

嘉久志遺跡・飯田C遺跡・古八幡付近遺跡

—一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—

1997年3月

建設省浜田工事事務所
島根県教育委員会

嘉久志遺跡・飯田C遺跡・古八幡付近遺跡

—一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—

1997年3月

**建設省浜田工事事務所
島根県教育委員会**

序

建設省浜田工事事務所においては、活力に満ちた石見地方を目指して、くらしの利便性、安全性、快適性の向上を図り、人や自然にやさしい環境形成にも配慮しつつ、道路整備を進めているところであります。

江津地区においても一般国道9号の交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして江津道路の事業を進めています。この道路は当面、山陰自動車道の機能を併せ持つ道路として活用を図ることとしており、国土の骨格を担う重要な道路でもあります。更に、過疎化が進み、若者の流失に悩むこの地域に活力を吹き込む道路でもあります。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも充分配慮しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

江津道路においても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同教育委員会や江津市教育委員会のご協力のもとに平成3年度から発掘調査を実施しております。

本報告書は、平成6年度に実施した「嘉久志遺跡」、「飯田C遺跡」、平成5～6年度に実施した「古八幡付近遺跡」の調査結果をまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術および教育のために広く利用されると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも充分留意しつつ進められていることへのご理解をいただくことを期待するものであります。

最後に、今回の発掘調査および本書の編集にあたり、御指導御協力いただいた島根県教育委員会ならびに関係各位に対し心より謝意を表すものであります。

平成9年3月

建設省中国地方建設局浜田工事事務所

所長 長嶺博史

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局の委託を受け、一般国道9号江津道路建設予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しました。

本書は平成5・6年度に実施した嘉久志遺跡・飯田C遺跡・古八幡付近遺跡での調査成果をまとめたものです。特に古八幡付近遺跡では水田跡を確認したほか、縄文時代から中世に至る多量の土器・木製品を採集しており、石見地方の古代・中世の歴史を解明する上で貴重な資料を提供することになりました。

本書が、この地域の歴史や文化財に対する关心と理解を深めるための一助となることができれば幸いに存じます。

なお、調査にあたりご協力いただきました建設省浜田工事事務所、江津市教育委員会をはじめとする地元の方々、関係者各位に厚く御礼申し上げます。

島根県教育委員会

教育長 清原茂治

例 言

1. 本書は、建設省中国地方建設局の委託を受けて島根県教育委員会が平成5・6年度に実施した一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 平成5・6年度に実施した発掘調査地は下記のとおりである。

平成5年度

久本奥窓跡 島根県江津市嘉久志町2125他

二宮C遺跡 島根県江津市二宮町神主イ429他

古八幡付近遺跡 島根県江津市敬川町400-7他

平成6年度

飯田C遺跡 島根県江津市二宮町神主イ791他

古八幡付近遺跡 島根県江津市敬川町403他

嘉久志遺跡 島根県江津市嘉久志町イ556他

3. 調査組織は下記のとおりである。

平成5年度

〔事務局〕 広沢卓嗣（文化課長）、山根成二（課長補佐）、勝部昭（埋蔵文化財調査センター長）、久家儀夫（課長補佐）、工藤直樹（企画調整係）、有田寅（島根県教育文化財団嘱託）

〔調査員〕 西尾克己（埋蔵文化財調査センター調査第3係長）、広江耕史（同主事）、太田浩司（同教諭兼主事）

〔調査協力〕 宮本徳昭（江津市教育委員会）、久保谷浩二（金城町教育委員会）

平成6年度

〔事務局〕 広沢卓嗣（文化課長）、野村純一（課長補佐）、勝部昭（埋蔵文化財調査センター長）、佐伯善治（課長補佐）、工藤直樹（企画調整係）、田部利夫（島根県教育文化財団嘱託）

〔調査員〕 足立克己（埋蔵文化財調査センター調査第5係長）、林健亮（同主事）、太田浩司（同教諭兼主事）

〔調査協力〕 宮本徳昭（江津市教育委員会）、河野敏広（美都町教育委員会）

平成8年度

〔事務局〕 勝部昭（文化財課長）、森山洋光（課長補佐）、宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）、古崎藏治（課長補佐）、渋谷昌宏（企画調整係）

〔調査員〕 内田律雄（埋蔵文化財調査センター調査第3係長）、大庭俊次（同文化財保護主事）、勝瀬利栄（同主事）、石倉敬子（同教諭兼文化財保護主事）、伊藤善太郎（同講師兼主事）、梅木茂雄（同臨時職員）、野津旭（同臨時職員）、林健亮（埋蔵文化財調査センター調査第2係主事）

4. 本書掲載遺跡の発掘調査及び遺物整理には次の方々に従事していただいた。

平成5年度

〔発掘作業員〕 柏村保雄、和田幸進、岩本一男、植田歳雄、中村忠男、永見義隆、山藤力、中

西美子、山下幸子、大平正広、横嶋芳香、小駿龍夫、吉村為春、中田義美、山藤積、今田八郎、石井完厚、茶畠正一、佐々木房義、小松原春美、加戸利夫

〔遺物整理作業員〕 増野晋次、久米基、家塙英詞、今井静子、河野八重子、陶山佳代、石川真由美、内海紀子

平成6年度

〔発掘作業員〕 柏村保雄、中村政雄、和田幸進、岩本一男、植田歳雄、中村忠男、黒川建義、永見義隆、山藤力、梅木茂雄、白石定人、家迫正美、中西美子、山下幸子、佐々尾ヨリ子、大平正広、横嶋芳香、小駿龍夫、吉村為春、堀一郎、中田義美、伊藤友太朗、松本秀城、山藤積、上手峰子、岡本裕、永井圭一、佐々木義郎、森下友弘、佐々木徹至、日高政治

〔遺物整理作業員〕 上手文子、堀民子、石川真由美、内海紀子

平成8年度

〔遺物整理作業員〕 内海紀子、吉田典子、中島美穂子

5. 発掘調査及び遺物整理にあたり次の方々にご指導を賜った。

田中義昭（島根大学法文学部教授）、河瀬正利（広島大学文学部助教授）竹廣文明（島根大学汽水域研究センター助手）、中村友博（山口大学人文学部教授）、大林達夫（防府市教育委員会）、杉原和恵（防府市教育委員会）、葉杖哲也（広島県立歴史民俗資料館）、妹尾修三（東広島市教育委員会）、亀田修一（岡山理科大学教授）

6. 本書で使用した遺跡略号は次のとおりである。

S D -溝、S B -建物跡、S K -土坑、P -ビット

7. 本書で使用した方位は、国土調査法による第III座標系X軸方向を指す。

8. 本書で使用した図の内、第1図は国土地理院発行のものを、第2・5・23図は、建設省浜田工事事務所作成のものを、第46・48図は（株）ワールド航測が作成したものをそれぞれ一部改変して使用している。また、巻頭で使用した写真は（株）ワールド航測が撮影した。

9. 本遺跡の出土遺物、実測図及び写真は島根県教育委員会で保管している。

10. 本書の執筆・編集は広江耕史の協力を得て林健亮が行った。

目 次

第Ⅰ章 遺跡の位置と歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査に至る経緯	5
第Ⅲ章 調査の経過	5
第Ⅳ章 遺跡の概要	7
1. 嘉久志遺跡	
① 調査区の設定	7
② 遺構の概要	8
③ 小 結	10
2. 飯田C遺跡	
① 遺跡の位置	11
② 遺構の概要	11
③ 遺物の概要	18
④ 小 結	31
3. 古八幡付近遺跡	
① 遺跡の位置	37
② 調査区の設定	37
③ I 区の調査	38
④ II区の調査	50
⑤ III区の調査	61
⑥ 平成 5 年度調査区	117
⑦ IV区の調査	131
⑧ V区の調査	143
⑨ I + II区で出土した白磁	149
⑩ 小 結	149
4. 古八幡付近遺跡におけるプラント・オパール分析 (川崎地質株式会社)	153
第Ⅴ章 む す び	156

挿図目次

第1図	嘉久志遺跡・飯田C遺跡・古八幡付近遺跡と周辺の遺跡	2
第2図	嘉久志遺跡調査区配置図	7
第3図	嘉久志遺跡地形測量図	8
第4図	嘉久志遺跡土坑実測図	9
第5図	飯田C遺跡遺構配置図	12
第6図	飯田C遺跡地形測量図	13
第7図	第3平面南夷測図	14
第8図	第3平面南壁上層断面図	15
第9図	飯田C遺跡遺構配置図	16
第10図	第3平面北夷測図	17
第11図	第4斜面南壁土層断面図	18
第12図	第5平面土層断面図	18
第13図	飯田C遺跡出土弥生土器実測図	19
第14図	飯田C遺跡出土土師器実測図（1）	20
第15図	飯田C遺跡出土上師器実測図（2）	21
第16図	飯田C遺跡出土上師器実測図（3）	23
第17図	飯田C遺跡出土上製品実測図	24
第18図	飯田C遺跡出土須恵器実測図（1）	26
第19図	飯田C遺跡出土須恵器実測図（2）	27
第20図	飯田C遺跡出土上師器・陶器実測図	28
第21図	飯田C遺跡出土上製品・硯実測図	29
第22図	飯田C遺跡出土石器実測図	30
第23図	古八幡付近遺跡調査区配置図	35
第24図	古八幡付近遺跡I区地形測量図	38
第25図	古八幡付近遺跡I区土層断面図	39
第26図	古八幡付近遺跡I区出土右器実測図	41
第27図	古八幡付近遺跡I区出土繩文土器実測図（1）	42
第28図	古八幡付近遺跡I区出土繩文土器実測図（2）	43
第29図	古八幡付近遺跡I区出土繩文土器実測図（3）	44
第30図	古八幡付近遺跡I区出土繩文土器実測図（4）	45
第31図	古八幡付近遺跡I区出土繩文土器実測図（5）	45
第32図	古八幡付近遺跡I区出土弥生土器実測図	46
第33図	古八幡付近遺跡I区出土土師器実測図	48
第34図	古八幡付近遺跡I区出土須恵器実測図	49

第35図	古八幡付近遺跡II区地形測量図	50
第36図	古八幡付近遺跡II区土層断面図	51
第37図	古八幡付近遺跡II区 S D - 1 実測図	52
第38図	古八幡付近遺跡II区 S D - 1 出土弥生土器実測図	53
第39図	古八幡付近遺跡II区出土石器実測図	54
第40図	古八幡付近遺跡II区出土縄文土器実測図	54
第41図	古八幡付近遺跡II区出土弥生土器実測図	55
第42図	古八幡付近遺跡II区出土弥生土器底部実測図	56
第43図	古八幡付近遺跡II区出土土師器実測図	58
第44図	古八幡付近遺跡II区出土須恵器実測図	59
第45図	古八幡付近遺跡II区出土陶器実測図	60
第46図	古八幡付近遺跡III区地形測量図	62
第47図	古八幡付近遺跡III区南壁土層断面図	63
第48図	古八幡付近遺跡III区木製品出土状況	64
第49図	古八幡付近遺跡III区出土石器実測図	65
第50図	古八幡付近遺跡III区出土縄文土器実測図	65
第51図	古八幡付近遺跡III区出土弥生土器実測図（1）	66
第52図	古八幡付近遺跡III区出土弥生土器実測図（2）	66
第53図	古八幡付近遺跡III区出土弥生土器実測図（3）	67
第54図	古八幡付近遺跡III区出土弥生土器実測図（4）	68
第55図	古八幡付近遺跡III区出土弥生土器・ミニチュア土器・土製品実測図	69
第56図	古八幡付近遺跡III区出土土師器実測図（1）	70
第57図	古八幡付近遺跡III区出土土師器実測図（2）	71
第58図	古八幡付近遺跡III区出土土師器実測図（3）	72
第59図	古八幡付近遺跡III区出土土師器実測図（4）	73
第60図	古八幡付近遺跡III区出土土師器実測図（5）	74
第61図	古八幡付近遺跡III区出土土師器実測図（6）	75
第62図	古八幡付近遺跡III区出土土師器実測図（7）	76
第63図	古八幡付近遺跡III区出土土師器実測図（8）	78
第64図	古八幡付近遺跡III区出土土師器実測図（9）	79
第65図	古八幡付近遺跡III区出土土師器実測図（10）	80
第66図	古八幡付近遺跡III区出土土製品実測図	81
第67図	古八幡付近遺跡III区出土須恵器実測図（1）	82
第68図	古八幡付近遺跡III区出土須恵器実測図（2）	83
第69図	古八幡付近遺跡III区出土須恵器実測図（3）	84
第70図	古八幡付近遺跡III区出土須恵器実測図（4）	86
第71図	古八幡付近遺跡III区出土須恵器実測図（5）	87

第72図	古八幡付近遺跡III区出土須恵器転用硯実測図	88
第73図	古八幡付近遺跡III区出土白磁実測図	88
第74図	古八幡付近遺跡III区出土鉄鎌実測図	89
第75図	古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図（1）	90
第76図	古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図（2）	91
第77図	古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図（3）	92
第78図	古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図（4）	94
第79図	古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図（5）	95
第80図	古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図（6）	96
第81図	古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図（7）	97
第82図	古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図（8）	99
第83図	古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図（9）	100
第84図	古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図（10）	101
第85図	古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図（11）	102
第86図	古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図（12）	104
第87図	古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図（13）	105
第88図	古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図（14）	107
第89図	古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図（15）	109
第90図	古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図（16）	111
第91図	古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図（17）	113
第92図	古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図（18）	114
第93図	古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図（19）	115
第94図	古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図（20）	116
第95図	平成5年度調査区地形測量図	117
第96図	平成5年度調査区北壁土層断面図	118
第97図	平成5年度調査区南壁土層断面図	118
第98図	平成5年度調査区南側上面実測図	119
第99図	平成5年度調査区南側下面実測図	120
第100図	平成5年度調査区北側下面実測図	121
第101図	古八幡付近遺跡平成5年度調査区出土弥生土器実測図	122
第102図	古八幡付近遺跡平成5年度調査区出土土師器実測図（1）	122
第103図	古八幡付近遺跡平成5年度調査区出土土師器実測図（2）	123
第104図	古八幡付近遺跡平成5年度調査区出土須恵器実測図（1）	124
第105図	古八幡付近遺跡平成5年度調査区出土須恵器実測図（2）	125
第106図	古八幡付近遺跡平成5年度調査区出土須恵器実測図（3）	126
第107図	古八幡付近遺跡平成5年度調査区出土陶磁器実測図	127
第108図	古八幡付近遺跡平成5年度調査区出土石器実測図	128

第109図 古八幡付近遺跡平成5年度調査区出土上瓦実測図	128
第110図 古八幡付近遺跡IV区地形測量図	131
第111図 古八幡付近遺跡IV区北壁土層断面図	132
第112図 古八幡付近遺跡IV区下方住居跡実測図	133
第113図 古八幡付近遺跡IV区住居跡実測図	134
第114図 古八幡付近遺跡IV区住居跡断面図	135
第115図 古八幡付近遺跡IV区建物跡出土遺物実測図	136
第116図 古八幡付近遺跡IV区出土弥生土器・土師器・土製品実測図	137
第117図 古八幡付近遺跡IV区出土須恵器実測図(1)	138
第118図 古八幡付近遺跡IV区出土須恵器実測図(2)	139
第119図 古八幡付近遺跡IV区出土須恵器実測図(3)	140
第120図 古八幡付近遺跡V区地形測量図	143
第121図 古八幡付近遺跡V区南壁土層断面図	144
第122図 古八幡付近遺跡V区造構配置図	145
第123図 古八幡付近遺跡V区S X-1実測図	146
第124図 古八幡付近遺跡V区出土土師器実測図	146
第125図 古八幡付近遺跡V区出土遺物実測図	147
第126図 古八幡付近遺跡出土磁器実測図	149
第127図 試料採取地点	153
第128図 N o.1地点のプラント・オパールダイヤグラム	154
第129図 N o.2地点のプラント・オパールダイヤグラム	154
第130図 N o.3地点のプラント・オパールダイヤグラム	155
第131図 N o.4地点のプラント・オパールダイヤグラム	155

表 目 次

第1表 嘉久志遺跡・飯田C遺跡・古八幡付近遺跡の周辺の遺跡	3
第2表 古八幡付近遺跡出土遺物観察表	157

図 版 目 次

嘉久志遺跡

図版1 嘉久志遺跡土坑完掘状況

- 嘉久志遺跡完掘状況
嘉久志遺跡出土玉石
- 飯田C遺跡
- 図版2 飯田C遺跡遠景
第1～第2平面完掘状況
- 図版3 第3平面SD-3・4付近完掘状況
第3斜面～第5平面完掘状況
- 図版4 第3平面落ち込み完掘状況
第3平面南壁土層堆積状況
- 図版5 第4斜面南壁土層堆積状況
第5平面土層堆積状況
- 図版6 飯田C遺跡調査後全景
飯田C遺跡第4斜面作業風景
- 図版7 飯田C遺跡出土遺物（1）
- 図版8 飯田C遺跡出土遺物（2）
- 図版9 飯田C遺跡出土遺物（3）
- 図版10 飯田C遺跡出土遺物（4）
- 図版11 飯田C遺跡出土遺物（5）
- 図版12 飯田C遺跡出土遺物（6）
- 図版13 飯田C遺跡出土遺物（7）
- 図版14 飯田C遺跡出土遺物（8）
- 古八幡付近遺跡
- 図版15 調査前近景
トレンチ調査状況（I区東側）
- 図版16 I区石組み検出状況
I区遺物出土状況
- 図版17 I区西壁土層堆積状況
I区完掘状況
- 図版18 II区西壁土層堆積状況
II区完掘状況
- 図版19 II区SD-1遺物出土状況
SD-1土層堆積状況
SD-1完掘状況
- 図版20 III区木製品出土状況
III区南壁土層堆積状況
- 図版21 III区完掘状況
III区完掘状況

- 図版22 平成5年度調査区北側完掘状況
平成5年度調査区南側完掘状況
- 図版23 IV区北壁土層堆積状況
IV区完掘状況
- 図版24 IV区加工段1遺物出土状況
IV区加工段完掘状況
IV区加工段完掘状況
- 図版25 V区加工段4土坑完掘状況
V区完掘状況
- 図版26 V区S X - 1遺物出土状況
S X - 1土層断面
S X - 1完掘状況
- 図版27 古八幡付近遺跡出土遺物（1）
図版28 古八幡付近遺跡出土遺物（2）
図版29 古八幡付近遺跡出土遺物（3）
図版30 古八幡付近遺跡出土遺物（4）
図版31 古八幡付近遺跡出土遺物（5）
図版32 古八幡付近遺跡出土遺物（6）
図版33 古八幡付近遺跡出土遺物（7）
図版34 古八幡付近遺跡出土遺物（8）
図版35 古八幡付近遺跡出土遺物（9）
図版36 古八幡付近遺跡出土遺物（10）
図版37 古八幡付近遺跡出土遺物（11）
図版38 古八幡付近遺跡出土遺物（12）
図版39 古八幡付近遺跡出土遺物（13）
図版40 古八幡付近遺跡出土遺物（14）
図版41 古八幡付近遺跡出土遺物（15）
図版42 古八幡付近遺跡出土遺物（16）
図版43 古八幡付近遺跡出土遺物（17）
図版44 古八幡付近遺跡出土遺物（18）
図版45 古八幡付近遺跡出土遺物（19）
図版46 古八幡付近遺跡出土遺物（20）
図版47 古八幡付近遺跡出土遺物（21）
図版48 古八幡付近遺跡出土遺物（22）
図版49 古八幡付近遺跡出土遺物（23）
図版50 古八幡付近遺跡出土遺物（24）
図版51 古八幡付近遺跡出土遺物（25）

- 図版52 古八幡付近遺跡出土遺物（26）
図版53 古八幡付近遺跡出土遺物（27）
図版54 古八幡付近遺跡出土遺物（28）
図版55 古八幡付近遺跡出土遺物（29）
図版56 古八幡付近遺跡出土遺物（30）
図版57 古八幡付近遺跡出土遺物（31）
図版58 古八幡付近遺跡出土遺物（32）
図版59 古八幡付近遺跡出土遺物（33）
図版60 古八幡付近遺跡出土遺物（34）
図版61 古八幡付近遺跡出土遺物（35）
図版62 古八幡付近遺跡出土遺物（36）
図版63 古八幡付近遺跡出土遺物（37）
図版64 古八幡付近遺跡出土遺物（38）
図版65 古八幡付近遺跡出土遺物（39）
図版66 古八幡付近遺跡出土遺物（40）
図版67 古八幡付近遺跡出土遺物（41）
図版68 古八幡付近遺跡出土遺物（42）
図版69 古八幡付近遺跡出土遺物（43）
図版70 古八幡付近遺跡出土遺物（44）

第Ⅰ章 遺跡の位置と歴史的環境

島根県中部に位置する江津市は、北に日本海を望み、中国地方最大の河川である江川によって形成された沖積平野と砂丘からなっている。飯田C遺跡・古八幡付近遺跡の位置する江津市二宮町・敬川町は、江津市南部の山塊が日本海に突きだした尾根の間にできた三日月形の沖積平野に位置している。また、嘉久志遺跡の位置する江津市嘉久志町は、この山塊の東端に位置し、東側には江津市中心部の砂丘地帯を望む。

嘉久志遺跡は、標高約20mを測る丘陵東斜面に位置し、遠く江川河口を望む。東側は砂丘地帯のため遺跡は見つかっていないが、西側には古代の窯業遺跡である久本奥窯跡が発見されている。

飯田C遺跡は、江津市南部の山塊が、日本海に向かって延びる尾根の東側斜面上に位置し、すぐ東側は小さな谷に、その先には恵良遺跡のある丘陵がある。

古八幡付近遺跡は、北に向かって流れる敬川が日本海に出る直前の沖積平野の南はしに位置している。

江津市域では、現在のところ旧石器時代の遺跡は見つかっていない。縄文時代になると波子町大平山遺跡群など数カ所が知られている。これらの遺跡は縄文中期から晩期にかけてのもので、特に縄文中期の地域的な土器型式として「波子式」が設定されている。

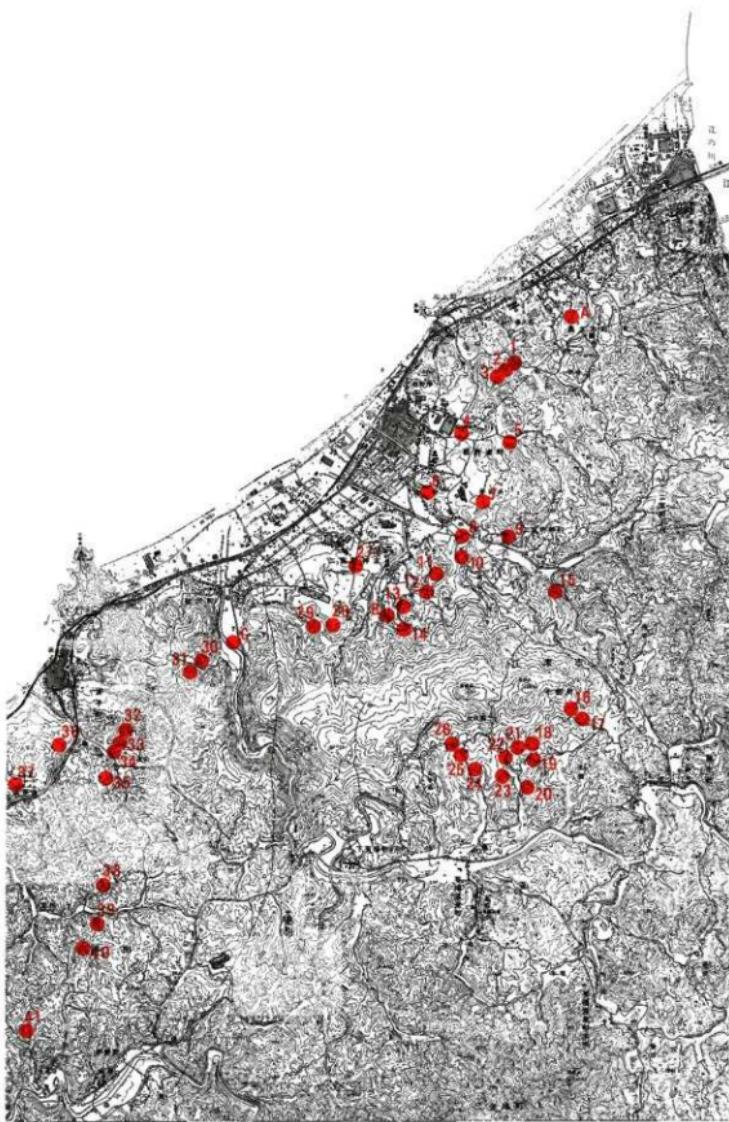
弥生時代の遺跡は、都野津町の稻荷山遺跡・半田浜遺跡、後地町の波来浜遺跡などが挙げられる。稻荷山遺跡や半田浜遺跡では、弥生時代中期の土器片が発見されているほか、波来浜遺跡では、弥生時代後期の墳墓群が調査されている。また、二宮町の雨ヶ峰1号墓は、四隅突出型墳丘墓である可能性が指摘されている。

古墳時代に入ると遺跡数も増加し、集落跡として、敬川町古八幡付近遺跡・都野津町半田浜遺跡、千田町宮倉遺跡が知られているほか、都野津町二又平古墳・千田町ツヅラヤブ古墳など、横穴式石室を主体部とする終末期の古墳も見られる。また、古墳時代から奈良時代にかけて和気川流域で須恵器や瓦などの窯業生産も行われ、嘉久志町の久本奥窯跡、櫛橋押込窯跡がある。

奈良時代には、二宮町に石見二宮（多鳩神社）があることなどから、山陰道が通っていたという説がある。二宮町の宮倉遺跡からは石見国分寺跡と同文の軒平瓦が出土しているほか、前述の久本奥窯跡からは、浜田市下府町の下府廃寺と同文の軒丸瓦・砥尾が出土しておりこれらの遺跡との関係が注目される。また、二宮町の半田浜西遺跡からは、奈良三彩や土製分銅など官衙の存在を伺わせるような多くの遺物が出土している。

古代末から中世の遺跡は少ないものの、前述の波来浜遺跡からは、壇・皿や石帶を副葬した中世墓と、1000枚近い錢貨が束になった状態で検出されている。これらの錢貨の大部分が12世紀初頭までの錢貨であることが知られている。中世には、海運で栄えた都野氏が江津を中心に勢力を握っており、二宮町の神主城跡は、都野氏に関係が深いものと考えられている。また、神主城跡の南側には高神遺跡がある。

近世から近代にかけては、都野津層に含まれる豊富で良質な粘土を主原料に瓦・陶器の生産が活発になる。市南西部の丘陵上には古くから多数の窯が造られており、現在に至るまで江津市の主要産業の一つとなっている。



第1図 飯田C遺跡・古八幡付近遺跡・嘉久志遺跡と周辺の遺跡

第1表 嘉久志遺跡・飯田C遺跡・古八幡付近遺跡の周辺の遺跡

A	嘉久志遺跡	26	岩本古墳群
B	飯田C遺跡	27	青山遺跡
C	古八幡付近遺跡	28	飯田A遺跡
1	久本奥窯跡	29	室崎商店裏遺跡
2	カワラケ免遺跡	30	横道古墳
3	鹿伏山遺跡	31	先打井畠遺跡I区
4	:又平古墳	32	先打井畠遺跡II区
5	棚橋押込遺跡	33	先打井畠遺跡III区
6	稻荷山遺跡	34	堂々遺跡
7	半田浜遺跡	35	堂々窯跡
8	半田浜西遺跡	36	堂々古墳
9	雨が崎古墳	37	大田屋窯跡
10	宮原遺跡	38	長東坊節窯跡
11	二宮C遺跡	39	中堀田古墓
12	神主城跡	40	大尾谷遺跡
13	恵良遺跡	41	上条古墳
14	高神遺跡		
15	神村城跡		
16	八幡社古墳群		
17	ツヅラヤブ古墳		
18	寺床古墳群		
19	岩田氏宅裏古墳群		
20	白石古墳		
21	金クソ古墳		
22	峠田野地古墳群		
23	ダイ古墳群		
24	大溢古墳		
25	恵後古墳群		

- (参考文献) 穴道正年 「島根県の縄文式土器集成 I」 1974年
「江津市誌」 江津市 1982年
「島根県遺跡地図II(右見編)」 島根県教育委員会 1992年
『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書I』 島根県教育委員会 1995年
『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査概報』 島根県教育委員会 1993年
『飯田C遺跡・古八幡付近遺跡・嘉久志遺跡』 島根県教育委員会 1995年
『波来浜遺跡発掘調査報告書』 島根県教育委員会 1973年

第Ⅱ章 調査に至る経緯

一般国道9号江津道路は、建設省により、江津市内の交通渋滞の緩和と、石見地域の高速交通網の整備を目的とし、江津市渡津町を起点とし、浜田自動車道浜田インターチェンジを終点とする自動車専用道路として4車線道路を建設することが計画された。

江津道路建設の計画を受け、島根県教育委員会文化課（以下文化課という）は、平成元年に江津市嘉久志町から敬川町までの分布調査を行い13カ所の遺跡の存在を確認している。

平成3年1月には、4者協議（建設省浜田工事事務所、県土木部、文化課、江津市教育委員会）が行われ、発掘調査について具体的に検討された。これを受けて平成3年度には建設省の委託を受けた江津市教育委員会が発掘調査を行うこととなり、7月に半田浜西遺跡、翌平成4年1月にはカワラケ免遺跡、鹿伏山遺跡のトレンチ調査が行われた。これらの遺跡の調査の後、3者協議（建設省、江津市教育委員会、文化課）が行われ、平成4年度から文化課が本調査に入ることとなった。

平成4年度に、鹿伏山遺跡・半田浜西遺跡の本調査と二宮C遺跡・室崎商店裏遺跡のトレンチ調査を、平成5年度に久本奥窓跡・二宮C遺跡・カワラケ免遺跡の本調査と二宮B遺跡・古八幡付近遺跡・飯田C遺跡のトレンチ調査を行い、古八幡付近遺跡については、一部本調査も行った。平成6年度には、飯田C遺跡・嘉久志遺跡と古八幡付近遺跡の残りの部分の本調査を行い、飯田A遺跡・恵良遺跡・嘉久志遺跡と神主城跡・室崎商店裏遺跡の一部についてトレンチ調査を行っている。

第Ⅲ章 調査の経過

〔平成5年度〕

久本奥窓跡・二宮C遺跡・カワラケ免遺跡の本調査と二宮B遺跡・飯田C遺跡のトレンチ調査などを行った。

古八幡付近遺跡については、7月28日よりトレンチ調査を開始し、8月31日より水田の一部について本調査を開始した。また、飯田C遺跡については、1月24日より16本のトレンチを設定して調査を開始し、この内7本のトレンチから遺構・遺物を検出している。

〔平成6年度〕

平成6年度は、4月20日より飯田C遺跡の表土掘削を重機を使用しながら開始した。5月12日には、第3平面で土器片多数を採集し、ピットも検出している。6月30日には、全遺構を完掘し、清掃・写真撮影を行っている。その後、実測・測量図の作成を行い、9月6日に現地調査を終了した。

7月5日からは、古八幡付近遺跡のトレンチ調査を開始し、多量の遺物の検出を見たため、翌日から全面発掘を行っている。11月9日には、水田遺構の一部を検出し、12月22日まで掘削を行った。平成7年1月25日に水田遺構についてラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い。木製品の取り上げを行った後1月27日に現地調査を終了した。この間12月17日に調査指導会を、翌18日に現地説明会を行っている。

嘉久志遺跡は、当初計画ではトレンチ調査のみを行う計画で、12月6日より現地入りした。その直前には、江津市教育委員会より経塚が存在する可能性を指摘されており、これを見て現地を確認し

たところきわめて狭い範囲であることが予想されたため、トレンチ調査と並行して、経塙存在の可能性のある地点の全面発掘を行った。12月7口に上坑を検出し、12月22日までに実測図を作成して現地調査を終了した。

11月8日から12月15日までの間には、飯田A遺跡・恵良遺跡・神主城跡・室崎商店裏遺跡についてトレンチ調査を行っている。

〔平成8年度〕

平成7年度は、江津道路建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査は行っていない。

平成8年度は、6月11日よりまず、1班により波子町の大田屋窯跡のトレンチ調査から開始し、そのまま本調査に移行している。大田屋窯跡本調査中の11月25日からは、波子町中掘出古墓のトレンチ調査を行っている。一方他の1班は9月中旬より二宮町恵良遺跡のトレンチ調査を、10月21日からは二宮町神主城跡のトレンチ調査を行い、11月からは、恵良遺跡の本調査を実施している。両班とも12月25日に現地調査を終了した。

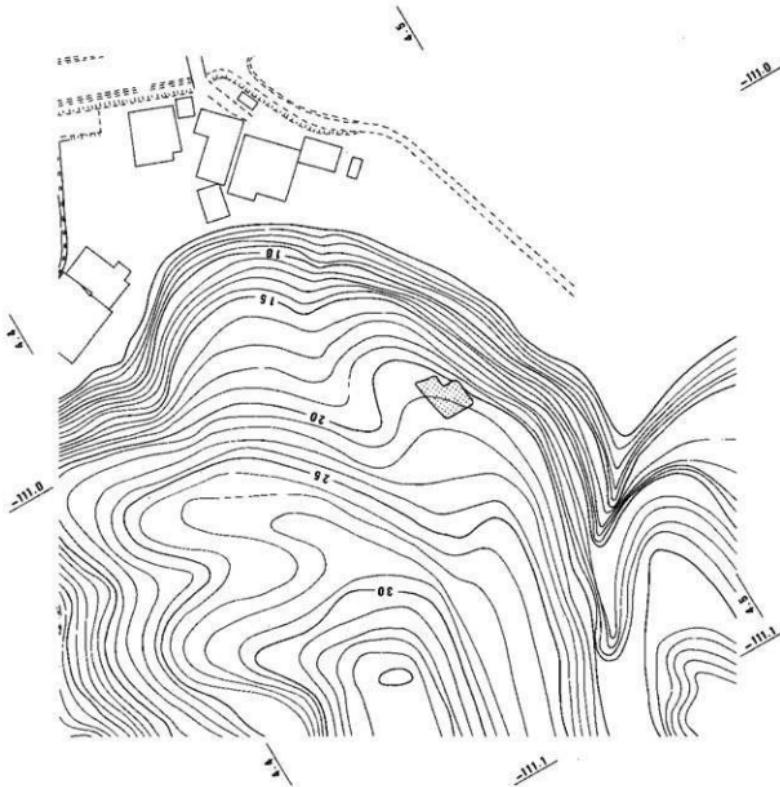
また、平成8年度は、平成6年度調査分を対象に遺物の整理を行い、本報告書を作成している。

第Ⅳ章 遺跡の概要

1. 嘉久志遺跡

① 調査区の設定

嘉久志遺跡は、江津市嘉久志町イ556番地他の、標高約20mの東向き斜面に位置する。和木町から嘉久志町に続く山塊の東端に位置し、嘉久志遺跡の位置する尾根の最高所は標高約50mである。遺跡の東側は、新川が流れる深い谷になっており、その先は、江津市中心部を形成する砂丘地帯に続いている。遺構は東西に延びる尾根の東側先端近くに位置するが、尾根の頂部から遺構のある標高20m付近までは緩やかな斜面が続いており、台地状になっている。この部分は、以前は畠地として開墾されていたようである。標高20m付近から下方は岩盤が露出した急斜面となっており、直下を北流する新川へと続いている。遺跡の南側は、狭く深い谷があり、その先は、南側へ向かって丘陵が伸びている。



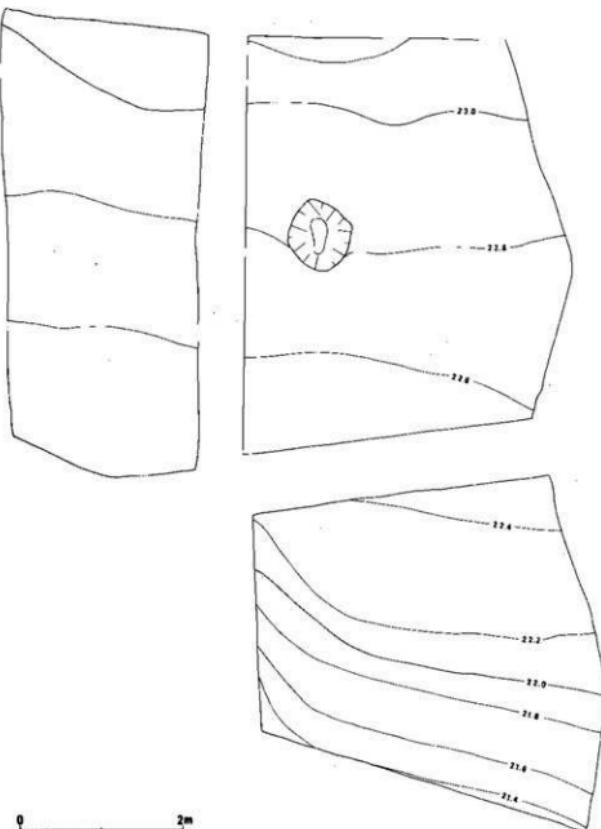
第2図 嘉久志遺跡調査区配置図（1:1000）

北側は、浅い谷と尾根を経て丘陵が終わり、日本海へと続いている。

遺跡より北側の尾根先端に当たる部分には、本遺跡と同様の小さな加工段が点々とあり、墓地になっている。そのため、新川付近から各墓地を通り、遺跡のすぐ横を抜け、尾根上に至る道が残されていた。

調査前の状況は、斜面がわずかに緩やかになった位置に直径5cm程の玉石が、半径2m程度の範囲に散乱しており、わずかに高まりが見られたものの、石塔や構築物の痕跡は見えなかった。

本調査地は、江津市教育委員会より、「キヨウツカ」と言う地名があったとの連絡を受けて調査に入ったもので、現状から「経塚」の存在した可能性が伺われた。



第3図 嘉久志遺跡地形測量図 (1 : 60)

② 遺構の概要

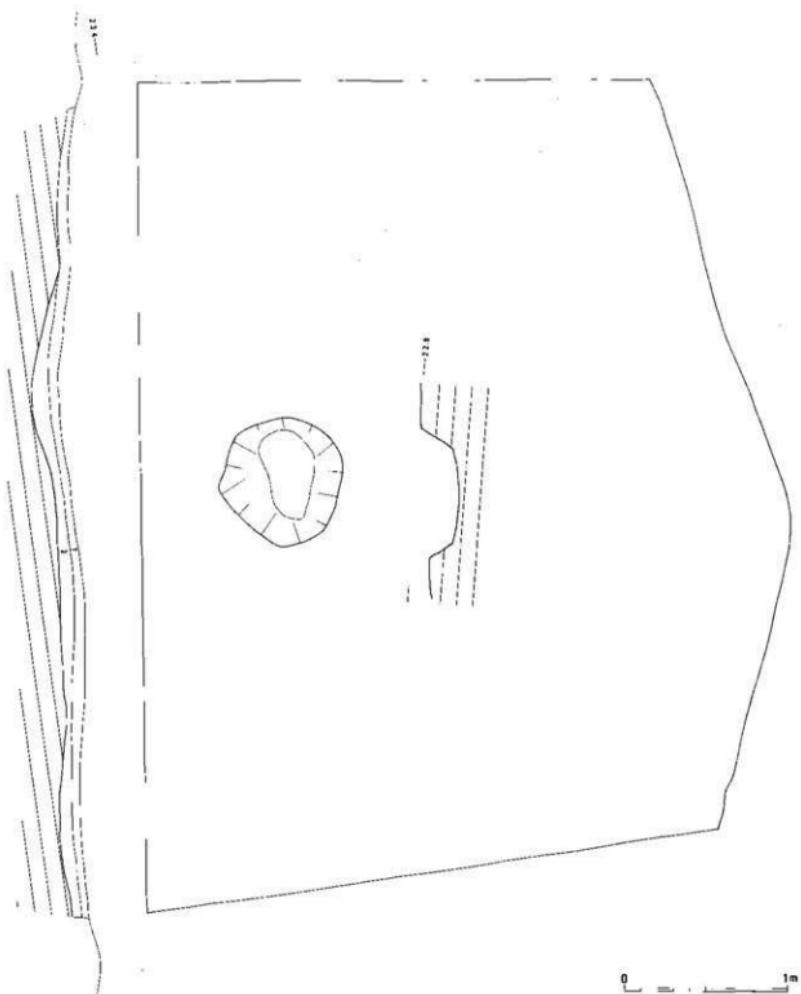
調査地は、尾根頂部から延びる緩やかな斜面が終わる標高21mから23mまでの間で行い、調査地より下の方は、急斜面になる。

現地の表土は、非常に薄く、10cmに満たない。表土直下には、すぐに明赤褐色の地山が現われる。遺構付近は、表土の直下に炭化物を含む土がわずかに見られた。地表面で見られた玉石が、埋土中のきわめて広い範囲で見られることがから、攪乱されていることが伺わたった。

検出した遺構は、土坑1基で、検出面で長径約

1.6m、短径約1.4mを測る梢円形を呈す。完掘時の深さは約40cmであった。土坑内の埋土は橙褐色を呈し、比較的柔らかく、前述の玉石を少量含んでいる。玉石以外の遺物は出土しなかった。表土に玉石を含む範囲で調査区を拡張したが、それ以外に遺構・遺物は検出できなかった。

調査に並行して丘陵全域でのトレンチ調査も行っているが、本遺跡に関連するような遺構・遺物は検出されていない。



第4図 嘉久志遺跡土坑実測図 (1 : 30)

③ 小結

調査の結果からは、「経塚」があったという確実な証拠は確認できなかったが、玉石や土坑の存在から、少なくとも人工的な施設があったことは確認できた。遺跡周辺の状況から墓地の可能性も否定できないが、地元での伝承から墓ではない何かが在ったと想像される。地元住民から聞くところによると、以前大きな台風が来たときに、この位置にあった大木が倒れ、その下から玉石が散乱したとのことで、当初は木が植えられており、それが倒れた際に埋納物が散逸したことが想定され、玉石の検出状況からもそれを肯定できる。遺物が存在しないため、時期は不明であるが、このような話から、経塚か墓が存在した可能性は高い。

2. 飯田C遺跡

① 遺跡の位置

飯田C遺跡は、江津市二宮町神主イ791番地他の標高約50mを測る丘陵の東斜面に位置する。付近は、飯田川に依って浸食された河岸段丘が多く見られ、谷には水田が営まれている。下方の水田から調査区先端までの比高差は約7mを測る。遺跡の南側には、高野山から中国山地へと続く山塊を控え、高野山南麓にはツヅラヤブ古墳^(注1)などが含まれる高野山古墳群が知られている。北側は水尻川とその沖積平野を経て日本海に至る。東側は水尻川の支流飯田川が流れる谷になっており、対岸は神主城跡が在る丘陵が位置する。飯田C遺跡と向かい合う斜面の河岸段丘上には、恵良遺跡が在り、付近の河岸段丘上にはまだ多くの遺跡が存在するものと思われる。

調査地は牧草地として開墾されており、斜面を大規模に削って、6～7段の加工段を造成した状況であった。調査地北側は宅地となっており、大きく削平され、遺跡の残存は望めなかった。また、遺跡の東側には道路が通っており、それより下方は、飯田川に向かって急斜面になっている。牧草地の加工段は、調査地を横断して、更に南側まで続いている。

調査区は、北側の宅地部分を除いた標高36mから53mの範囲に設定し、それぞれの加工段とその斜面を、上方から順に第1平面・第1斜面・第2平面・第2斜面……第6平面と呼び、第1平面から掘削を開始した。第1平面より上方は、南北に延びる尾根上に緩やかな斜面が続いていたが、トレンチ調査の結果、遺構・遺物が認められなかつたことから調査区から除外した。

註1 柳浦俊一「石見における群集墳の一例」『島根考古学会誌 第1集』1984年

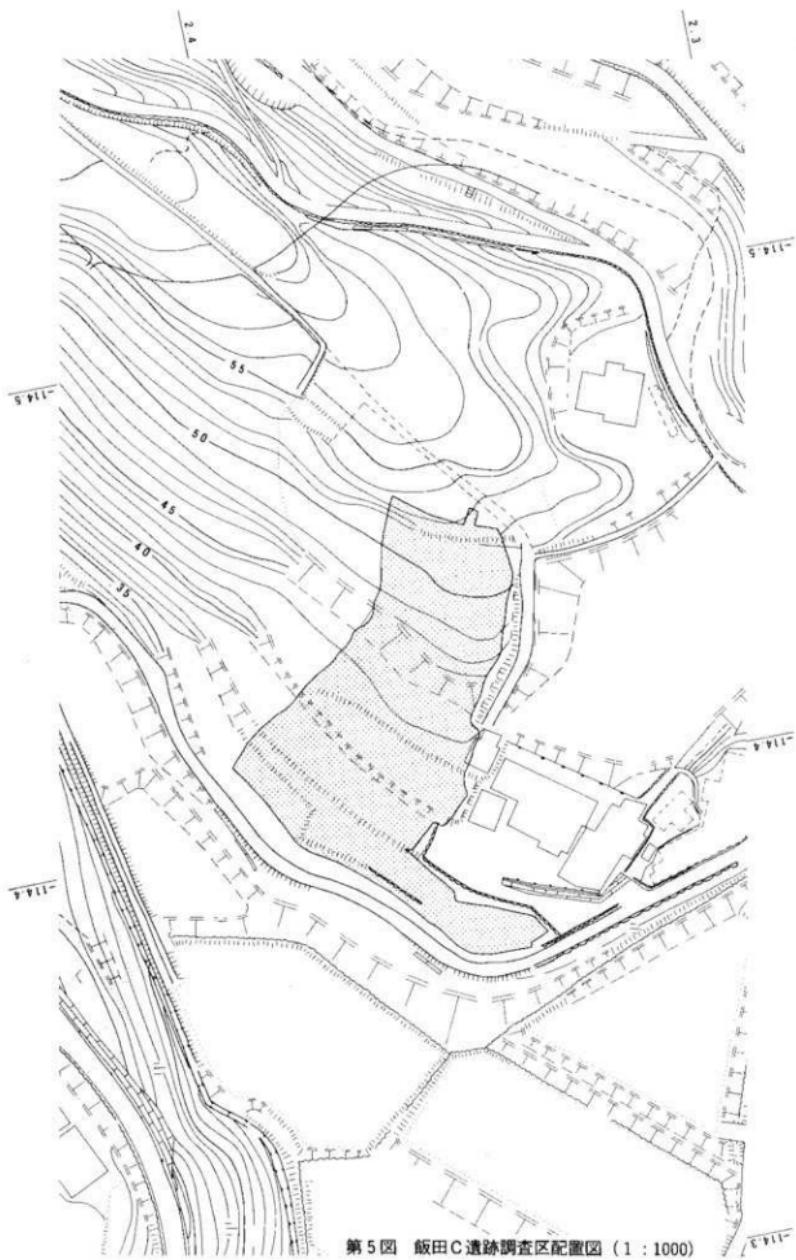
② 遺構の概要

第1平面～第2斜面 第1平面は標高53m付近で、表土直下に褐色土が堆積しており、埋土は比較的薄い。第1斜面も同様で、遺構・遺物は見られなかつた。

第2平面は、飯田C遺跡で最も広い平坦面で、調査前の状況では、標高50m付近で、ほぼ水平に造成されていた。調査の結果この平坦面は、山側の斜面を削り、その土を谷側に盛って造成したもので、第2斜面側は造成土が厚く堆積した状態になっていた。この状況は、下方の各平面とも同様で、各平面の奥側には遺構・遺物の残存が少なく、先端側は厚い造成土の下に遺構・遺物が残存している。

第2平面のほぼ全面にわたって、地山面に、近年の煙草畑と思われる、東西方向に延びる畝が検出された。また、第2平面の北側・南側とも1段下がっており、排水溝があったものと思われる。北側の排水溝は、調査時にも少量の湧水が見られ、南側の排水溝には塩化ビニール製のパイプが敷設されていた。北側の排水溝からは、遺物は出土しなかつたが、位置関係から畝に伴うものと思われ、近代のものであろう。また、表土中を中心に、家屋移転に伴うと思われる陶磁器類が多量に採集できたが、古いものは含まれていなかつた。

第2斜面は高低差約4mを一気に下る急斜面で、第3平面の造成により削られたものと思われる。上方は第2平面から続く厚い造成土が堆積しており、造成土中には須恵器・土師器の小片が、わずかに含まれていた。下方は、第3平面の造成により削られているようで、表土と薄い埋土の直下が地山



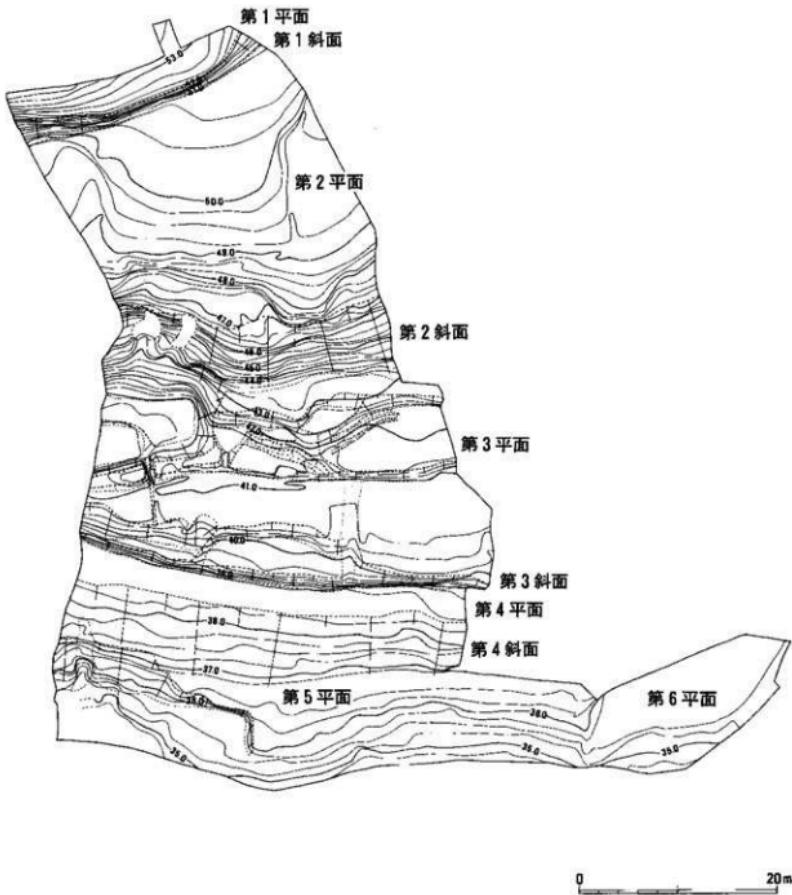
第5図 飯田C遺跡調査区配置図 (1:1000)

となっている。

第2斜面南側の一角は特に傾斜が急で、後述する溜池に向けて、土砂崩れの痕跡が2カ所で見られた。

第3平面 第3平面は、標高41m付近に位置し、北側の宅地部分から続く南北に長い平坦面になっていた。

調査区南端には、溜池と思われる大きな落ち込みが見られた(第7図)。落ち込みは、地山面を幅約6mに亘って掘り窪み、東側の堤に当たる部分を幅約2m程掘り残したもので、長さ12mに亘って検出し、更に調査区南側に延びている。堤部分は南北方向に一直線に伸び、落ち込みの北から西側は地



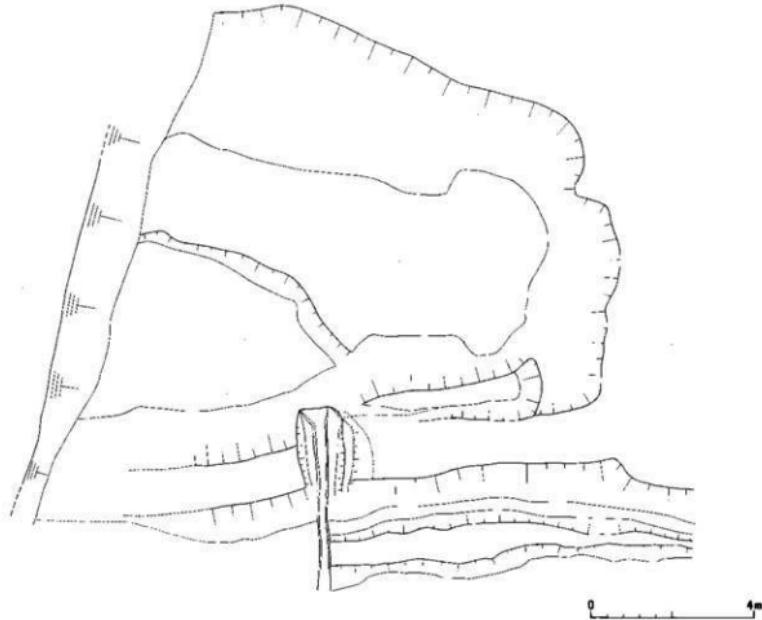
第6図 飯田C遺跡地形測量図 (1 : 800)

形に制約されたためか、緩やかに廻っている。底面は中程の小さな段を介して2面になっており、どちらもほぼ水平を保っている。落ち込み最深部の標高は約40mで、堤部分の最高所から落ち込みの最深部までの比高差は、1.1mを測る。

堤部分の上面は約80cmの幅の通路状の平坦面となっており、調査区外南側に続いている。落ち込み部分の北端から約6mの位置には、樋と思われる溝が切られていた。樋と思われる溝は2段に造られており、上端の幅約1m、中段の幅約80cm、下段の幅約20cmを測り、堤部分の上端から中段までの比高差は約20cm、下段までの比高差は約50cmである。仮に落ち込み部分に水があったとしてもこの樋では完全に水を抜くことはできない。樋と思われる部分の下段の底には砂が堆積していたことから、水が流れていたことが伺われる。なお、完掘した後も湧水は認められなかったが、第2平面南側の溝の真下に位置し、第2平面の湧水地との関係が想定される。

溝部分の中段は堤部分の幅で完結しているが、下段は独立した溝として、堤部分から2m以上続いており、第4平面方向に向けて水を流していたようである。第3平面にはピットや溝などの遺構が存在するが、その溝の一つを切って続いている。

調査区南壁の土層断面（第8図）では、落ち込みの底から西側にかけては斜面の崩落（第2斜面の土砂崩れの跡か）によると思われる堆積が見られるが、他の大部分は一度に埋められたようで、石や大きな土の塊がそのまま堆積していた。埋め戻し後しばらくは、小さな落ち込みが残っていたようで、溝状に壅んだ土層が残っている。また、樋と思われる部分の盛り土の痕跡は確認できなかったが、埋



第7図 第3平面南実測図 (1 : 120)

め戻し土は、更に1m近く積み上げられている。

落ち込み部分の埋め戻し土や埋土には、遺物は全く含まれていなかった。

第3平面の中程から北側にかけては、比較的多くの遺構が残存していることから、前述の落ち込み

は全くの斜面に新たに掘削されたものではなく、元々いくらか落ち込んだ部分があり、その位置に掘られたものと思われる。

第3平面中程から北側にかけてはピット・溝を検出している。調査前に一枚の平坦面だった第3平面は、完掘すると小さな段と平坦面が連続する状況で、地山面に溝5条、ピット11基を検出している（第10図）。

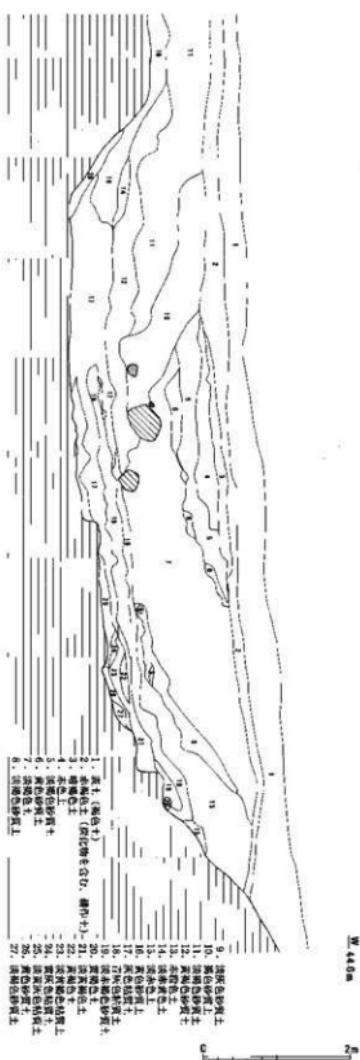
溝は、全て後世の造成により切断されている。

SD-1は幅約50cm、深さ約20cmを測る断面「V」字形を呈する溝で、やや蛇行しながら南北方向に掘られている。北側を造成により破壊されているが、総延長7mに亘って検出した。SD-2も同様の溝で、SD-1に並行しており、同様の機能を持つ溝の掘り直しと考えられるが、前後関係は不明である。

SD-3は、SD-1・2より南側で検出した溝で、その形状は、SD-1・2と同様である。北側で切断されているが、SD-2に「L」字形に続くものと思われる。SD-3の西側はSD-3に並行する加工段になっており、これがSD-1に連続した溝であった可能性が高い。両者とも南側を前述の落ち込みによって切られている。

SD-4は、SD-3の東側に位置する溝で、幅約80cmを測り、他の溝に比べてやや広い。断面も逆台形を呈し、その方向もSD-3とは並行しない。東側の肩は造成により破壊されているが、西側の肩が加工段として生きており、調査区南端まで連続しているが、その途中を落ち込みから続く樋と思われる溝によって切られている。

SD-5は、最も西側に位置する溝で、第2斜面の直下に位置する。この溝だけ主軸を斜面と並行する（東西）方向に取る。他の溝に比べ高い位置にあるが、削られた西側を延長すると第2斜面に



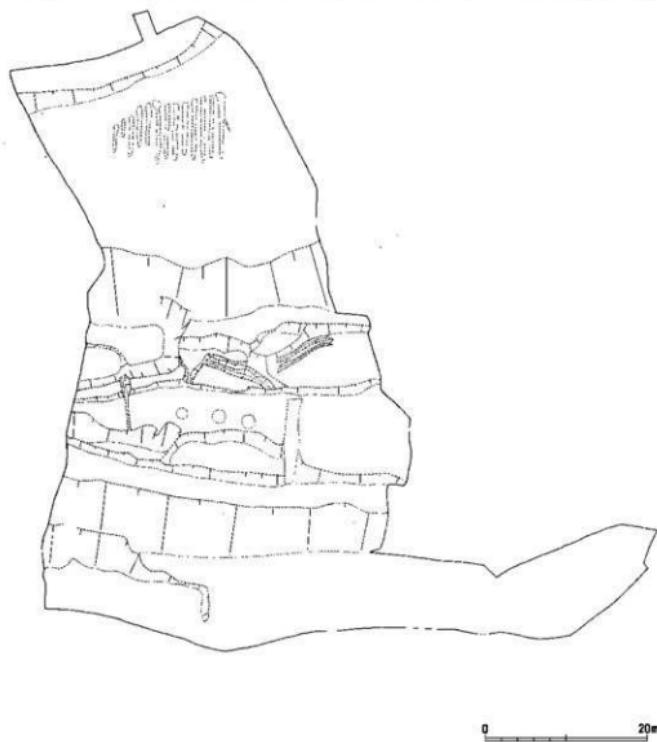
第8図 第3平面南壁土層断面図 (1 : 60)

ぶつかることになるので、どこかで（第2斜面の形状からおそらく北側に向けて）「L」字形に曲がるものと思われる。

S D-3・4の間の平坦面には、7基のビットが見られる。そのほとんどは直径約30cm程の比較的小なものだが、深さは約50cmと、しっかりしており、第10図 A列は80～90cm間隔で、直線に並んでいることから、柵列か建物跡があったものと思われる。また、B列のビットは、上面に削平を受けているものの、上面が方形を呈し、更に30cm円形に彫り込んだ2段のビットになっている。A列のビットも同様の形状であったと思われ、掘立柱建物跡の可能性が高い。位置関係からA列が掘立柱建物跡、S D-4がその区画溝であったものと思われる。同様に他の溝も建物に伴うと思われ、この周辺には、掘立柱建物の何回かの建て替えがあったものと想定される。第2平面からの遺物の出土量は少ないが、第20図-3・13などの土師器の椀や小皿が出土している。

S D-4とそれに連続する加工段部分より下方は、大きく削平されており、ビット等は確認できなかつたが、土師器小片が多く出土している。

第3平面東側の平坦面先端付近にも加工段の痕跡が点々と見られ、この辺りも建物跡が存在した可

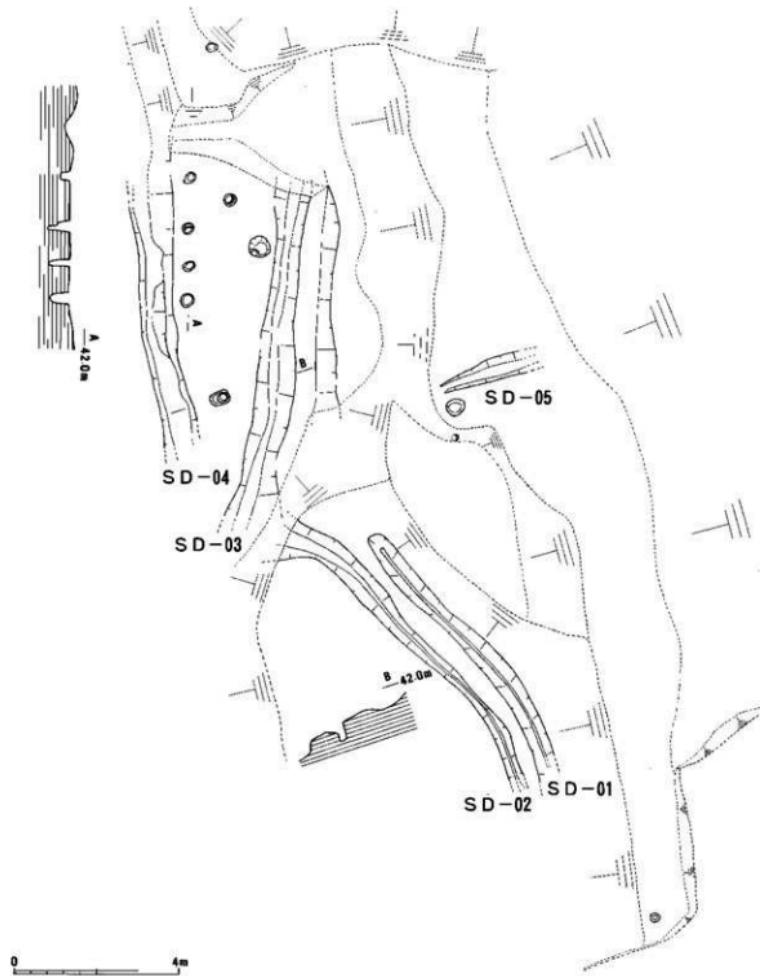


第9図 飯田C遺跡遺構配置図（1：600）

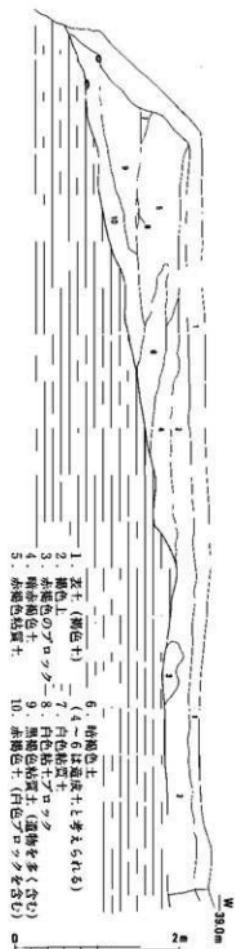
能性が高いが、後世の改変が著しく、ピット等は確認できなかった。しかしながら、第3斜面の包含層や、第3平面中央に設定した第12トレンチでも多量の遺物が出土していることから、建物跡が多く存在したことは確実である。なお、確実に遺構として検出し得たものは、この第3平面の溝・ピットのみであった。

第3平面中央に見える円形の土坑3基は、いずれも近年に果樹を植えたものである。

第3斜面～第5平面 第3斜面から第5平面は、標高34～39mに位置する。この間は、調査前の状況



第10図 第3平面北実測図 (1 : 120)



第11図 第4斜面南壁土層断面図 (1 : 60)

では、第3・4斜面が高さ1mもある明瞭な段差として存在しており、それによって第4・5平面を分けていたが、造成土を削がすと加工段と小規模な平坦面が連続する形状で、大規模な平坦面が存在しない。造成による埋土も厚く、第4斜面南壁の土層堆積状況を見ると、地山面についてはほとんど掘削されず、その上に造成土が厚く盛られた状況で、地山面の改変は比較的少なかったものと考えられる。

造成土除去後の地形は、第3斜面は加工段にすぎず、第4斜面も非常に緩やかな傾斜となっている。ピット等の明確な遺構は見られなかったものの、第3・4斜面を構成する加工段とその間に見られる小さな加工段が連続して調査区を横断するように延びている。

第3斜面から第5平面の北側部分は、黒色土の厚い堆積が見られた。黒色土中には、須恵器・土師器を中心とする多量の遺物が含まれている。この黒色土の堆積は調査区南側には全く見られず、南側では遺物も少なかった。

第5斜面の南側は、小さな谷地形になっており、すり鉢状に落ち込んでいる。調査時にも湧水が見られ、そのために東端の検出は断念した。湧水は第4平面付近から始まり、調査区外東へ延びている。谷の中から第5平面下方にかけては、人頭大から1mを越える大きな石が散乱した状態になっており、砂が厚く堆積している。遺構・遺物は、見られない。

第6平面 第6平面は、北端の調査区で、宅地として造成された部分の真下に当たる。標高36m付近に位置し、調査前はほぼ完全な平坦面で、畑地であった。埋土は非常に薄く、大半が削平されていたが、東側の調査区周縁部には、わずかに自然地形が残されており、東に向かって落ち込んでいる。遺構・遺物は見られなかった。

③ 遺物の概要

弥生土器 弥生土器と思われる土器片は少量が出土しているが、この内4点を図示した(第13図)。いずれも複合口縁を持つ壺の小片で、13-2・4は第3斜面から、13-1・3は第5平面から出土している。13-1は、復元口径12.8cmを測る小型のもので、口縁部外面に擬凹線文を施す。開き気味に延びる口縁端部をやや尖らせる。肩部に櫛によると思われる羽状文を密に入れる。口縁部内面はヨコナデを、体部内面は横方向のケズリを施す。焼成は良好で、明桃褐色を呈し、灰色・褐色の砂粒をやや多く含んでいる。13-2は、



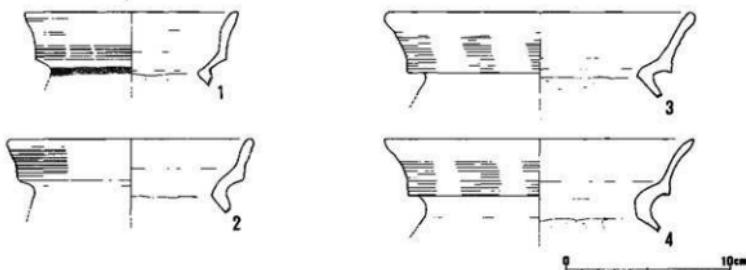
第12図 第5平面土層断面図 (1 : 60)

復元口徑14.6cmを測る。直線的に延びる、やや厚手に作られた口縁端部は、丸く納める。口縁部外面に擬凹線文を、口縁部内面にヨコナデ、体部内面に横方向のケズリを施す。明白褐色を呈し、やや歓質である。灰色の2mm程度の砂粒を含んでいる。13-3は、復元口径18.4cmを測る、やや大型の壺である。口縁部の形状は13-2に似るが、やや高い。調整も、13-2と同様である。焼成は良好で、明褐色を呈し、褐色・白色の砂粒をやや多く含んでいる。13-4は、復元口径18.9cmを測るもので、やや薄手に作られた口縁部がわずかに外反しながら延び、端部を尖らせるものである。調整は13-3と同様で、明褐色を呈し、焼成は良好である。内面は、黒灰色を呈している。胎土中には2~3mmの白色の砂粒をやや多く含んでいる。いずれの土器も弥生時代の後期後半のものと思われる。

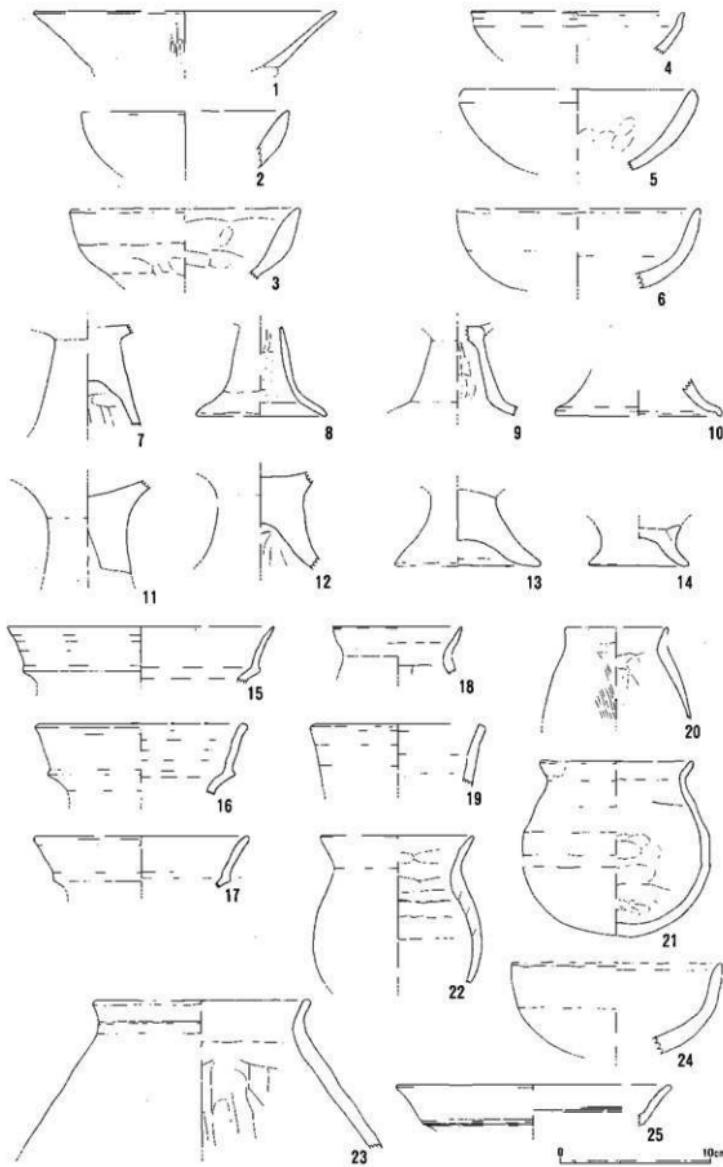
土師器 土師器は第3平面から第6平面までの広範囲で多量に出土しているが、そのほとんどは、第3斜面から第5平面にかけて見られる黒色土中からの出土である。

14-1~12は高壺である。14-1は、12トレンチから出土したもので、壺部の中位に稜が付き、口縁部に向かって直線的に開く形状のものと思われる。復元口径は19.9cmとなり、外面にミガキが見える。焼成は良好で、橙色を呈し、胎土には赤色・白色の砂粒を含んでいる。14-2・3・5・6は、丸みを帯びた壺部を持つものと思われ、14-3は、12トレンチから、他は第5平面から出土した。復元口径は14~16cmとなる。いずれもマメツしておらず、調整は不明である。橙色を呈し、胎土中に白色の小砂粒をやや多く含んでいる。14-4は、口縁部外面に稜を持つもので器台かもしれない。12トレンチから出土している。直線的に立ち上がる壺部が口縁端部の下1cm程のところで、明瞭な棱を持ち、指ナデによるものか、わずかに外反して口縁部に至る。復元口径は14cmで、橙褐色を呈し、焼成は良好である。胎土中には砂粒をほとんど含まない。14-7~12は高壺の脚部である。14-7は第5斜面から、14-8・9は、12トレンチから、14-10は第4平面から、14-11・12は第3平面から第3斜面で出土している。14-7・11・12は厚手で太い脚部を持つもので、いずれも調整は見えない。14-7・12は、橙色から明褐色を呈し、白色の砂粒を少量含む。14-11は、黄褐色を呈し、胎土中に2mm前後の角の丸い白色の砂粒を多量に含む。14-8~10は、薄手の細い脚を持つもので、筒部の裾で折れ曲がり、端部に至るものである。いずれも外面と内面端部をナデ調整し、筒部内面は絞り口を残す。淡橙色を呈し、胎土には白色の砂粒を含んでいる。

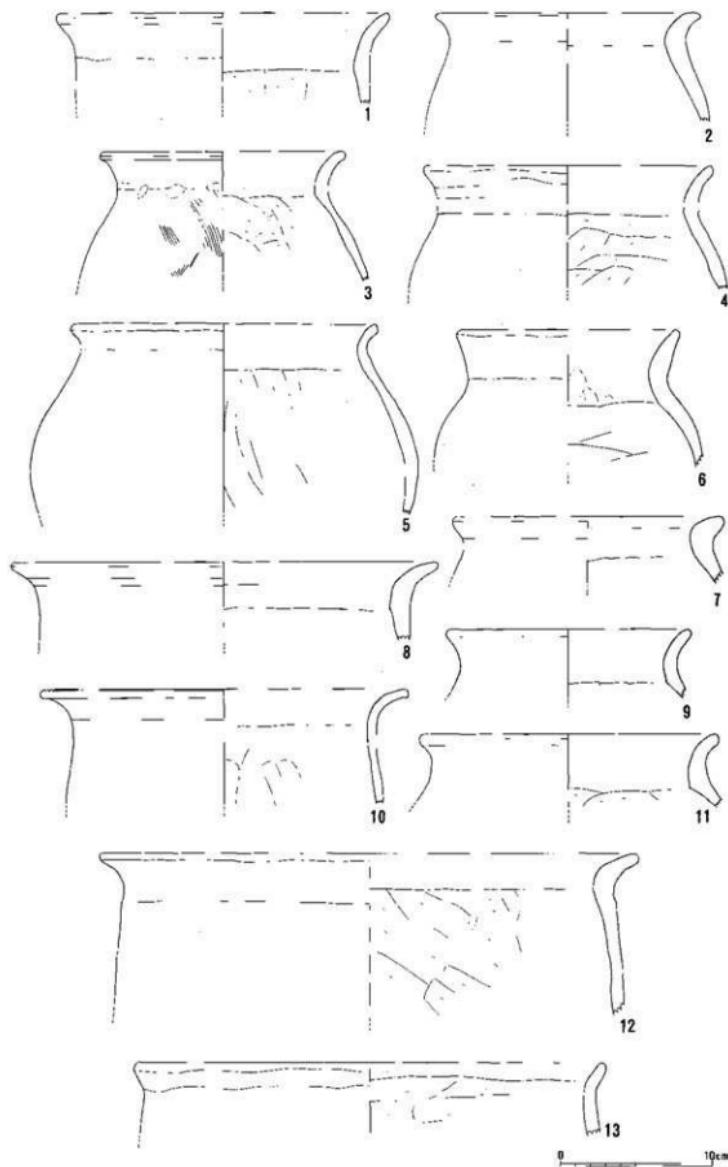
14-13・14は低脚壺である。14-13は第4平面から出土したもので、底径約9cmを測り厚手である。内外面ともナデ調整する。橙色を呈し、胎土中に白色の砂粒を含んでいる。14-14は、第5平面から



第13図 飯田C遺跡出土弥生土器実測図（1：3）



第14図 飯田C遺跡出土土師器実測図(1) (1 : 3)



第15図 飯田C遺跡出土土器実測図(2) (1 : 3)

出土したもので、底径6、6cmを測る。14-13に比べ薄く小型である。内外面ともナデ調整する。橙色を呈し、胎土中に白色の小砂粒を非常に多く含んでいる。上記の高坏・低脚坏は古墳時代中期のものと思われる。

14-15~17は、複合口縁を持つ壺である。14-15は、薄手の口縁部がわずかに外反して先端を尖らせるもので、12トレンチから出土している。淡褐色を呈し、胎土には白色の小砂粒を含んでいる。弥生土器に含まれるものか。14-16は、第5平面から出土したもので、口縁端部に面を持つものである。灰褐色を呈し、胎土中に褐色の砂粒を非常に多く含んでいる。14-17も同様のものであるが、口縁端部の面が不明瞭なものである。第6平面から出土した。淡橙色を呈し、胎土には白色・褐色の小砂粒を多く含んでいる。14-16・17は、古墳時代前期のものと考えられる。

14-18は小型の壺で、12トレンチから出土した。復元口径は約8cmである。赤褐色を呈し、胎土中に灰色の小砂粒を多く含んでいる。14-19は直口壺の口縁部と考えられるもので、第5平面から出土した。復元口径は約10cmで、口縁端部に明瞭な面を持つ。淡橙色を呈し、胎土中に赤色・褐色の小砂粒を含んでいる。

14-20~22は、小型の壺である。14-20は第5平面から、14-21・22は第3斜面から出土している。復元口径は7~10cmと小さい。14-20の外面には縦方向のハケメが見える。また、14-22の内面には粘土の接合痕が明瞭である。いずれも赤褐色を呈し、胎土中に白色の砂粒を含んでいる。

14-23は第4平面から出土した。短い口縁部から胴部は大きく張り出す。外面はナデ調整し、内面には板ナデ状の荒いケズリを縦方向に施す。橙色を呈し、胎土中に白色の小砂粒を含む。

14-24は、鉢と考えているが、高坏であろうか。第6平面から出土している。内外面ともナデ調整する。橙色を呈し、胎土中に灰色の砂粒をわずかに含む。

14-25は複合口縁の壺と思われるが、稜になる部分が沈線状に窪むもので、第3斜面から出土して。明褐色を呈し、胎土には褐色の小砂粒をやや多く含んでいる。焼成はやや軟質である。

第15図には土師器の壺を図示した。15-1・3・9は12トレンチから、15-2・4・5・8・10は第3斜面から、15-6・11は、第5平面から、15-7は第4斜面から出土している。15-1など胴部が長く延びると思われるものと、15-5などのように丸みを持つ胴部を持ち、最大径を測る部分が低くなると思われるものがある。

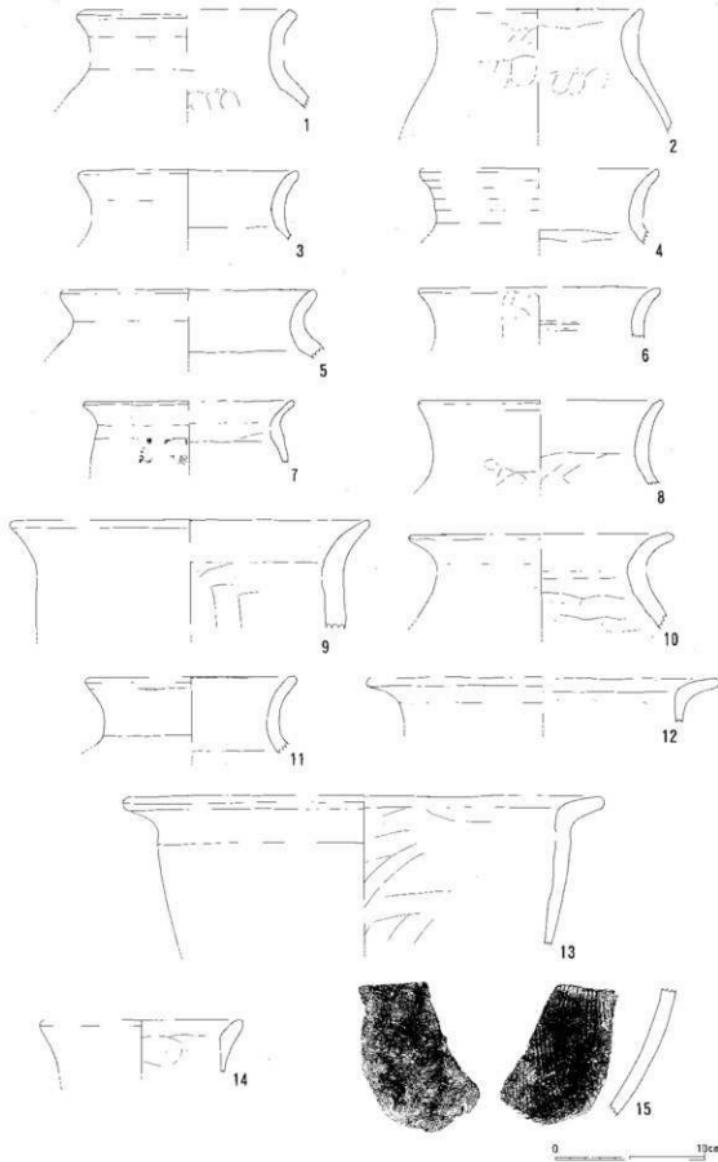
この内、15-7・10・12は、口縁部が極端に外反する。また、15-20は、鍋と呼ぶべき器形に近い。これらの土器は、第20図に図示した土師器などに伴う、新しい時期のものと思われる。

第16図には小型の壺と鍋を図示した。16-1・6・10は第5斜面から、16-2・13~15は第3斜面から、16-3は12トレンチから、16-4・5・11は第5平面から、16-7・8・12は第3平面から、16-9は第4平面から出土している。

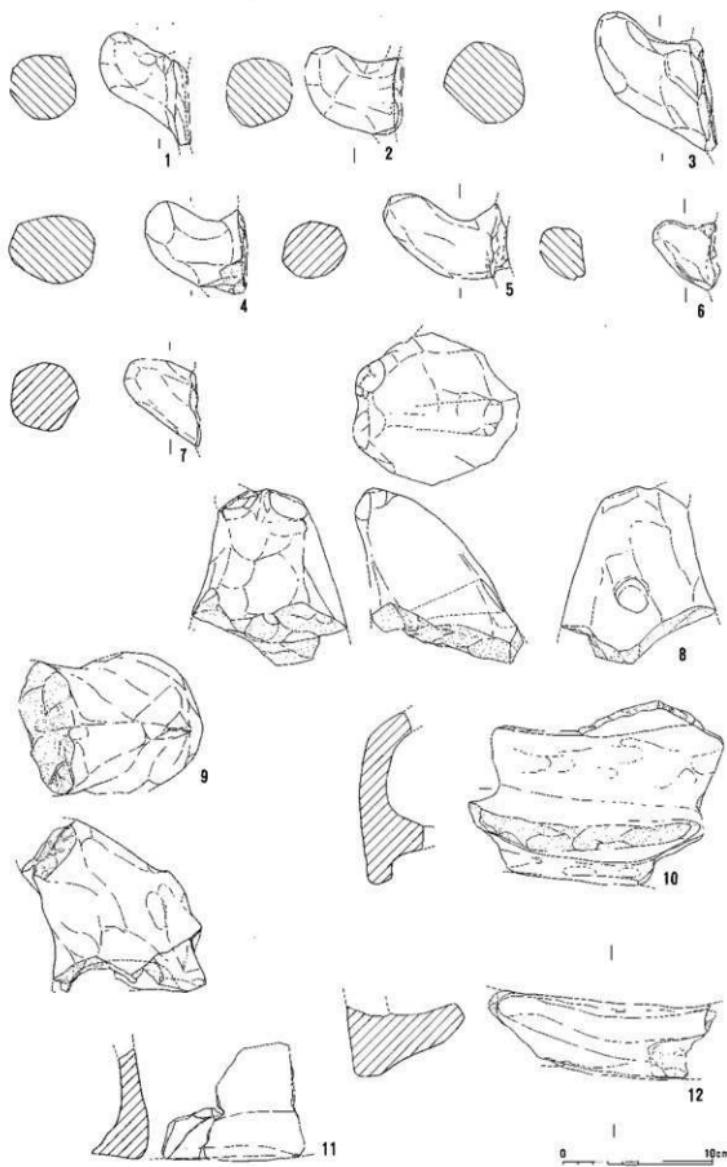
16-14は、復元口径が約13cmと極端に小さいもので、斜めに延びる口縁部の内面直下からケズリが入るものである。黄褐色を呈し、胎土中に白色の砂粒を含んでいる。

16-7・12・13など、口縁部が極端に外反する鍋は、第3平面か、直下の第3斜面から出土しており、第3平面の建物跡などに伴うものと思われる。いずれも橙色を呈し、胎土中に白色の小砂粒を含んでいる。16-7・14は非常に硬質に、16-13はやや軟質に焼成される。

16-15は、一見須恵器壺に見える個体だが、外面は荒いハケメを内面にはナデを施している。淡桃



第16図 飯田C遺跡出土土器実測図（3）（1：3）



第17図 飯田C遺跡出土土製品実測図 (1 : 3)

色を呈し、胎土中に砂粒をほとんど含まず、非常に硬質に焼成される。第3斜面から出土しており、鍋の体部であろうか。

第17図には土製品を示している。この内17-1～7は、櫛と考えられるものである。17-1は第6平面から、17-2・5・7は第3斜面から、17-3は14トレンチから、17-4は第5平面から、17-6は12トレンチから出土している。17-3などの大型のものや、17-6・7など小型のものが含まれる。

17-8・9は上製支脚である。17-8は、第5平面から出土したもので、橙色を呈し、胎土中に白色の砂粒を含んでいる。大きく前傾する形で、背には親指大の穴が開けられている。穴は奥に行くほど狭くなり、貫通まではしていないと思われる。17-9は第3斜面から出土したもので、底部まで残っていることから高さの低いどっしりした形のものである。背には縫が付けられている。赤褐色を呈し、胎土中に白色の小砂粒をやや多く含む。

17-10～12は、甌である。17-10・12は、12トレンチから、17-11は、12トレンチ直下の第4斜面から出土しており、同一個体の可能性があり、比較的小型のものと思われる。橙色を呈し、胎土中に赤色・白色の砂粒を含んでいる。

須恵器 第18・19図に示したものは須恵器である。

古墳時代の壺類は小片の出土が多く、3点を示す。18-1は、12トレンチから出土した蓋である。口縁部内面に明瞭な沈線があり、飯田C遺跡で最も古相を呈するものである。18-2は、大きなカエリが直立するもので、復元口径は約10cmと小さい。第5平面から出土している。18-3は、口縁部内面にくぼみを持たない蓋である。内外面ともナデ調整し、ケズリの痕跡を残さない。復元口径は約13cmで、第4平面から出土した。

18-4・5は、長脚の高壺で、第5平面から第5斜面で出土している。どちらもスカシは確認できない。18-6・7は、短脚の高壺で、第3斜面から出土している。脚取り付け部から広く、脚部が大きく外反し端部をわずかに垂下させる。18-8は、脚部の細い高壺で、少なくとも2方向に線状のスカシを持つ。第4斜面から出土している。

18-9・10は、第3斜面から出土したもので、壺だろうか。18-9はハケメ原体に、18-10はヘラ状工具による斜行刺突文を持つ。18-9には、ボタンが張り付けられれている。

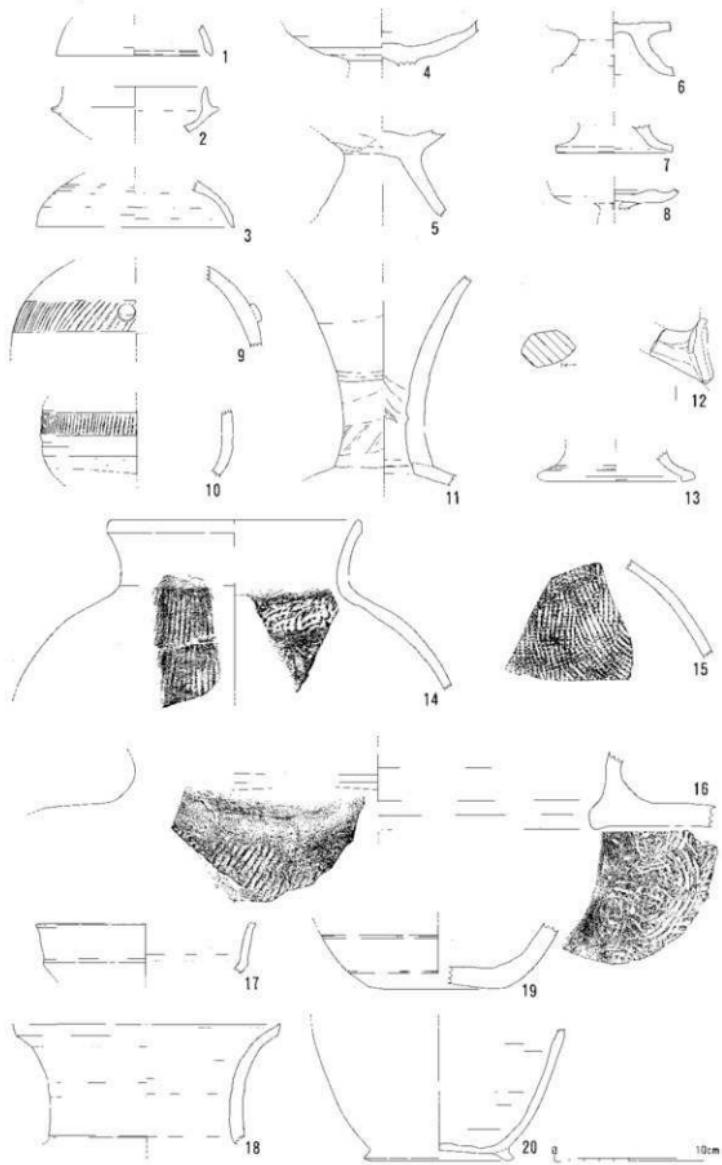
18-11は、長頸壺である。頸部中程に沈線が巡り、頸部下半には絞り目をわずかに残す。壺部上に頸部を張り足した痕跡が残っている。第3斜面から出土した。

18-12は、取手である。櫛とも考えられるが、体部側が大きく湾曲しており、鍋のような底のあるものではないだろうか。第4斜面から出土している。灰色を呈しているが、一部に黒変があり、火にかけられた可能性がある。

18-13の器形は解らない。脚付き壺の脚部であろうか。端部が肥厚し内面側に折り返された形状になっている。内外面ともナデ調整する。14トレンチから出土した。

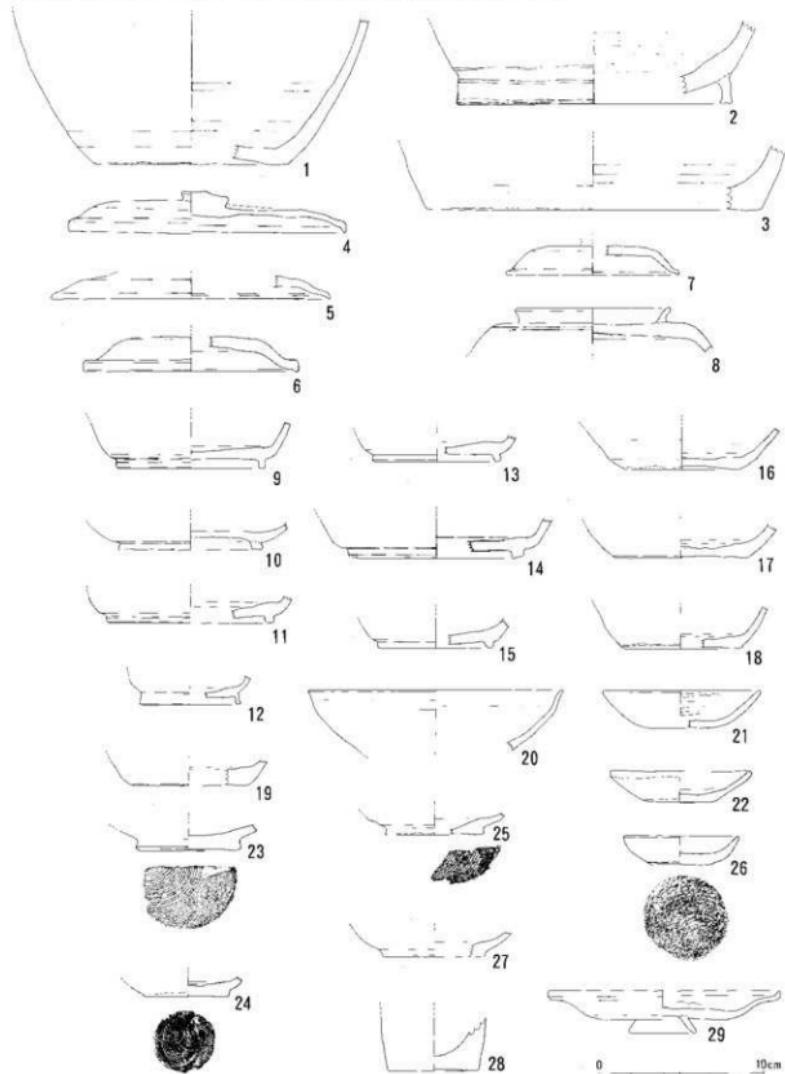
18-14～18は甌である。体部は外面に平行タキを内面に同心円文の押さえ具の痕跡を残す。口縁部は、外面側に直立する面を持つもの（18-14・18）と、頸部中程に稜を持ち、上面に面を持つもの（18-17）がある。18-14・15は第5平面から、18-16は第3平面から、18-17・18は第3斜面から出土している。

18-19・20は壺の底部と考えられるものである。18-19は、無高台の底部から緩やかに内湾する体

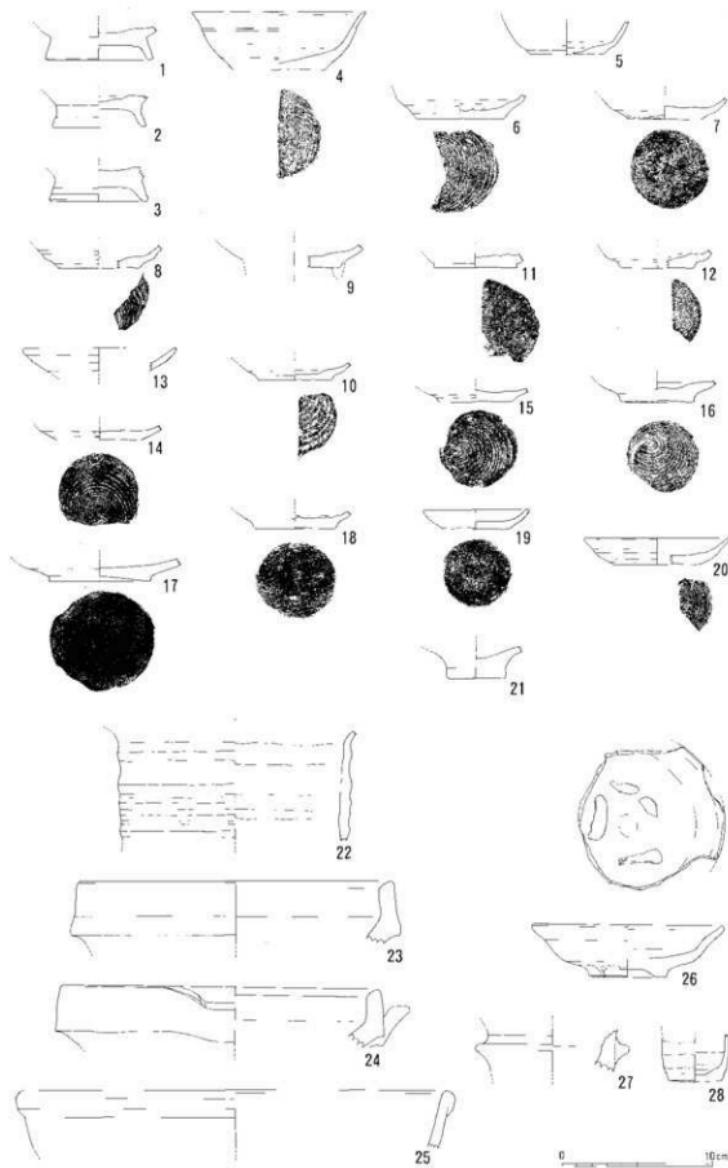


第18図 飯田C遺跡出土須恵器実測図(1) (1:3)

部が立ち上がるるもので、体部外面に強いナデによる沈線状のくぼみを持つ。18-20は外側に張り出す高台を持ち、内面見込み部に自然釉の付着が見られる。18-19は第4斜面から、18-20は第3斜面から出土した。両者とも底部に回転ヘラ切りと思われる痕跡を残している。



第19図 飯田C遺跡出土須恵器実測図(2)(1:3)



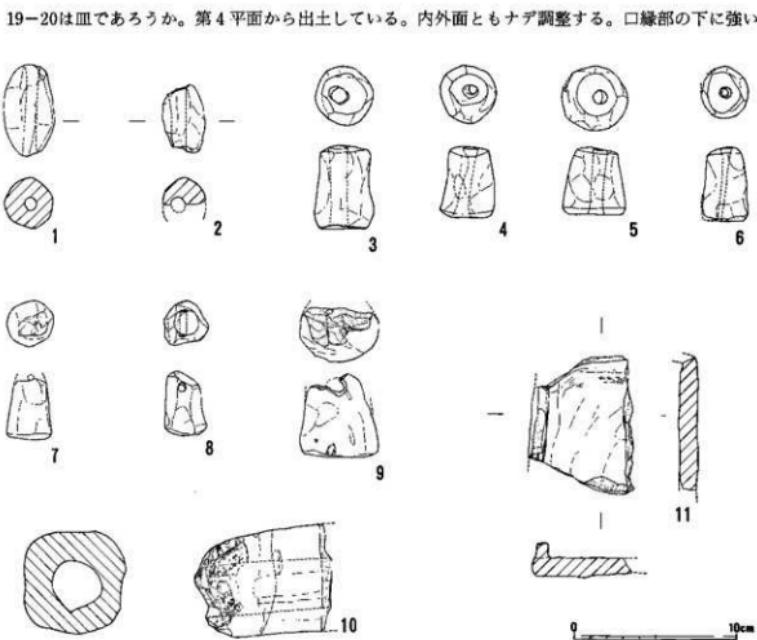
第20図 飯田C遺跡出土土師器・陶器実測図 (1 : 3)

19-1は、大型の壺の底部で、高台は無い。10トレンチから出土している。ケズリの後丁寧にナデている。19-3は、第5平面から出土した小片であるが、19-1と同様のものと思われる。19-2は太く高い高台を持つ壺の底部である。第3平面から出土している。

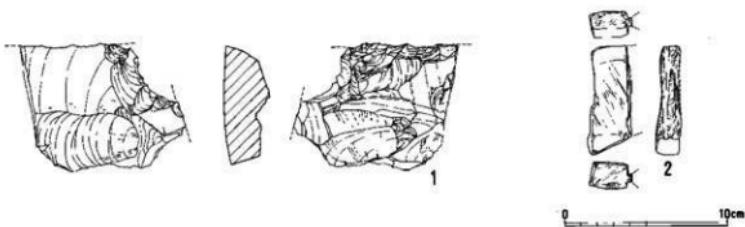
19-4～8は蓋である。19-4は擬宝珠状つまみを持つもので、復元口径約17cm大きなものである。緩やかな体部を持ち、端部が小さく垂下し、カエリを持たないものである。外面には自然釉が付着している。19-5も同様のものと思われる。両者とも第3斜面から出土した。19-6・7は、つまみから体部が水平に伸び、中程で折れ曲がって端部にいたり、下端をわずかに垂下させ、端部外面に面を持つものである。第3斜面から出土した。19-8は非常に径の大きい輪状つまみを持つもので、第3斜面から出土した。つまみ部の径は約9cmあり、端部を欠くが、器高は比較的高いと思われる。19-4～7は奈良時代の、19-8は、平安時代のものと思われる。

19-9～15は、第3斜面から出土した高台付きの壺である。いずれも低い直立する高台を持つもので、底部は回転ヘラ切りである。19-12は、高台の形状が異なり、極端に小型であることから壺の可能性もある。奈良時代のものであろうか。

19-16～19は、無高台の壺で、底部を回転ヘラ切りするものである。19-16は第6平面の表土から、19-17は10トレンチから、19-18は第3斜面から、19-19は第4平面から出土している。いずれも高台付きのものに比べ体部の開きが大きい。



第21図 飯田C遺跡出土土製品・現実測図(1:3)



第22図 飯田C遺跡出土石器実測図（1：3）

指ナデによるくぼみを持つ。

19-23~25・27は回転糸切り底を持つもので、19-23・25・27は皿、19-14は壺と判断した。いずれも底部に円盤高台状の高まりを持つ。19-23は第3斜面から、19-25は第6平面から、19-27は第5平面から出土し、19-24は表面採取した。

19-28は、第4斜面から出土した壺と思われるものである。底部は破片のため断定しがたいが、静止糸切りに見える。

19-29は蓋の転用鏡である。高く傾斜したつまみを持つ蓋を転用したもので、内面に使用による擦痕と、少量の墨を残す。第3斜面から出土した。

平安時代の土師器 第19図の一部と第20図には平安時代以降と考えられる土師器・陶器を図示した。

19-21・22・26は、皿である。19-21・22は第2平面から、19-26は第5平面から出土した。底部は回転糸切りによるものと思われる。19-22は内面にタール状の付着物があり、灯明皿として使用されていたものと思われる。

20-1~3は、高台付きの椀である。20-1・2は第4斜面から、20-3は、第3平面から出土している。いずれも底部は回転ヘラ切りで、胎土中に白色の小砂粒を含んでいる。

20-4~7は、無高台の壺で、20-4は第6平面から、20-5は第3斜面から、20-6・7は第5平面から出土している。20-4は、底径約6cmを測る底部から、膨らみを持つ体部が高く延び、口縁部はわずかに外反する。いずれも底部は回転糸切りである。

20-8~20は、皿である。20-8・11は第6平面から、20-10は第4平面から、20-12は第4斜面から、20-13・18は第2平面から、20-14・20は第3平面から、20-15は12トレンチから、20-16・19は第3斜面から、20-17は10トレンチから出土している。いずれも底部に回転糸切り痕を残す。

20-21は低い柱状高台を持つ皿である。マツツしており、底部の切り離しは確認できない。第6平面から出土した。

20-22は鍋と思われる破片である。内外面とも横方向の強いナデによる線が見える。明褐色を呈し、赤色・灰色の小砂粒をやや多く含んでいる。第3平面から出土した。

20-23・24は備前焼のすり鉢と考えられるものである。20-23は第3平面から、20-24は第5平面から出土した。

20-25は、10トレンチから出土した、土師器のこね鉢と考えられるものである。復元口径は約28cmと大きく、端部を玉縁状に折り返す。体部は緩やかに内湾するようである。淡橙色を呈し、胎土中に

黒色・白色の小砂粒を含んでいる。

20-26は肥前系の皿である。釉は暗褐色を呈し、貫入が多く見られる。高台外面は露体で、底面は搔き取り、高台を削り出す。見込みの4カ所に砂目が見られる。第3平面から出土した。

20-27は、第6平面から出土したものであるが、器種は不明である。須恵器に含まれるものであろうか。青灰色を呈し、胎土中に白色の小砂粒をやや多く含む。

20-28は、壺であろうか。明黄褐色を呈し、胎土中に赤色の砂粒を含んでいる。やや軟質に焼成される。第3平面から出土した。

土製品 第21図は土製品を図示している。

21-1・2は紡錘形の土錘である。21-1は表面採集し、21-2は第6平面から出土した。21-1は完形品で、46.6gを測る。橙色を呈し、胎土中に白色の微砂粒を少量含む。21-2は大半を欠く。灰色を呈し、胎土中に灰色の砂粒を含んでいる。

21-3は円柱形の上鍤である。72.9gとやや重い。淡橙色を呈し、胎土中に白色の砂粒を含んでいる。第3斜面から出土している。

21-4～6は裁頭円錐形の上鍤である。21-4は第4斜面から、21-5は第3斜面から、21-6は第4平面から出土した。重量はそれぞれ51.5g、65.0g、46.8gを測る。

21-7～9は、上製分銅と判断した。土錘との違いは、整形・調整が大変丁寧である点、円孔の方向が中軸方向に直行する点などである。特に21-8は、頭部を焼成後に切り落とし、孔を開け直していると見られることから重量の微調整を行った可能性がある。これらは第3斜面から第4斜面の間で出土している。21-7は一部を欠くが25.2g、21-8が28.2g、21-9が約1/3を欠くが67.6gを測る。いずれも橙色を呈し、胎土中に白色の砂粒を含んでいる。

21-10は、ふいごの羽口である。第3平面から出土した。先端がガラス化し、外形は断面隅丸方形を呈している。

硯 21-11は、平面長方形になる陶硯で、海に当たる部分を欠く。還元炎焼成され、暗灰色を呈し、白色の砂粒を含んでいる。第3斜面から出土した。

石製品 第22図には石器・砥石を図示した。

22-1は、第4斜面から出土した黒曜石製の石器である。欠損部分が多く、全体を伺えないが、スクレーパーの基部であろうか。石材は暗色で透明感が無く、気泡が少ない。

22-2は、第6平面から出土したものであるが、用途不明品である。片側に擦り切りを行ったような痕跡を持ち、他の面は砥石のように擦痕が残っている。石材は緑灰色の非常に硬い石を使用している。

製鉄関係遺物 図版14の写真は第3斜面から出土した鐵宰である。

④ 小結

弥生時代以前の遺物について 弥生時代以前の遺物は、黒曜石製石器が1点出土しているに過ぎない。この石器の外形すら解らない状況では時期は決めがたいが、縄文時代のものだろうか。

弥生時代の遺物について 弥生土器はいずれも第3斜面から第5斜面の黒色土中から出土している。この黒色土は、奈良時代の須恵器まで同一層で含む遺物包含層で、遺構に伴うものではない。出土した弥生土器はいずれも弥生後期後半に限られていることから、この時期の遺構が近くにあったもの

と思われる。

古墳時代前期～中期の遺物について 古墳時代前期に含まれると考えられる遺物はきわめて少ない。弥生土器も少ないとから、飯田C遺跡に本格的に人が住み始めるのが古墳時代中期以後のことであったと考えられる。弥生時代後期から古墳時代前期の土器の多くに見られる特徴として、胎土に1～2mm程度の角の丸い砂粒を大量に含んでいることが挙げられる。これは、次項の古八幡付近遺跡にも見られることで、この地域のこの時期の特徴であると思われる。高壇大半や甕の一部は古墳時代中期のものと考えられる。いずれも第3斜面から第5平面に見られる遺物包含層から出土したものであるが、前期以前に比べ、遺物量が格段に増加する。前期の土器の胎土に見られた、角の丸い砂粒の大・量混入は見られない。

古墳時代後期の遺物について 飯田C遺跡で出土する最も古い須恵器は18-1で、TK-10に並行するものと思われる。その後TK-43併行期辺りまでは点々と出土しているものの、中期の遺物に比べるとやや少ない印象がある。特にカエリを持つ蓋は全く出土しておらず、7世紀台の遺物は、高壇には含まれるものがあるかもしれないが、非常に少ない。

奈良時代の遺物について 奈良時代にはいると、再び遺物量が急増する。擬宝珠状つまみを持つ蓋と高台付きの壺の大半がこの時期に含まれるものと思われる。19-4は胎土・焼成・表面に付着したタール状の黒点が、江津市嘉久志町の久本奥窓跡のものに似ており、久本奥窓跡のものと思われる。久本奥窓跡ではこの蓋を8世紀前半台（V期）としている。

転用鏡として使用された、高い輪状つまみを持つ蓋は久本奥窓跡には見られないものであるが、体部途中で屈曲して端部に至るプロポーションは、久本奥窓跡のV期とVI期の中間的なものに見え、8世紀台に含まれるものと思われる。

18-12は甕の取手状のものであるが、体部の内湾の状況から、底部のふさがった容器（甕・鍋か）の可能性がある。県内ではあまり知られていないが、広島県御調郡久井町の熊ヶ崎1号窓跡などで、口径に対して器高の低い甕に取手の付くものがあり、その取手の形状は飯田C遺跡のものに似る。熊ヶ崎1号窓跡のものは、広い底面を持ち、緩やかに内湾する体部の中程よりや上に取手を付け、口縁部を外反させるもので、9世紀台の年代が与えられている。人々熱に弱い須恵器を火にかけたかどうかは疑問があるが、飯田C遺跡出土のものについても、甕以外の可能性も検討の余地がある。

他に奈良時代の遺物と思われるものに土製分銅がある。水分などにより重量の変化しやすい素焼きのものを重量の基準に使用するかどうかについては、若干の疑問もあるが、他の用途が考えられない。調査時には、上述の重量変化の問題から土錘と考えたが、川の漁で使用する土錘は基本的に孔が縱方向に貫通しているか、上端と下端の2カ所で接続できるようになっており、ぶら下げる使用する錘は見ない。これは、ぶら下げるタイプの錘では、流れにより網に絡まる危険性があるためである。また、海の漁に使用するには錘が軽すぎると思われる。重量調整したと考えられる個体も存在することから、土製分銅と断定した。^(註4) 分銅は松江市才の峰遺跡から石製のものが、出雲国府跡から銅製のものが出土しているが、上製のものは江津市二宮町の半田浜西遺跡のものしか知られていない。^(註5) 半田浜西遺跡では4個体が出土しており、小型のものが46g、中型のものが88gと100g、大型のものが193gとなっており、大型のものが中型の倍、中型のものが小型の倍の重量になっているとされている。重量調整の痕跡の見られる21-8が28.2gを測り、21-7も釣り手の部分を欠いていることから、30g前後であつ

たと見られることから、半田浜西遺跡のどれにも当てはまらない。21-9については、90g前後の重量が予想され、半田浜西遺跡の中型品に匹敵する。こうしたことからあえて言えば、飯田C遺跡の小型の分銅は、半田浜西遺跡の中型品の1/3の重さであったと推定される。

飯田C遺跡の奈良時代の遺物には、転用鏡や分銅など官衙の存在を伺わせる遺物が含まれている。奈良時代から平安時代の江津市域では二宮地区が中心的役割を果たしていたと予想され、半田浜西遺跡では奈良三彩が出土するなど有力な遺物が見られる。飯田C遺跡周辺は、水尻川の沖積平野からやや離れた山間に位置するものの、この片翼を担っていたものと思われる。

平安時代以降の遺構・遺物について 平安時代に含まれると考えられる遺物は第20図の土師器椀・皿類の他、回転糸切り底を持つ須恵器皿など比較的多い。

須恵器皿の回転糸切りによって底部を切り離す手法は、前述の久本奥窓跡では知られていないが、半田浜西遺跡 S D-4出土須恵器に見られる。半田浜西遺跡のものは、高さのある深い壺であるが、わずかに円盤高台状に底部が突きだしており、飯田C遺跡のものに似ている。また、同様の須恵器は、次項の古八幡付近遺跡でも出土しており、古八幡付近遺跡では、ほぼ同様の形態で、皿と壺の両者が見られることから、同時期のものと考えられる。古八幡付近遺跡では、同じプロポーションで、小さな高台の付く皿もあり、底部をわずかに突き出すのは意識して行われたものと思われる。半田浜西遺跡では、同時に灰釉の椀が出土していることから、9世紀後半の年代を当てている。

土師器には、椀・壺・皿が見られるが、高台の付く椀は、松江市池ノ奥遺跡出土のものと同形態で、11世紀頃と思われる。20-4などは底径に対して器高が高く半田浜西遺跡出土の須恵器に近い。土師器で同様の器形のものは安来市大坪遺跡出土品に似ており10世紀台のものと思われる。20-21は、柱状高台と呼ばれるものに近いと思われるが、一般的な柱状高台の皿に比べ遙かに低い。

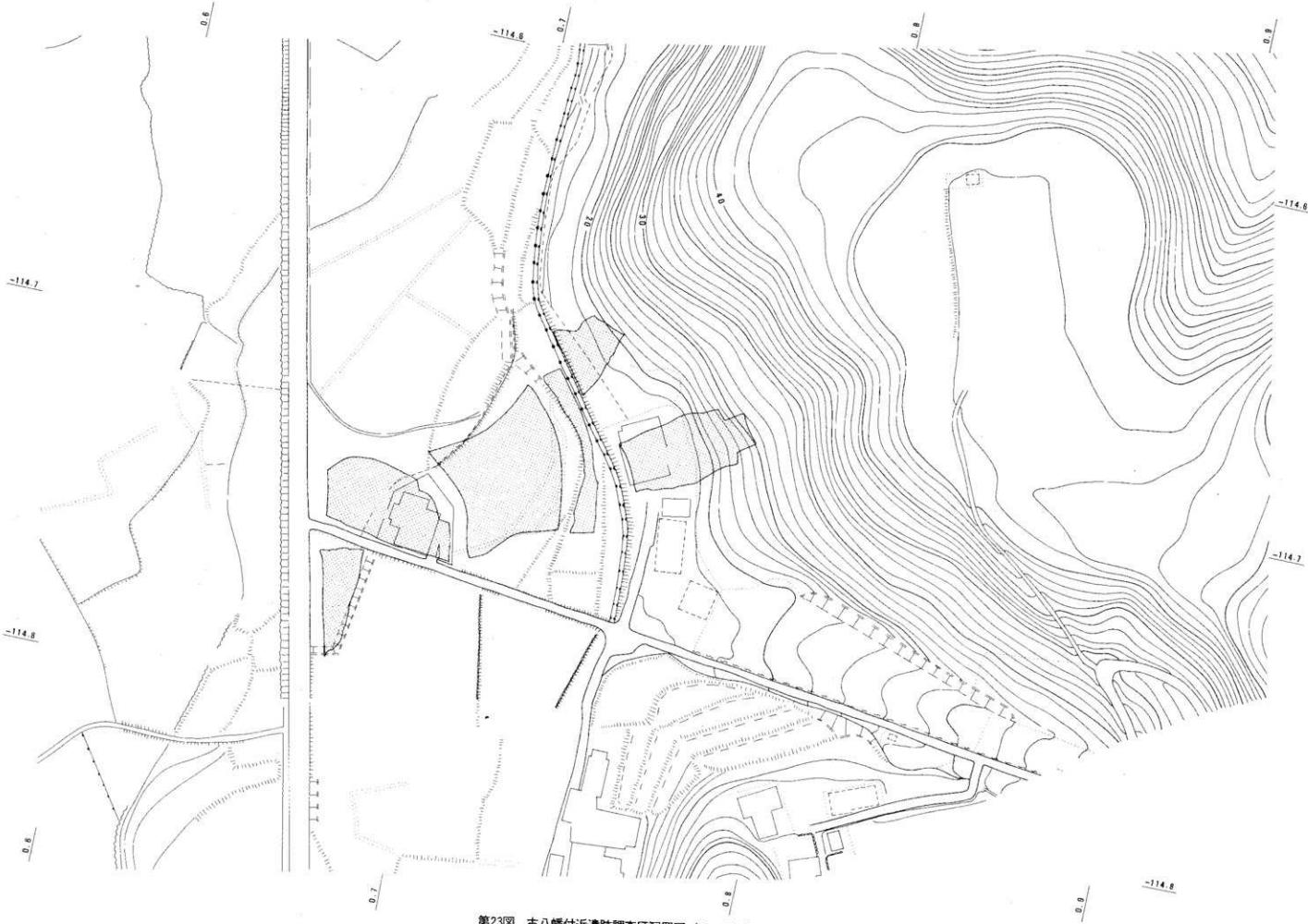
飯田C遺跡には貿易陶磁は見られないが、搬入品については、備前焼と考えられるすり鉢が見られる。口縁部の形態から17世紀前後のものと思われる。また、肥前系の皿は、砂目を使用しており、肥前II期（17世紀）と考えられる。その後の遺物は見られず、およそ、9世紀後半から17世紀までのものが含まれているものと思われる。

飯田C遺跡で、明確な遺構は第3平面の溝とピット群のみであった。この内、第10図A列のピット群は、平安時代の掘立柱建物跡と考えられる。周開には合計5本の溝が見られ、掘り直しも予想されることから、この周囲に何棟かの建物があり、建て替えを繰り返していたものと思われる。ここからは、土師器の椀・皿が出土しており、平安時代のものと考えられる。

製鉄関係の遺物については、その所属時期は解らないが、奈良・平安時代には、二宮地域が江津市域の中心地となっていたであろうこと、中世には都野氏の勢力下にあったであろうことから、平安～中世に行われたものと想像される。

第3平面にピット・溝が作られたのは平安時代のことと思われるが、飯田C遺跡の丘陵は、近代に入ってから改変の手が加わったと思われる。まず、第3平面南側に溜池が掘られるが、これは、全くの斜面に掘削されたものではなく、平安時代の集落などによって削られた加工段に掘られたものであろう。

- 註1 広江耕史編 「一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」 島根県教育委員会 1995年
- 註2 「熊ヶ岬第1・2号窓跡」 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 1996年
- 註3 広島県立歴史民俗資料館学芸員葉杖哲也氏のご教授による。
- 註4 「才ノ岬遺跡」「国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ」 島根県教育委員会 1983年
- 註5 「出雲御序跡発掘調査概報」 松江市教育委員会 1970年
- 註6 註1と同じ



第23図 古八幡付近遺跡調査区配置図 (1 : 1000)

3. 古八幡付近遺跡

① 遺跡の位置

古八幡付近遺跡は江津市西部の敬川町に位置する。この地域は、有福温泉方向から山間を流れてきた敬川が日本海に流れ出る河口近くの、日本海に面した扇形の沖積平野に位置し、遺跡はこの沖積平野の付け根に当たる。付近に遺跡は知られていないが、調査区南側の運送会社造成時に縄文土器が出土している。

古八幡の地名は、現在北側の敬川集落内にある敬川八幡宮が、元々この付近にあったことから付けられている。

古八幡付近遺跡は敬川右岸の標高約7～10mの水田と、その東側の斜面からなっており、最高所の標高は約30mである。調査区の西側約300mには敬川が北流しており、そこから古八幡付近遺跡までを含めた範囲は、低い河岸段丘が連続する地形になっている。また、現状では水田下に埋没して見えないが、河岸段丘上には大小の起伏があり、敬川に流れ込む小河川が、かつて存在したようである。小河川の一つは敬川町を形成する沖積平野の東端を流れていたと思われ、遺跡中央付近に残丘を残している。

② 調査区の設定

調査は、県道下府江津線から東側の水田と斜面を対象としている。この内、水田部東端の一部については平成5年度に行い、他の部分は平成6年度に行った。平成6年度の調査は原道や水路を掘削できないため、それらを残したことから5区に区分して調査を行った。5区に区分した調査区は、南西側の調査区からI区・II区……V区と呼んでいる。なお、県道下府江津線より西側にも遺跡が広がっていることが予想されるが、平成5・6年度には調査は行っていない。

I区は、県道下府江津線沿いの水田部の内、淨泉寺へ至る現道の南側に位置する三角形の水田部である。現地の標高は9m前後であるが、調査区南側は台地になっており、台地と県道の間を埋め立てていることが予想された。調査区外南側の台地上は、すでに削平されており、以前に縄文土器が採集できたとの連絡を受けている。

淨泉寺へ至る現道より北側の水田と、東側の宅地部分をII区とした。宅地部分はすでに削平されていることが予想されたが、宅地部分から県道に向かっては、一段下がって水田となっているため、旧地形の斜面があるものと考えられる。宅地部分は、敬川の河岸段丘と沖積平野東端を流れる旧河川の間にできた残丘と考えられる。

宅地部分の東側にある水田部は、北端で標高約7m、南端で標高約10mを測る。この水田部の東端の細長い部分について、平成5年度に調査を行い、他の部分をIII区とした。平成5年度調査に並行してIII区で行ったトレンチ調査では遺物の薄い包含層との結果を得ていた。

IV区は、平成5年度調査区の東側に当たり、宅地とその後背斜面に当たる。宅地部分は標高約14mを測りほぼ水平であるが、その東側は急斜面で標高約30mまで一気に立ち上がっている。宅地部分でもIII区の水田面より4mも高いことから、東側の斜面を削り落とし、宅地部分を大きく埋め立てていると思われ、そうしたことから現地形になっていると予想した。

V区は、IV区の北側に当たるが、IV区の宅地部分に当たる平坦面が無く、全体として緩やかな斜面になっている。標高約10mから17mの間に位置し、何条かの古道が南北方向にあったと思われ、小さな段が連続している。

③ I区の調査

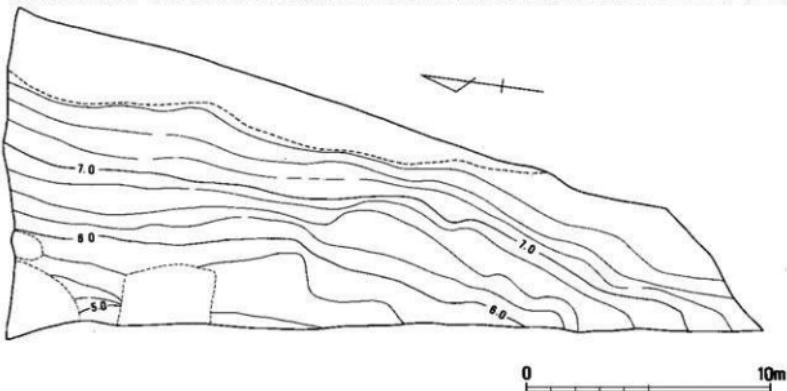
遺構の概要 I区東隣の一角は、平成5年度にトレンチ調査を行い、完全に削平されていることが確認されている。現地の標高は約10mで、そこからI区に向けて約1mの段を介して下がっている。

I区の表土・耕作土を剥がすと一旦水平な面が現れた。この面は、東側では地山面、他の部分は、明らかに地山を掘り崩して埋めたことが解る疊を含んだ赤褐色土で、造成面である。造成面から敬川に向かう先端には、石垣が構築されており、完掘時には「L」字形に折れ曲がった形で検出された。造成土中に遺物は無く、時期は解らないが、石垣の背後に当たる部分に何の造作もなく、造成土先端に石を積み重ねただけの簡単な構造で、畠地か宅地に伴う近代のものと思われる。また、この石垣に接して井戸も検出した。

石垣で「L」字に区画された内側の部分は、水を含んだ黒褐色土が厚く堆積していた。範囲が狭かつたため、造成土・石垣を撤去しながら掘削した。この黒褐色土中標高約7.5m付近からは黒曜石製石器と縄文土器片が多量に、面的に出土した(図版16)。しかし、その下層から須恵器・土師器を含む遺物包含層を検出し、更に下層からはガラス・プラスチックを含む層が検出された。このことから、これらの遺物包含層は、県道を嵩上げする際に埋められたものと判断され、南側の台地から一時期に、一気に埋められたものと思われる。地山面は、橙色土で、大きく北西に傾いており、北側の県道際では基盤層は検出されず、水を含んだ青灰色粘質土層が続いている。青灰色粘質土中には遺物は見られなかったが、地山面直上からは、黒曜石塊など少量の遺物が出土している。

地山面に遺構は見られなかったが、青灰色粘質土には、細い杭が打たれている。

石器 I区からは、石器・縄文土器を中心にして遺物が出土している。第26図には、I区から出土した石器類を示した。I区で出土した石器類の大半は黒曜石の剥片で、用途の解る石器は多くはない。包



第24図 古八幡付近遺跡I区地形測量図 (1:200)



第25図 古八幡付近遺跡Ⅰ区土層断面図 (1 : 80)

含層のため所属時期は不明だが、大半が縄文時代で、石包丁など、一部に弥生時代のものも含まれているようである。

26-1～7は石鐵である。26-1～3は黒曜石、26-4～7は安山岩製である。

26-8は、石錐であろうか。黒曜石製で、断面台形を呈す。基部を欠くが、長さ約3cmを測り、側部は片側から「寧に調整される。

26-9・10は楔形石器と考えられるものである。両者とも黒曜石製である。

26-11は剥片だが、石材が変わっていたため図示した。安山岩質と思われるが、乳白色から灰色を呈し、軟らかそうな印象がある。特に目立った加工はなく、剥離方向も一定しない。

26-12も剥片である。安山岩の非常に薄い剥片で、下端に逆方向の剥離がある。

26-13～16は黒曜石の剥片である。

26-17は打製石斧である。長さ10.9cm、重さ124gを測る。材質は不明だが、玄武岩であろうか。板状剥離する石材を使用し、側部を大きく打ち欠いて石斧としたもので、刃部をわずかに欠く。使用痕はあまり見られない。

26-18は石包丁の小片と考えられるものである。石材は不明である。非常に薄く剥離した石材を使用し、片側から研磨して刃部を付けたもので、刃部には斜め方向に擦痕が多く見られる。小片のため、全形は伺えない。

縄文土器 第27～31図には縄文土器と考えられるものを図示した。突帯文土器や底部には弥生時代のものも含むかもしれないが、包含層出土のため、便宜的に縄文土器とする。

前述したように縄文土器は逆転包含層中より出土しており、全体の器形が伺えるものはほとんど無く、器面も磨滅しているものが多い。突帯文土器を除くと大半のものが縄文後期前葉に含まれるようである。

第27・28図に図示したものは、福田KII式から津雲A式・彦崎KI式に並行すると考えられるものである。やや直線的になった沈線の区画による、擦り消し縄文を基調としたもので、27-3に見られるように波状口縁を持つ鉢を中心である。

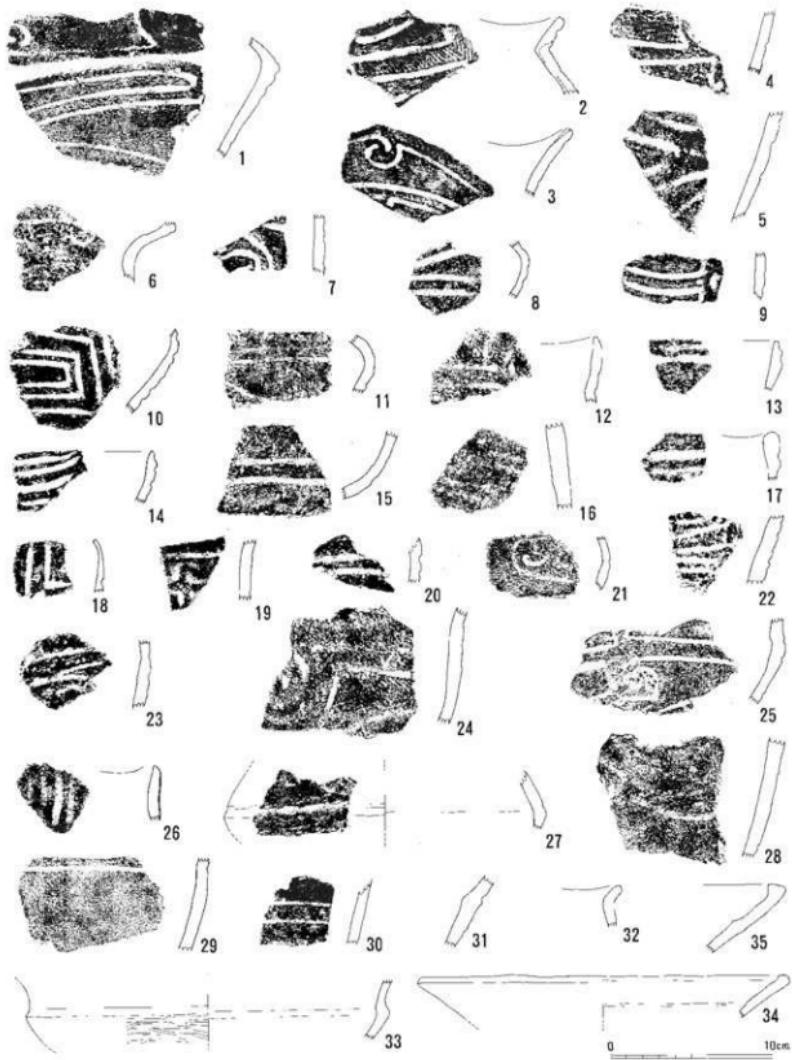
27-1は、深鉢の肩部で、沈線で文様を描くが、縄目はよく見えない。27-2は、短く折れ曲がる波状口縁を持つもので、縄文が良く残っている。27-10は直線的な口縁を持つ浅鉢と考えられるもので、曲線を主体とした「J」字の文様ではなく、四角形を基調とする文様を持つ。淡褐色から黒褐色を呈するものが多く、胎土中に白色の砂粒を含んでいる。磨滅しており、擦り消し縄文以外の調整を残している個体は少ないが、27-33は、外面にミガキが見られる。また、内面調整は、確認できたものはナデであった。

第28図には、主に縄帶文の時期のものを図示している。28-1は波状口縁の頂部に渦巻き状の文様を施すもので、波状口縁から延びる粘土帯が、時計回りに巻く。また、渦巻きの下方には円孔が開けられている。28-2は、直線的な口縁を持ち、渦巻き状の部分のみが突起になるものである。渦巻きの方向は反時計回りで、完全な螺旋にならず、沈線で表現する。28-3は、波状口縁が外側に肥厚するもので、上面に2状の、外面に1状の沈線が入り、波状口縁の頂部直下に円孔を開ける。28-6～19は、口縁部を拡張し、沈線を施すもので、外面から上面に沈線を入れるものと、内面側に沈線を入れるものがある。第28図に図示したものは、渦巻き部を除き曲線的な文様はほとんど見られない。



第26図 古八幡付近遺跡Ⅰ区出土石器実測図 (2 : 3)

29-1は、直線的な口縁を持ち、肩部に二枚貝によると思われる斜行刺突文を持つ。29-2は、小さく「S」字に屈曲する肩部を持つ浅鉢と考えられるもので、小さな円孔が空く。口縁部外間に巻き貝による斜行連続刺突文を持ち、肩部は2条の沈線で区画し、その間に同じく巻き貝による連続刺突文を



第27図 古八幡付近遺跡I区出土綱文土器実測図(1)(1:3)

施す。単位は見えないが外面の器面は丁寧に調整されており、ミガキであろう。内面には条痕が残る。
両者とも縁帶文の時期であろう。同様のものは美保関町サルガ鼻洞窟遺跡から出土している。

29-3は緩やかに外反する口縁を持ち頸部に円形の文様を持つものである。肩部から頸部にかけては一段落ち窪んだ様になっていて、その間に2段に棒状工具による円形刺突文が施される。肩部には浅い沈線が入る。縁帶文の時期のものと思われる。

29-4は、無文の鉢で、外面穿孔による円孔が開けられる。磨滅のため調整は不明である。

29-5・6は、条痕地の深鉢である。繩文土器と思われる破片は多く出土しているが、条痕地のものは磨滅のせいもあるが、以外に少ない。2点とも二枚貝によるものと考えられる横方向の条痕を内外面ともに施す。

第30図には、突帯文土器を図示した。

30-1は、口縁端部が折れ曲がるように肥厚し、刻み目を施すものである。内面調整はナデである。

30-2～4は、口縁端部からわずかに下がった位置に突帯が付くもので、30-2・4は刻み目も施される。

30-5～7は、口縁端部から一段下がった位置に突帯が付くもので、30-5は幅の広い、30-6・7は細かい刻み目を持つ。30-5の刻み目は片側から抉るように付けられたもので、原体は二枚貝によると思われる。

30-8は、口縁部が大きく外反し、その下方に非常に高い突帯を施すものである。突帯には巻き貝の



第28図 古八幡付近遺跡Ⅰ区出土縄文土器実測図(2)(1:3)

背によると思われる刻み目が施される。

第31図には縄文土器の底部と考えられるものを図示した。完全に平底になるもの(31-1~3)、周縁を残して内側がわずかに上がるるもの(31-4~10)、高台状に高く持ち上げられるもの(31-11~14)の3種類に大別される。

弥生土器 第32図には弥生土器を図示した。

32-1・2は、壺である。口縁部が緩やかに外反し、口縁端部は丸く作られる。内外面共にハケメ調整し、外面に1条のヘラ描き直線文を施す。32-2は、胴部がわずかに張り出す。弥生時代前期のものと考えられるが、底部を除いて、他に前期と考えられる個体は無い。

弥生時代中期の土器もきわめて少ない。32-5は、頸部が「く」字状に屈曲する壺である。口縁部は肥厚し、上方に向けてつまみ上げるように拡張する。

32-7~14は、口縁部を上に拡張して凹線文を施すものである。32-6・8は、小型の鉢と考えられるもので、複合口縁の部分はほぼ直立する。肩部に櫛状工具による連続刺突文を施す。内面の頸部より下方はヘラケズリが見られる。32-7は壺で、口縁部に3条の凹線文があり、頭部に櫛による斜行刺突文を施す。厚手で作られた頸部はほぼ真横に折れ曲がり、口縁部は上下に拡張される。内面の頸部は鋭く尖り、それより下方は横方向のケズリが見られる。

32-15・16は、長い複合口縁を持つ壺で、口縁部外面には擬凹線が施される。口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁端部は肥厚して丸く作られる。口縁部内面はヨコナデである。内面の頸部より下方はヘラケズリが見られる。

32-17~20は、底部である。32-17は、内面にもハケメが見られる。32-18の内面はケズリである。

32-3は壺の頸部と考えられる破片であるが、複合口縁が付くものと思われる。肩部に櫛描きの直線文が施される。

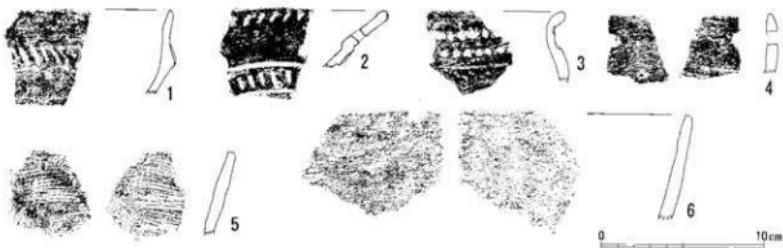
32-4は、壺の頸部であろうか。櫛による刺突列点文が施される。内面はケズリである。

土師器 第33図には土師器を図示した。

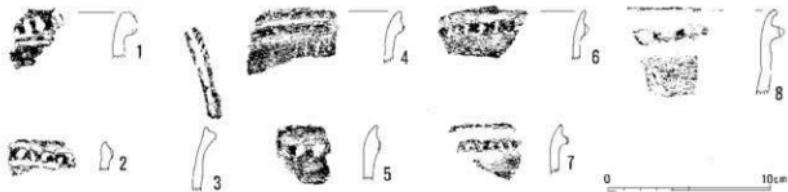
33-1~9は、高环である。33-1・4は内面にミガキが見える。33-4・5は环部の中位に稜が入るもので、外面の稜より下方にはハケメが入る。

33-10は複合口縁の壺で、ほぼ直立する口縁は端部が尖る。頭部内面にはナデによる面を持ち、それより下方はケズリである。

33-11・12は小壺の壺である。33-11は、内面にも強いナデ上げの痕跡がある。33-12は磨滅のた



第29図 古八幡付近遺跡I区出土縄文土器実測図(3)(1:3)



第30図 古八幡付近遺跡I区出土縄文土器実測図(4) (1 : 3)

め、調整は見えないが、内面はケズリで、33-11とは異なる。

33-13は、口縁部が大きく外傾して立ち上がる臺である。胴部外面には斜め方向のハケメが見える。内面は頸部以下を荒く削る。

33-14~17は、口縁部が直立する臺である。いずれも胴部外面の調整は見えない。内面は、頸部のやや下方で横方向に削っている。

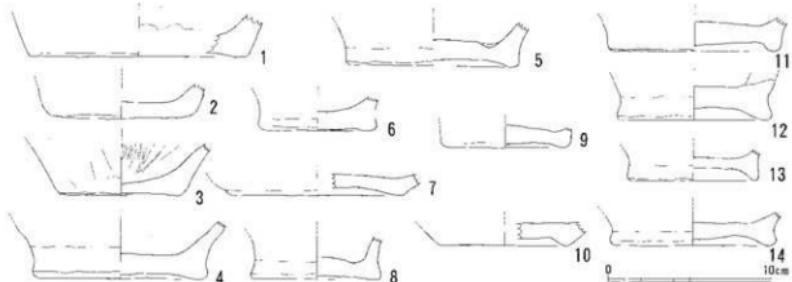
33-18~20は口縁部が緩やかに外反する臺である。33-20は、口縁端部直下で強いアクセントを持ち、外反している。

33-21は坏である。底部は回転糸切り痕を残し、体部にはロクロ目状のナデの痕跡を残している。底部と体部の間は、糸切り時の糸によるものか、大きく高台状にくびれており、断面ではその部分で張り合わせたように見える。

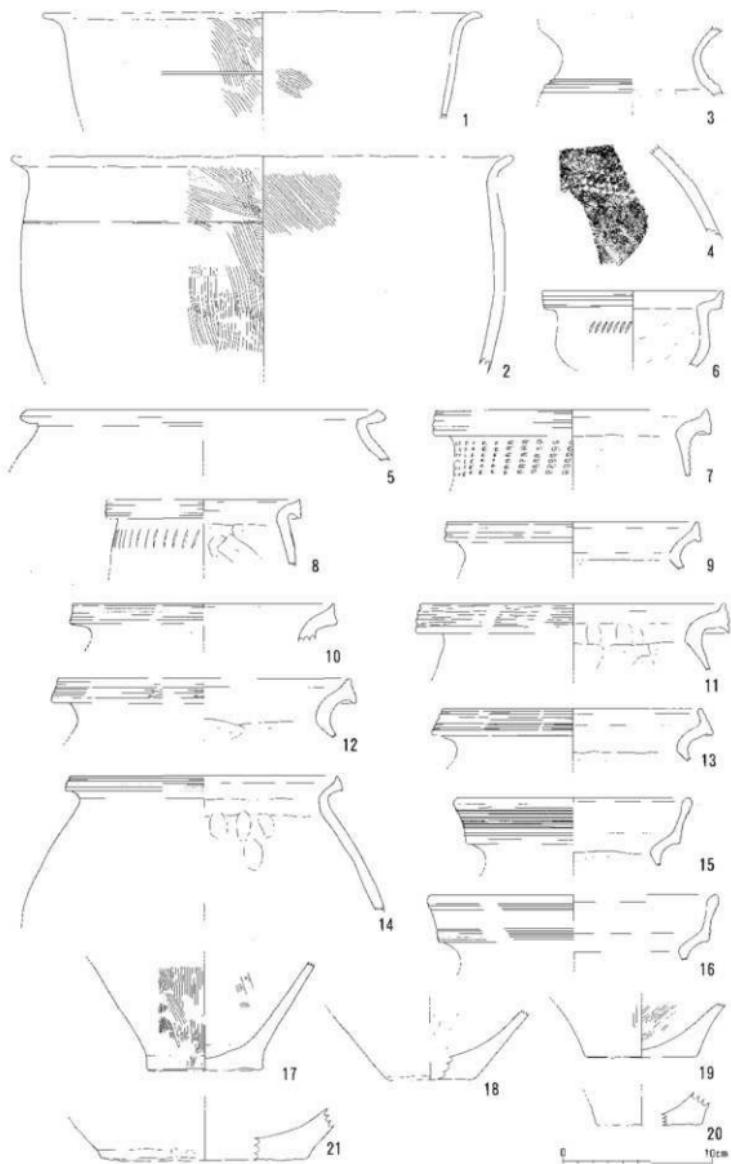
33-22は、桃灰色を呈す皿であるが、須恵器であろう。底部には回転糸切り痕と板状のものの圧痕を残し、体部は直線的に斜めに立ち上がる。比較的厚くつられた体部は、そのまま口縁部に続いており、口縁部は丸く収まる。

33-23は、柱状高台を持つ皿である。底部には回転糸切り痕を残し、高台部分の高さは約2cmある。皿部は残存範囲ではほぼ完全に水平である。

33-24~29は小皿である。33-24・27の底部には回転糸切り痕が、33-29の底部には回転ヘラ切り痕を残している。33-24~26は、直線的な短い体部を持ち、口縁端部の外側に面を持つ。33-27は糸切り痕を残す底部の部分が極端に小さく、底から1~2段の段を介して体部に続く。33-28は、外反する体部を持つもので、口縁端部は尖る。33-29は、あまり外傾しない短い体部を持つものである。



第31図 古八幡付近遺跡I区出土縄文土器実測図(5) (1 : 3)



第32図 古八幡付近遺跡Ⅰ区出土弥生土器実測図

須恵器 第34図には須恵器を図示している。

34-1は、壺である。底部の周辺にはケズリを残し、体部は直立する。口縁端部はやや尖らせている。34-2は、高台付きの壺である。ほぼ垂直に付く高台を持ち、直線的な体部はわずかに開く。34-5は、同様の器形を呈すものだが、高台を伴わない。34-3・4・6・7も34-2と同様のものである。

34-8・9は、高壺である。34-8は長脚の、34-9は、短脚のものと考えられる。

34-10~14は蓋である。34-10・11は、口縁部を「S」字に曲げただけの高さのないもので、つまりの形状は解らない。外面は回転を利用したナデ、内面は不定方向のナデを施し、ケズリの痕跡は残さない。久本奥窯跡には少ない器形であるが、V期とVI期の間にに入るものであろうか。34-12・13は、輪状つまみ部分の破片であるが、口径に対して器高が高く体部が「S」字状に折れ曲がるものであろうか。34-14は、体部の途中で、「S」字状に鋭く折れ曲がり、端部のアクセントがほとんど無いもので、輪状つまみが付くものと考えられる。久本奥窯跡のVI期に相当し、8世紀後半から9世紀のものであろう。

34-15・16は回転糸切り底を持つ皿・壺の底部である。両者とも底部が高台状に突き出しており、体部は回転ナデによって丁寧に調整されている。底部の、円盤高台状の突き出しが、回転糸切りによるものと思われ、高台部分の外面には、特に調整は見られない。内面は螺旋状に強いナデが施されるが、このナデは、意識してナデの線を付けたものと思われる。

35-17は、壺の口縁部と思われる。内外面とも横方向のナデが施される。器高が高く、口縁部がわずかに外反するものである。この器形は、久本奥窯跡のVII期に相当し、9世紀末から10世紀初頭のものと思われる。

35-18は小型の壺の底部と考えられ、高い高台を持つものである。高台は、やや外傾して付き、内面側にわずかに面を持つ。底部の切り離しは不明である。

34-19・20も内面のナデが荒く、小型の壺の底部と考えられる破片である。両者とも底部の切り離しは回転ヘラ切りである。

34-21・22は、長頸壺と考えられるものである。内外面ともナデ調整し、外面肩部に沈線を1条入れる。

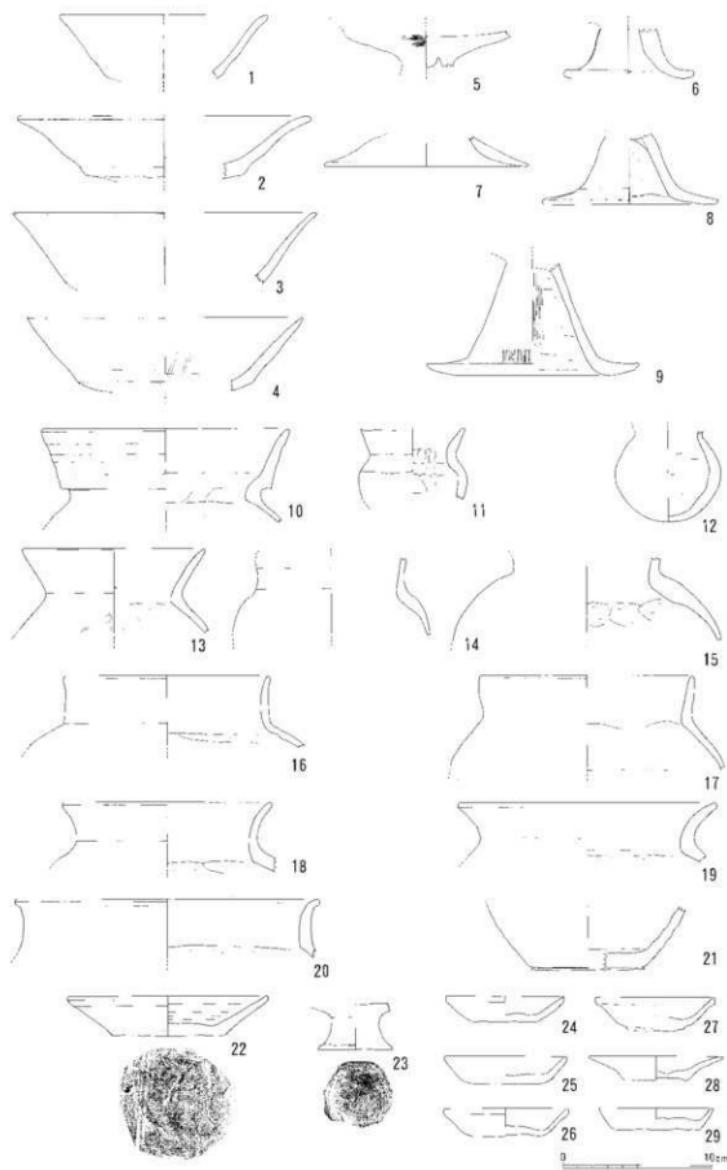
34-23は、無高台の壺の底部である。内面はナデ、外面はケズリを行う。ケズリの単位は不明瞭で、上位に向かうとナデになるものと思われる。

34-24は、高台の付く壺の底部である。高台は断面四角形を呈し、太く短い。体部外面はケズリを行なう。

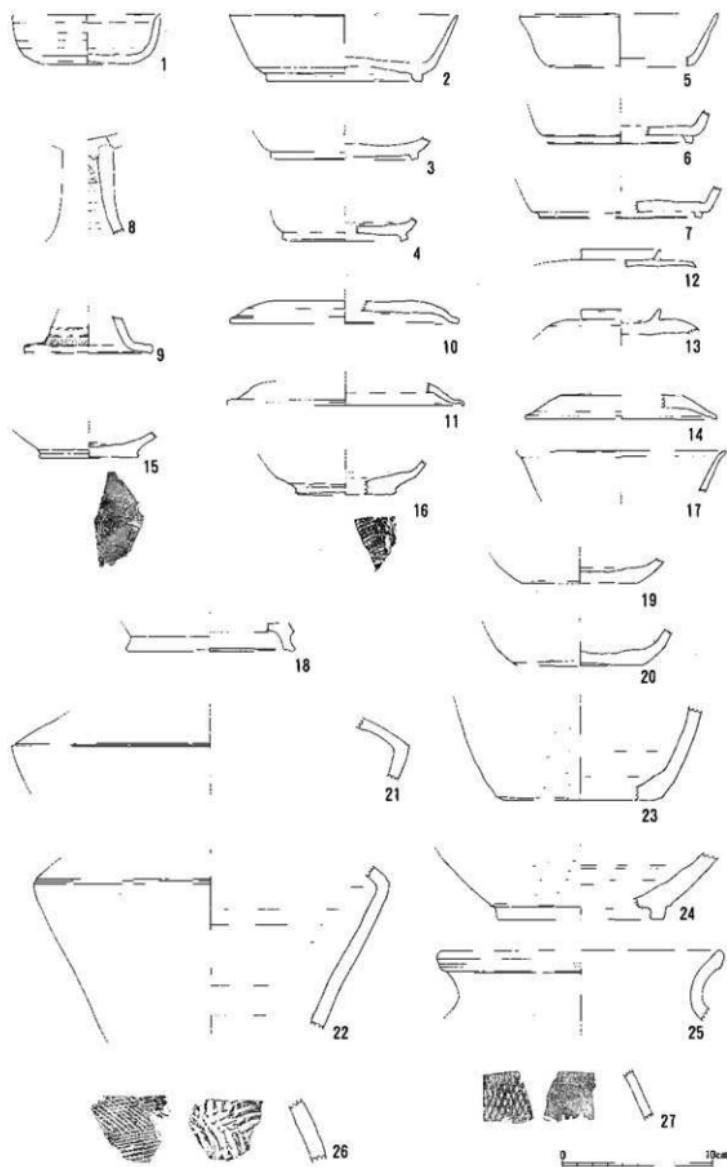
34-25は、壺の口縁部である。口縁端部は玉縁状に肥厚し、外面下方に小さな段を持つ。内外面とも横方向のナデを行なう。

34-26・27は、壺の胸部の小片である。34-26は内面は同心円文の押具痕を残すが、外面のタタキ痕は、細く深い平行タタキである。34-27は外面は通常の平行タタキを交互に方向を変えて行ったものと思われるが、内面の押具痕をナデ消している。

註1 佐々木謙・小林行雄「山豐国森山村崎ヶ鼻洞窟及び権現山洞窟遺跡」『考古学第8卷第10号』 1937年



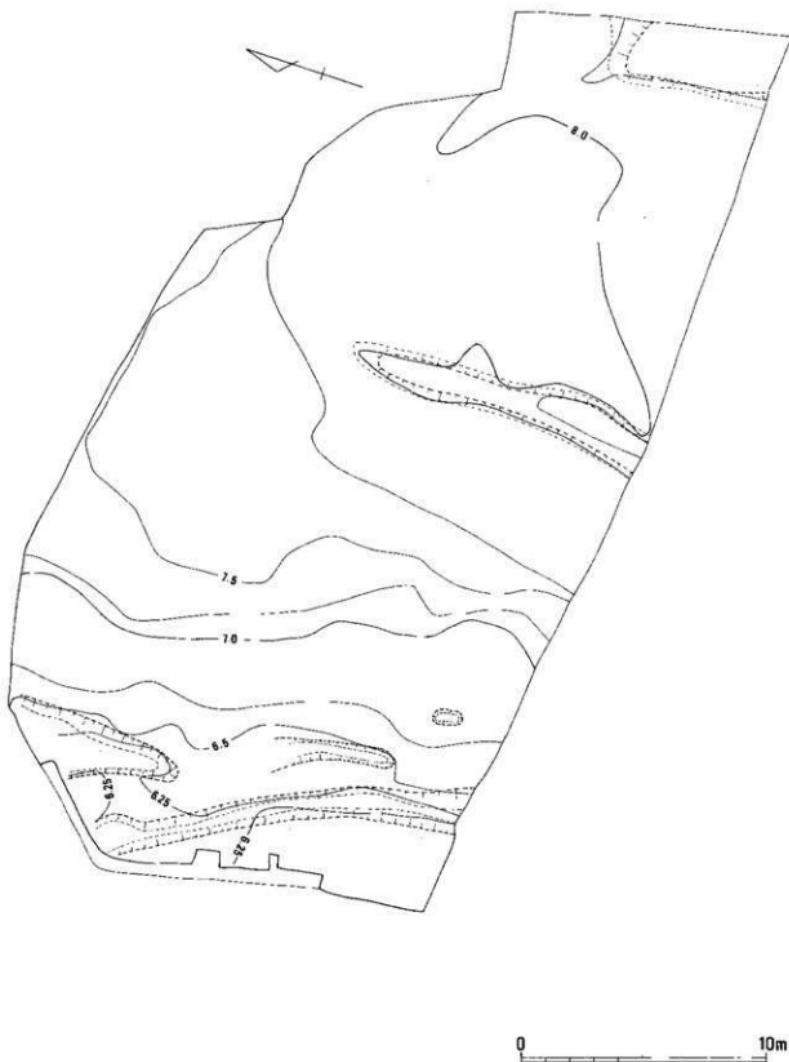
第33図 古八幡付近遺跡I区出土土師器実測図 (1 : 3)



第34図 古八幡付近遺跡I区出土須恵器実測図 (1 : 3)

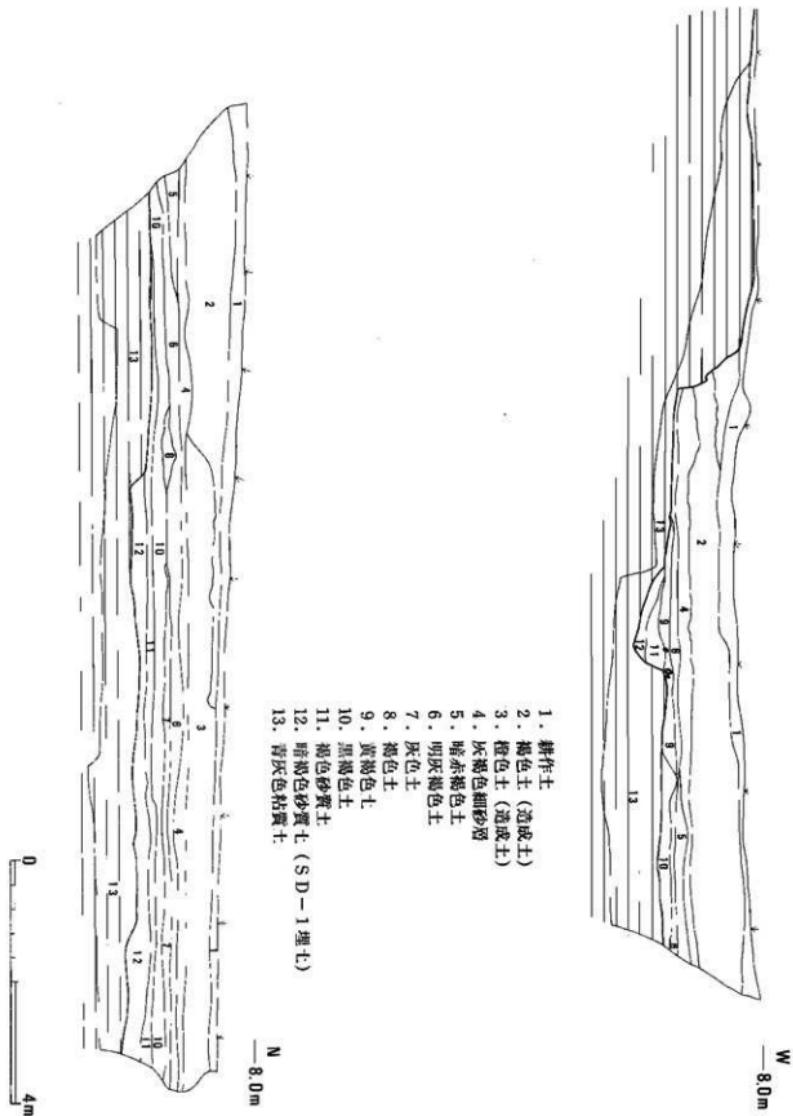
④ II区の調査

遺構の概要 II区は、県道沿いの標高約9mの宅地とその西側の水田で、宅地部分については改変が著しいものと思われるが、水田部分は大きく西側に傾斜しており、遺構面を確認した。標高7.5mより



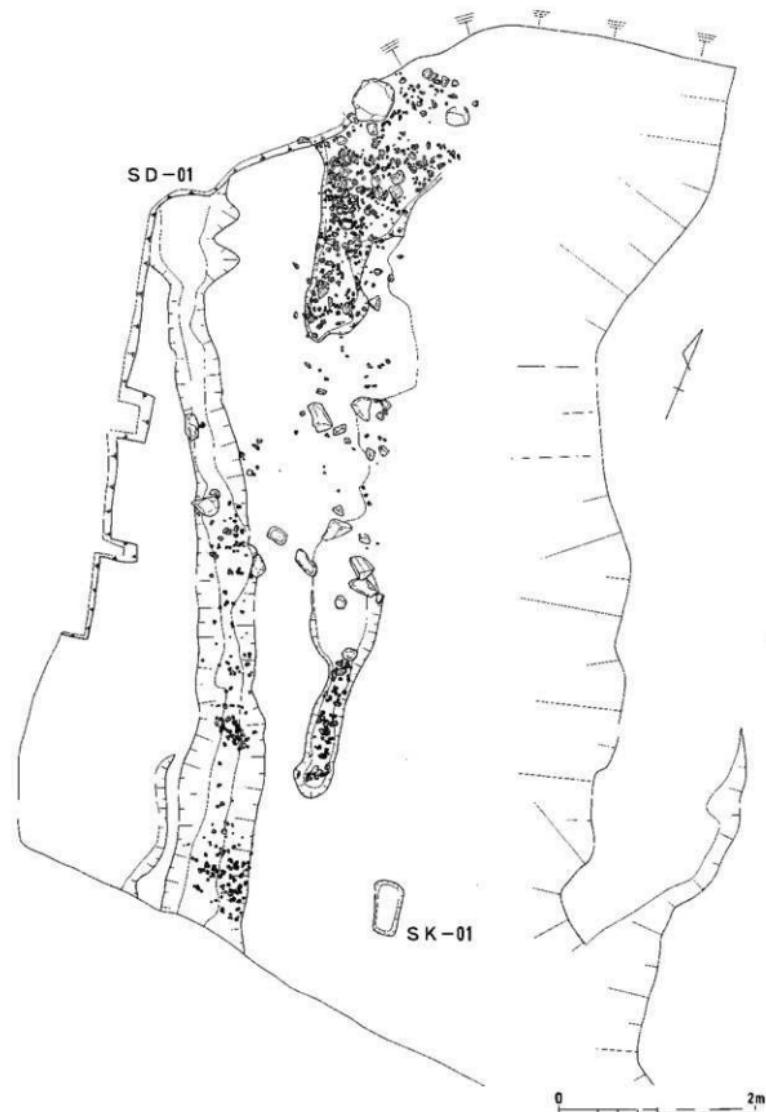
第35図 古八幡付近遺跡II区地形測量図 (1 : 200)

上方は削平されているが、そこから標高6.5m付近まで加工段状の傾斜面があり、その傾斜面の底を沿うような状況で溝（SD-1）が検出されている。SD-1の床面からは、38-1が出土しており、跡

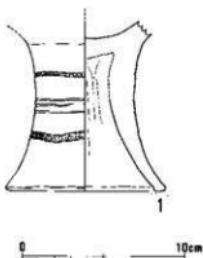


第36図 古八幡付近遺跡II区土層断面図（1:80）

生時代のものである。SD-1より西側は青灰色の粘土が堆積しており、遺構・遺物は見られなかつた。



第37図 古八幡付近遺跡II区 SD-1 (1 : 50)



第38図 古八幡付近遺跡II区
SD-1出土弥生土器実測図 (1 : 3)

II区からは、SD-1・SK-1以外の遺構は検出できなかったが、SD-1は何らかの区画溝と想像され、その中心は、より西側（調査区外県道側）に広がっているものと思われる。

SD-1出土土器 SD-1の床面からは弥生土器の小片がまとまって出土しているが、破片が小さく、図示できるものは1点のみであった。第38図はSD-1から出土した高壺の脚部である。壺部の形状は不明であるが、太く、短い脚を持ち、脚端部内面には小さなカエリを持つ。内面は未調整で、外面には、半裁竹管状の工具による押し引き文を2条配し、その間に、ヘラ描きの直線文3条を施している。弥生時代後期初頭のものと考えられ、SD-1から出土した他の土器片も同時期と考えられることから、SD-1もその頃に掘削されたものと考えられる。

石器 II区は、I区からは道を挟んで5m程しか離れておらず、当然I区に近い様相を呈すと想像していたが、実際にはその様相は大きく異なり、I区で検出した石器・縄文土器を多量に含む包含層は見られず、包含層中から少量の石器・縄文土器が出土するにとどまった。これは、I区の状況がかなり局所的な土砂の移動による、と判断できる。

第39図には、石器を4点図示した。39-1は、石鎌である。一片をわずかに欠くが、浅い抉りを持つものである。黒曜石製で、剥離方向は一定していない。

39-2は、石鎌未製品と考えられるものである。主要剥離面側からして剥離方向が一定せず、荒く作られている。有茎石鎌の未製品であろうか。

39-3は、何らかの刃器と考えられるが、用途は不明である。剥離方向の一定しない大きな打裂で整形され、大剥離面側の1側縁に刃部の整形と考えられる加工が見られるが、下端を大きく欠き、全形は伺えない。

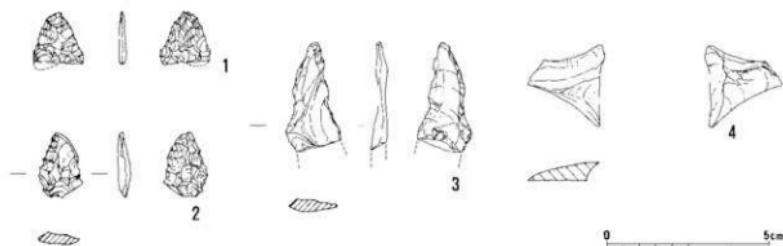
39-4は、安山岩の剥片と考えられるものである。この他にも少量の石器が出土しているが、いずれも黒曜石製の剥片である。

縄文土器 第40図は縄文土器を図示している。前述のとおり、I区に比べ縄文土器の出土量は格段に少ない。40-1は、波状口縁を持つもので、全体に磨滅しており、その文様は見えにくいか、「J」字の擦り消し縄文を持つものであろう。内面はナデている。福田K2式前後のものと考えられる。

SD-1より東側は、斜面下端に石が集中してみられる部分が溝状に連続していたが、遺物は含まれておらず、斜面が地表に露出していたときの水の流れた跡であろう。また、調査区南端からは、長さ約50cm、幅約25cm、深さ10cm程の長方形の土坑（SK-1）を検出した。この土坑は、埋土の状況から、SD-1より後に掘られたことは確実であるが、遺物が無く、所属時期は不明である。SD-1を埋めた埋土の上層からは、古墳時代前期の土器が比較的まとまって出土しており、SK-1が古墳時代前期に作られた可能性はある。

SK-1は、宅地部分から続く斜面の中程、斜面がわずかに緩くなつた位置あり、その周辺には遺構は見られない。また、古墳時代前期の上器類もSD-1周辺からの出土が多く、SK-1の周囲からは小片

しか出土しなかつた。SK-1の埋土中からは石や砂等は見られなかつたが、検出状況から墓壙とも考えられる。



第39図 古八幡付近遺跡II区出土石器実測図 (2 : 3)

40-2～5はいずれも突帯文土器である。40-2は、口縁直下に突帯の付くもので、全体に磨滅が著しく、浅い刻み目が入るものと思われる。40-3～5は、口縁端部からやや下がった位置に突帯の付くもので、40-3・5は指押さえ状の深い刻み目が入る。

II区の縄文土器には、I区で見られた福田K2式から縄帶文の時期のものが少なく、I区と全く様相が異なっている。

弥生土器 弥生土器はSD-1埋土からその上層の遺物包含層を中心に、まとまった量が出土している。

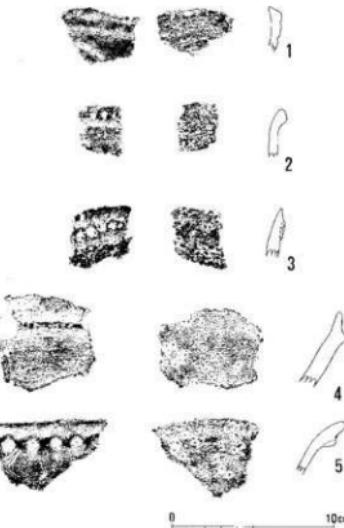
41-1は小型の壺である。口縁部は大きく外反し、副部はわずかに張り出るもので、1条のヘラ描き直線文を引く。磨滅しており、よく見えないが、外面にはハケメを施したものと思われる。前期のものであろう。

41-2～4は、前期の壺と考えられるものである。41-2は、肩部に巻き貝と思われる原体を使用して、斜行刺突文を施している。41-3は、同じく肩部に櫛を使用して、押し引き文風に斜行刺突列点文を施す。41-4は、2枚貝の腹縁による羽状文を施すものである。

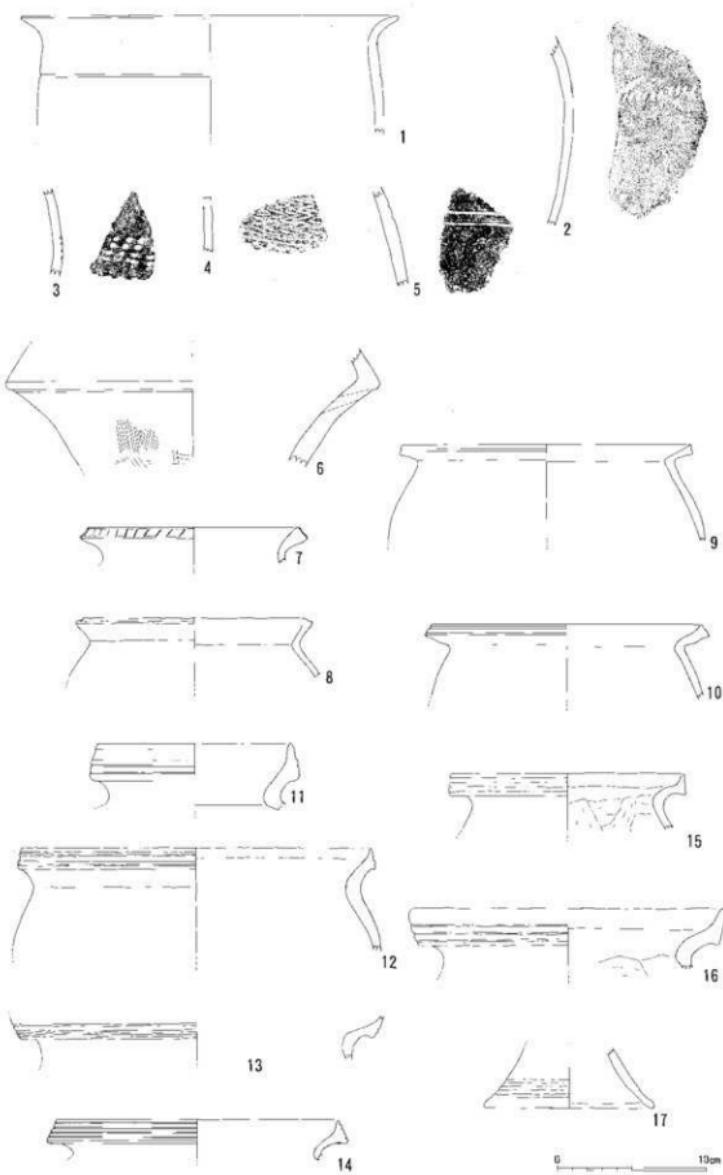
41-5は、前期の甕の胴部と考えられるもので、ヘラによる直線文2条を施している。

41-6は、中期の壺であろうか。口縁端部を欠くが、口縁部を大きく内傾させ、拡張している。頸部外面には、ハケメを残している。41-7は、中期の壺と考えられるもので、口縁部を拡張し、口縁端部にヘラによる斜行刺突文を施している。II区からは、弥生土器が多く出土しているが、中期と考えられる土器は非常に少ない。

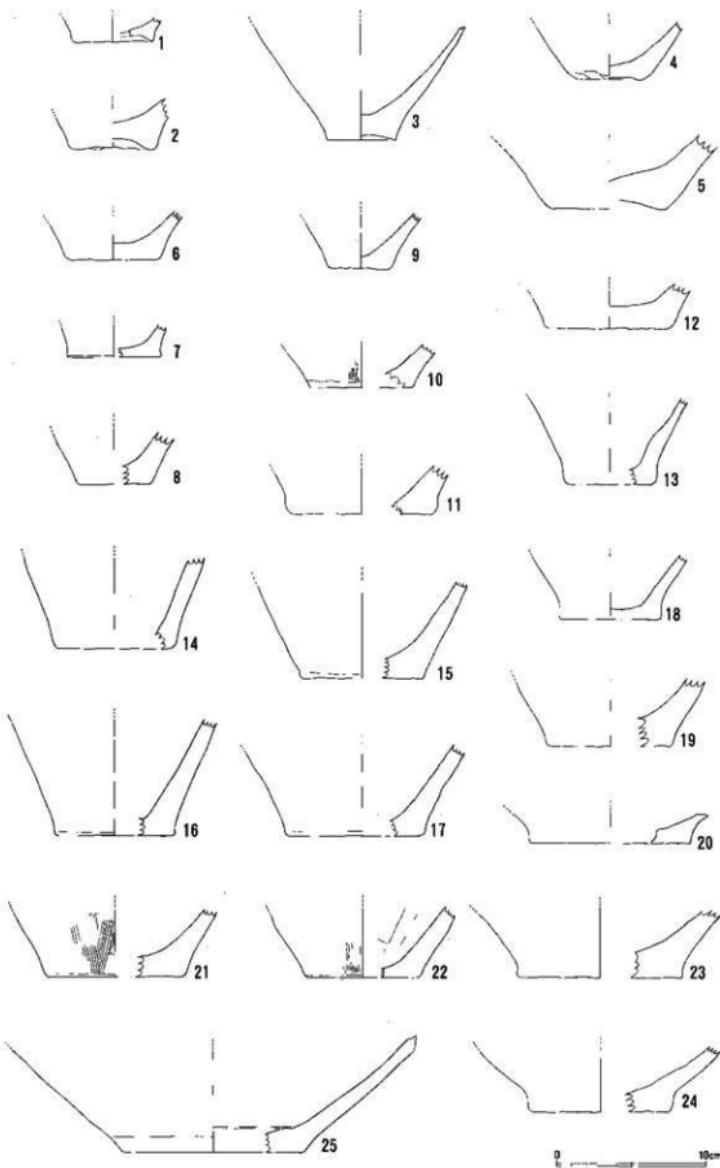
41-8～10は、後期初頭の甕と考えられるものである。口縁部を小さく拡張し、1～2条の凹線文を施している。



第40図 古八幡付近遺跡II区出土縄文土器実測図 (1 : 3)



第41図 古八幡付近遺跡II区出土弥生土器実測図 (1 : 3)



第42図 古八幡付近遺跡II区出土弥生土器底部実測図 (1 : 3)

41-11・15は、壺と考えられるものである。口縁部は上方に向けて大きく拡張し、口縁部外面に、凹線文を施している。

41-12~14・16は、後期の壺である。口縁部を拡張し、口縁部外面に凹線文を施している。

41-17は高坏か、脚付きの壺であろうか。外面端部近くに凹線文を施している。内面はナデ調整し、ケズリは見られない。後期初頭のものであろうか。

第42図には弥生土器底部と考えられるものを図示した。上げ底になったものと、平底のものが見られる。

土師器 第43図には、土師器を図示している。弥生時代後期の溝と考えられるSD-1を埋めた上層からは、複合口縁を持つ壺が完形で出土したほか、同時期と考えられる小片が、多量に、面的に出土している。しかしながら、いずれも残存状況が非常に悪く、形を保ったまま取り上げることができなかった。他の時期の土師器は、上層の遺物包含層から出土しているが、その量は多くはない。

43-1は壺と考えられるものである。口縁部の小片で、内外面ともヨコナデを施している。

43-2は、複合口縁を持つ壺である。この個体は、検出時は完形品で、埋土ごと取り上げたが、残存状況が悪く、復元できなかった。口縁端部に面を持ち、内外面ともにヨコナデで仕上げている。

43-3~7・12~16は、高坏である。脚部・坏部ともに何種類か有るようである。

43-17は、小型の壺である。口縁端部は鋭く尖らせ、頸部と胸部中程にハケメを残している。内面は残存状況が悪く、よく見えないが、ケズリであろう。43-18も同様のものであるが、口縁端部に小さな面を持つ。

43-19・20は、土師器壺と考えられるものであるが、前述の古墳時代の土師器とは異なる印象がある。43-19は口縁部内面に段を持ち、口縁部上面に面を持つものである。また、43-20は、一見弥生土器を思わせるプロポーションを持ち、肩部に直線文を引いている。内面までナデ調整し、頸部には指頭圧痕を残している。

43-21は、ミニチュアの壺か鉢であろう。内外面共にナデ調整されている。43-22は、小型の鉢である。両者とも古墳時代前期のものと思われ、43-2に伴うものであろうか。

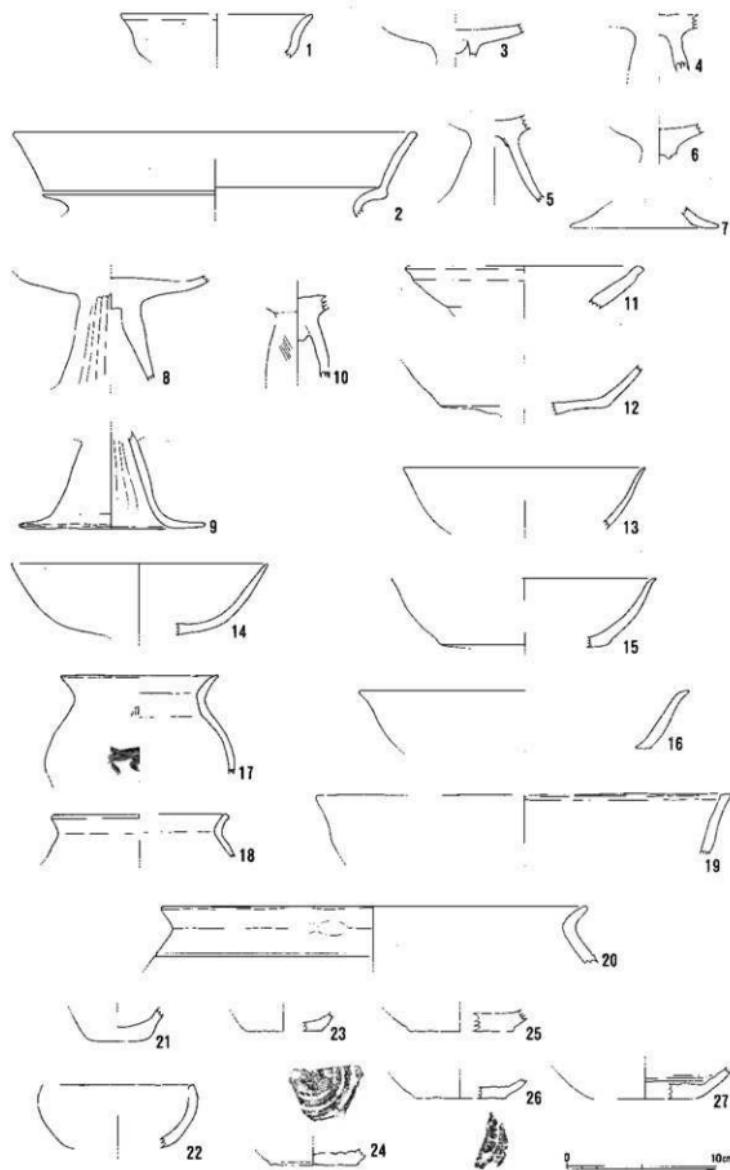
43-23~27は坏である。残存状況が悪いが、底部は回転糸切り、内面は螺旋状に強いナデを施すものが多い。平安時代のものと思われ。壺(43-19・20)は、これらの坏に伴うものであろう。

須恵器 第44図には、須恵器を図示している。II区で出土した須恵器は非常に少なく、特に古墳時代のものはほとんど含まれていない。

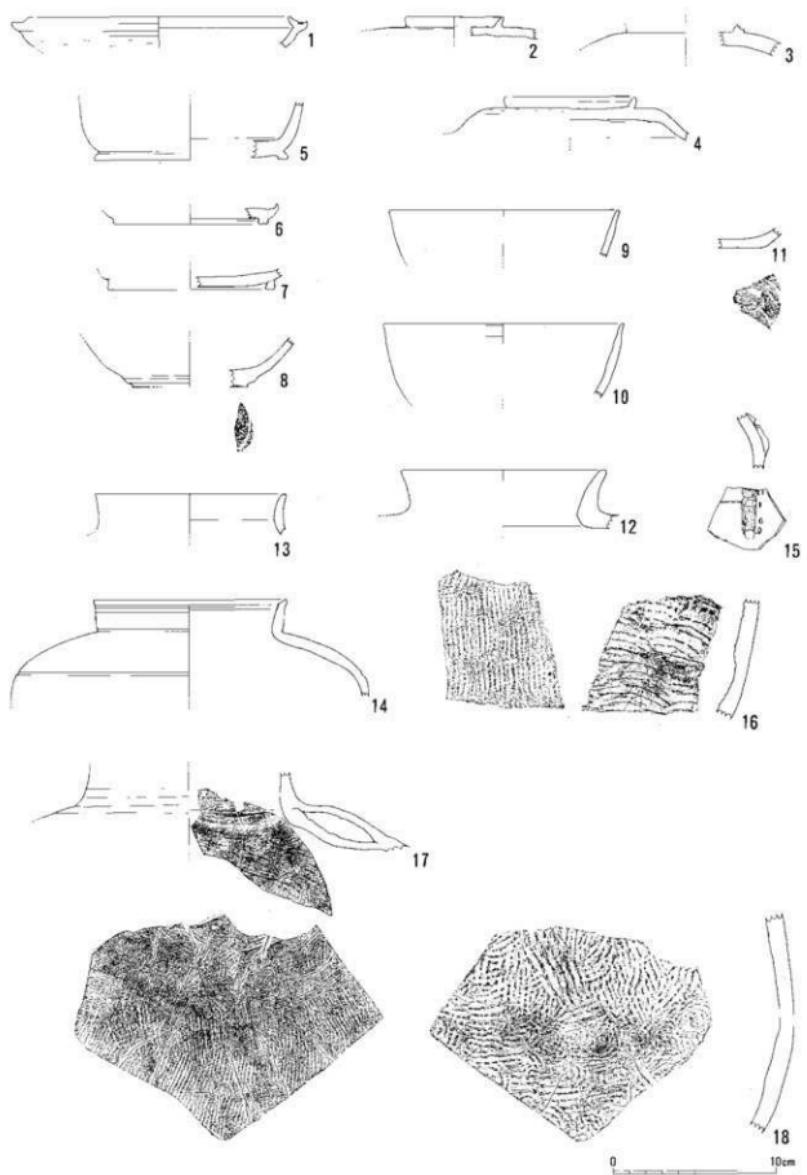
44-1は坏である。大きく内傾するカエリを持ち、体部外面はケズリの後、横方向にナデしている。古墳時代と考えられる坏は、他数点があるが、いずれも小片で図示できない。

44-2~4は輪状つまみを持つ壺である。44-1・3は、小片のため詳細は解らないが、44-4は、径の大きなつまみを持ち、体部が大きく湾曲するもので、おそらくカエリが消失した後のものであろう。久本奥窯跡のVI期に相当し、8世紀後半台のものと考えられる。頂部のつまみ周辺にケズリを残している。

44-5~7は、高台を持つ坏である。いずれも短い高台を底部最外部に付け、高台直上から体部に統くものである。44-5はやや外傾して、44-6・7はほとんど直立して高台を付けている。底部の切り離しは小片のため不明であるが、44-7は回転ヘラ切りであろうか。いずれも内外面ともにナデ調整する。



第43図 古八幡付近遺跡II区出土土器実測図（1：3）



第44図 古八幡付近跡II区出土須恵器実測図 (1 : 3)

高台の形状から44-4に伴うものと考えられ、8世紀のものである。

44-8は、無高台の壺である底部には回転糸切り痕を明瞭に残し、底部と体部の境には回転糸切り時のものと考えられる小さな段が2～3段残される。体部は、内外面ともに横方向の丁寧なナデを施している。

44-9～11も44-8と同様の壺と考えられるが、小片のため、不明である。44-11は、底部に回転糸切り痕を残している。

44-12～18は、壺（壺）である。44-12・13は口径の小さい壺で、口縁部は短く、端部を丸く納めている。

44-14は壺で、口縁端部を鋭く尖らせ、内面側に面をもっている。口縁部には強いナデによる沈線状のくぼみが多く見られ、体部は内外面ともにナデ調整している。肩部がわずかに張り、丸みを帯びたプロポーションになるものと思われる。肩部には、沈線1条が巡っている。

44-15は、耳を持つ壺形のものの小片であるが、双耳壺であろうか。耳部の大半を欠くが、紐を掛け穴が開いており、白磁双耳壺の様なプロポーションが想像される。耳の片側には刺突文状の傷が、別の側にはナデによる沈線状の線が見られるが、文様ではないであろう。内面はナデ調整する。

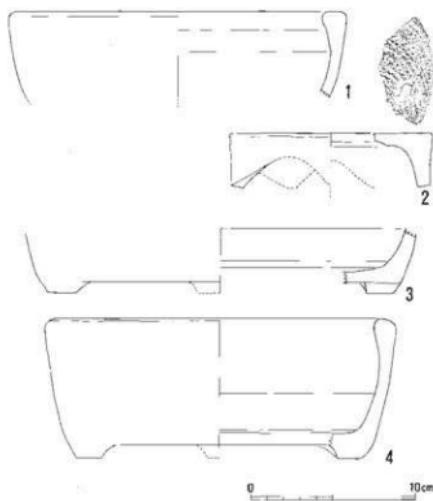
44-16は壺の胴部の小片である。外面に平行タタキを、内面に同心円文の押さえ具の痕跡を残す。内面の押さえ具の痕跡は、同心円文の径が大きく、一周した同心円ではないかもしれない。

44-17は、壺の頸部の小片である。外面は肩部近くまでナデ調整している。平行タタキの幅は、やや広い。断面には空気が入り大きく膨れている。

44-18は、壺の胴部の破片であるが、外面の平行タタキが、やや細く深いものである。内面には同心円文の押さえ具の痕跡を残している。

第45図には、近世～近代の遺物を図示した。45-1は、鉢と考えられるものである。瓦質に焼成されており、黒灰色を呈す。口縁部は内面側に拡張するように肥厚している。45-4と口縁部の形態が似ており、同様に脚が付くものと思われる。

45-2は、窯道具の焼き台と考えられるものである。下端を尖らせた5～6本の脚を持ち、脚と脚の間は、波状になっている。外面から内面はナデ調整し、脚部を削りだしているが、上面は回転糸切り痕を未調整である。上面中央には円形の孔が開けられる。窯焼き時に重ね焼きを行うときに使われる焼き台と考えられる。茶褐色を呈し、非常に硬く焼き絞められているほか、上面に着色痕があり、数度の使用が想像される。古八幡付近遺



第45図 古八幡付近遺跡II区出土陶器実測図（1：3）

跡の東側丘陵上では、石見焼き窯跡が存在した可能性が高く、そこから持ち込まれたものであろうか。

45-3・4は、瓦質の3~4足の鉢と考えられるものである。脚の部分は張り付けによるもので、左右非対象である。内外面ともに丁寧にナデ調整され、口縁部が内面側に肥厚する形状は45-1と同様である。

⑤ III区の調査

遺構の概要 III区は、II区と平成5年度調査区の間の標高約8mの水田部である。平成5年度に行なったトレンチ調査の結果、水田下の深い位置にある比較的薄い遺物包含層で、遺構は存在しないものと想定して調査を開始したが、実際には、多量の木製品を含む水田遺構を検出した。

現在の水田は長い年月をかけて嵩上げして營まれているよう、無遺物の厚い耕作土があり、現地表面から遺物包含層までの深さは1m以上になる。II区との境は水路の関係で、調査できず不明であるが、II区の微高地からかなりの急角度でIII区に落ち込んでいるようである。II区の宅地跡とIII区の無遺物層との高低差は、場所によっては2mにもなる。

第2層にあたる青灰色粘質土層までは、現水田の耕作土と考えられ、遺物を含んでいないが、明青灰色粘質土より下層は少量ながら遺物を含んでおり、第7層にあたる第2青灰色粘質土中には多量の遺物を含んでいる。含まれている遺物には、繩文土器から中世の陶磁器までが有り、年代順の層位にはなっていない。第9層にあたる白色細砂層・黒色粘質土層には遺物を含んでおらず、これより下層は掘削していないが、土層堆積状況から、旧河川か、波打ち際であったと考えられ、この面が後述する水田遺構の面と考えられる。無遺物層のため掘削しなかったことより白色細砂層と、黒色粘質土層を分層していないが、両土層は薄く交互に堆積しているようである。

III区を完掘すると、標高7.1mから6.7mのほぼ平坦面となり、掘削時の問題から調査区中央がやや下がる形となったが、全体には大きく北側に傾斜しており、敬川に流れ込む旧河川であった可能性が高い。調査区際の東側と西側は、急傾斜で立ち上がっており、それぞれが旧河川の際にあたるものと思われる。

検出した水田と考えられる遺構は、この旧河川の流路に直行して、約40cm間隔で2列に杭を打ち込み、その間に板材を渡して畦としたと考えられるものである。

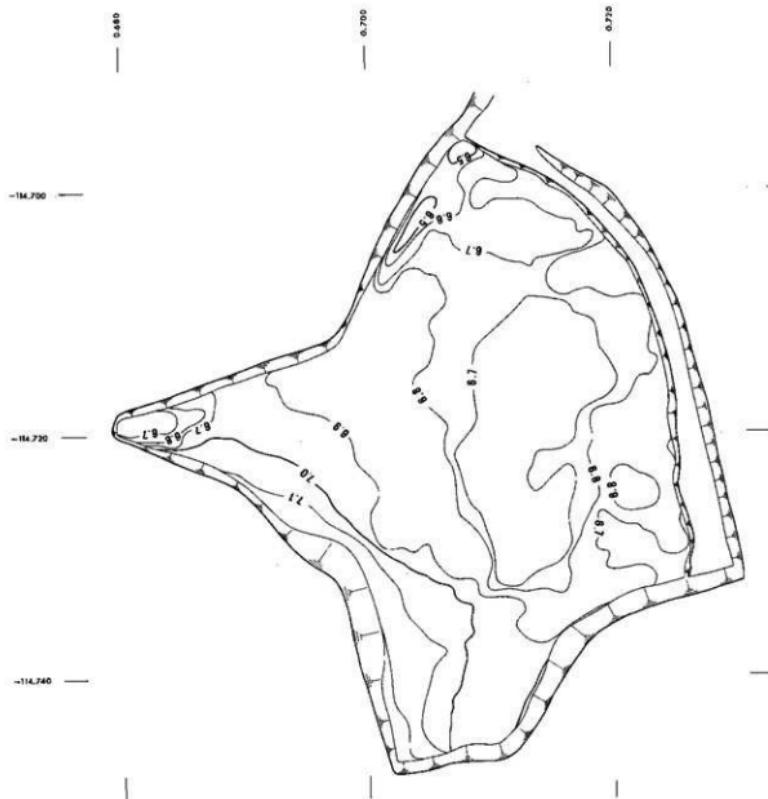
調査区南側に、東西方向の杭列があり、それより南では杭等は検出できず、この線が水田遺構の南限にあたるものと思われる。その線から、調査区の東西両端に平行するように南北方向の杭列がある。これらの杭列で区画された範囲内には東西方向を中心的に更に細かい区画があり、それらが水田一枚分の範囲を示すものと考えられる。最も南側の区画は、東西約8m、南北約5m。中央の区画は複雑になっており、東西約8m、南北約2mの区画を中心に細かい区画が西側に続く。北側は、杭列の残存状況が悪く、区画が見えにくいが、8m前後の台形の区画が2ないし3ヵ所あるようである。東側を南北に走る杭列より東には人頭大の石が散乱しており、この部分には水田遺構は營まれていない可能性がある。また、南側を東西に走る杭列には板材だけではなく人頭大の石も使用されている。西側は、東西方向の杭列が延びており、更に西側のII区近くまで続いているものと思われる。

畦に使用される杭には建築材の転用材と思われるものが多くあり、貫などの加工を施されたものも多い。また、転用材でない杭は、自然木をそのまま使用しており、皮が残っているものも見られた。

杭にかけられる板材も、ほとんどが建築材の転用材で、貫などの加工痕が残るものが多く見られた。

加工痕が残る建築材の転用材は、中央の区画から、東側を南北に走る杭列に多く見られ、北側の区画を構成する杭列には自然木を割ったものが使用されていた。また、北西隅の区画からは、流失によるためか、板材の出土は見られず、杭列だけが出士した。中央付近の区画からは、杭列が抜け、板材ごと横倒しになった状況で検出された部分（図版21）があり、板材と杭は特に連結せず、杭列の内側に板材を置いて埋めた様子が解る。このことから、畦の上面は土で、その側面に杭を打ち、杭列の内側に板材を横方向に立てかけていたものと思われる。このような畦の細工は、松江市上小紋遺跡などで見られるしがらみ造構と似ており、上小紋遺跡の水田造構は弥生時代後期と考えられている。

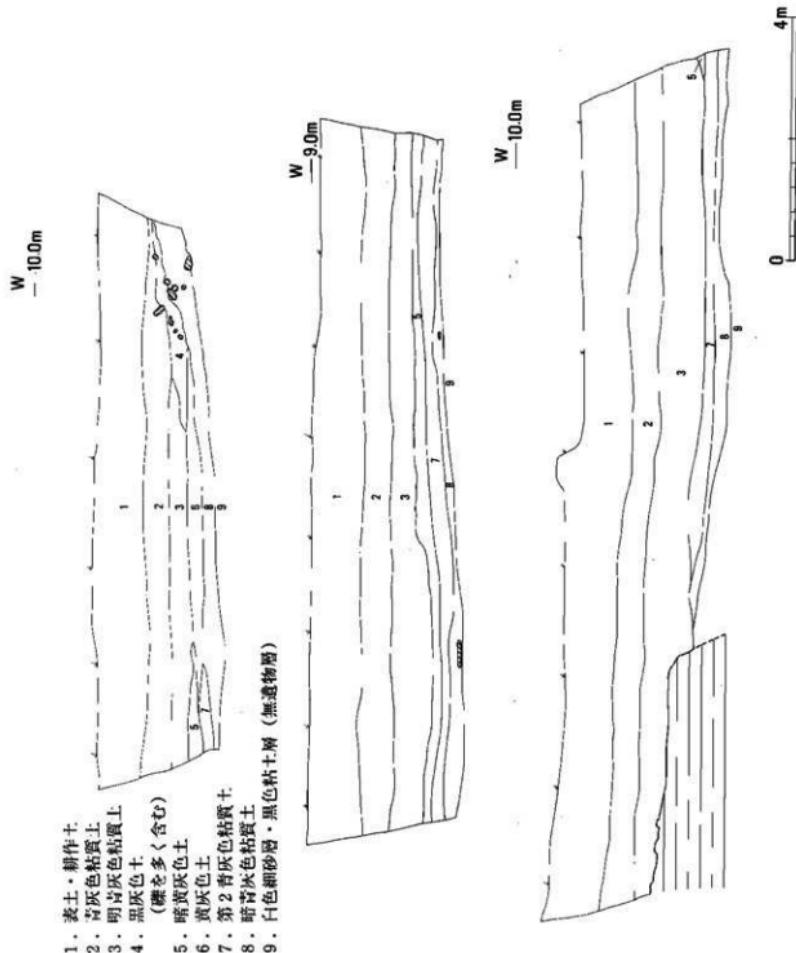
この水田造構の時期は、畦を構成する部分からの遺物の出土が存在しない点から不明であるが、包含層の遺物の中心時期が古墳時代と平安～鎌倉時代にある点、弥生時代と考えられる木製農耕具が出土している点から、その3時期のいずれかであろう。また、(株)川崎地質に依頼したプラント・オバー



ルの測定では、無遺物層とした第9層を始め、ほとんど全ての土層からプラント・オバールが検出されていることから、各時代を通じて継続的に水田が営まれていることは確実であり、その初現は、木製農耕具のある弥生時代に遡る可能性はある。

水田造構を構成する杭列や畦の部分には、農耕具と思われる木製品が引っかかっているほか、水田造構を埋めた埋土中には土師器を中心に多量の遺物が含まれていた。

石器 III区からの石器類の出土はきわめて少なかった。黒曜石剝片は少量が出土しているが、成品は



第47図 古八幡付近遺跡III区南壁土層断面図 (1 : 80)

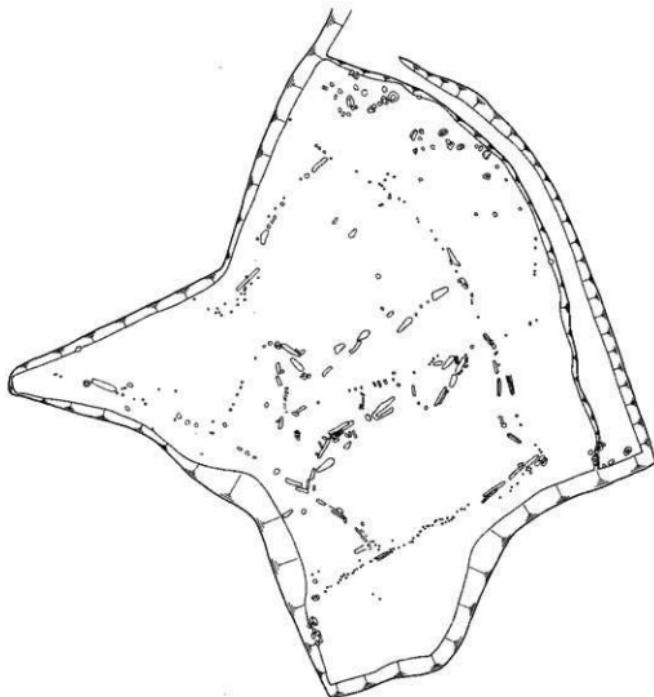
2点のみで、第49図に図示している。

49-1は、黒曜石製の石鎌で、抉りの深い、精美なものである。各剥離も丁寧に行われている。

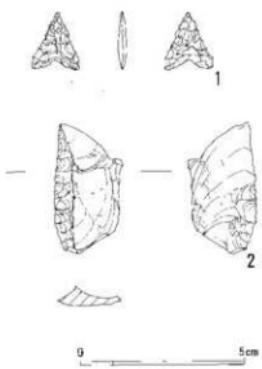
49-2は、黒曜石製のスクレーパーと考えられるものである。主要剥離面側には、新しい割れが見られる以外一切加工は行っておらず、大剥離面側の1側縁のみを丁寧に整形している。丁寧に整形された刃部は、細かい剥離で構成されるが、刃部全体としては、ほぼ直線刃となる。

縄文土器 石器と同様に縄文土器と考えられる遺物の出土はきわめて少なかった。確実に縄文土器と思われるものは、第50図に図示した1点のみである。こうした状況は、I・II区の状況とは大きく異なっており、縄文時代にはIII区付近に、まだ旧河川が流れしており、活動域が敬川の河岸段丘上である西側に集中していたためと考えられる。次の弥生時代にはいると遺物量は急増することから、III区付近が、その頃から湿地化していったものと想像される。III区で出土する石器・縄文土器は、I・II区方面、もしくは南側の河岸段丘上からの混入品と考えられる。

50-1は、III区から出土した唯一の縄文土器である。非常に薄手に作られており、口縁部は波状口縁になるものと思われる。口縁部上面にわずかに面を持ち、体部は直線的で、深鉢になるものと考えられる。体部外面は貝による条痕を施し、内面はナデている。時期は不明である。



第48図 古八幡付近遺跡III区木製品出土状況（1：200）



第49図 古八幡付近遺跡III区出土
石器実測図 (2 : 3)

51-5は、大きく屈曲する口縁部の部分を欠いた、頸部の破片である。頸部下方に、ヘラによって4条の直線文を引き、その上から板状工具により斜行刺突文を施すものである。内面にはケズリに見える板ナデが見られ、中期のものであろうか。

51-6は、2枚貝による斜行刺突文を配するものである。内面には板ナデが見られる。

51-7は、櫛による刺突列点文を、51-8はヘラによる直線文を3条以上配するものである。いずれも内面は荒いナデである。

51-9は、装飾の多い壺の肩部である。頸部近くから、ヘラ描きの直線文を6条以上施す。その下に8~9本単位の櫛による刺突列点文を、やや斜行させて施し、その上下に断面三角形の刺突文を加えている。内面は、頸部をナデ、体部は板状工具を使用してナデしており、砂粒が動き、ケズリに見える。中期のものであろう。

51-10・11は底部である。51-10は外面に縦方向のヘラミガキを施し、51-11はハケメを残している。

第52~54図には弥生時代後期と考えられるものを図示した。

52-1は壺であろう。厚手に作られた口縁部を更に上下に拡張し、口縁端面に櫛状工具による斜行刺突文を施す。

52-2は頸部に刻み目を持つ隆帯を持つものである。頸部は長く直立し、口縁部はほぼ直角に折れ曲がり、口縁端部は上下に拡張する。口縁端面に凹線文3状を施している。

52-3は、小型の壺で、口縁部に凹線文を持つものである。

52-4~6も口縁部に凹線文を持つ壺で、52-4は、内外面共に、ハケメを施す。頸部から口縁部にかけては比較的長く、頸部は強く屈曲する。

第53図には、複合口縁に凹線文が施されるものである。いずれも口縁部が上方に向けて拡張され、口縁部外面に凹線文を施す。

弥生土器 第51~55図には弥生土器を図示した。前述のとおり、弥生時代にはいると遺物量は急増し、中にはミニチュア土器など水辺の祭司を想像させるものも含んでいる。

第51図には、前期から中期と考えられる土器を図示した。

51-1は壺である。口縁部は短く外反し、頸部にヘラによる直線文2条を引いている。内外面ともにナデ調整する。

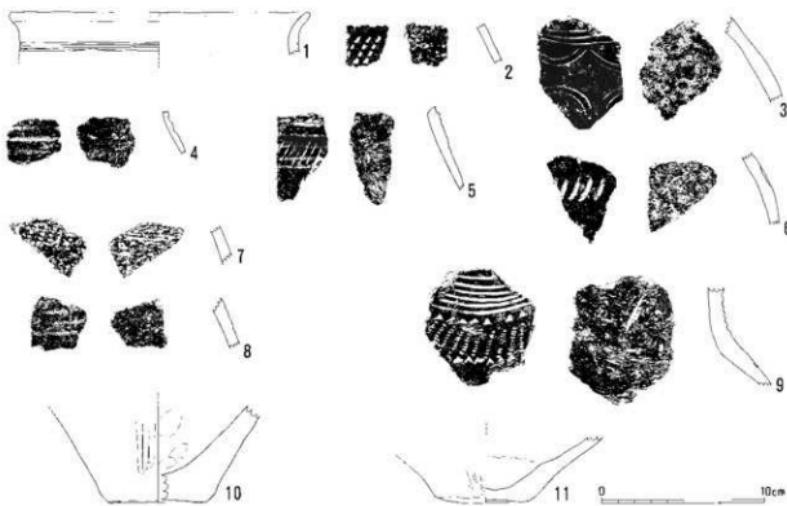
51-2~9は壺と考えられる小片である。51-2は、肩部の小片と思われ、櫛による押し引き状の斜行刺突文を持つ。

51-3も肩部の小片で、頸部近くにヘラ描きの直線文3条を引き、直線文から下方に向けて重弧文を、また、その下方に上に向けて重弧文を配すもの、重弧文の部分は貝を原体に描かれている。内外面ともにナデ調整する。

51-4は、ナデ調整した後にヘラ描きの直線文を3条以上配したものである。



第50図 古八幡付近遺跡III区
出土陶土器実測図 (1 : 3)



第51図 古八幡付近遺跡III区出土弥生土器実測図(1) (1 : 3)

内面の頸部より下方にはヘラケズリを施す場合がある。

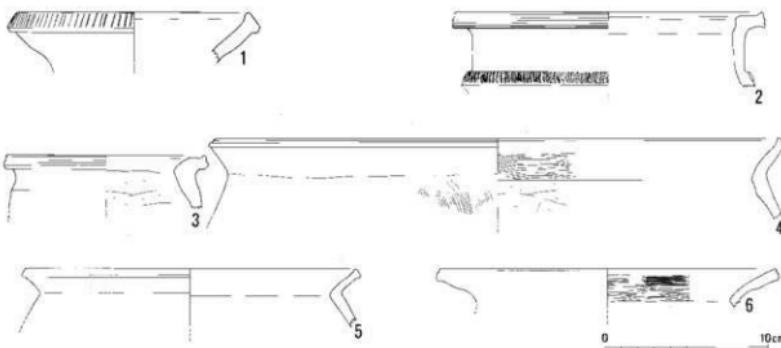
53-2は、小型の壺で、頸部に貝による斜行刺突文を施している。

53-3・5は、壺と考えられるもので、頸部が長い。53-5は、頸部に断面三角形を呈す棒状工具による刺突文を施している。

53-8は、やや大型の壺で、肩部に貝による斜行刺突文を施している。押し引き状に斜行刺突文を施すが、左方向から右へ向けて施されている。

53-9は、口縁部が直立して拡張されるもので、頸部に、棒状工具による斜行刺突文を施す。

53-10は、口縁部を上方のみに拡張するもので、肩部に棒状工具による刺突文を備えている。刺突



第52図 古八幡付近遺跡III区出土弥生土器実測図(2) (1 : 3)

文は、交互に2段に打たれる。

第54図の1～7は複合口縁に擬四線文を施すものである。

54-1は口縁部を上下に拡張し、口縁部をやや内傾させるものである。内面の頸部より下方は、ヘラケズリが施される。

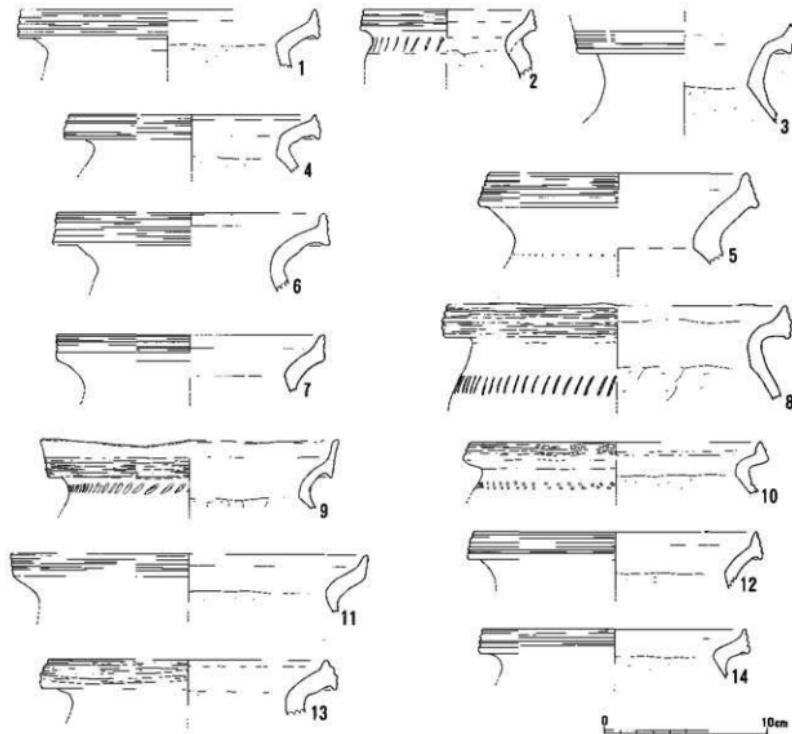
54-2～4は、複合口縁を薄く作り、大きく外傾させるものである。複合口縁は下方に向けて小さく拡張しており、口縁部は比較的短い。

54-5～7は、複合口縁を直立させるものである。複合口縁の下側への拡張はほとんど無く、上方へ向けて大きく拡張され、口縁端部はわずかに肥厚する。内面側に鋭く尖る頸部より下方は、ヘラケズリが施される。

第54図の8～13は、弥生土器の底部である。

54-8～9は、平底のものである。底部下面には纖維状の圧痕が見られる。内面はいずれもナデ上げしていると思われるが、器壁が荒れており不明である。54-8・10は、外面にハケメを残している。

54-11は、底部の非常に厚いものである。底面を小さく窪めて高台状に整形し、外面にはわずかに



第53図 古八幡付近遺跡III区出土弥生土器実測図（3）（1：3）

縦方向のハケメを残している。内面側は非常に丁寧なナデを施している。底面の窪めた部分は、荒いナデを施す。

54-12・13は、高台状を呈す底部を持つものである。底面を窪めて高台状になった部分を割り出すように造られたもので、高台状になった部分は断面三角形を呈す。内外面ともナデられており、ケズリやハケメは見えない。

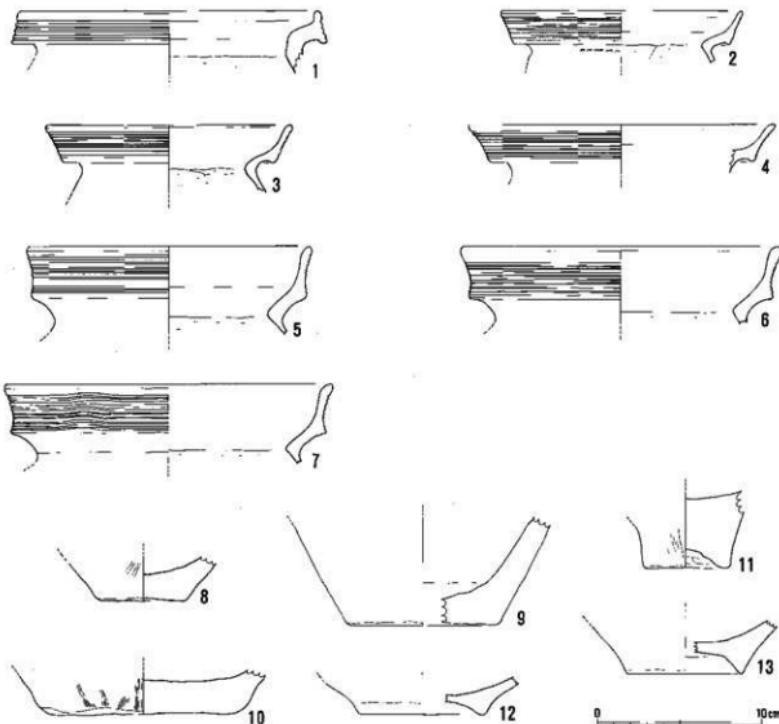
第55図には弥生土器の他、ミニチュア土器・土製品を図示している。ミニチュア土器・土製品の所属時期は不明である。

55-1は、後期の小型の高环と考えられるもので、口縁端部は上面に向けた面を持ち、環部は厚く作られている。口縁部外面には3本の直線文を施す。口縁端部はあまり内傾しない。

55-2は、小型の器台であろうか、薄手に仕上げ、全面ナデ調整である。

55-3は、複合口縁を持つ小型の甕で、口縁部外面は、ヨコナデで仕上げる。口縁部は比較的厚く作られ、端部は丸く仕上げる。

55-4は小型の甕である。口縁部の形状は不明であるが、頸部はあまりくびれず、緩やかに底部に向



第55図 古八幡付近遺跡III区出土弥生土器実測図(4)(1:3)

かう。内面は、底部から頸部に向けて強くナデ上げ指の痕跡を多く残す。頸部付近には粘土紐の接合痕を多く残している。外面は、底部から胴部の大半をナデ調整し、胴部上半にヘラによって横方向の線を入れる。この線は4～5条を短い間隔で入れるもので、線は短くとぎれ、間隔や方向も一定せず、直線文にはならない。頸部には縦方向の細かいハケメを多く残している。

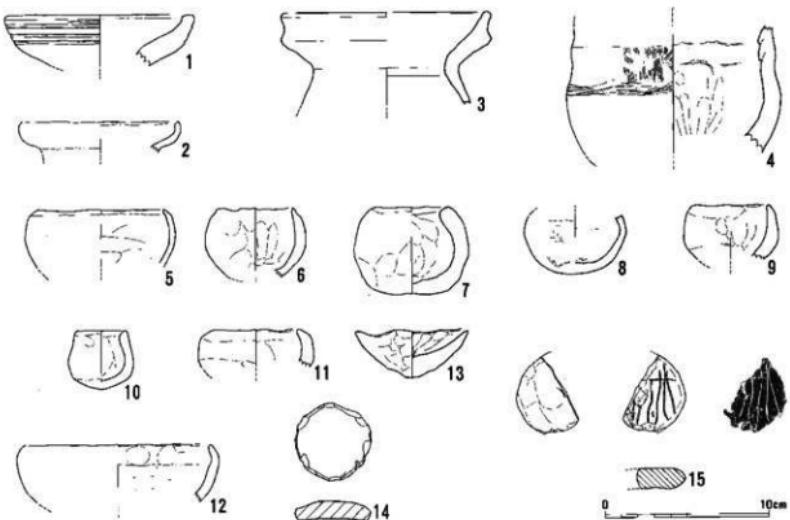
55-5は、ミニチュア土器の鉢と考えられるものである。内面にはヘラケズリの痕跡があり、外面はナデている。口縁部は外面側にわずかにアクセントがあり、端部を尖らせる。

55-6～11は手すくね土器である。内外面とも指ナデの痕跡を強く残し、荒く整形されるものが多いが、55-8のみは、器壁も非常に薄く、仕上げも丁寧である。外面にはハケメ状の線が見られ、繊維状のものの圧痕と考えられる。

55-12は、ミニチュア土器の鉢である。胴部上半で大きく屈曲させ、口縁端部を内傾させるものである。内面は大半をヘラケズリで仕上げ、口縁部付近のみをなでる。口縁部内面には、指頭圧痕を残している。

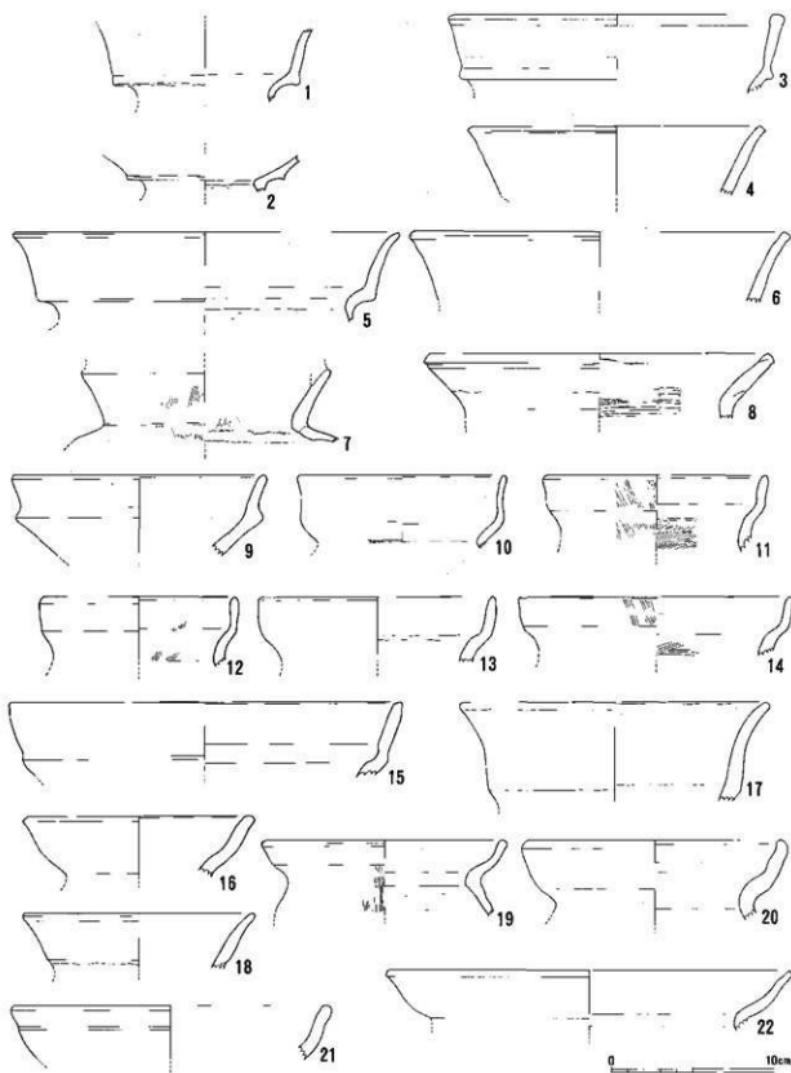
55-13は、手すくね土器の鉢であろうか。全面を手すくねで整形し、指による圧痕を非常に多く残している。

55-14・15は、土製円盤である。55-14は、土器の体部を丸く打ち欠いたもので、磨滅しており、土器の調整痕は残していない。55-15は、当初から土製円盤として作られたもので、側面と片面はナデ調整している。他の一面はナデ調整した後に線刻を施している。線刻の内容は解らないが、何らかの絵であろうか。



第55図 古八幡付近遺跡III区出土弥生土器・ミニチュア土器・土製品実測図 (1 : 3)

土師器 第56図には、土師器の甕を図示した。56-1～6は複合口縁を持つものである。口縁端部に面を持つものが多く、口縁外面はヨコナデで仕上げる。複合口縁の下側への拡張はほとんど見られずむしろ横方向へ張り出す。56-2・5では、頸部より下方の内面は横方向のケズリを施している。



第56図 古八幡付近遺跡III区出土土師器実測図(1) (1 : 3)

56-7は、複合口縁を持つ壺と考えられるものである。口縁部はきれいに剥離しており、擬口縁を呈す。頸部から肩部の外面は、縦方向のハケメを残している。

56-8は、複合口縁を持たない壺である。口縁部内面に横方向のハケメを残し、外面はヨコナデで仕上げる。断面に内傾接合の痕跡が見える。

56-9は、複合口縁の壺であろうか、内外面ともヨコナデで仕上げる。

56-10~14は、小型の壺である。複合口縁は稜が緩くなり、口縁部も短くなっている。頸部内面にハケメを残すものも見られる。

56-15は、緩い複合口縁を持つ壺である。複合口縁の部分は、稜となって残るのみで、内面側はくぼみになっている。内外面ともにヨコナデで仕上げる。

56-19は、小型の壺である。頸部より下方は縦方向の細かいハケメを残している。口縁部は厚く作られ、端部は上面にわずかに面を持つ。

第57図には、小型の壺と壺を図示した。

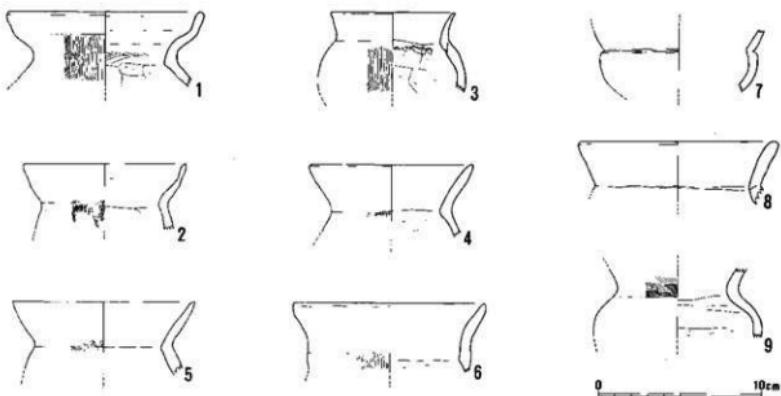
57-1~6は小型の壺で、57-1はわずかに複合口縁の影響を残すが、他はいずれも直線的な口縁部を持つ。頸部を中心にわずかにハケメを残すものが多い。

57-7小型丸底壺で、底部と口縁部を欠く小片である。内外面とも丁寧にナデを施し、頸部には、ヘラ状工具を使用して、沈線を彫り込むように線を入れている。

57-9は、口縁部の長い壺と思われる。頸部から口縁部外面には斜め方向のハケメを残している。内面は頸部よりかなり下までナデが見られ、ケズリは胴部中程より下方に限られる。

第58・59図には、壺と単純口縁の壺を図示している。

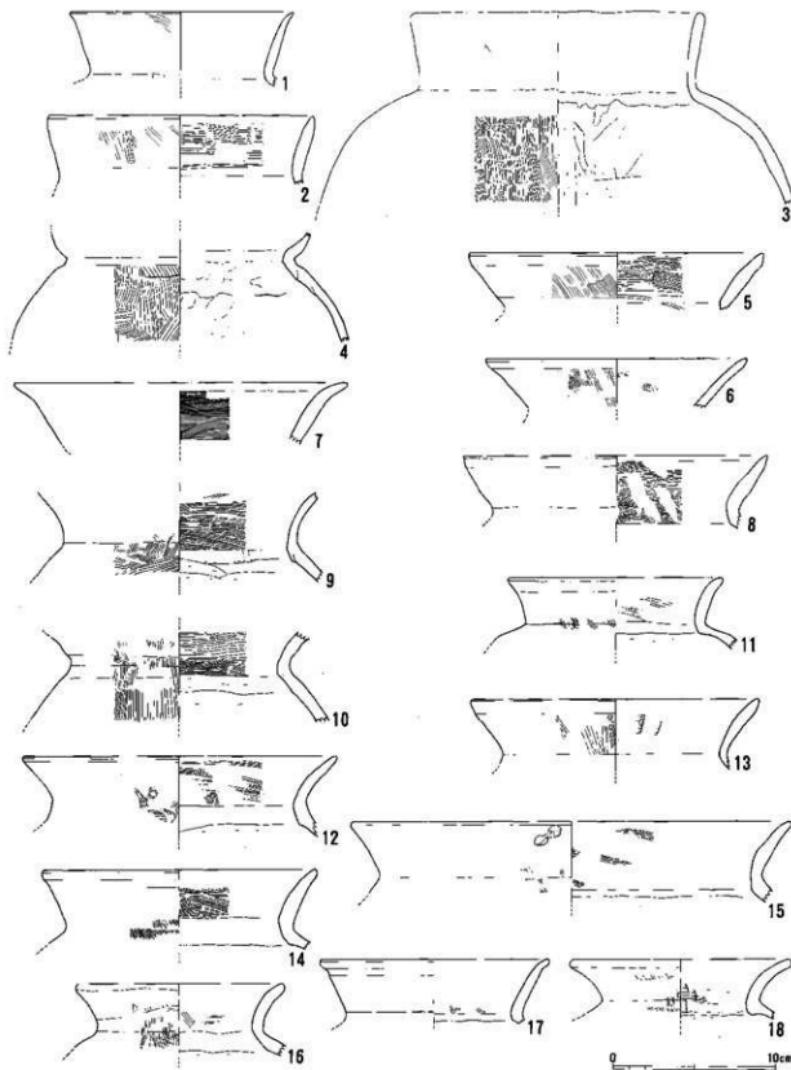
58-1~3は壺と考えられるものである。58-1は、やや外傾する口縁部を持ち、口縁端部近くを小さく外反させる。口縁部外面に横方向のハケメをわずかに残している。58-2は口縁部外面に縦方向の、内面に横方向のハケメを多く残している。58-3は、口縁部は内外面ともにヨコナデを加えるが、体部外面には、縦方向の細かいハケメを密に施している。直立する口縁部は、端部近くでわずかに肥厚し、



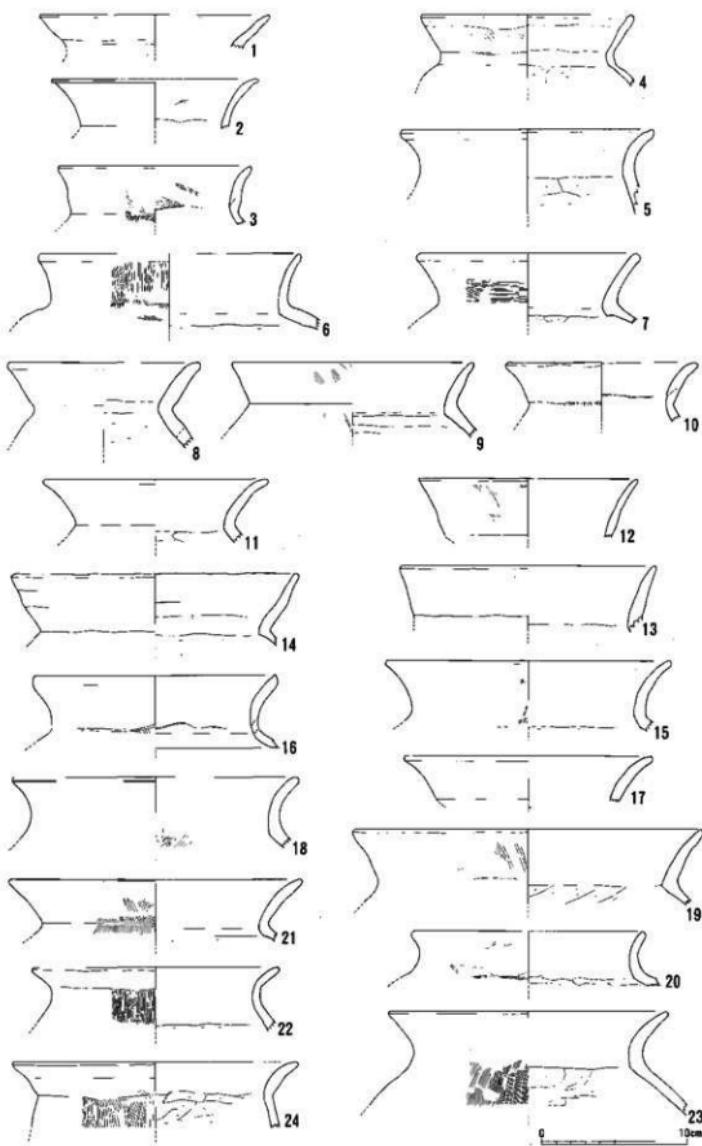
第57図 古八幡付近遺跡III区出土土器実測図（2）（1：3）

丸く納める。内面の頭部より下方は、荒いケズリを行う。古墳時代初頭のものか。

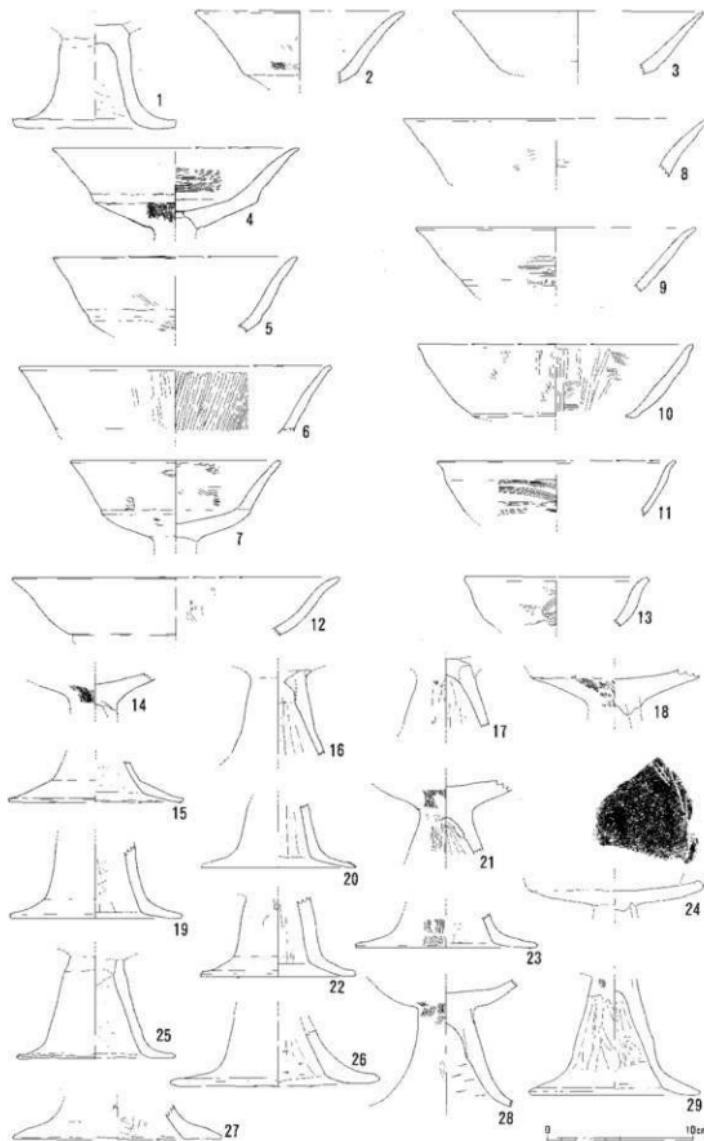
58-4は、甕である。口縁部がわずかに内湾するもので、口縁部外面は丸みを帯びる。頭部より下の胴部には、縱方向を中心としたハケメを密に入れる。



第58図 古八幡付近遺跡III区出土土師器実測図（3）（1：3）



第59図 古八幡付近遺跡III区出土土器実測図(4)(1:4)



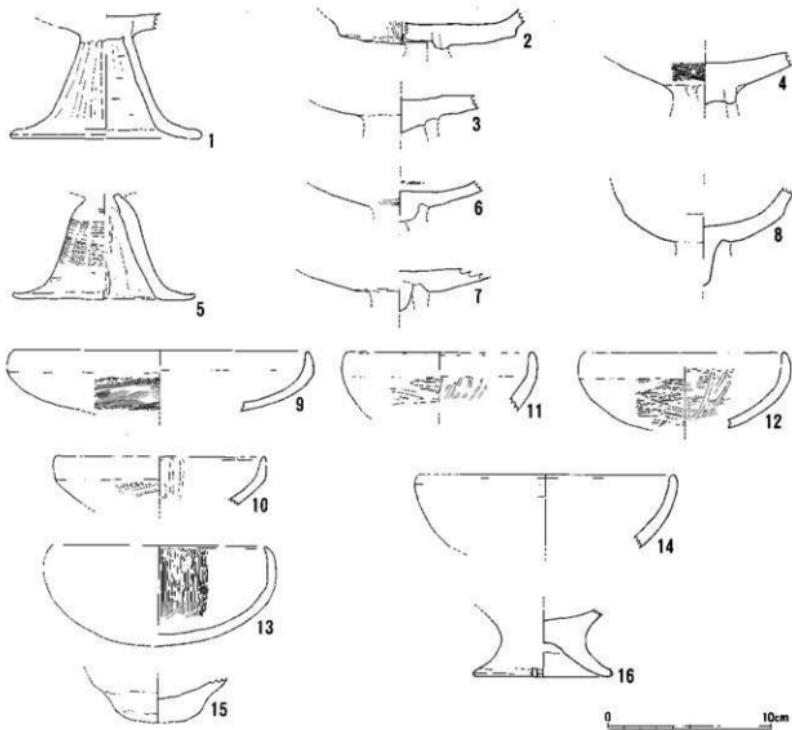
第60図 古八幡付近遺跡III区出土土師器実測図（5）（1：3）

58-5~59-23は、甕である。口縁部外面と胴部外面にハケメを残すものが多い。59-7は、わずかに外反する口縁を持ち、口縁端部が肥厚して、丸く納めるものであるが、口縁部外面に横方向のハケメを残している。

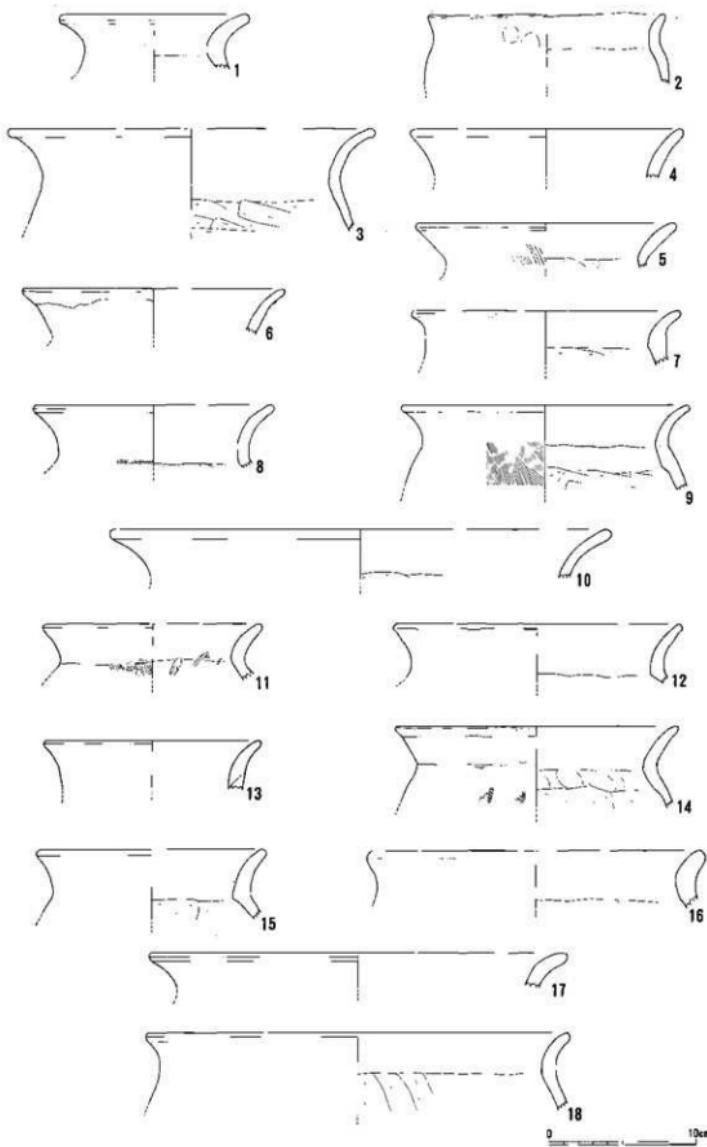
第60・61図には、土師器高坏・鉢・低脚坏を図示している。

高坏には、直線的な坏部を持ち、坏部中程に稜を持つものと、丸みをおびた椀形の坏部を持つもの(60-28等)がある。直線的な坏部を持つものは、坏部外面にハケメを、内面にミガキを施すものが多い。60-18は、稜を持つ直線的な坏部のものであるが、稜の上面で剥離している。剥離面には、ヘラによる不定方向の傷が付けられており、この部位で接合して整形したことが解る。

脚部と坏部の接合資料は非常に少なく、脚部と坏部の関係は分かり難い。脚部と坏部の取り付けは、脚部を差し込むだけのもの(60-17)、円盤を充填し押さえるもの(61-4等)、脚内部に多量の粘土を入れた状態で脚を差し込み、内面に舌状に粘土の塊が出ているもの(61-8等)がある。筒部の口径が同時期の出雲地方のものよりも大きな印象があるほか、脚端部の開きが大きく、高さが低いようである。



第61図 古八幡付近遺跡III区出土土師器実測図(6)(1:3)



第62図 古八幡付近遺跡III区出土土師器実測図(7)(1:3)

61-9～12は、高坏の坏部であろうか。体部に丸みがあり、口縁部近くで強く直立させる。いずれも外面に横方向のハケメを残し、内面には、暗文状にヘラミガキを施している。

61-13・14は、鉢と考えられるものである。61-13は全体に丸みを持ち、口縁部外面を強く内傾させ、端部を尖り気味にさせるものである。残存状況が悪く、外面の調整は不明であるが、内面は、綫方向の細いヘラミガキを密に入れている。61-14も同様の器形のものと考えられるが、磨滅のため調整は不明である。

61-15は、底部の破片で、器形は不明である。内面はナデており、底面には纖維状の圧痕が多く見られる。

61-16は低脚坏である。坏部を欠くが、内外面ともナデ調整する。脚端部に綫方向に棒状のものを当てたようなくぼみが見られる。

第62図には、口縁の短い壺を図示した。62-1は小型のもので、内外面ともヨコナデを施している。

61-2は、頸部がわずかに延び、口縁部が極端に短いものである。頸部外面には指頭圧痕を点々と残している。

61-3～18は口縁部が強く外傾するもので、体部外面に綫方向のハケメを残すものが多い。61-11の頸部内面には工具が当たってしまったかのようなハケメ状の線があるが、他のものは口縁部にハケメは見られない。いずれも内面の頸部より下方をヘラケズリする。

第63・64図は土師器坏(椀)である。確認できたものの全てが底部の切り離しに回転糸切りを使用する。底部の形態は円盤高台状に強く張り出すもの(63-12等)と、張り出しを持たずそのまま納めるもの(64-14等)がある。いずれも外面は回転を利用した横方向の強いナデを、内面には中心から続く螺旋状のナデを施している。両者とも意図的に付けられたものと思われ、ロクロ目を意識したものに思われる。底部が円盤高台状に突き出すものは、ほとんど例外なく底部側面にも糸切り時の糸の痕跡(63-12等)が残っており、断面では小さな段になって現れる。

図示できるような口縁部の破片は少ないが、64-13は、口縁部から体部の半分ほどが残存しており図示できた。この土器は、体部の開きが大きく、皿形態に近いものと思われるが、外面に強く横方向のナデを施し、内面は丁寧にナデしている。内面に、強いナデの形跡は見られず、前述した螺旋状のナデは、見込み部とその周囲に限られる可能性がある。

64-17は、底部が厚く、底径が比較的小さいものである。底部外面には糸切り時の糸の線が多くみられ、2次調整は加えていない。底面には回転糸切り痕を未調整で、板状のものの圧痕が重なって付く。

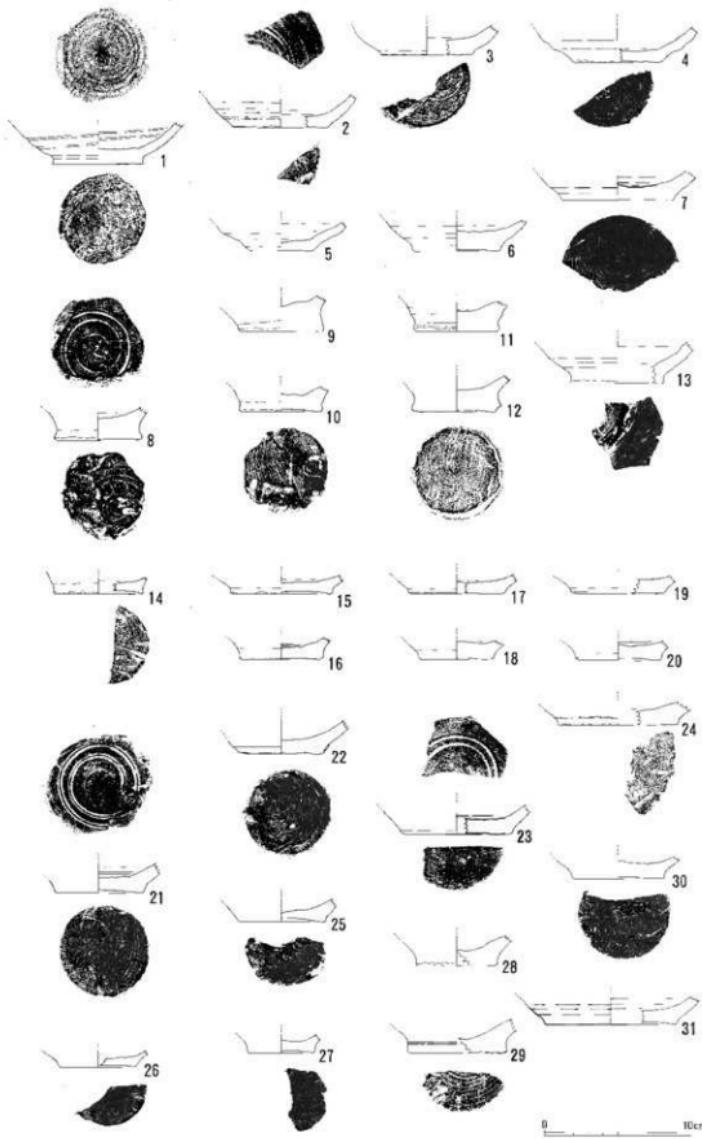
第65図の1～21は、土師器小皿である。確認できたものの全てが底部に回転糸切り痕を残している。

65-1～3は口縁部の短いものである。比較的厚い底部を持ち、口縁部を屈曲させるのみで、内胞量はほとんど無い。内面にはナデが施される。

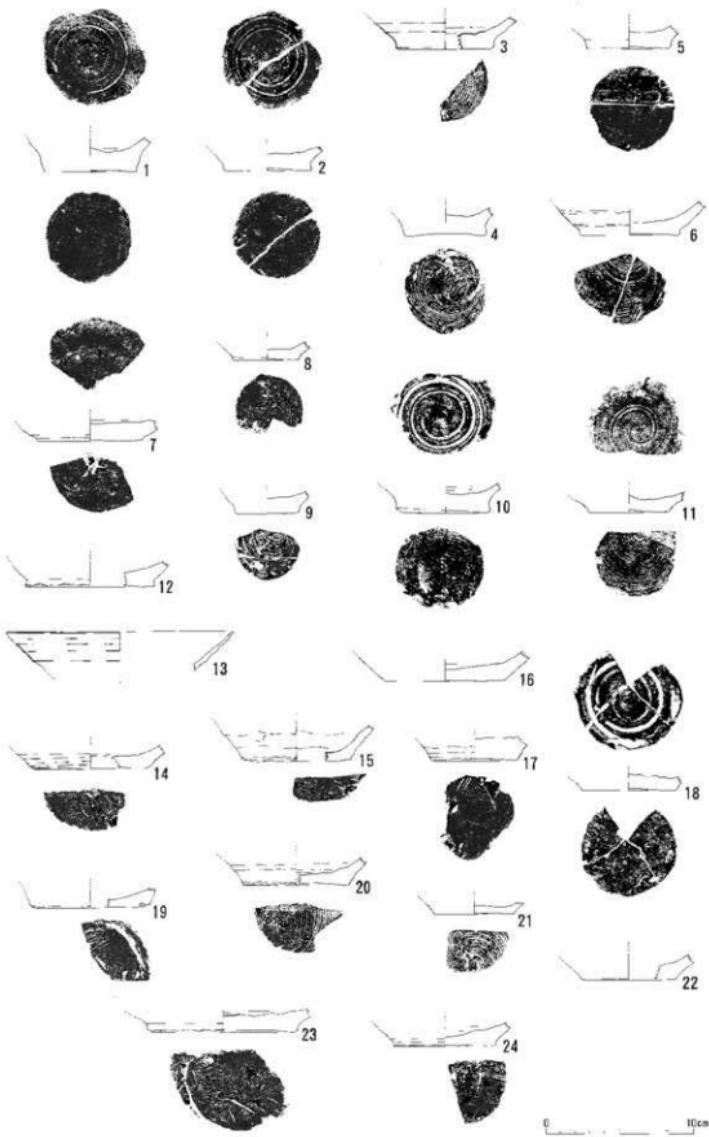
65-4は、口縁部のやや長いものである。口縁端部外面にわずかに面を持ち、内面に螺旋状のナデを施す。体部外面は丁寧にナデている。

65-5～8は、底部の薄いものである。欠損のため断定できないが、口縁部は大きく外傾し、扁平なものになると思われる。

65-11は、底部が円盤高台状に張り出すものである。底部外面には、糸切り時の糸の痕跡が見られ



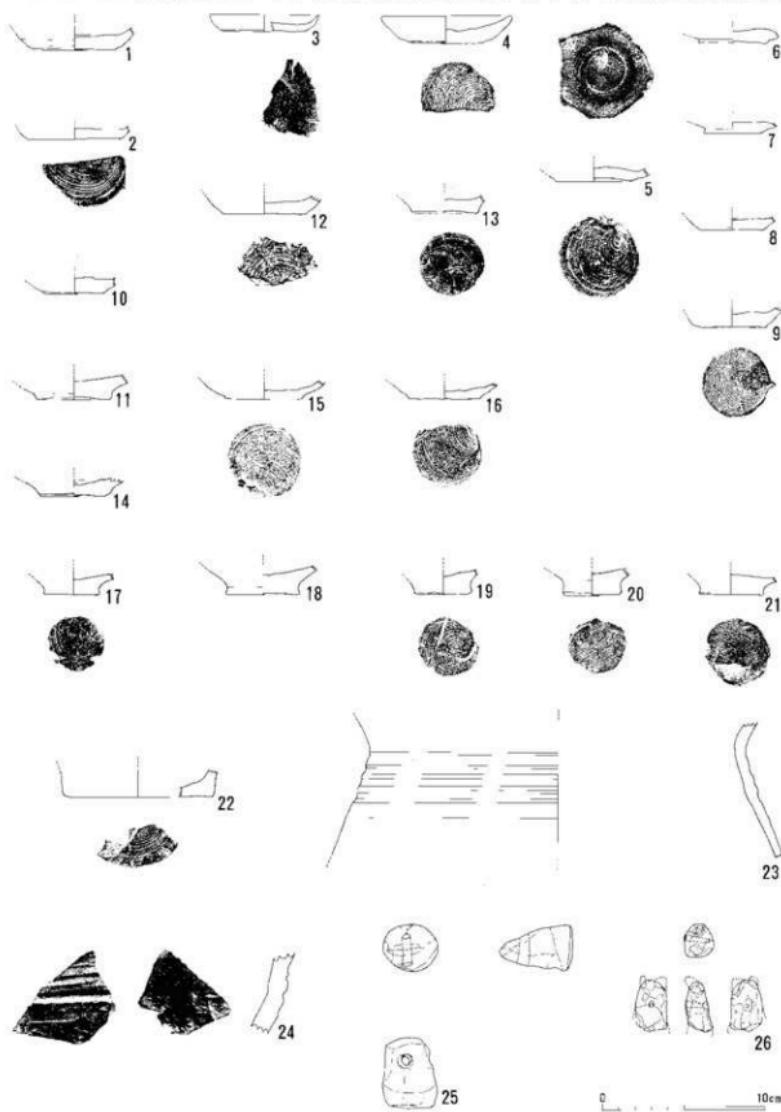
第63図 古八幡付近遺跡III区出土土器実測図（8）（1：3）



第64図 古八幡付近遺跡III区出土土師器実測図 (9) (1 : 3)

る。

65-17~21は、円盤高台を持つものである。底径は口径に対して小さく、体部は大きく外傾して扁



第65図 古八幡付近遺跡III区出土土師器実測図(10)(1:3)

平なものになる。底面には、回転糸切り痕を残している。

上記の土師器坏（楕）皿は、ある程度の時代幅を持つものと考えられるが、後述する青・白磁類との関係から12~14世紀台のものを含んでいるものと思われる。

65-22は、壺であろうか。底部には回転糸切り痕を残し、体部は一旦直立してからわずかに開き始めるようである。内面には横方向の荒いナデを施している。高温で焼き絞められており、非常に硬く、新しいものであろうか。

65-23・24は、壺である。小片のため、傾き・口径は変化が出てくるものと思われる。頸部に横方向の強いナデによるロクロ目状の線を入れる。他の部分は荒いナデで仕上げている。器壁は比較的薄い。後の時代の鍋に近いものと思われ、第63~65図の坏（楕）・皿に伴うものと考えられる。

65-25は、土製分銅と考えられるものである。重量38gを測り、全面をナデで仕上げており、頂部に穿孔が見られる。同様のものは江津市二宮町の半田浜西遺跡の他、前述の飯田C遺跡で出土している。半田浜西遺跡では重量から3種類に区分し、また、飯田C遺跡でもその分類にはほぼ一致する重量測定結果が得られているが、65-25の重量はそのどれにも該当しない。強いて挙げれば半田浜西遺跡の小型のものに匹敵するか。分銅の出土は、その性格から官衛的なものの存在を伺わせるが、半田浜西遺跡周辺すでに3ヵ所が確認されていることから、その性格は再検討の余地がある。

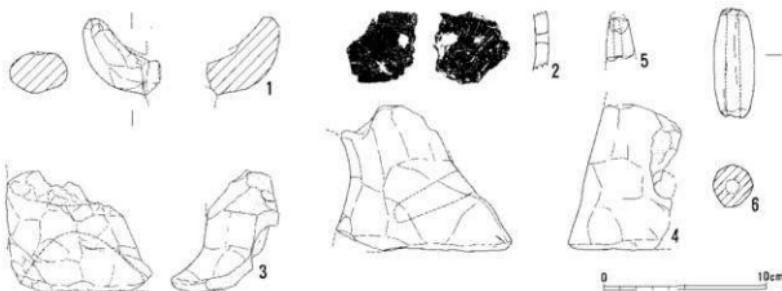
65-26は、ミニチュアの土製支脚である。上下両端を欠くが、やや還元炎気味に焼成され、内面側の2本の小突起や、背面から内面に貫通する孔まで忠実に表現されている。古八幡付近遺跡で出土する通常の土製支脚は、大きく前傾するものが多く、65-26は直立し、器高が高く表現されている印象がある。

第66図には土製品を示している。III区からは土製品の出土は少なかった。

66-1は壺の取手である。扁平で、やや短く作られており、体部に差し込んで作られる痕跡を残している。

66-2は、壺の底部近くの小片と思われるものである。外面はナデ、内面にはケズリが見られる。焼成前の穿孔が見られる。

66-3・4は、土製支脚の基部の破片である。66-3は裾が大きく広がり、底部内面のくぼみが非常に深い。上半を欠損するため、背面の突起・穿孔の状況は不明である。全面をナデ調整している。66-4



第66図 古八幡付近遺跡III区出土土製品実測図 (1 : 3)

では、底部内面のくぼみがほとんど無く、底部はほとんど平坦である。背面からやや下方に向けて深い穿孔が見られるが、内面までは貫通していない。上端を欠くが、器高は比較的低く、強く前傾する器形になるものと思われる。全面を荒くナデしている。

66-5・6は、土鍤である。両者とも紡錘形を呈し、長軸方向に穿孔される。穿孔は最大径に比して大きく、全体に軽く作られている。

III区で出土する土器には、須恵器類は比較的少なく、土師器類が大多数を占める。時期毎では、弥生時代後期に最初のピークがあり、古墳時代前期がやや少ないものの、古墳時代中期まで続く。古墳時代後期から、奈良時代の遺物はやや少なく、遺物量は減少するが、中世になって再び増加するようである。

須恵器 第67図には、古墳時代のものと考えられる須恵器を図示した。古い須恵器は非常に少なく、カエリを持つ坏身も数点が出土しているが、小片ばかりで図示できなかった。

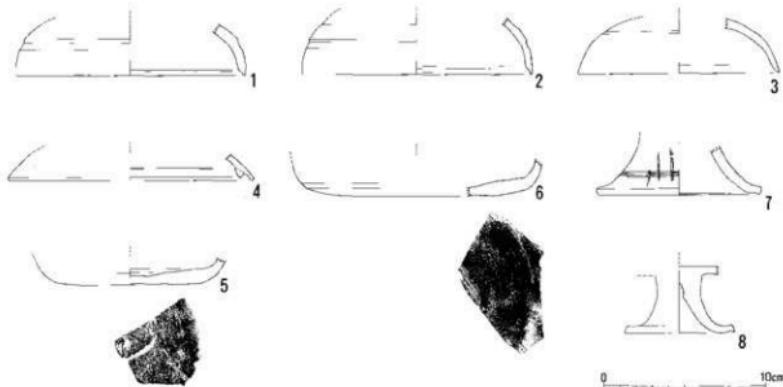
67-1・2は、蓋である。口縁端部の内面側の明瞭な沈線を持ち、体部外面に強い稜を備えている。残存部分は全てナデを行っているが、頂部を欠き、この部分にケズリを残すものと思われる。5世紀末から6世紀前半のものであろう。

67-3は、口縁端部内面に沈線を持たない蓋である。肩部の稜は明瞭さを欠き、わずかに折れ曲がる程度となる。頂部を欠くが、全面ナデ調整する。6世紀後半のものであろう。

67-4も蓋である。カエリが蓋に付くもので、口縁端部を薄く作り、断面三角形を呈すカエリを貼り付けている。頂部を欠くが、宝珠形のつまみが付くものであろう。久本奥窯跡のIII期に相当し、7世紀前半のものであろう。

67-5・6は、坏の底部である。両者とも底面にヘラ起こしの痕跡を調整しない。体部は直立に近く、急激に折れ曲がる。内外面ともにナデ調整し、ヘラケズリは見えない。蓋を伴うものと思われ、7世紀代のものと考えられる。

67-7は高坏の脚部である。坏部を欠くが、長脚のものであろう。内外面ともにナデ調整し、脚端部



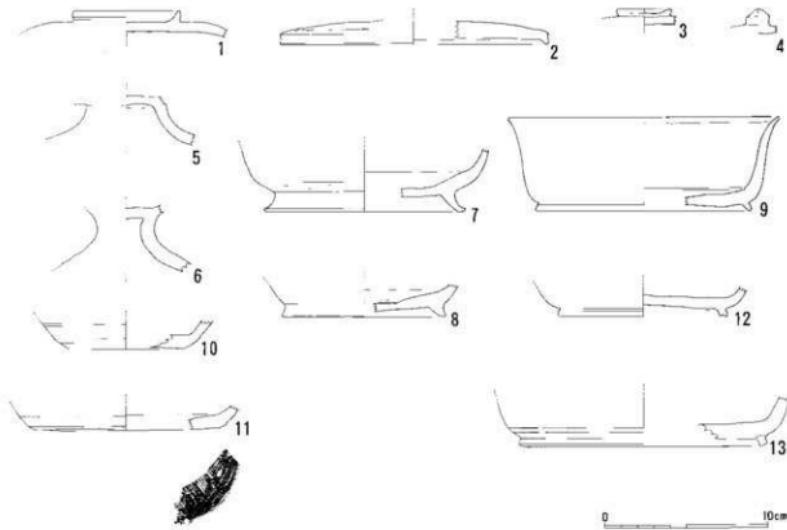
第67図 古八幡付近遺跡III区出土須恵器実測図（1）（1：3）

には外面に向けて小さな面を持つ。脚部下端には、外面側の面から続き小さく垂下させる。脚部外面にはヘラによる縱方向の沈線3状を入れ、その後に横方向の沈線2状を巡らせる。スカシは見られない。

67-8は、小型の高坏である。坏部の大半を欠くが、残されている部位では非常に薄く、扁平である。脚部は太く、短い。大きく湾曲しながら端部に至る。脚端部は下方に垂下し、外面側に面をもつている。脚部内面は横方向に丁寧にナデられ、中央部に脚取り付け時に棒状工具で突いたものか、2段になつた孔が開いている。スカシや沈線は見られない。

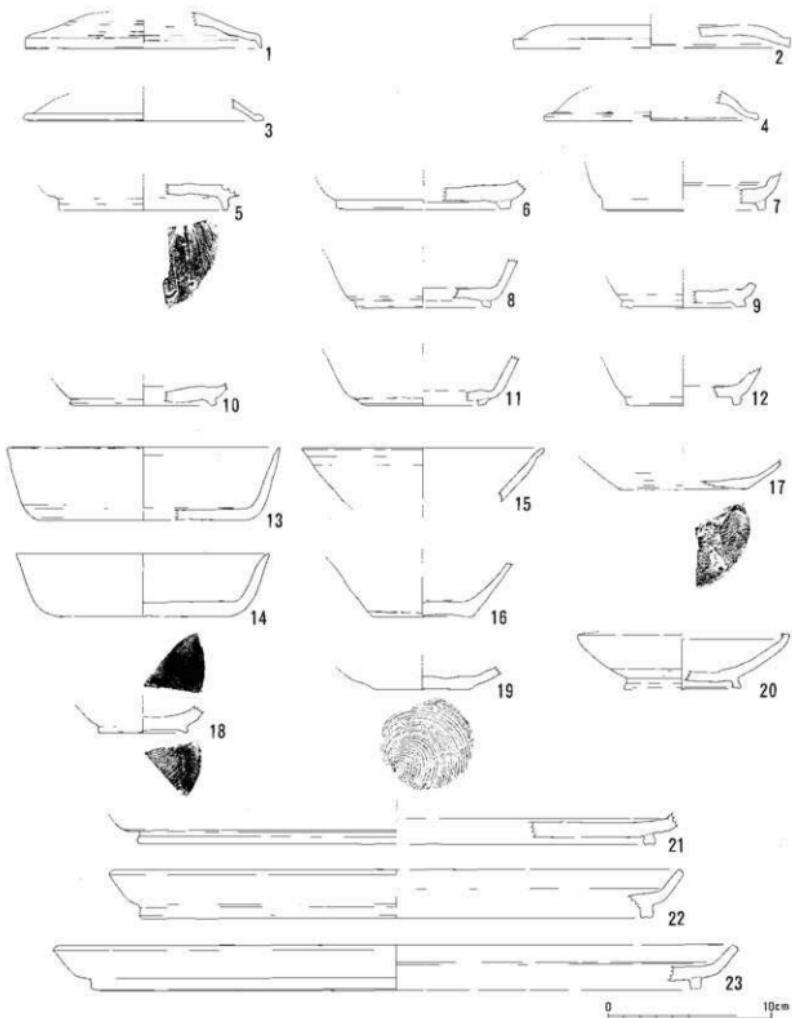
第68・69図には奈良～平安時代と考えられる須恵器を図示した。この時期の遺物は前述の古墳時代後期と同様に少ないが、盤や転用硯等、官衙的な様相が見られる。

68-1は、輪状つまみを持つ蓋である。端部を欠くが、扁平な体部を持ち口縁端部が垂下してカエリを持たないものと思われる。輪状つまみは比較的径が大きく、高さが低い。つまみの形状は断面三角形を呈す。外面は横方向のナデ、内面は不定方向のナデを施し、ケズリの痕跡は残さない。68-2も、蓋である。つまみの部分を欠くが、体部は高さのない扁平なもので、端部は下方に垂下し、カエリを持たない。端部外面は強いナデによりわずかに窪む面を持つ。外面には横方向の内面には不定方向のナデを施す。端部の形状から久本奥窯跡のV期に相当し、8世紀前半のものと考えられる。つまみの形状は不明であるが、全体のプロポーションは、68-1と同様になるものと思われ、輪状つまみが付く可能性もある。久本奥窯跡では、7～8世紀代に輪状つまみを持つ蓋は少ないが、益田市根ノ木田遺跡D区ではボタン状つまみを持つものと同時に出土しており、報告書では奈良時代前半期とされている。



第68図 古八幡付近遺跡III区出土須恵器実測図（2）（1：3）

68-3・4は、つまみの小片である。68-3はボタン状つまみの頂部を強く押さえ、輪状つまみ状にしたものである。68-4は、宝珠つまみで、非常に小さい。久本奥窓跡では、高さのある宝珠状つまみから扁平なボタン状つまみへの変化は7世紀代と考えられており、68-4は、7世紀前半代のものと考えられる。



第69図 古八幡付近遺跡III区出土須恵器実測図（3）（1：3）

68-5・6は、高坏の脚部である。68-5は、短脚のもので、筒部の径が太く、脚部の高さが低い。脚部内面は、取り付け部までナデされている。68-6は、やや脚の長いものである。脚内面の取り付け部は狭くナデが及んでいない。両者とも全面ナデ調整し、スカシは見えない。

68-7は、高台の高い坏である。高台は斜め方向に突きだし端部がわずかに上を向く。高台取り付け部から上方のわずかの間にケズリを残している。68-8も同様のものであるが、高台が低く、高台は断面三角形を呈す。

68-9は、斜めに付く短い高台を持つ坏である。底部は回転ヘラ切りによって切り離し、高台取り付け部近くからほぼ垂直に体部が立ち上がる。口縁部は薄くなっている、わずかに外反する。8世紀後半から9世紀のものであろうか。

68-10・11は無高台の坏である。底部は回転糸切りによって切り離され、体部は直線的で、斜めに立ち上がる。右見地方での回転糸切りの手法は9世紀後半に導入されたと考えられており、その頃のものであろう。

68-12・13は、高台付きの坏である。高台はやや斜めに取り付け、高台下端にアクセントを持つ。高台は体部との屈曲部近くに付き、体部はわずかに外傾する。底部の切り離しは回転ヘラ切りによるものと思われる、8世紀後半のものと考えられる。

69-1・2は蓋である。比較的径が大きく、口縁端部をわずかに垂下させるもので、つまみの形状は解らない。ケズリの痕跡は残していない。久本奥窓跡のV期とVI期の中間的なものと考えられ、8世紀中頃のものか。

69-3・4は、径の小さい蓋である。器高が高く、体部途中で「S」字状に屈曲し、輪状つまみを持つものと思われる。口縁端部の垂下はほとんど無くなる。8世紀後半から9世紀前半のものと考えられる。

69-5は、薄い高台を持つ坏である。底部は、切り離し後未調整で、静止糸切りに見える。高台はやや内湾し、薄く高い。

69-6～12は、小さな高台を持つ坏である。口径が小さく、高台が直立するものが多い。体部は、直線的で、やや外傾する。

69-13・14は、無高台の坏である。器高が低く、底径が広い。底部はヘラ起こしによるものと思われ、全面ナデ調整する。8世紀前半のものであろう。

69-15・16は、坏である。器壁が薄く、強い横方向のナデが施される。体部は大きく外傾し、器高が高い。9世紀代のものであろうか。

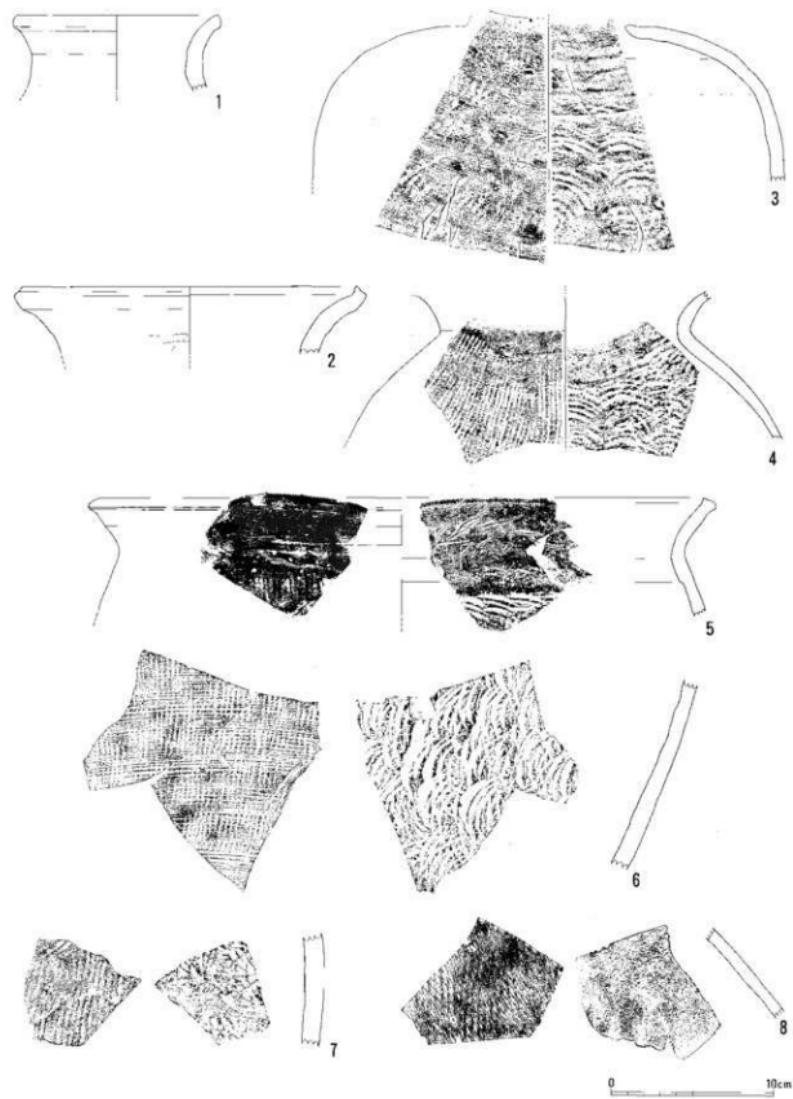
69-17～19は皿である。いずれも底部の切り離しは回転糸切りを使用する。69-18は、断面三角形を呈す小さな高台を持っている。

69-20は、小型の平瓶と考えられるもので、文具として使用する水差しであろう。高台は直立気味に付き、高台取り付け部より上方にわずかにケズリを残す。肩部から上を欠くが、肩部から頸部にかけてはほとんど水平になるものと思われる。

69-21～23は盤である。断面四角形を呈す太く短い高台を持ち、外傾して立ち上がる体部が厚く作られる。口縁端部は上方から外側に向かう面を持つ。小片のため、口径は推定である。

第70図には須恵器壺を図示している。

白磁 第73図には白磁を図示している。III区からは少量の白磁が出土しているが、いずれも調査区東側の、平成5年度調査区近くから出土したものである。後述する平成5年度調査区からは、白磁の他



第71図 古八幡付近遺跡III区出土須恵器実測図（5）（1：3）

青磁碗も出土しており、いずれも12世紀代から13世紀頃のものと考えられる。

73-1～3は、口縁部外側に大きな玉縁を持つもので、太宰府分類の白磁IV類碗である。

73-4～6は、口縁端部を外側に強く屈曲させるもので太宰府分類の白磁VII類碗である。73-8もVII類碗の底部と考えられるものである。

73-7は、碗であるが、外面の釉が体部途中までしかかっていない。VII類碗であろうか。

73-9は、高台の非常に低いものである。IV類碗の底部と考えられる。

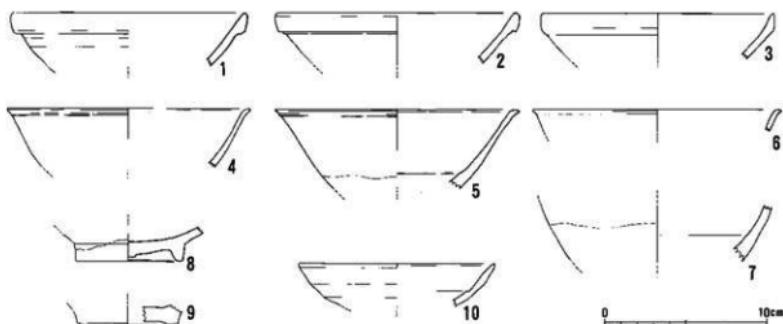
73-10は白磁の皿である。ケズリによる強い屈曲や内面の段が見られる。

III区で出土した白磁はその大半がIV・VII類碗で、その流通時期は12世紀末前後と考えられる。他の時期の陶器類が全く見られることから、第63～65回の土器類もこの時期を中心としたものである可能性が高い。

金属器 III区は低湿地のため、金属器の残存は期待していなかったが、鉄鎌が1点出土しており、第74図に図示した。刀身部は長台形を呈し、刃部は先端のみである。刃部の残存状況は良くないが、片刃であろう。刀身部は、断面長方形で、側面は直線である。関はほぼ直角である。茎は断面長方形で、端部を欠く。木質の痕跡は見られなかった。包含層からの出土のため、その所属時期は不明である。

木製容器 第75～94図には木製品を図示している。この内、容器と考えられるものは、第75図に示した9点である。木製品には建築材と考えられるものや木製農耕具と考えられるものが目立つが、容器類は非常に少ない。

75-1～6は、円形を呈す小型の曲物で、針葉樹の板材を使用している。75-1・2は、一回り大きな中型品と呼べるもの、他のものは更に小さく、使用する材もより薄く作られている。75-1・4では側部近くに穿孔が見られ、側板を桜皮で留めたものと考えられる。また、75-1には側面から打ち込まれた木釘の痕跡もあり、桜皮と木釘が併用されたことが解る。片面側のみに加工痕を残すものが多く見



第72図 古八幡付近遺跡III区出土須恵器転用窯実測図
(1 : 3)

第73図 古八幡付近遺跡III区出土白磁実測図 (1 : 3)

られる。

75-8は、大型の隅丸方形を呈する曲物である。長側辺には2穴1セットの楕円形の孔が4カ所以上で開けられている。片面の側縁近くには溝状に側板の痕跡が残っている。側板の痕跡には、重なっている場所も見られ、この位置で、側板が縫じ合わせられていたと考えられる。外面と考えられる面には、工具による加工痕がわずかに残されている。桜皮で側板を留めたと考えられる孔は、前述のとおり2穴で1セットとなっており、このため、側面に木釘の痕跡は見られない。針葉樹の板目材を使用しており、小型のものに比べ厚く作られる。同様のものは松江市タテヨウ遺跡^(註4)などで出土している。

75-9は、取手の付く容器である。底部と1側辺を欠くが、左右対称で、両側に取手が付くものと考えられる。針葉樹の板目材を割り貫いて作られたもので、容器の部分はほぼ平面円形を呈し、わずかに外側が広い台形の取手が付く。取手は口縁部より約2cm下がった位置から付き、やや上向きに傾斜している。残存する体部は、わずかに内湾しながら底部に向かうが、底面はほぼ水平になっているようで、屈曲する部分が見られる。

同様の器形を持つ木製品の出土は、県内では知られていないが、民俗例から、加熱した状態の土器^(註5)を置いたり、移動するための機能が考えられる。

田下駄 第76・77図には田下駄と考えられるものを図示している。いずれも從来「オオアシ」と呼ばれていたものと考えられるが、秋山浩三氏の分類^(註6)に従い、方形枠付き形式田下駄と呼ぶ。

第76図に図示したものは、直接足を乗せる足板部分である。76-1は、やや幅の狭いもので、この個体のみ5穴である。前端部には方形枠に連結するための刺込みが見られる。針葉樹の板目材を使用し、孔は、片面から穿孔し、方形を呈す。側部近くに穿孔された4穴は左右非対称である。秋山氏の分類には5穴のものは見られず、柾目材である点、他の個体より薄く作られている点が異なり、他の用途も考えられる。

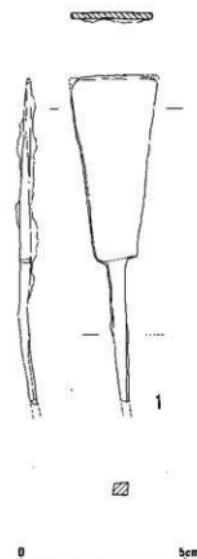
76-2~4は3穴の足板である。いずれも杉と思われる針葉樹で、76-3は板目材を、他は柾目材を使用する。76-4は、1側縁を欠くが、他の2点は、ほぼ左右対称に片側から方形の穿孔が行われる。前側の孔は中軸線からはずれており、左右の区別があるかもしれない。いずれも前後両端の残存状況が悪いが、枠板に連結するための柄の痕跡が残る。

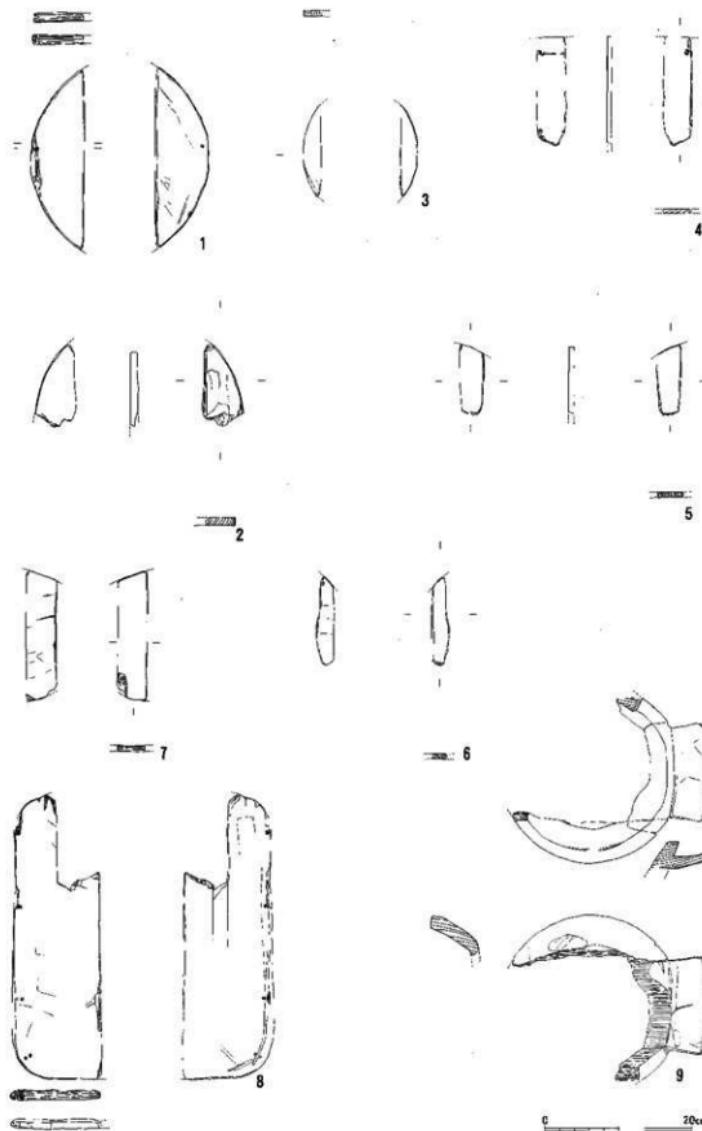
この内、76-1・2について、年輪年代測定を依頼し、76-2は辺材部分まで残存しており、AD 620年、76-1は、辺材が残っていなかったがAD 164+ α と言う結果を得た。

第77図には、方形枠部分を図示している。これらの部材については、方形枠付き田下駄の枠と、馬鉄の基部の両者の可能性が考えられたが、77-8・9の柄の大きさが77-1の孔に一致したことから方形枠付き田下駄と判断した。

77-1~7は、方形枠の縦枠部分と考えられるものである。いずれも断面半円形で、横枠を差し込む方形の孔が開けられ、横枠の柄や、柄を留める楔を残すものが多く見られる。

第74図 古八幡付近遺跡
田区出土鉄族実
測図 (2 : 3)





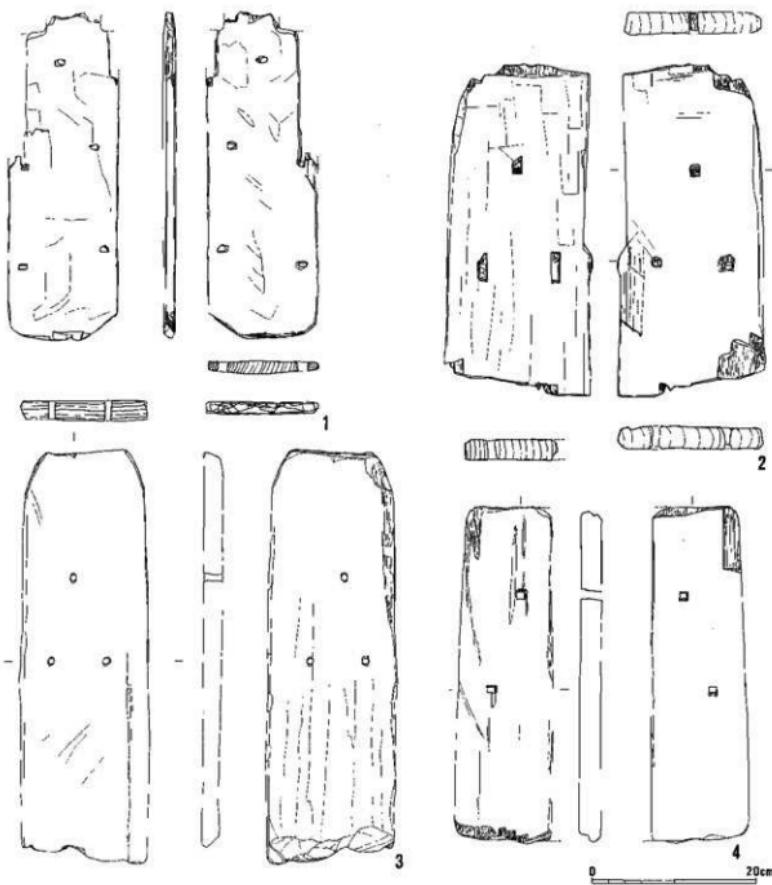
第75図 古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図 (1) (1 : 6)

77-1・4には、引き手の部分と考えられる鉛直方向の柄孔が見られる。

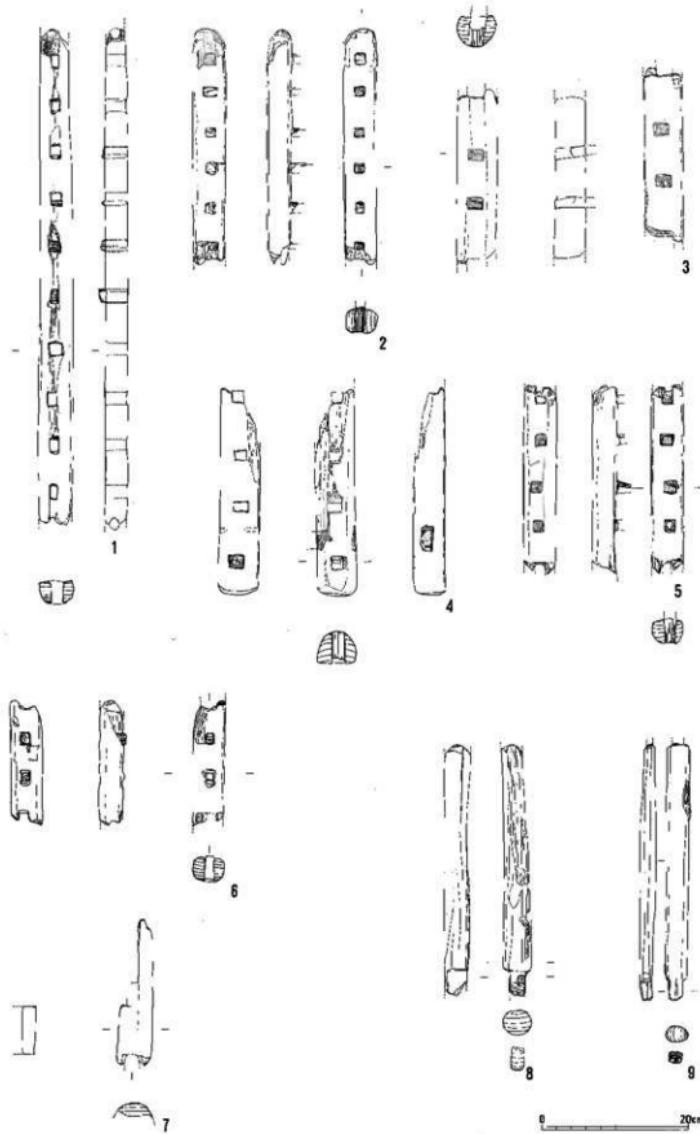
77-8・9は、横枠の部材である。断面はほぼ円形を呈し、縦枠の方形孔に一致する柄を両端に備えるものと思われる。77-9には楔の痕跡が残る。

武器形木製品 第78図に図示したものは、機織具と武器形木製品の両者の可能性がある。いずれも針葉樹の板目材を使用している。武器形木製品とした場合、78-1は完形品と考えられるもので、切っ先と茎の表現が見られる関の部分は丸くなっている、銅剣よりは鐵剣を模したものと考えられる。78-3・5・7・10は関の部分が直角に切り落とされている。78-11は、片闇で刀形と言える。

78-1が出土した時点では、武器形木製品であると考え、検討していた。しかし、刃部の表現が見られ



第76図 古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図（2）（1：6）



第77図 古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図（3）（1：6）

ない、下端部のさきぐれ立っている部位が欠損している様に見える等の点から、上下対称に作られたいた可能性も考えられ、機械具の可能性も出てきた。以下それぞれの可能性の欠点について整理する。

武器形木製品の場合

11点もの出土が見られる中で、切っ先と考えられる破片が78-11の1点しか無く、上下対称形であった可能性も考えられる。

柄にあたる遺物は、確認できない。

断面長方形を呈すものが多く、刃部の表現が見られない。

機械具の場合

握りの部分が短かすぎる。

機械りに関わる他の遺物が全く見られない。

武器形木製品の場合と同様に刃部の加工が無く、機械具に適さない。

全く違う他の可能性（例えば、田下駄の横棒の部材）も無いわけではなく、今後の検討と類例の増加を待ちたい。

小型の用途不明板材 第79・80図には、用途不明の板材の内、比較的小型のものを図示している。

79-1・2・4は、抉りの入ったもので、いずれも針葉樹を使用し、79-1・2は、柾目材である。

79-3・5・6は側縁近くに穿孔の見られるものである。特に79-5・6は、穿孔の位置がほぼ一致し、同じ機能を持つものと考えられる。穿孔はほぼ円形で、片側から開けられる。

80-1は、大きな孔を持つものである。全体に残存状況が悪く、全形は伺えない。片面からノミ状工具により穿孔されている。80-2は、上端に小さな穿孔を1カ所施すもので、下端には柄状の突起が見られる。

80-3は、上端を欠くが、2カ所で方形の穿孔が見られるものである。下端には2本の突起があり、柄と思われる。

80-4は、片側に方形の抉りを持つもので、やや大きな方形の穿孔を1カ所に持つ。穿孔は片側からノミ状工具で行われ、他面で纖維方向に割れている。

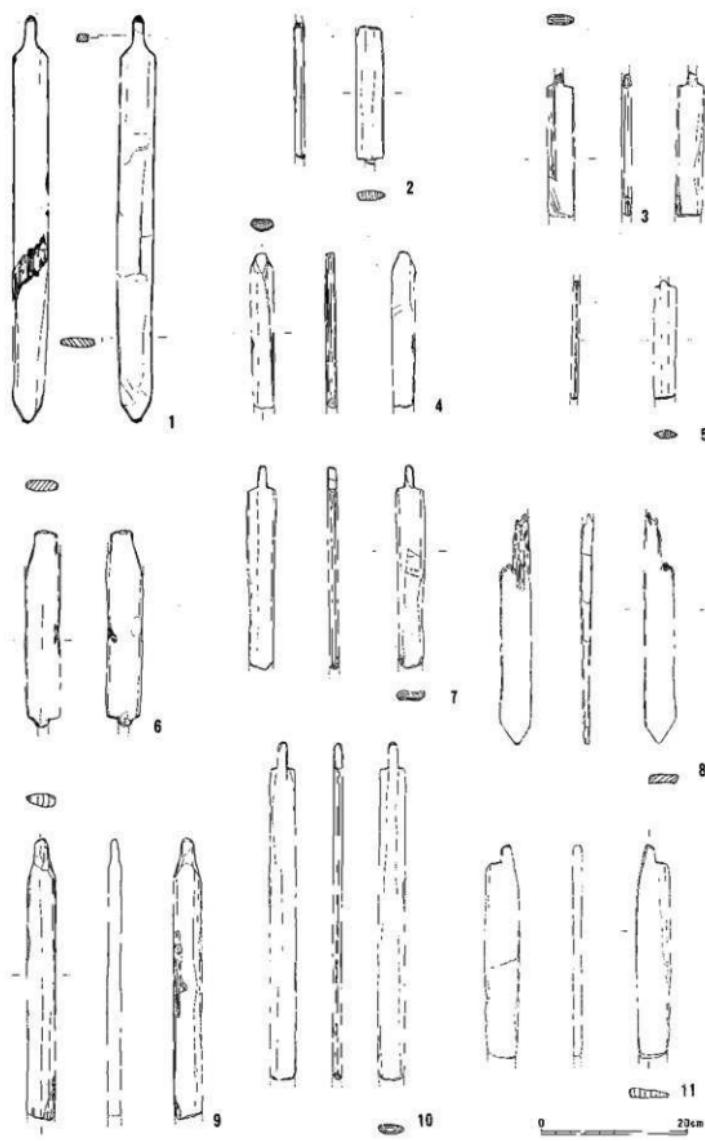
80-5は、やや大きな板材である。破損状況から上下対称形になるものと思われる。図面下方に残存する幅の狭い部分にはやや大きな方形の穿孔が見られる。

80-6・7は、穿孔の見られないものである。80-6は、柄穴と考えられる方形の抉りがあり、建築部材であろうか。80-7は、針葉樹の板目材を使用し、厚さが非常に厚い。側部に方形の抉りが、下端部に半円形の抉りが見られる。

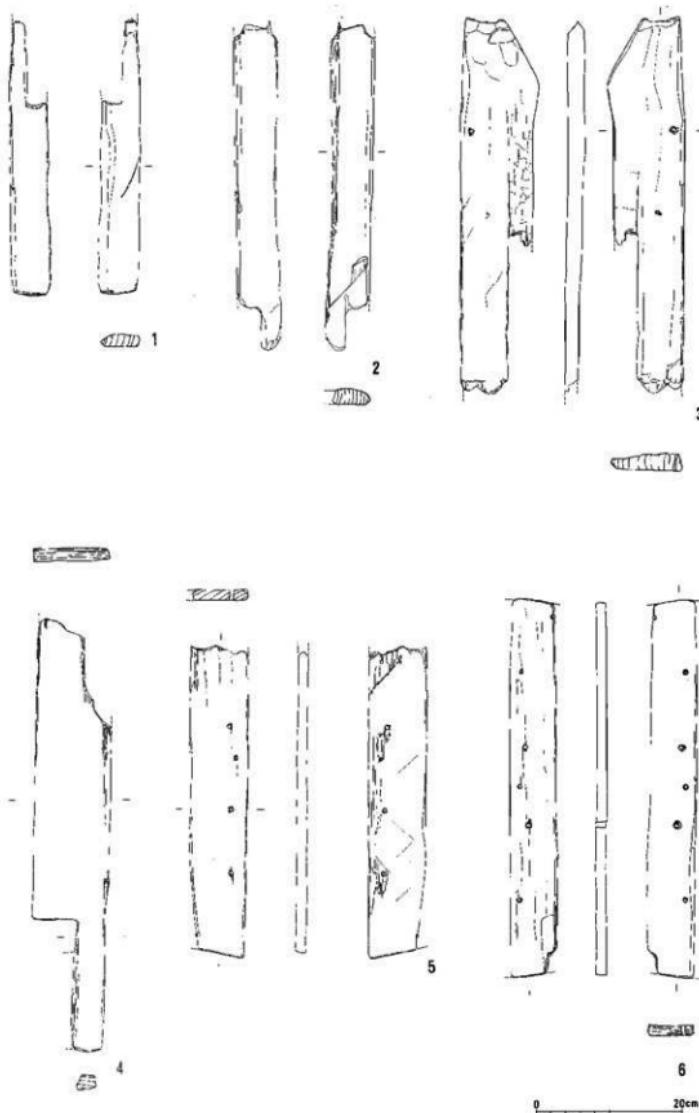
一本梯子 一本梯子は2点が、調査区南端で出土しており、第81図に図示した。梯子の段の方向に対する木取りの方向が異なることから、2点は別個体である。いずれも杉と思われる針葉樹の柾目材を使用しているが、残存状況は悪い。斧状工具で荒く成形されており、加工痕を各面に残す。81-1は、下端部分と考えられるが、横方向に切断されるのみで、特に細工は見られない。段の部分の幅約3cmで、約40cm間隔で作られている。基部の方向に対し、段は斜めに作られており、段の部分を水平と仮定すると、梯子の設置角度は約60°となる。

用途不明の板材 第82・83図には用途不明の板材の内、主に中型のものを図示している。

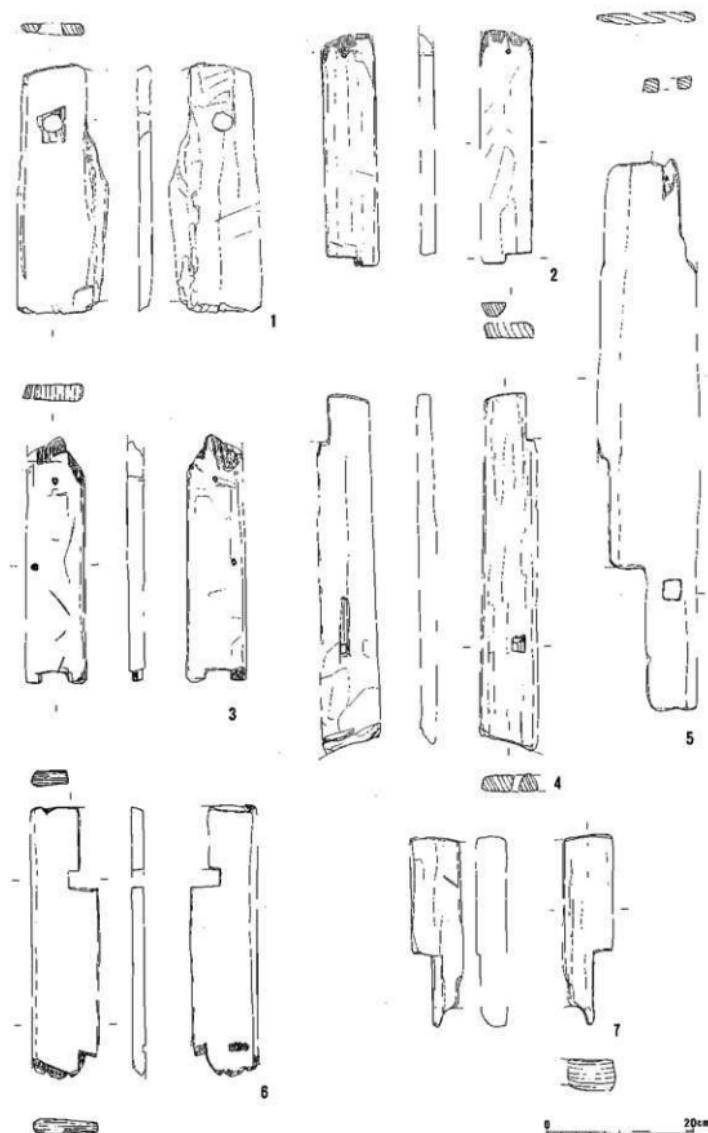
82-1は、1側縁を欠くが、左右対称と考えると、樅の様な形状になるものと考えられる。針葉樹の



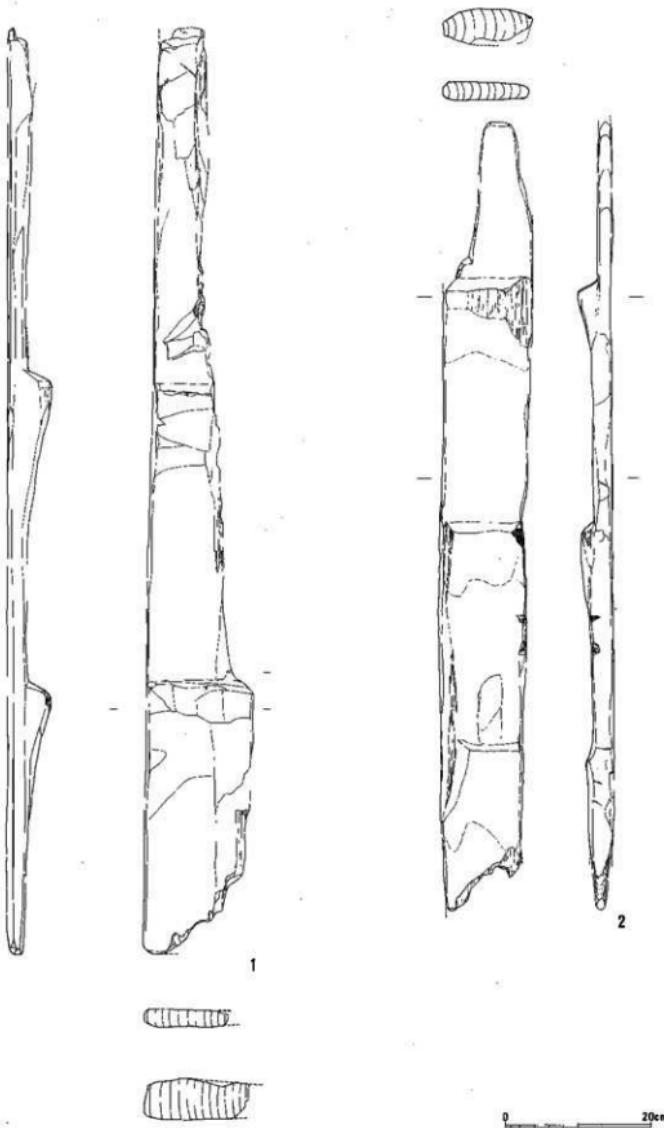
第78図 古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図(4)(1:6)



第79図 古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図（5）（1：6）



第80図 古八幡付近遺跡Ⅲ区出土木製品実測図（6）（1：6）



第81図 古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図（7）（1：6）

板目材を使用し、厚く作られており、側面には加工痕を多く残す。

82-2～4は建築材であろうか。加工痕を多く残し、柄と考えられるような方形の穿孔が見られるものもある。

82-5・6は、棒状のものである。82-5は、細い枝を使用し、片面は辺材部分をそのまま使用している。端部に抉りがあり、機械工具にも見える。82-6は、断面方形に加工された材を使用し、上端部を丁寧に成形したもので、上端近くには、面取りも見られる。下端部は、残存状況が悪く形状は不明であるが、尖らせていたのではないだろうか。

83-2・3は残存部分から判断して平面円形のものと考えられる。両者とも針葉樹の板目材を使用しており、荒い加工痕が多く見られる。83-1は、中程に、両側から開けた円形の穿孔が見られる。

83-3・4は、両端を丸く削るものである。両者とも針葉樹の柾目材を使用している。両面に加工痕が残り、完成品と考えられるが、用途は不明である。83-4には、片側から開けた方形の穿孔が見られる。

建築材転用杭 第84・85図には、建築材などを転用したと考えられる杭を図示している。85-1・4を除き、機能に無関係と思える柄や抉りが見られ、そのほとんどが、当初は建築材であったと思われる。85-1は、端部に至るまで、非常に丁寧な成形が施され、建築材以外の用途のものを杭に転用したことでも考えられる。また、85-4は、扁平な板材の一端を荒く削って杭としたもので、建築材などの転用と思われる。

84-1は、方形の柄穴と上下2カ所の抉りを持つものである。柄穴はほぼ正方形を呈し、丁寧に加工される。抉りは、上下で方向を変えている。

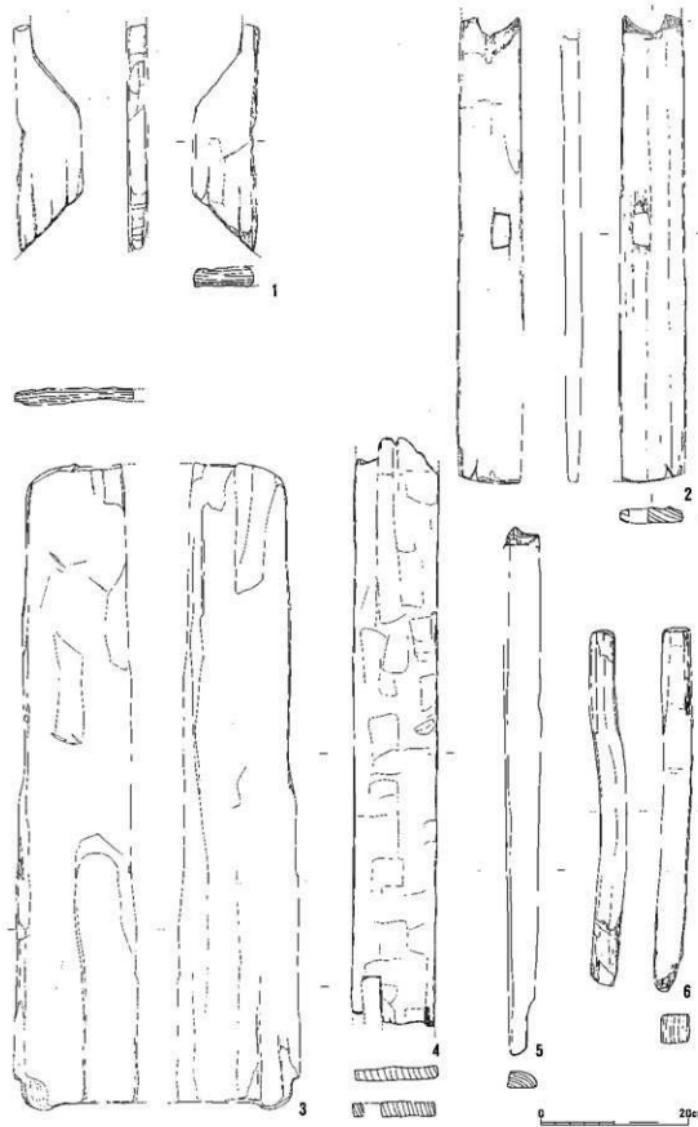
84-2～5は、抉りのみを持つものである。この内84-3・5は、上下の抉りの方向が直行するものである。

85-1は、前述のとおり、建築材以外の用途を考えたい。断面方形の柾目材を面取りし、断面椭円形に成形したもので、頂部近くでは5cm程の間で面取りを省略し、杖頭部に残している。頂部は丁寧に面取りし丸く整形する。中程よりやや下に横方向に通る抉りを設け、その内側に六角形の穿孔を行う。下端は円錐形に削り杭になっているが、この加工のみは荒く、他の部分の加工痕とは明確に異なっている。

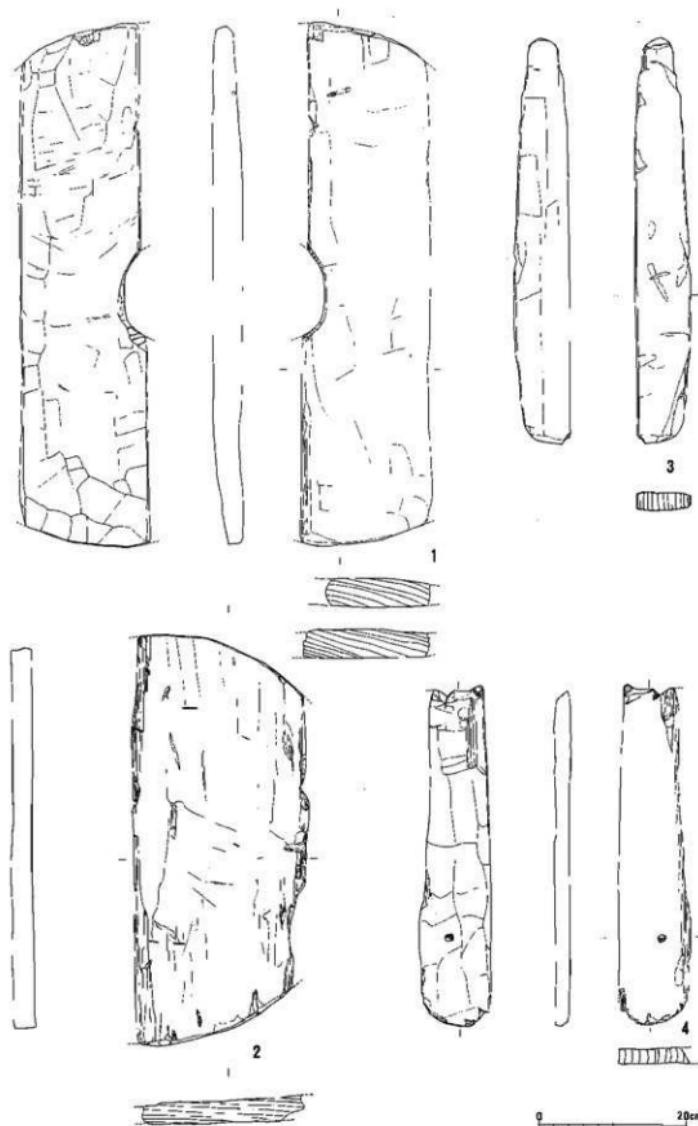
85-2は、84-4と同じものと考えられるが、木取りの方向が異なる。85-3は、極端に薄いものである。針葉樹の板目材を使用し、断面三角形を呈す。抉りも斜めに入っており、当初、断面方形だった材を縦方向に削って使用した可能性がある。

85-1は2カ所の抉りと柄穴と考えられる痕跡を残すものである。側部の残存状況が悪いが、断面長方形を呈していたものと思われ、2カ所の抉りは、面方向に対し、やや傾斜して入れられている。杭に加工された下端部には、方形の柄穴と考えられる加工痕が残る。

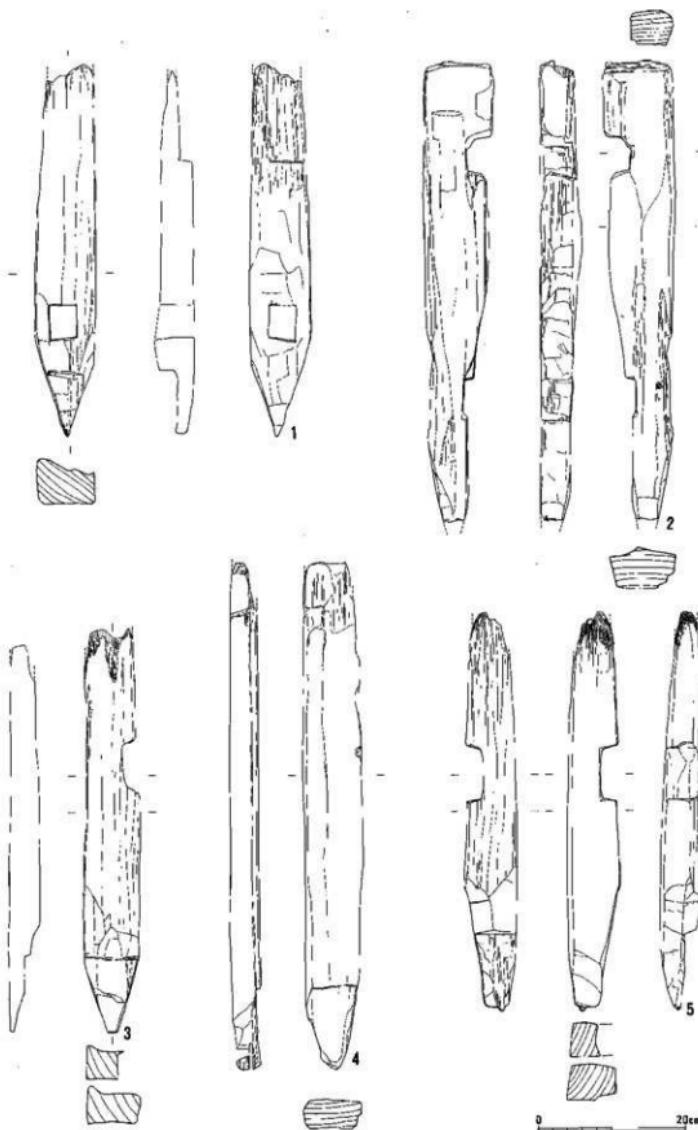
以上の転用杭は、そのほとんどが抉りや柄穴の部分で杭に加工されていることが注意される。例えば84-1では、打ち込み面に対し水平の面が残されていることから杭としては使用しにくいことが想像されるのである。以下は推測の域を出ないが、当初建築材であったものが、柄や抉り部分など構造的に細い部分で破損してしまった材を使用し、杭として簡単に加工しようとしたものであろうか。杭の検出面より下層は砂層であり、仮に棒状のものでも打ち込めるほどの柔らかさであったため、このよ



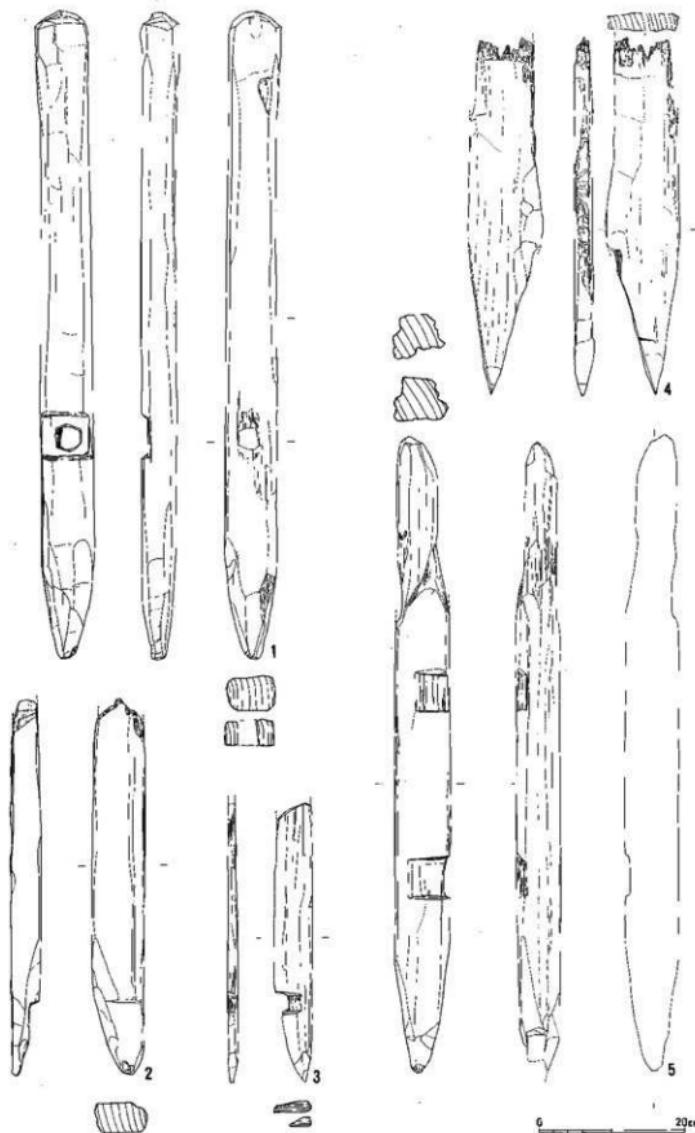
第82図 古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図(8)(1:6)



第83図 古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図 (9) (1 : 6)



第84図 古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図(10)(1:6)



第85図 古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図 (11) (1 : 6)

うなものができたと想像される。

大型の用途不明板材 第86～90図には用途不明の板材の内、比較的大型のものについて図示している。

第86図に図示したものは、両端に柄状のものを備える板である。3本とも中心部分の全長がほぼ等しく、同様の用途に使用されたものと思われる。図中上端にあたる部分は幅が広く長さの無い柄状のものが、下端には、幅が狭く長さの長い柄状のものが備えられる。86-1には中程に斜めに開けられた方形の穿孔がある。

87-1は、3カ所以上で穴の開けられるもので、長方形のものが両端に円形のものが端近くに見られる。87-2は、側部に半円形の抉りがあるものである。側部は当初の形状のまま残存していると見られる。87-3は、図中下端に2段以上の抉りが見られる。各面に荒く加工痕を残している。

第88図に図示したものは、抉り・穿孔を持つ板である。88-1は、図中左端に方形の抉りが入る。下端に見られる楕円形の穴は節穴である。非常に多くの加工痕を残している。88-2は、抉りと穿孔を持つ。穿孔は片面から行われ、楕円形を呈す。また、1側縁に三角形の抉りを入れている。88-3・4は、片側端部近くに方形の穿孔が見られる。この穿孔は、両側から行われているようである。88-5は、中程に穿孔を持つものである。板材の両端まで残存しており、片側が斜めに切断され、平面台形を呈す。

89-1は、穿孔・抉りの見られないものである。板目材を荒削し、簡単に成形したもので、加工痕はあまり見られない。平面長方形を呈すものと考えられる。

89-2・3は、表皮に近い材を使用したものである。片面は一応の加工が見られるが、他面は、割った時の面をそのまま使用する。89-2には、2カ所で抉りが見られるが、89-3には、目立った細工は見られない。

89-4も表皮近くの材を使用するものであるが、一端に柄状のものを持つ。芯側の面は割ったままで、大きな加工は見られないが、表皮側は丁寧に面取りしている。

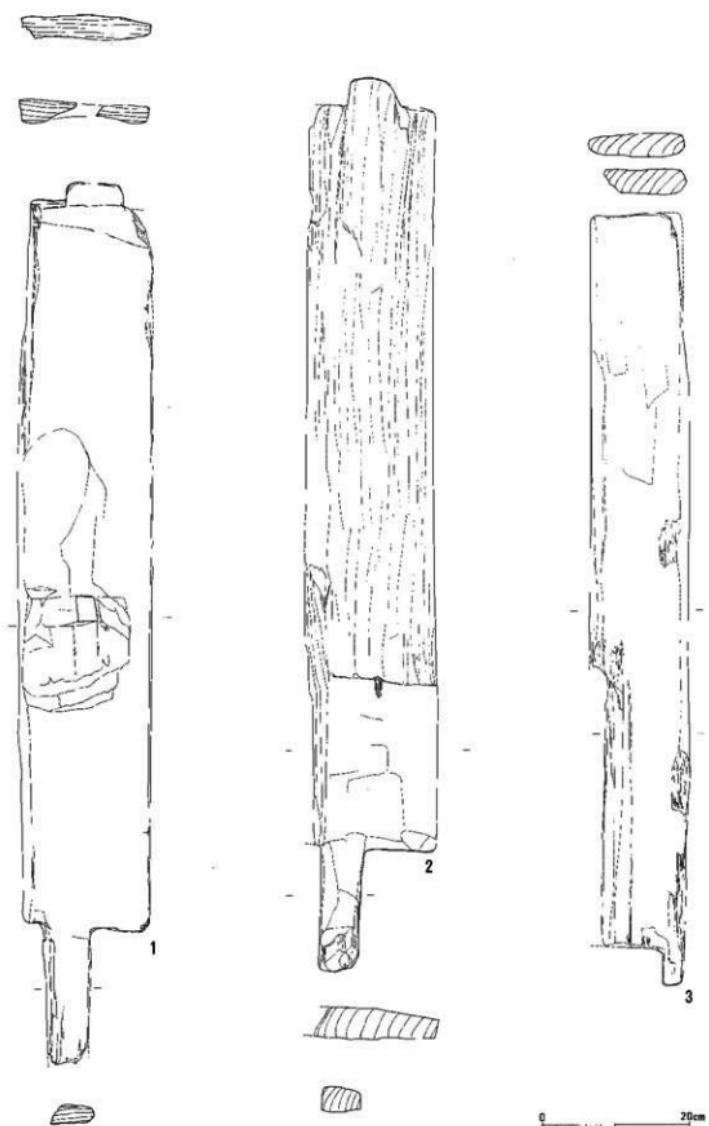
89-5は、長大な板目材に抉り・穿孔を施すものである。一端を斜めに削り出し、抉りを設けた部分は柄状に飛び出している。方形の穿孔を1カ所に持つ。

90-1・2は、針葉樹の板材である。90-1は、方形の穿孔と、対角に2カ所の抉りを持つ。90-2は、一側縁に2カ所の抉りを入れている。両者とも片面は、割ったままの状態で使用し、他面に加工痕を残している。

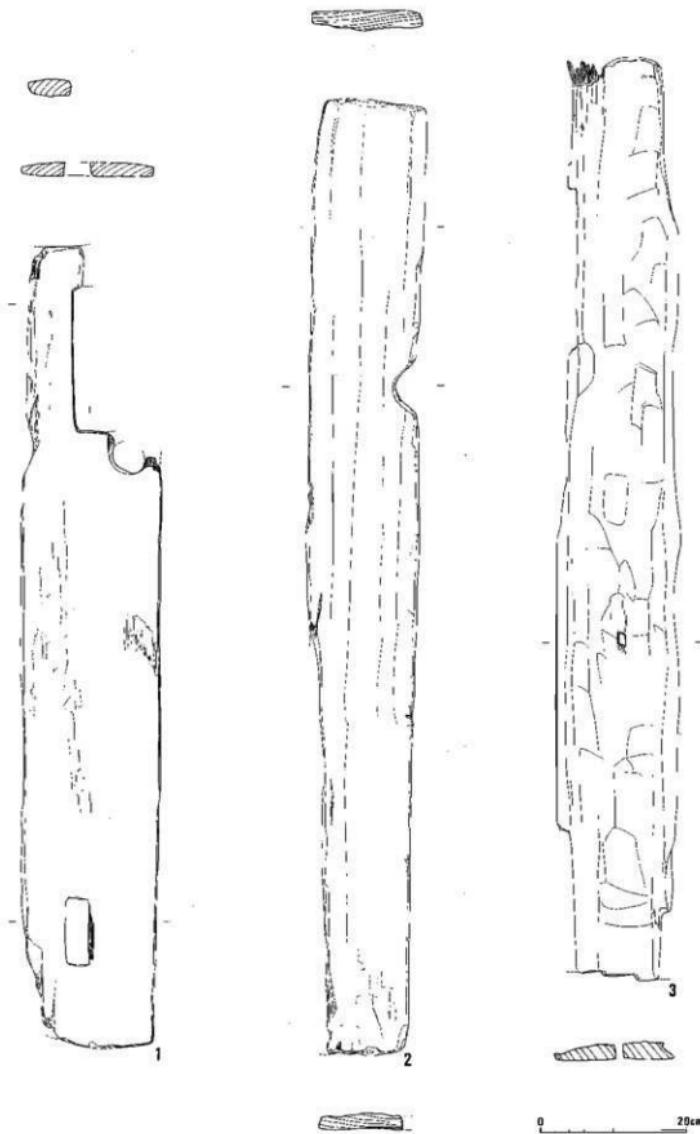
90-3・4は、広葉樹の板である。広葉樹の板目材を切断しているが、それ以外に目立った加工は見られない。両者とも板目材であり、ミカン割り材ではない。古八幡付近遺跡では、田下駄以外の明確な農耕具は見られず、鋤・鎌などの木製農耕具は検出していないことから、木製農耕具未製品とは考えにくい。

板材 第91図に図示した板は、非常に丁寧に成形されているもので、各面はあたかも台鉋で削ったかのように平滑なものである。いずれも調査区東側で、杭列に直接かかった状態で検出されており、水田造構を形成する畦の部材の一部である。

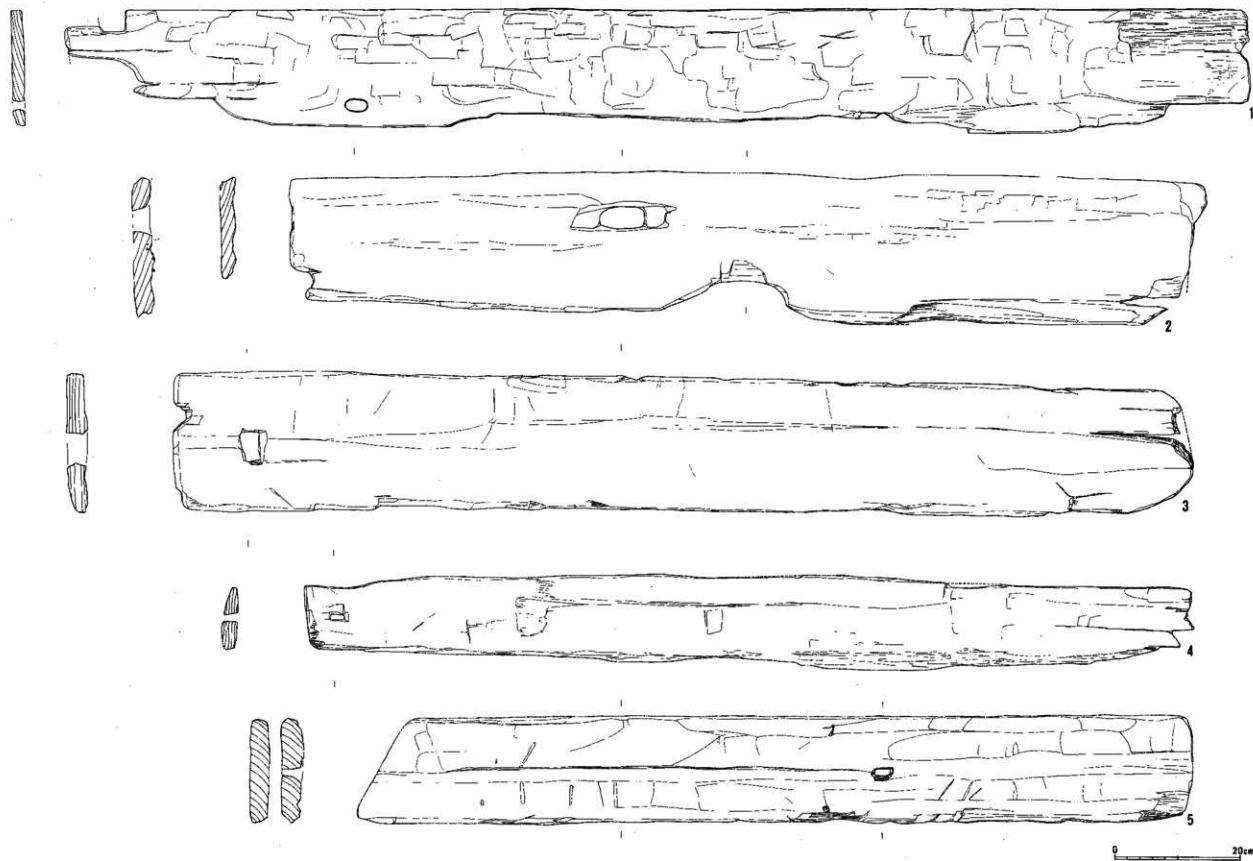
91-1は、平面長方形を呈する板で、1側縁を欠いている。杉と考えられる板目材を使用し、一見台鉋を使用しているように見えるほど丁寧に成形されるものである。片面は削った状態のまま使用し、全く加工痕が無く、他面を丁寧に成形し、わずかに加工痕を残す。上下端面はほぼ切断されたままの状態で、面取りは見られないが、使用によるものか角は丸く磨滅している。残存している側の側端は、



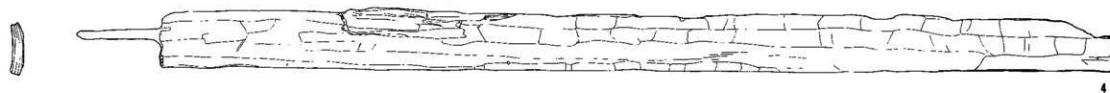
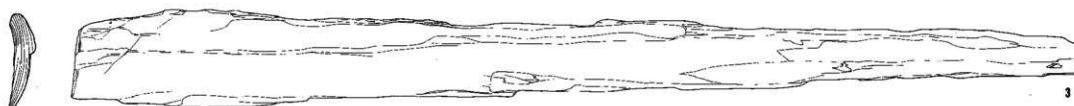
第86図 古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図 (12) (1 : 6)



第87図 古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図 (13) (1 : 6)

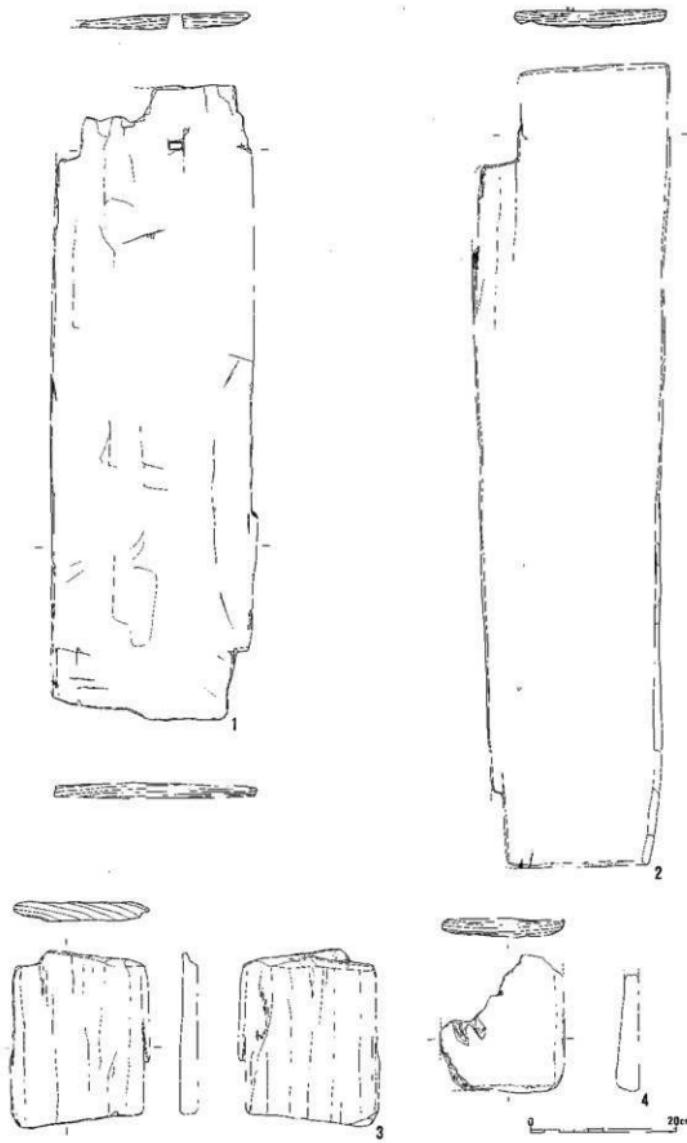


第88図 古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図 (14) (1 : 6)



第89図 古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図 (15) (1 : 8)

0 40cm



第90図 古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図 (16) (1 : 6)

わずかに薄くなり、丸く面取りが行われているようである。側端近くの上下 2 カ所に 1 辻 2 cm 程の方形の穿孔が見られる。丁寧に穿孔されており、その痕跡は見えないが、片面から穿孔されたものと思われる。建築部材と推定されるが、調整が非常に丁寧なことから特殊な用途かもしれない。この板について、年輪年代測定を依頼し、BC 16 年 + α との測定結果を得た。^(註 9) 91-1 は、辺材が全く残存していないため、伐採年代は BC 16 年よりかなり後の年代になり、弥生時代後期頃であろうか。

91-2・3 は、上下端部に段を持つもので、他の部材と組み合わせて箱形を形成するものであろう。針葉樹の板目材を使用し、上下の両端部には、小さな段を備える。段のある端部には 2 穴 1 セットで、段のない側縁部には、1 穴 1 セットで、梢円形の穿孔が見られ、他の部材と桜皮を使用して連結したことが解る。各面とも丁寧に成形され、加工痕をあまり残さない。

杭 第 92 図に図示したものは転用材ではない杭である。92-1～4 は、断面方形に割った材を使用し、92-5～9 は、適当な太さの枝材をそのまま、もしくは半裁して使用するものである。

92-3 は、1 側縁に加工痕が多く残り転用材である可能性がある。また、92-4 は、1 側縁に表皮近くの部分をそのまま残しており、表皮が付いたまま使用していた可能性がある。92-1 は、端部を 3 方向から削る。また、92-2～4 は、両側面を生かし、別の 2 側面から削り落としており、先端部に至るまで、断面方形を呈す。

92-5～8 は、細い原木を半裁して使用するもので、裁断面以外の面は、表皮だけが欠落した状態である。先端部は 3 方向から荒く削る。

92-9 は、細い枝材をそのまま使用するもので、小枝を落としただけのやや曲がった材を使用している。小枝の痕跡を残していることから表皮も剥がしていないと考えられる。端部は 3 方向から荒く削り落とす。

特殊品・用途不明木製品 第 93・94 図には、用途不明の小型の木製品を図示している。

93-1 は、琴柱と考えられる。針葉樹の板目材を使用し、上端部を欠く。2 本の脚が斜め方向にやや外反しながら延び、下端部は弓なりに削られる。体部中央に両面から穿孔された円形の小さな穴が開いている。

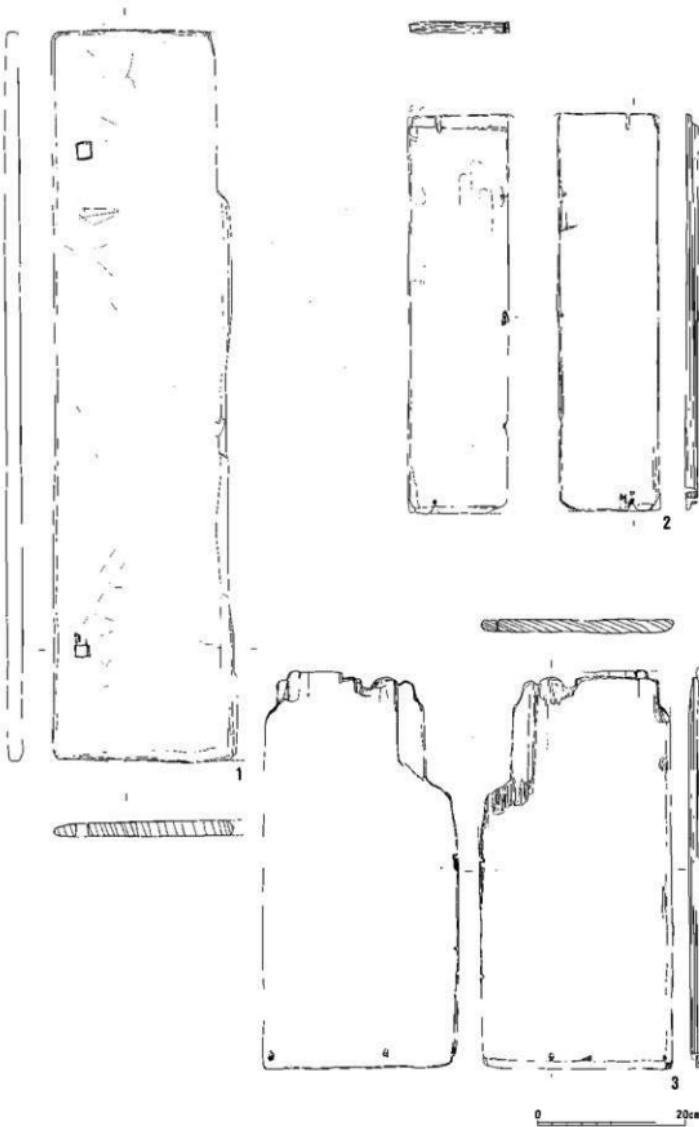
93-2 は、引き手状のものである。針葉樹の板目材を使用し、平面長方形を呈すものと考えられ、左右対称と仮定すると、大小 3 カ所の穴が開けられるものと思われる。3 カ所の穴は片面から穿孔され、中央のものはやや大きく梢円形に、端のものは小さく円形から六角形に開けられる。現状では何かに接合されていた痕跡は伺えない。

93-3 は、取手状の形状をしたものである。頭部は複雑に面取りされ、基部は、断面方形を呈す。下部を欠損するが、破断面には方形の加工の跡が見られ、柄穴状のものがあったと思われる。針葉樹の板目材を使用している。

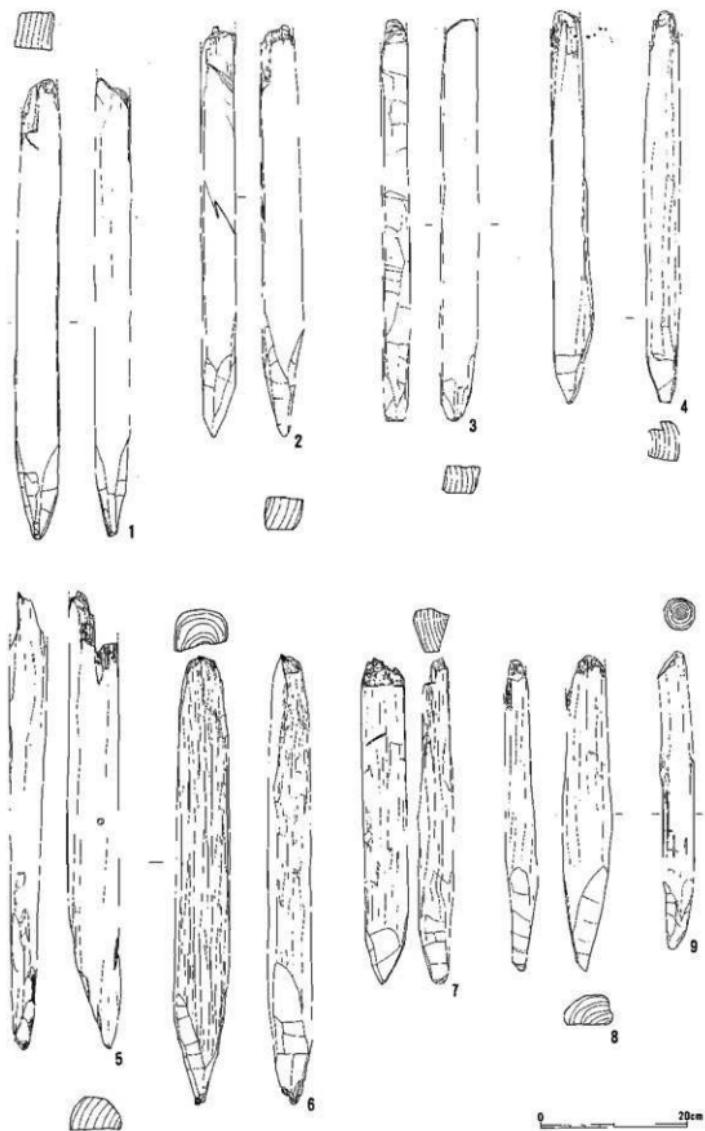
93-4 は、ヘラ状のものである。柾目材を使用し、側面を除いて加工痕は残していない。薄い板材の側部を加工したもので、頂部は握り状に細く作られる。

93-5 は、板材の 1 側縁を鋸歯状に加工したものである。それ以外に明確な加工は無く、火切り臼ではない。針葉樹の板目材を使用する。

93-6 は、コルク抜きの取手に似たものである。下端に飛び出した部分には下方から小さな穴が開けられており、わずかに屈曲して、片面側に貫通する。杉と思われる針葉樹の板目材を使用している。



第91図 古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図 (17) (1 : 6)



第92図 古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図 (18) (1 : 6)

94-1・2は、取手状の抉りを持つものである。94-1の取手状に抉れた部分には、円形の穿孔が見られる。

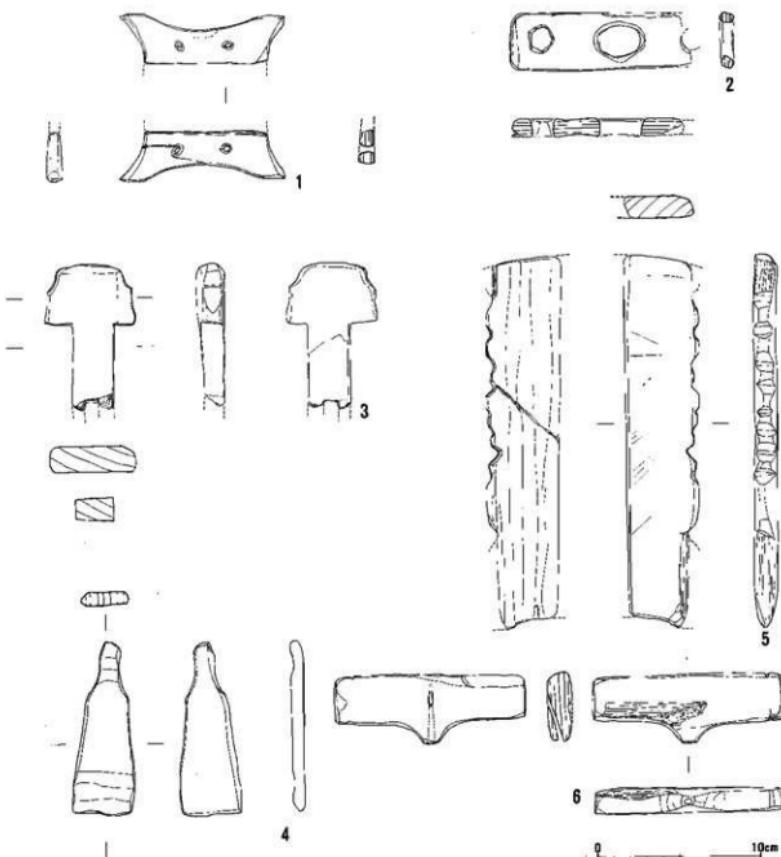
94-3は、厚い柾目材に大きな円形の穿孔を施すものである。周囲は丁寧に切断されている。

94-4は、小さな板材であるが、図中上端に火を受けた形跡があり炭化している。

94-6も正目の板材であるが、1側縁を両側から斜めに切断し、縦断面五角形を呈するものである。

94-7は竹を割ったものである。明確な加工は見られない。94-8は、広葉樹の原木である。

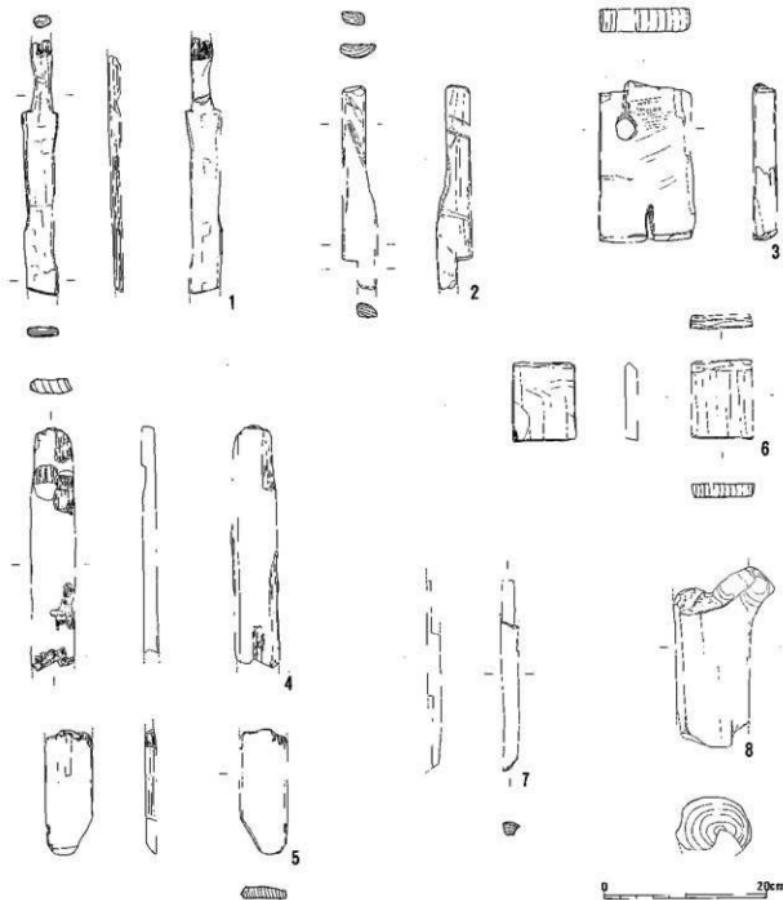
III区は、前述のとおり、水田遺構とその上層に堆積した遺物包含層からなる。土器からは、弥生時代後期、古墳時代中期、中世の3つのピークが見られ、木製品の年輪年代測定では弥生時代後期と7世紀の年代が得られた。弥生時代後期の年代測定結果を得た木製品の内の1点は、水田耕作用の農耕



第93図 古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図(19)(1:3)

具と考えられる方形枠付き田下駄であり、古八幡付近遺跡での水田耕作は、弥生時代後期には行われていたと推定される。また、杭列を使用した畦状造構の構築時期もその頃ではないだろうか。

弥生時代後期の水田跡を検出した松江市の上小紋遺跡でも、しがらみ遺構に建築材転用杭を使用しており、共通性が見られる。また、上小紋・向小紋遺跡では比較的小区画の水田遺構が重なって見られるが、古八幡付近遺跡では大きな区画1面しか検出できなかった。古八幡付近遺跡の水田遺構はまだ南北に拡大する可能性が高く、畦の構築時期や継続期間など検討課題は多い。



第94図 古八幡付近遺跡III区出土木製品実測図 (20)

⑥ 平成 5 年度調査区

平成 5 年度調査区は、III 区の東側に隣接する標高約 10 m の水田である。古八幡付近遺跡の全面発掘に先行して平成 5 年度に調査を行った。その他、平成 5 年度には、古八幡付近遺跡の調査区北東側の丘陵上、南西側の畠地（I 区の東側）、III 区の水田等で、トレンチ調査を実施している。

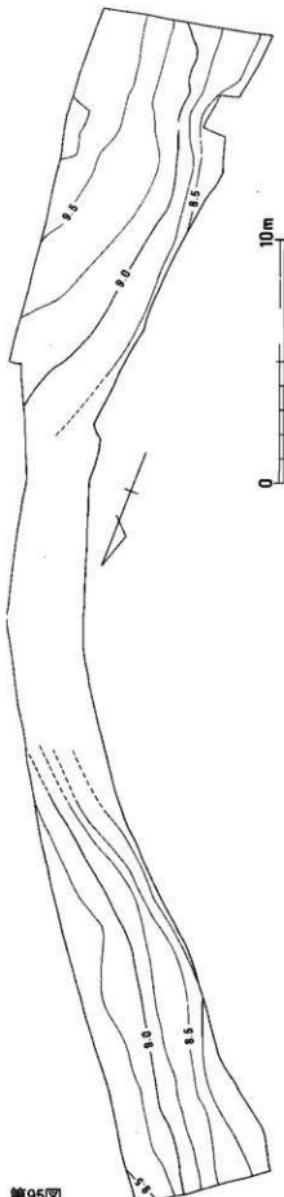
平成 5 年度調査区は南北に細長い範囲で、西側（III 区の方向）に大きく傾斜した地形である。西側は III 区の水田が広がり、東側はコンクリート製の水路が南北に走り、かなり嵩上げされている事が予想される。当初の地形は、III 区から IV 区に向けて急激に上る斜面になっていたと考えられる。

地山面の地形は、調査区の南北両端が西側に向けて延び、調査区中程が、小さな谷地形になっている。調査区中程の谷地形の内側は、巨人な石が散乱した状況になってしまっており、この部分の地形測量は断念している。調査区の最低所は北西側隅で標高約 8 m、地山面の最高所は、調査区南隅で標高約 10 m を測る。

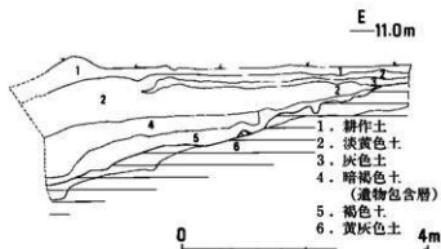
調査区北側では、耕作土と造成土と考えられる淡黄色土が厚く堆積しており、その下層に暗褐色土が 20 cm 程度の厚みを持って見られる。暗褐色土には遺物が多く含まれており、須恵器・土師器を中心とする土器類を採集している。

地山面は黄灰色土で、その直上には、人頭大の石が多く散乱していた。地山面からは、東西方向に走る溝・ピットを検出している。

調査区南側は、北側に比べ造成土（褐色土）が薄く、代わりに水田の床土と考えられる青灰色土、茶褐色土が交互に堆積しており、継続的な水田耕作が推定される。第97図の土層図 5 の茶褐色土は、木の根等による搅乱と思われるが、それに切られている土層図 4 の暗褐色土は、遺物包含層で、調査区北側の土層図（第96図）の 4 の暗褐色土に連続するものであろう。この遺物包含層が乗る黄色粘質土上面は遺構面で、ピット 18 穴を検出している。前述のとおり、調査区中程は石が散乱しており、このために北側への広がりは確認できなかった。また、III・IV



第95図
平成 5 年度調査区地形測量図（1 : 100）



第96図 平成5年度調査区北壁土層断面図（1：80）

区への広がりも確認できなかった。黄色粘質土・青灰色土を掘削し、基盤層と見られる褐色土面を検出している。褐色土面には、ピット・溝・加工段が見られるが、調査区西側で、大きく傾斜して落ち込んでおり、西側のIII区には見られない。南側上面遺構 調査区南側は、前述のとおり、黄色粘質土を基盤とする遺構面である。この面からは、須恵器を中心とする遺物が出土した。

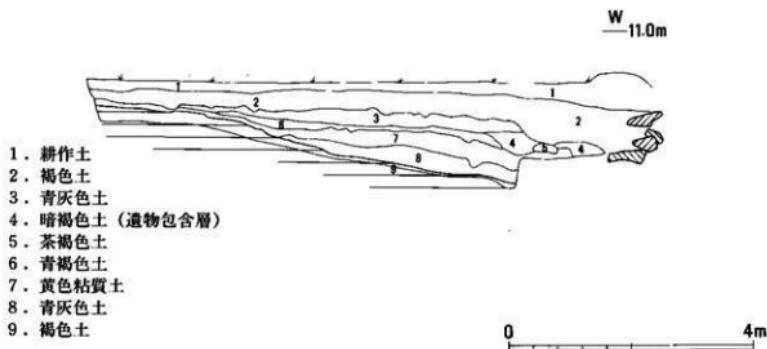
検出した遺構はピット18穴で、斜面の傾斜方向に合わせ、同じレベルから掘られたまとまりが存在するようである。ピットのレベルは標高約9m付近に1列、標高約9.2m付近に1～2列である。各ピットの横方向に対応するものは見られず、建物跡などのまとまりは確認できなかった。この面から出土する遺物には古墳時代の須恵器から、12世紀代と考えられる白磁までを含んでおり、遺構の時期は不明である。

南側下面遺構 調査区南側の地山面直上では、溝1、浅い土坑状の落ち込み、段、ピット18穴を検出している。

S D - 2 (溝) は、調査区東壁から延び、約2mを検出して消失するもので、幅約90cm、深さ約10cmを測る。S D - 1 からは須恵器・土師器の他、白磁の小片や黒曜石の剝片が出土している。

浅い土坑状の落ち込みは、調査区東壁から北西に向かって約1.5m延び、一旦消失した後に約3m先で再び小土坑となって現れる。いずれも深さは無く、小さな段が連続するような形状になっており、古道であろうか。

段は調査区南壁から南北に延びるもので、約6m連続した後途絶えるが、同様の段は調査区北側でも検出しており、連続していたと考えられる。段の部分の高低差は約80cmあり、わずかに蛇行しながら南北に延びている。周囲には青灰色土など水成層と考えられる土層が多く見られ、また、前述のと

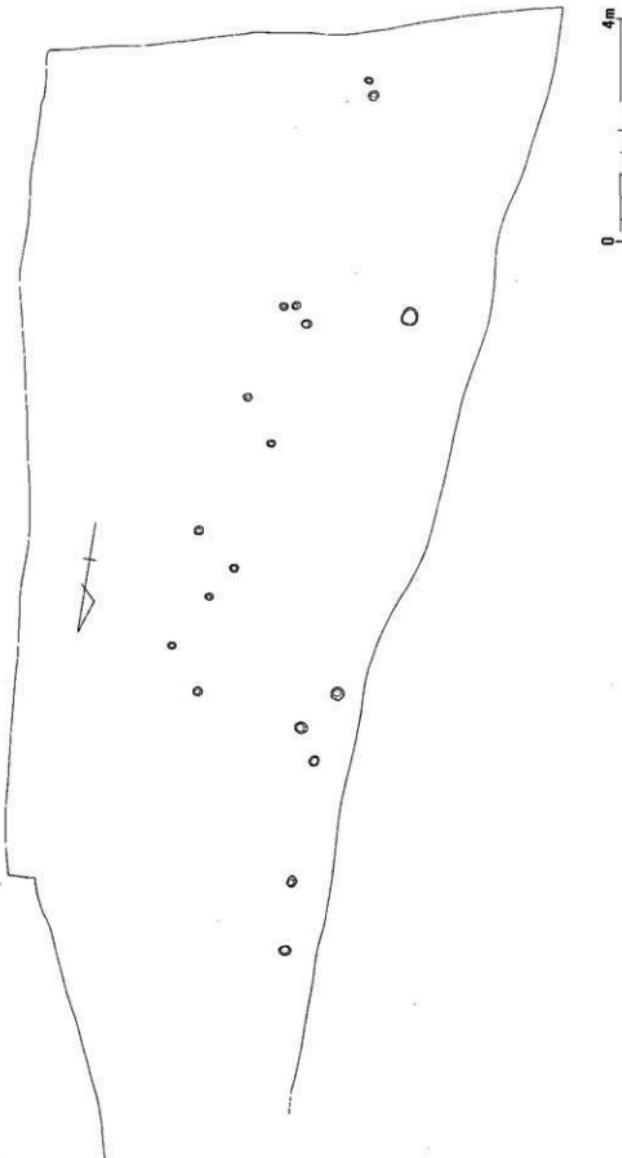


第97図 平成5年度調査区南壁土層断面図（1：80）

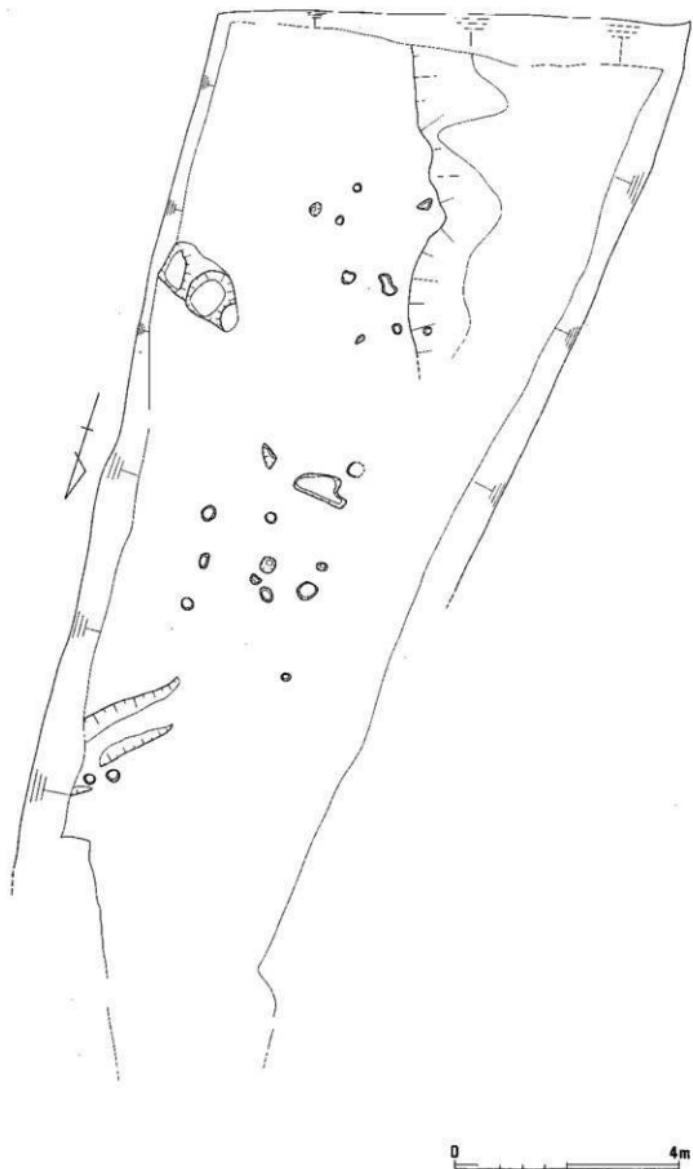
おりⅢ区が旧河川であったと推定されることから、自然の地形の川岸であったと思われる。

ピットは2カ所でまとまりが見られる。古道と推定した土坑状の落ち込みとSD-2の間に、11穴のピットが見られ、極端に浅い4穴を除くと、斜面下方向で2~3穴足りないものの、2間×2間程度の方形の区画になる。このピットに建物を建てたとすると、2.4m×1.6mの非常に小さいものになる。

もう1カ所のまとまりは、調査区南側の段の周囲に見られるもので、同様に2間×2間程度の区画は、考えられる。この場合は一片が約2.4m前後になる。



第98図 平成5年度調査区南側上面実測図 (1:80)



第99図 平成5年度調査区南側下面実測図 (1 : 80)

地山面を埋める青灰色土からは、須恵器・土師器の他107-6等の輸入陶磁器まで含んでいる。III・IV区との土層の連続性も確認できず、これらの遺構の時期は不明である。調査区北側の遺構面は、南側の下面遺構と連続すると考えられる

が、同様の理由により時期は不明である。

北側遺構 調査区北側からは溝8条、段、ピット34穴を検出した。地山面が不安定な上に、石が多く散乱しており、ピットは更に多く在ったものと考えられる。

溝は調査区中程に近い位置から検出しており、ほとんどの溝が東西方向である。いずれも深さ20cm以下の浅いもので、幅は、20~40cmを測る。

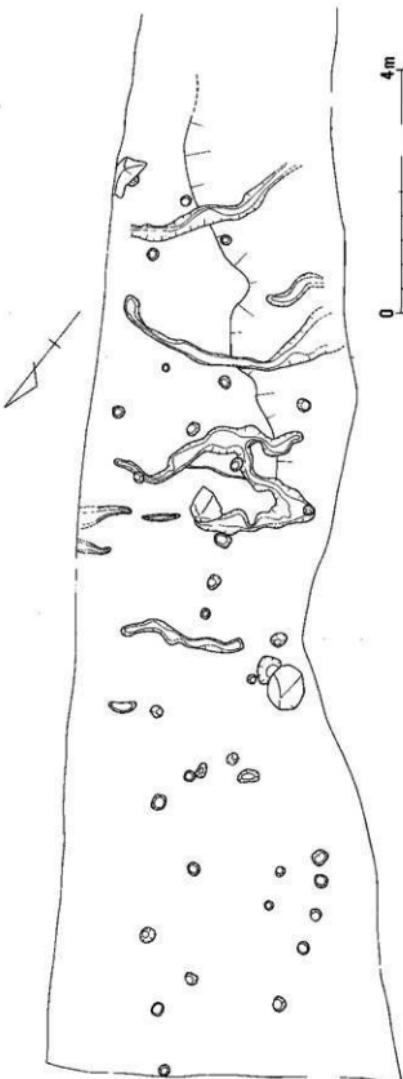
段は、前述のとおり、調査区南側から連続するものと思われる。やや蛇行しながら北西方向に向かっており、溝に阻まれて消失しているが、調査区西壁にはほぼ一致して続くものと思われる。段を越えて西へ続く溝が、段の下場までに消失している。

ピットは多数見られたが、南側上面と同様に等高線に平行するまとまりが見られるものの、横方向で対応するピットが確認できず、建物跡などのまとまりは確認できなかった。いずれも直徑30cm前後の円形を呈すものである。

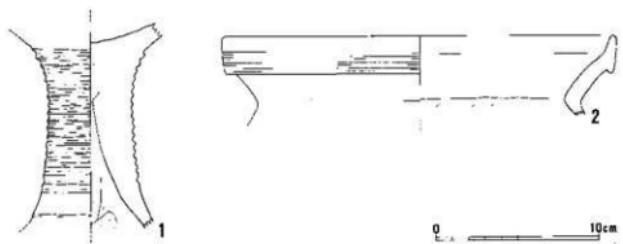
弥生土器 弥生土器は、遺物包含層である暗褐色土中から出土しており、第101図に2点を図示している。

101-1は、高壺の脚部である。脚部外面には幅広く凹線文が施される。内面は狭く確認しがたいが、円盤充填法によって作られているようである。内面下方には、斜め方向のヘラケズリが見られる。

101-2は、壺である。口縁部は上下に拡張され、ほぼ直立する。口縁部外面には凹線文が施されている。頸部は「く」字形に鋭く屈曲し、内面の頸部より下方



第100図 平成5年度調査区北側下面実測図（1:80）



第101図 古八幡付近遺跡平成5年度調査区出土弥生土器実測図（1：3）

るものである。非常に薄く作られている。

102-2は、胸部が大きく開く形状のものである。口縁部は緩く外反し、端部にわずかに面を持つ。外面の頸部以下は縦方向のナデを、口縁部の内面には、横方向のナデと指頭圧痕を残している。

102-3は、口縁部が厚く口縁端部下方に沈線状の溝を持つ。

102-3・4は、口径の小さい壺である。102-4は、頸部が厚く作られ、口縁端部に向けて急激に細くなる。102-5は、口縁部の外反が少ない。

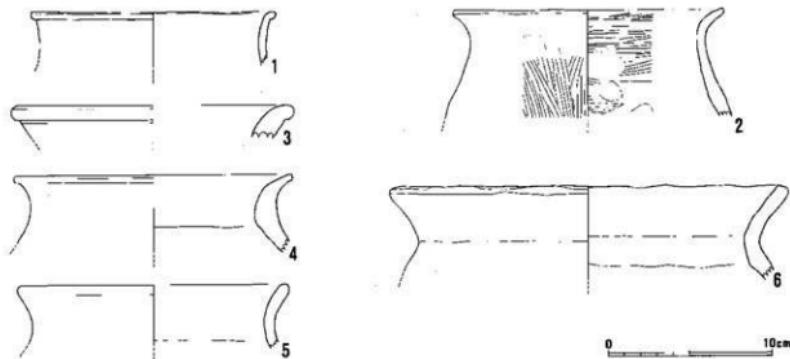
102-6は、やや口径の大きいものである。頸部は強く屈曲し、口縁端部は上面に向けて面を持つ。内面の頸部より下方はヘラケズリを行い、頸部内面にナデによる面を持つ。

103-1～6・7～15は壺と考えられるものである。103-1は、高台を持つ壺である。須恵器の壺と同じ器形で、須恵器の焼成不良品であろうか。

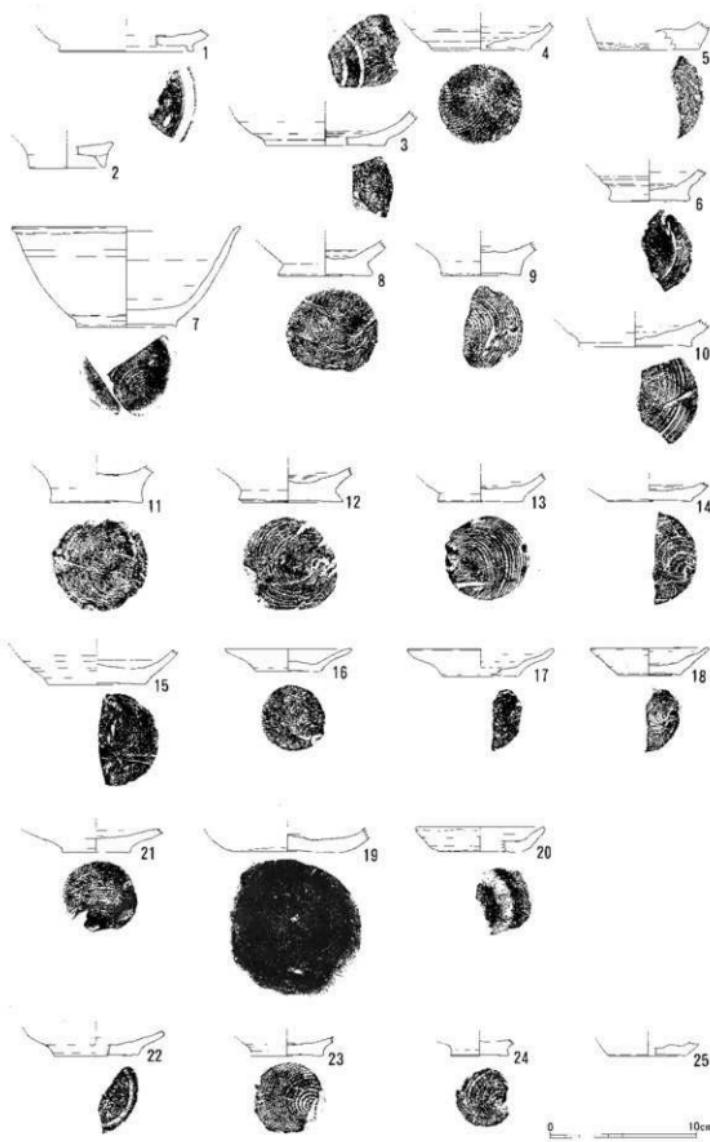
103-2は、断面三角形の高台を持つものである。底径が小さく、小型のものか。

103-3・4は、底部がわずかに張り出すものである。底部の切り離しは回転糸切りを使用し、体部外面と内面に強いナデを施す。

103-5は、器壁が厚く作られるものである。底部の切り離しは回転糸切りを使用し、他の部分は強



第102図 古八幡付近遺跡平成5年度調査区出土土器実測図（1）（1：3）



第103図 古八幡付近遺跡平成5年度調査区出土土師器実測図(2)(1:3)

くナデている。

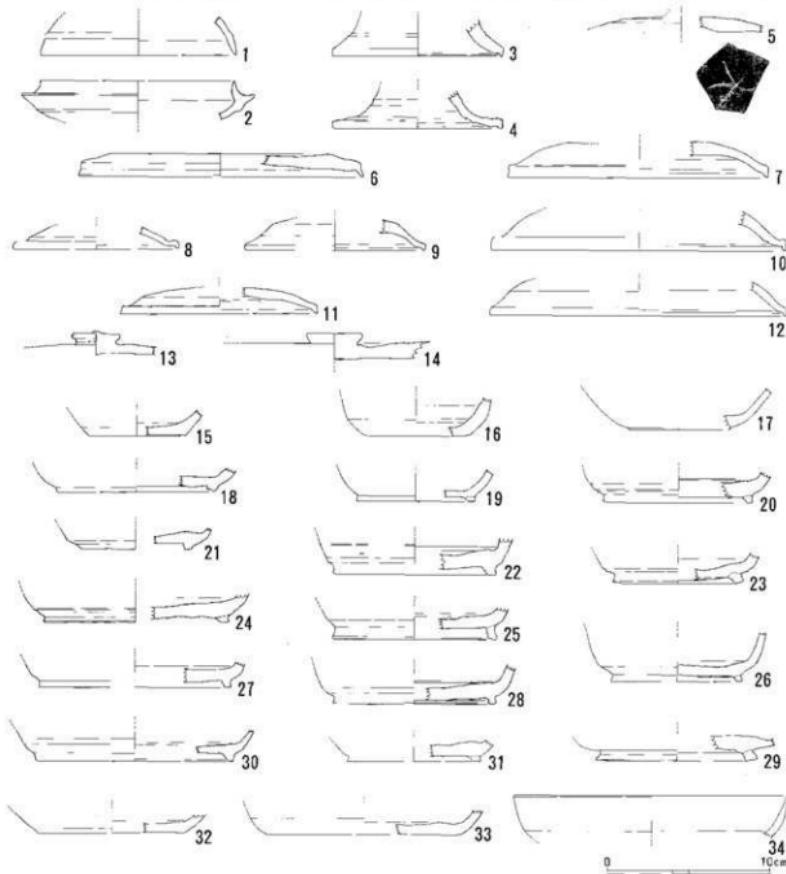
103-6・8・12は、底部が外側に強く張り出すものである。回転糸切りによって底部を切りはなし、体部との継ぎ目は強くくびれ、円盤高台状になっている。

103-9は、厚い底部を持つものである。体部との継ぎ目に括れはなく、体部は斜めに延びている。

103-7は須恵器の碗である。底部を回転糸切りで切り離した後、低く小さい高台を張り付けている。底部は比較的厚く、体部はわずかに内湾しながら延び、口縁端部を外側に屈曲させる。内外面とも横向方向のナデを施す。

103-16~25は、皿である。底部の切り離しは回転糸切りで、高台を持つものは無い。

103-16・17は、体部が屈曲するものである。底部から上側に延びる体部が、すぐに外反し、口縁部



第104図 古八幡付近遺跡平成5年度調査区出土須恵器実測図(1)(1:3)

に至るもので、103-17は更に口縁部下方でも屈曲し、口縁端部は上向きになる。内外面とも強い横方向のナデを施す。

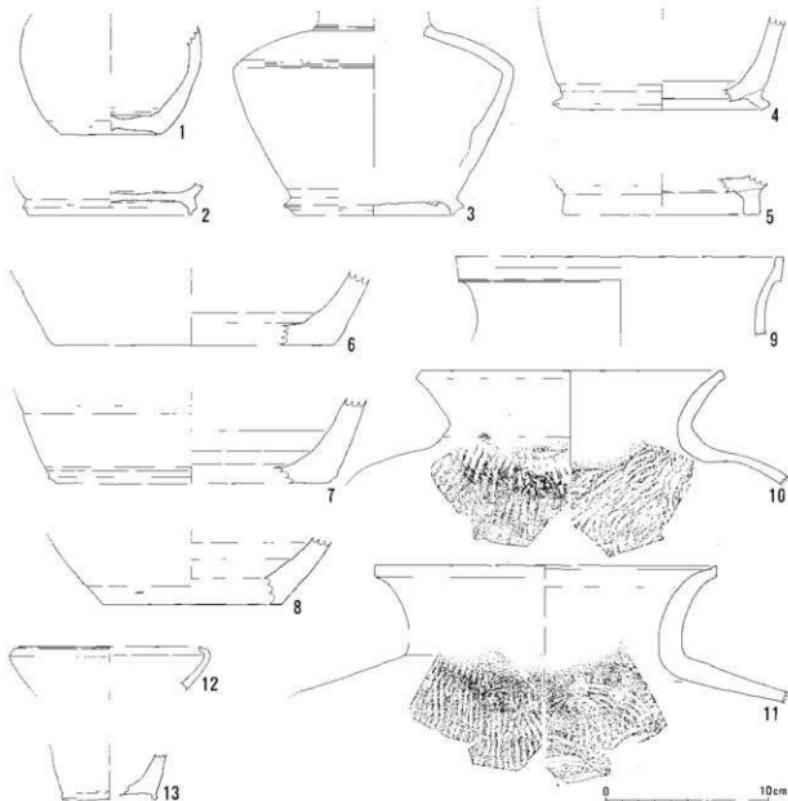
103-18は、直線的な体部を持つものである。底部近くでは器壁が厚く、口縁部を尖らせるように薄く延びる。

103-19は、体部に丸みを持つもので、底径が大きい。内面は横方向に強いナデを施し、見込み部中央に盛り上がりを持つ。

103-20は、体部の短いものである。器壁が厚く、底径に対する口径が比較的小さい。斜めに延びる体部は極端に短く、わずかに外反する。

103-24は、底部の高いものである。底径は比較的小さい。

須恵器 第104～106図には須恵器を図示している。104-1は、蓋である。口縁端部を尖らせ、肩部に強い稜を残す。104-2は、坏で、内傾する高いカエリを持つ。両者ともケズリは見えない。



第105図 古八幡付近遺跡平成5年度調査区出土須恵器実測図(2)(1:3)

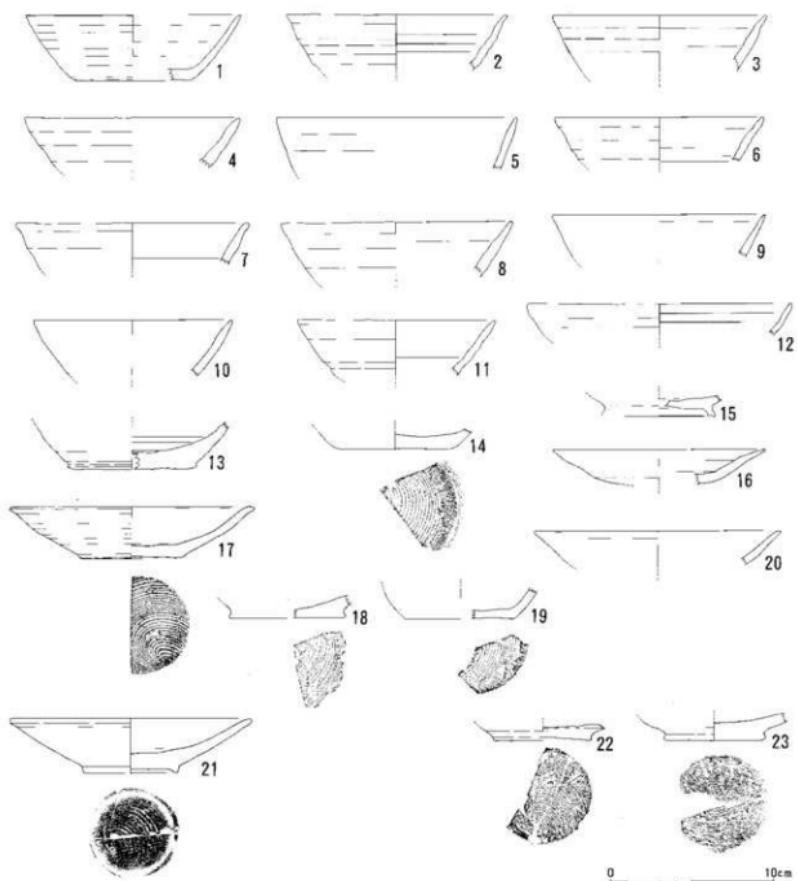
104-3・4は、高坏の脚部である。脚端部の外面側に面を持ち、端部は下方に垂下させる。

104-5は、蓋の小片で、つまみや端部の形状は不明であるが、内面にヘラ描きを施している。3本の直線を組み合わせたもので、「大」と読める。8世紀台のものであろうか。

104-6～14は、つまみの付く蓋である。口縁端部が垂下するもので、カエリは無い。104-8・9を除きボタン状つまみが付くものと思える。

104-15～17は、無高台の坏の内、底径の小さいものである。いずれも器壁が比較的厚く、体部は大きく内湾する。

104-18～31は、高台付きの坏である。底部の端に垂直に高台を付けるものが多い。確認できたもの



第106図 古八幡付近遺跡平成5年度調査区出土須恵器実測図(3)(1:3)

は全て回転ヘラ切りで底部を切り離している。

104-32は、壺と考えられるものである。底部の切り離しは回転糸切りを使用するようである。

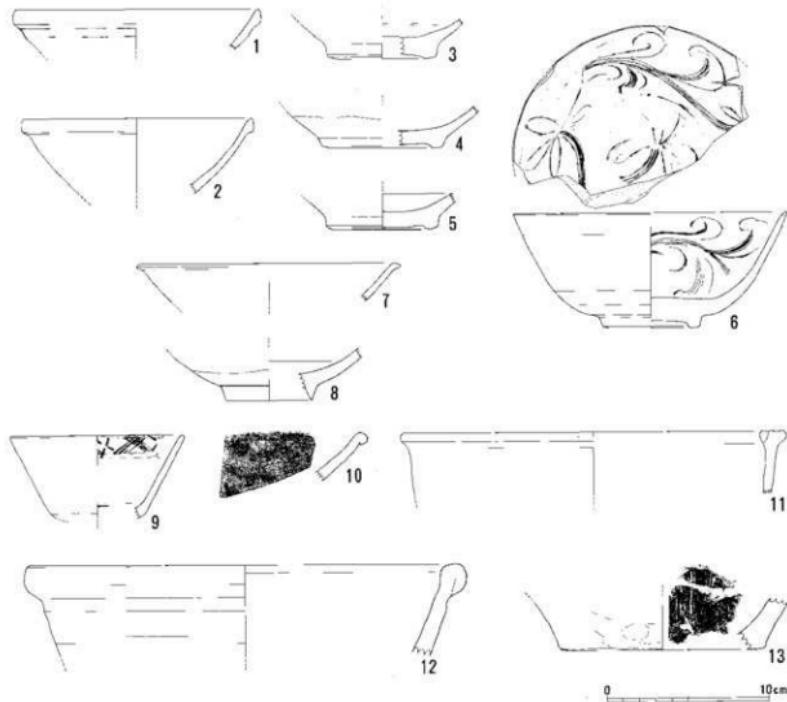
104-33・34は、底径の大きい皿である。全面をナデ調整し、104-33は、底部の切り離しに回転糸切りを使用するようである。

105-1～5は壺と考えられるものである。105-1は、高台の無い壺である。底部回転ヘラ切りによって切り離し、外面下端部にヘラケズリを施す。胴部は丸みを持ち、横方向の丁寧なナデによって成形する。長頸が付くものであろうか。105-2・3は、長頸壺である。外面に稜を持つ高台を斜めに付け、胴部は直線的に延び、肩は強く張る。肩部上面と頸部下端に浅い沈線を入れる。105-3は、底部に窓着が見られる。105-4・5は、太い高台を持つものである。104-4は、断面長方形を呈す太い高台が、斜めに取り付き、体部は直線的に上方へ延びる。104-5は、太く短い高台が直立するものである。

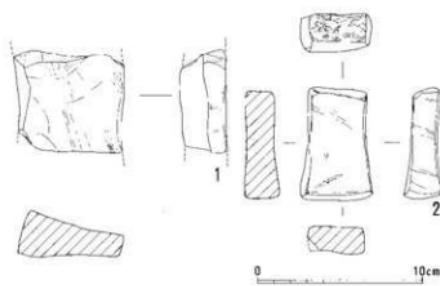
105-6～8は、高台の無い壺である。105-7は、平行タタキの後、外面を強くナデしている。

105-9～11は、壺の口縁部である。105-10の外面のタタキはやや幅の広いものを使用している。

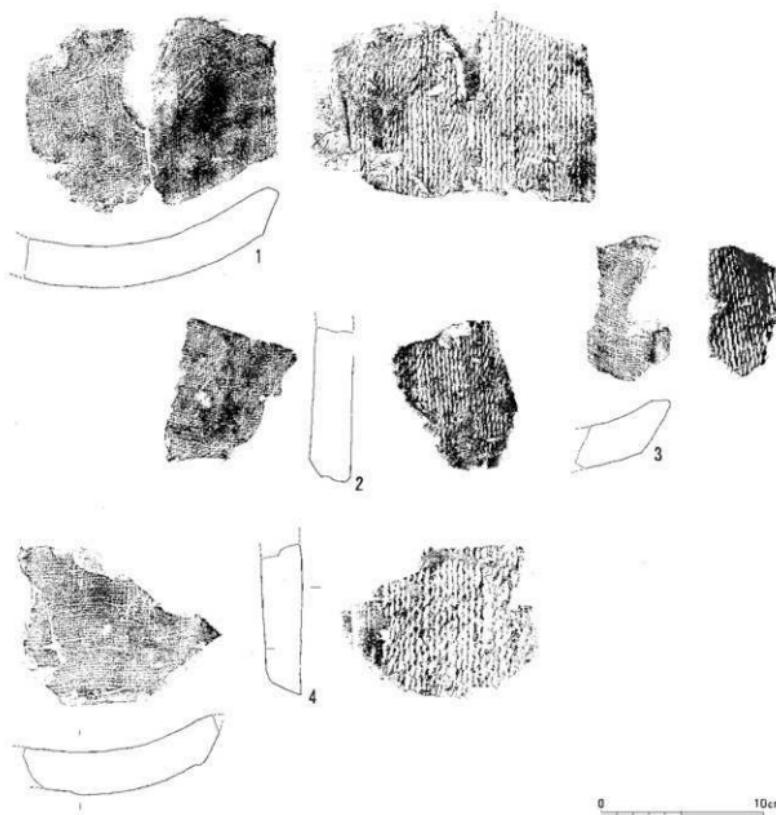
105-12は、鉢である。外傾して直線的に体部が延び、口縁部直下で強く内傾し屈曲するものである。口縁端部の上面には沈線状にくぼみが見られ、蓋を伴う可能性がある。



第107図 古八幡付近遺跡平成5年度調査区出土陶磁器実測図（1：3）



第108図 古八幡付近遺跡平成5年度調査区出土石器実測図 (1 : 3)



第109図 古八幡付近遺跡平成5年度調査区出土瓦実測図 (1 : 3)

105-13は、小型の壺と考えられる。器壁が非常に厚く、体部は直立する。底部の切り離しはヘラ切りと思われる、底面の端に小さい高台が取り付く。内外面ともナデ調整する。

第106図には須恵器壺・皿を図示している。106-1～121は、壺の口縁部を含む破片である。いずれも体部は直線的で、口縁部の外反も少ない。口縁部は尖らせるように細くなって、体部には、横方向のナデの痕跡を強く残している。

105-13は、わずかに底部が張り出すもので、壺と考えられる。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、円盤高台状にわずかに底部が突き出す。体部はわずかに内湾しながら上方へ延びる。

106-15は高台の付くものである。高台は外に張り出し、体部は斜めに立ち上がる。底部の切り離しは回転ヘラ切りと思われる。

106-17・21は、皿である。いずれも底部に回転糸切り痕を残し、体部はナデで仕上げる。106-17は、無高台で、口縁端部を外側へわずかに折り曲げているのに対し、106-21では、断面三角形を呈す非常に小さい高台を持ち、口縁端部は面を持つ。

106-18・22・23は、円盤高台状に底部が突き出すものである。106-18・23は、体部との接点が強くくびれる。106-22は、底部の器壁を非常に薄く作っている。

106-19は、壺と思われる。底部には回転糸切り痕を残し、体部は緩やかに内湾するようである。

陶磁器 平成5年度調査区からは白磁をはじめとする陶磁器類が比較的多く出土している。

107-1～5・7・8は白磁である。107-1・2は、口縁部外面に玉縁が付くもので、太宰府分類の白磁IV類碗にあたる。107-3～5は、低いケズリ出しの高台を持つものである。底面から高台部は、搔き取られ、体部の下方は釉がかかっていない。白磁IV類碗の底部であろう。107-7は、口縁端部が強く外反し、端部を尖らせるもので、白磁VII類碗にあたる。107-8は、その底部で、断面三角形の高い底部を削りだしている。

107-6は、龍泉窯系青磁のI類碗である。緑色を呈する釉が高台近くまでかけられ、内面には、片切り彫りで、優美な華文が描かれている。

107-9は、肥前系と考えられる染め付けの碗である。やや外傾する体部は直線的で、口縁端部は丸く納めている。口縁部内面に斜線を交差させた文様が描かれている。

107-10は、すり鉢である。口縁端部は外側に折り曲げ玉縁状に作る。暗赤褐色の釉がかけられる。

107-10は、素焼きの容器で、機種は不明である。口縁端部を内外に拡張し、上に面を持つ。

107-12・13は、すり鉢と考えられるものである。107-13は、底部の破片で、平成で高台は付かないものと思われ、体部下方には指頭圧痕が多く残る。内面には、6本程度の単位の工具をしようし、櫛目を入れる。107-12は、口縁部と体部の小片で、直立気味に延びる体部はわずかに内湾する。口縁部は外側に折り曲げ、玉縁を作る。両者とも胎土は淡褐色から黄褐色を呈し、釉を使用していない。

砥石 砥石は2点が出土しているが所属時期は不明である。

108-1は、両端を欠くものであるが、緑灰色の石材を使用し、少なくとも4面を使用する。108-2は、灰白色の気泡の多い石材を使用している。破断面は無く完形品で、全面を使用している。この内1面は打痕が多く見られ、叩き石としても転用している。

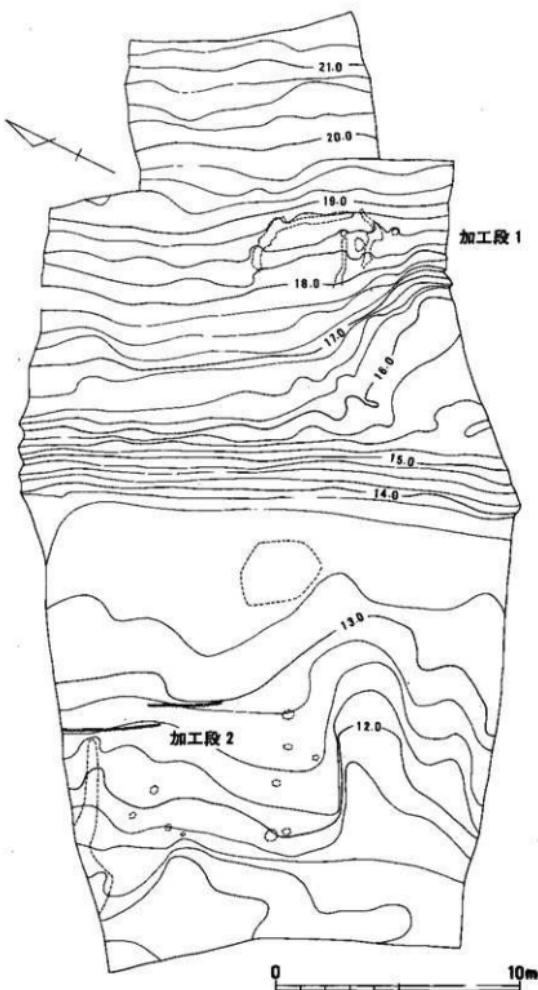
瓦 平成5年度調査区からは半瓦が少量出土している。丸瓦や軒瓦は見られず、周辺の調査区でも礎石建物は検出していない。第109図に図示した4点はいずれもほぼ同様のもので、凹面に布目压痕を、

凸面に縄目のタタキ痕を残す。側部は船直方向に切断され、凹面側で2面取りする。端部は、小片のため、狭・広端の区別が付かないが、凹面に向けてやや傾斜して切断され、凹面側から2面取りされる。灰白色から青灰色を呈し、還元炎焼成されている。凹面側に多少の凹凸は見られるが、弧深が浅く、側部が船直方向を向くことから一枚造り成形と考えられる。久本奥窓跡出土の第II類平瓦に似ており、8世紀後半台のものと考えられる。

- 註1 広江耕史 「一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書I」 島根県教育委員会 1995年以下、久本奥窓跡での年代観は全て上記報告書による。
- 註2 西尾克己・熱田貴保 「石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書」 島根県教育委員会 1992年 報告書では編年表を提示し、前述の年代観を示しているが、遺構に伴う遺物ではなく遺物に一括しては若干の疑問が残る。すなわち、ボタン状つまみを持つ蓋と輪状つまみを持つ蓋は体部のプロポーションが異なり、輪状つまみを持つものは、9世紀代まで下る可能性がある。
- 註3 註1と同じ。ただし、出雲地方での同軸糸切りの導入は非常に早く、石見地方でも出雲地方と同様の形態の輪状つまみを持つ蓋が出土することから、例外的に8世紀代の同軸糸切りが存在する可能性があると思われる。
- 註4 「タチヨウ遺跡発掘調査報告書IV」 島根県教育委員会 1993年
- 註5 民俗文化財に詳しい島根県古代文化研究センター浅沼季より指導を受けた。
- 註6 秋山浩三 「『大足』の再検討」「考古学研究 第40巻 第3号」 考古学研究会 1993年
- 註7 奈良国立文化財研究所光谷卓実氏に測定を依頼し、上記の結果を得た。
- 註8 78-1は、山口大学中村友博先生に実見していただき、向者の可能性と欠点について説明を受けた。その後、他の木製品の検討から、機織具の方向で考えていたが、岡山理科大学龜田修一先生より「武器形木製品では」と言う指摘を受け、再び迷い、上述のとおりとした。現在、武器形木製品の方向で検討している。
- 註9 註7と同じ。
- 註10 註1と同じ

⑦ IV区の調査

IV区は、平成5年度調査区の東側、標高14~22mの西向き斜面に位置し、東西に長い調査区を設定した。標高22mの調査区最高所から西へ、急斜面が一気にかけ下っており、その西側は、宅地となつておらず、標高14mの位置は完全に平坦面となっていた。斜面の内標高16mより下方は更に急斜面となつておらず、宅地造成時にこの部分を削り、その土砂で、西側を埋め、平坦面を造成したものと思われる。



第110図 古八幡付近遺跡IV区地形測量図（1:200）

西側の平成5年度調査区の表七面とIV区宅地部分の高低差は3m以上になる。

遺構の概要 斜面の部分でも埋土が非常に厚く、調査区最高所でも約50cmの厚さが見られた。表土（褐色土）は非常に薄く、厚さ2~10cm程しか見られないが、その下層に黒色土の堆積が見られ、黒色土中には遺物を含んでいる。この黒色土は、一見炭化物層かと思えるほど黒く、少量の石を含んでいる。黒色土の下層は、斜面上方では地山となるが、斜面下方から平坦面の周辺では水成層と思われる青灰色粘質土層が多く見られる。この土層にはあまり遺物を含んでいない。地山は橙褐色土で、非常に多くの礫を含んでいる。この礫は、ほとんどの埋土中に見られた。

東側は急斜面のため、遺構は無いものと

考えており、調査範囲を当初、標高20m付近までとした。しかし、この付近でも表土中から遺物の出土が見られたほか、標高19m付近でテラス状の加工段が見られたことから、標高22m付近までを拡張した。拡張した範囲内には遺構・遺物は見られなかったことから、更に上方の標高約30mの尾根上に遺構が存在する可能性がある。

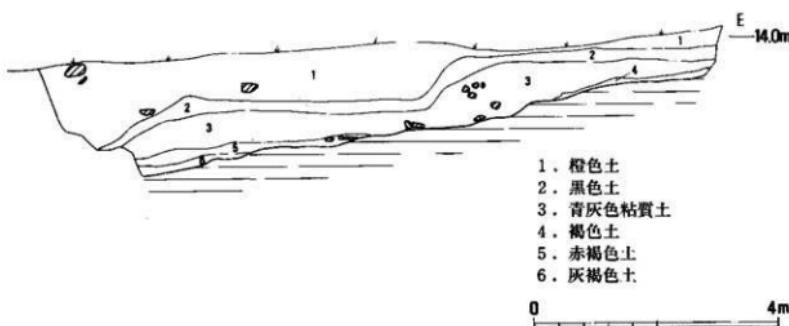
宅地による造成部分は、西端では約2mも嵩上げしており、地山面は緩やかに傾斜している。地山面の傾斜は、調査区西側の平成5年度調査区に連続するものと思われる。地山面の標高13mより上方は、ほぼ水平に削平された形跡があり、標高16mまでの間で削平が行われ、この間は元々斜面だったと考えられる。この削平された平坦面上には塩化ビニール製のパイプや下水の溜升(第110図点線内)等が掘り込まれており、この造成が近現代になって行われたことが解る。

遺物包含層である黒色土より下層の青灰色粘質土中には、2条に亘って石垣の構築が見られた。石垣は、いずれも斜面に平行して南北方向に延びるもので、調査区北端から約4m続くものと、その少し東側に約3m続くものがある。いずれも、人頭大の割石を使用し、西面で面を合わせ、一部では2段に積まれておらず、高さは50cm程度である。石垣の前後で土堆積状況に大きな変化は見られないが、青灰色粘質土は、石垣の東側に厚く、石垣を越えて西側では非常に薄くなっている。石垣付近から遺物の出土は見られなかったが、検出した石垣は、付近の水田に見られる石垣とよく似ており、近代のものであろう。

石垣の周囲は非常に湧水が多く、西側の石垣の真下から湧水地点が検出された。この湧水地点から、西へは水が流れ出ており、細い谷状になった水路を形成している。同様の小さな湧水点は点々と見られる。

青灰色粘質土の下層は、赤褐色土と礫を含んだ灰褐色土の薄い堆積が見られ、それより下層は地山面である。地山面は緩やかに傾斜しているが、その傾斜は一定ではなく、標高12m付近から下方は傾斜が急になっている。前述のとおり、標高13mより上方は、元々山裾であったと考えられることから、標高12~13mの間が最も傾斜が緩い。この傾斜の緩くなった部分は周辺の状況から加工段と考えられ、加工段2と呼んだ。加工段2からは、ピット10穴を検出している。

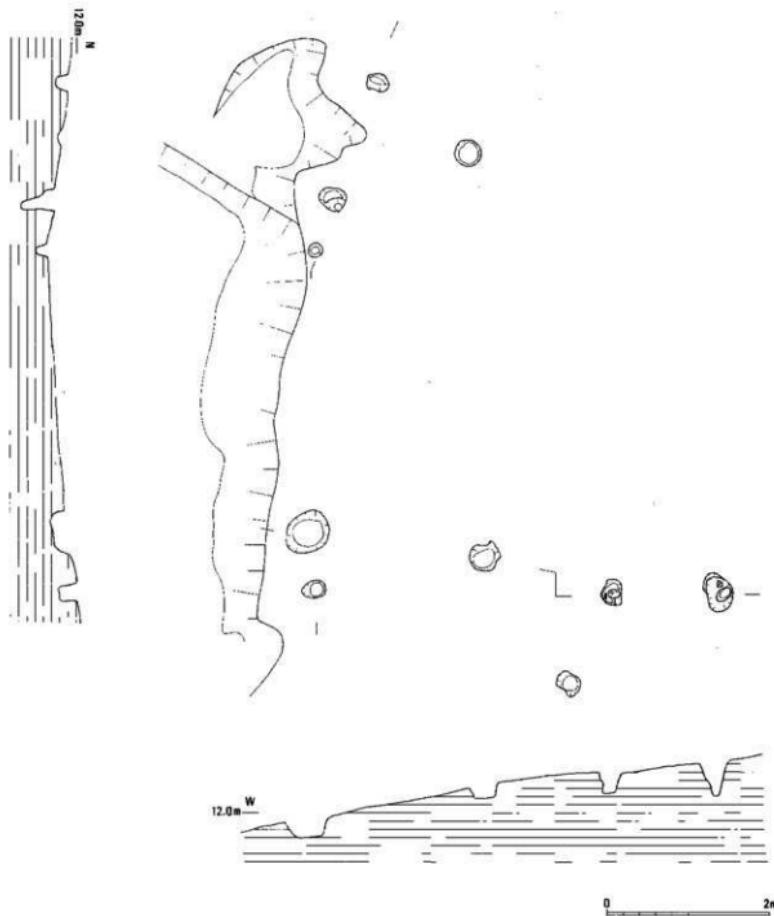
加工段2より西側は大きく段状に落ち込んでおり、その高低差は約50cmである。加工段2のピット



第111図 古八幡付近遺跡IV区北壁土層断面図（1:80）

は、その上面にあり、東西方向に4本、南北方向に3本のまとまりが見られる。南北方向のまとまりは、段の際に平行しており、直径20~40cm、深さ15~50cmである。東に約2m離れて別のピットが1穴あるが、対応しない。3本の間隔は、北から約2.1m、0.9mとなっているが、北側の柱間の中央には段上面崩れたと思われる落ち込みが入っており、ここにもピットが在った可能性がある。ここにピットを想定すると、柱間約90cmの棚列の存在が推定される。ピット列の間の落ち込みは湧水点の一つで、こうした湧水が段を後退させているものと思われる。

東西方向のピットのまとまりは、いずれも直径50~80cmを測る大きなもので、特に東側3穴は、標



第112図 古八幡付近遺跡IV区下方住居跡実測図 (1 : 80)

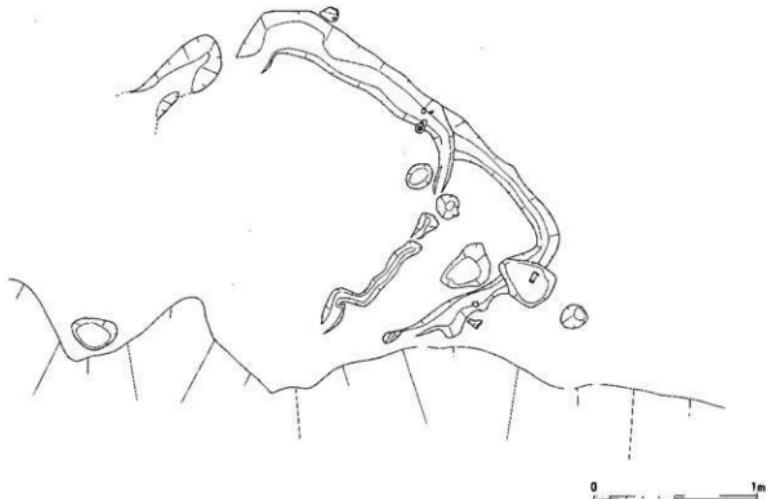
高約12.2mに深さをそろえているように見える。南北方向のピットのまとまりと比べ、深く、しっかりしたものに感じられた。これより北側にはピットは見られないが、南側に小さなピット2穴が見られる。ピット列の南側には地山確認用のトレーナーを開けてしまい、対応するピットは検出できなかつたが、掘建柱建物跡の存在が考えられる。最も西側のピット近くから青磁の小片(115-4)が出土している。

斜面側は中程まで遺物包含層である黒色土の堆積が見られたが、上方は、黒色土が徐々に薄くなり、礫を含んだ褐色土に変わった部分が多かった。

斜面での黒色土・褐色土を剥がすと、礫を多く含んだ橙褐色土の地山面が現れるが、標高18~19m付近で、地山面にテラス状の平坦面(加工段1)が検出された。平坦面は調査区中央が最も広く、南側に向けて通路状に狭くなりながら続いているが、北へ向けては見られない。南側は、地表面観察でも、調査区外にテラスが続いているのが解り、徐々に標高を下げながら南に延びている。加工段1の幅は、調査区南端で約60cm、調査区中央の最も広い場所で約4.2mを測り、検出した長さは、約8mであった。

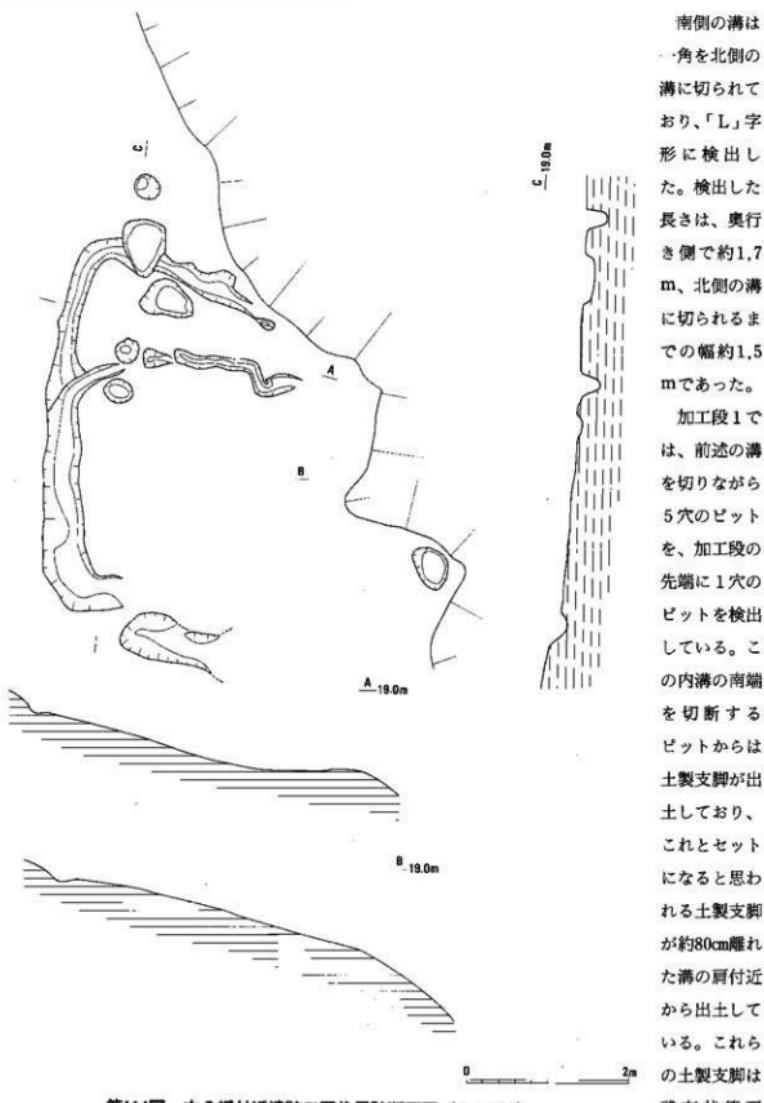
加工段1の上面には人頭大以上の大きな石が、多数散乱していた。それらを除去し、埋土を掘削すると、数条の溝が検出されている。加工段1は、完全な水平面ではなく、検出面ではわずかに西に傾斜しており、上面は流失しているものと考えられる。そのため、溝や、溝の一部と考えられる壁面は、途切れながら見られ、途切れた部分を復元すると、切り合ひながら、南北2本の溝になるものと思われる。

北側の溝は、斜面を背にして西側に開く「コ」字形を呈し、幅約3m、奥行き約3mのほぼ正方形の区画になる。斜面を背にした南北方向の部分は、高低差も大きく、上端には巨大な岩が露出してい



第113図 古八幡付近遺跡IV区住居跡実測図 (1:50)

た。岩は、完全に地山の中に含まれており、地滑りによって迫り出してきたものと思われる。岩の直下から須恵器壺（115-2）が出土している。またこの溝の中からは須恵器蓋（115-3）が出土しており、この溝は8世紀後半のものと考えられる。



第114図 古八幡付近遺跡IV区住居跡断面図（1:100）

く、図示できなかった。加工段1で検出したピットは、位置関係や形状が様々で、建物跡になるようなまとまりは確認していないが、加工段1からは前述のとおり多くの土器を検出しており、小さな掘建柱建物が在ったものと考えられる。加工段1の先端は直線的ではなく、複雑に入り組んでおり、加工段1の掘削土を全面に盛って平坦面を造成していたものと思われる。

加工段1・2出土遺物 加工段1からは、115-1～3の須恵器の他、土師器小片少量と土製支脚2点が出土しているが、土師器類は図示できなかった。

115-1は、須恵器壺の口縁部付近の破片である。加工段1の北側の溝から出土している。体部外面には縦方向の平行タタキを、体部内面には強い同心円文の押さえ具の痕跡を残している。頭部は強く屈曲し、口縁部は大きく外傾して延びている。口縁端部は丸く納めるが、下方に小さな稜を持つ。

115-2は、壺の底部である。斜めに張り出す断面長方形の高台を持ち、底面は丸く作られる。外面の高台の直上にヘラケズリの痕跡を残し、体部の大半は、横方向のナデで仕上げる。内面は荒くナデしており、その痕跡を強く残している。底面までヘラの痕跡を残し切り離しはヘラ切りと考えられる。

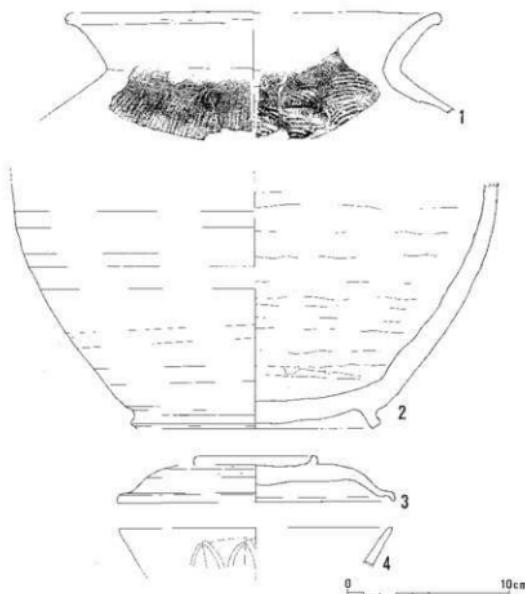
115-3は蓋である。絶の広い輪状つまみを持ち、体部は「S」字に屈曲する。端部は下方に垂下して外面側に面を持ち、カエリは持たない。内外面ともナデ調整するが、輪状つまみの周囲にわずかにケズリの痕跡を残している。久本奥窯跡のVI期のものに似るが、器高が低い、口縁部の垂下が長い等相違点もあり、VI期の直前の8世紀中頃のものと考えられる。

115-4は加工段2のピットの近くから出土したもので、龍泉窯系青磁碗である。内面は無文で、外面に片切り彫りによる鎬を持つ連弁を彫り込んでいる。太宰府分類の龍泉窯系青磁碗I-5類と考えられ、13世紀初頭から前半のものと思われる。

上記の遺物より、加工段1内の内、北側の溝で囲まれた一角は、8世紀中頃と考えられ、それに切られた南側の一角もその直前のものであろう。また、加工段2のピット群は13世紀前半のものである可能性がある。

弥生土器・土師器・土製品

116-1は、弥生土器の壺と思われるものである。全面磨滅しており、調整は不明である。116-2は、弥生土器の底部と考えられるも

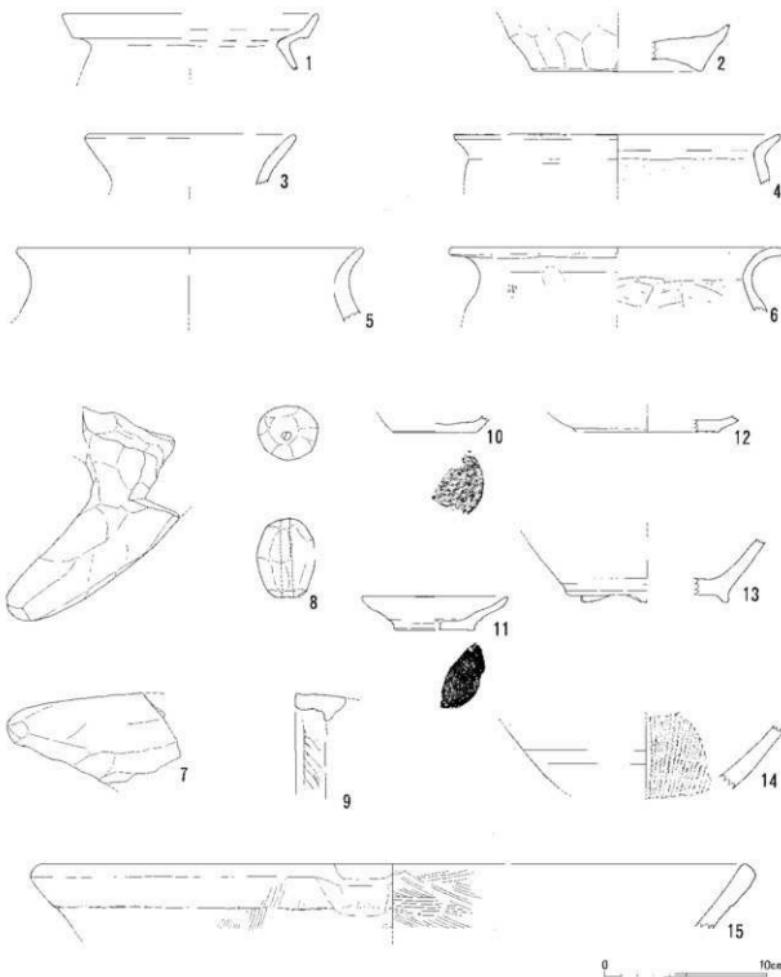


第115図 古八幡付近遺跡IV区建物跡出土遺物実測図（1：3）

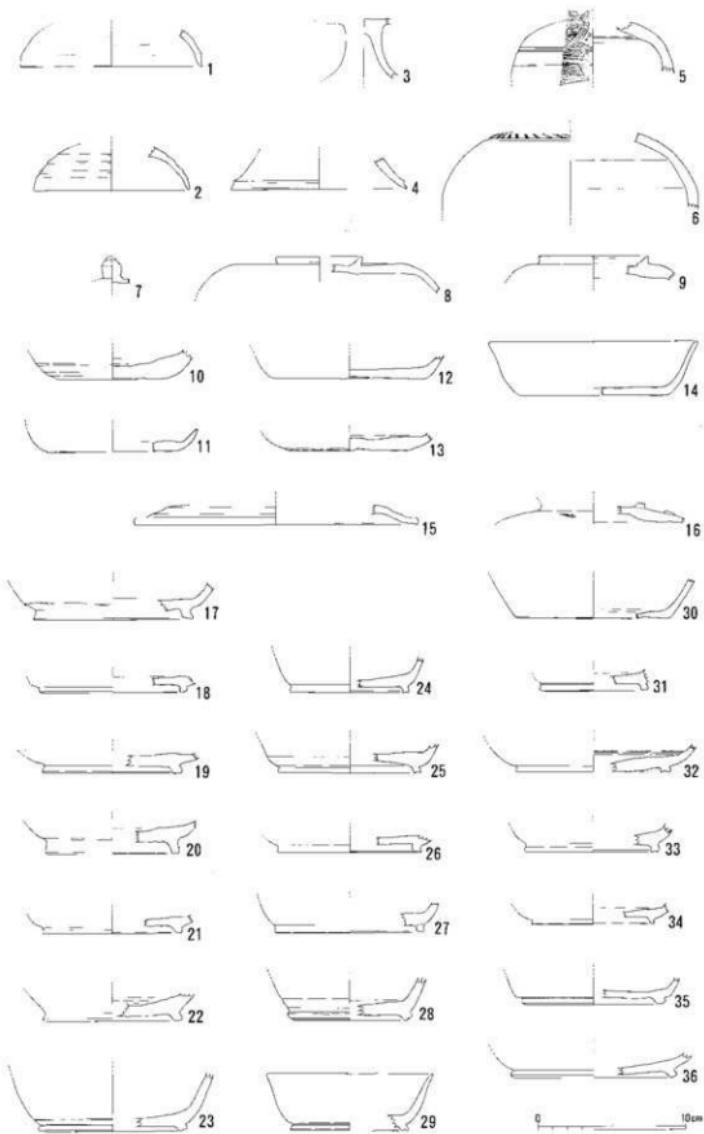
のである。底部は高台状になっており、外面には、強い指押さえが点々と見られる。

116-3～6は土師器の甕である。116-3は、小型のもので、頸部から口縁部は比較的長く、口縁部はわずかに外湾する。116-4は頸部が強く屈曲するものである。116-5は、頸部から口縁部が緩やかに屈曲する。116-5は、比較的薄く作られているもので、頸部から口縁部は大きく外湾する。頸部にはわずかに指頭圧痕が見られる他、頸部以下の外面にわずかにハケメが見える。

116-7は土製支脚である。前方の2本の突起の内の左側の破片で、突起は鋭く長い。各面ともナデ



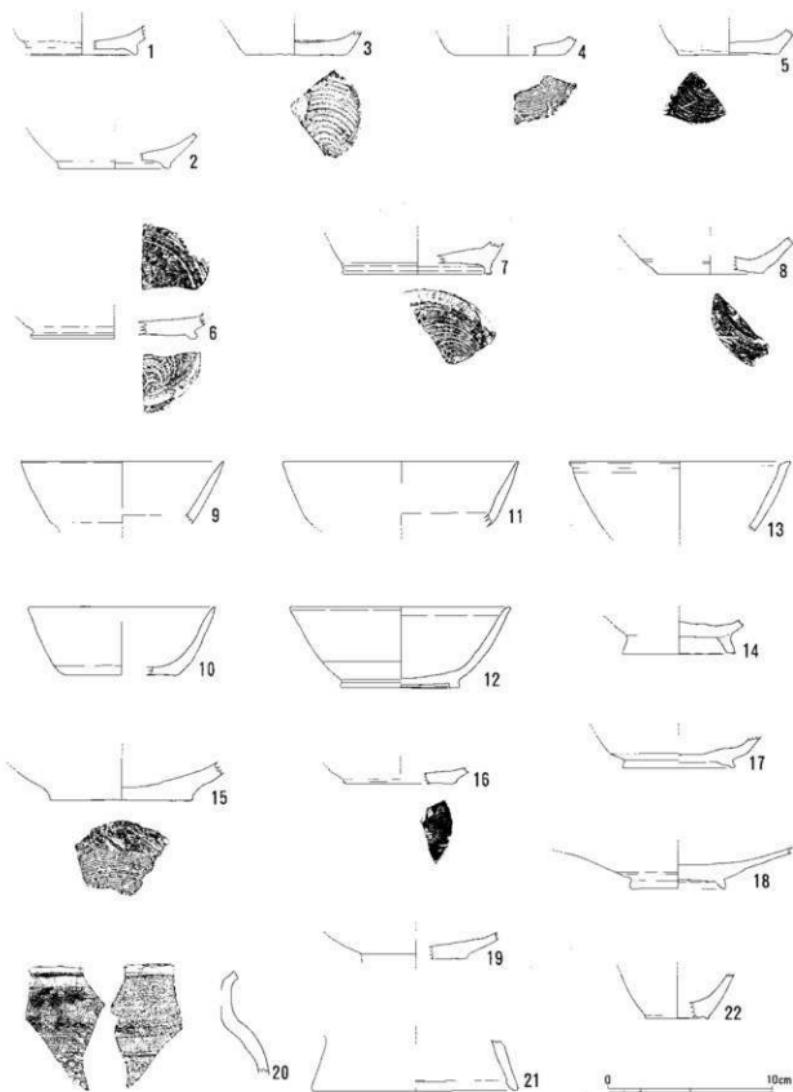
第116図 古八幡付近遺跡IV区出土弥生土器・土師器・土製品実測図（1：3）



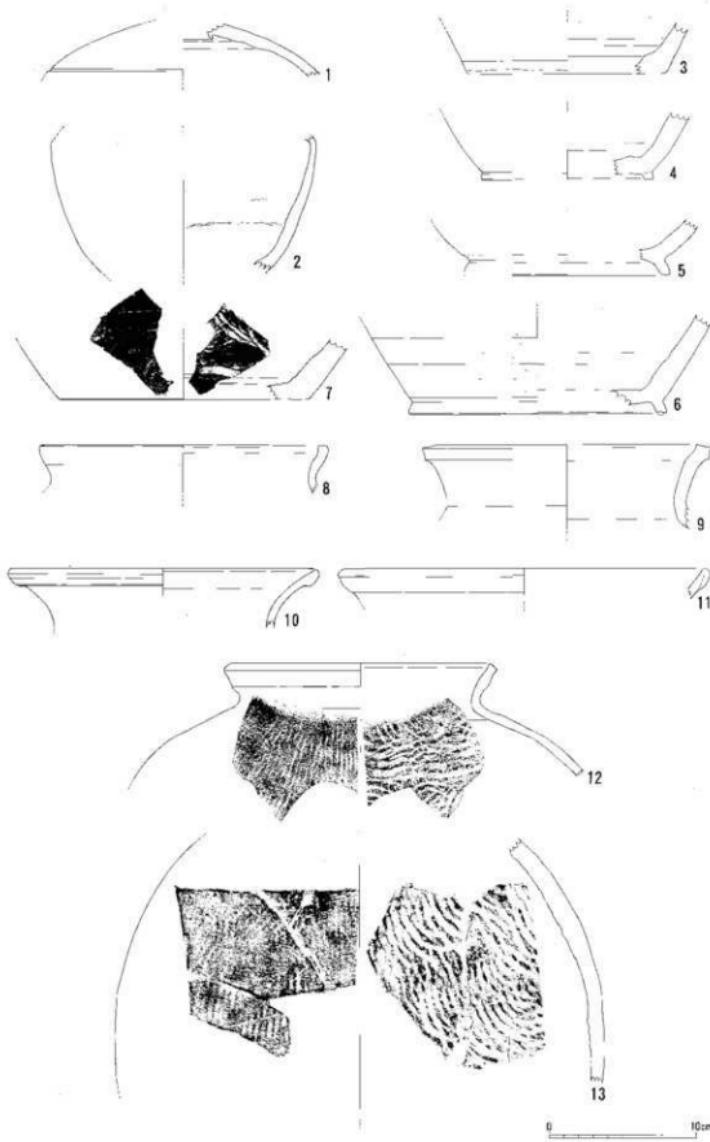
第117図 古八幡付近遺跡IV区出土須恵器実測図（1）（1：3）

で仕上げられている。

116-8は土錘である。



第118図 古八幡付近遺跡IV区出土須恵器実測図（2）（1：3）



第119図 古八幡付近遺跡IV区出土須恵器実測図（3）（1：3）

116-9は、軒丸瓦である。瓦当面が剥離した痕跡があり、瓦当部外区内縁以内の範を使用し、外区外縁を別造りで張り合わせている。外区外縁は細く、高い平縁である。こうした高い平縁を持つ古代の瓦は右見地方では知られていない。

116-10～12は、土師器の皿である。116-10は、底部が平底で、器高に対し、底径の広いものであろう。116-11は、円盤高台状に底部が突き出すもので、体部は直線的に延びるが口縁端部がわずかに上向きに屈曲するものである。両者とも回転糸切り痕を残している。116-12は、径の大きな皿で、底部に小さなアクセントがあるが、回転糸切りによるものであろう。磨滅が著しく調整は不明である。

116-13は、土師器の椀である。底部の切り離しは回転糸切りと思われ、底部と体部の境が強く屈曲し、体部が直線的に延びるものであるが、高台が特殊なものになっている。一周する高台はなく、水滴状に垂れ下がるような足を3～4本持つようである。

116-14はすり鉢である。酸化炎焼成され、無釉である。内面には櫛目が密に施される。

116-15は、片口鉢である。黒灰色を呈し、瓦質に焼成される。口縁部は外面に折り返したように肥厚しており、端部には面を持つ。内面は、横方向を中心としたハケメを施し、外面にも縦方向のハケメをわずかに残している。

須恵器 第117～119図は須恵器である。117-1・2は、カエリのない蓋である。内外面ともナデである。

117-3・4は、高坏の脚部である。117-3は、小型のもので、内外面ともナデ調整する。117-4は、脚端部の破片で、端部外面側に面を持っている。

117-5・6は、廉であろうか。117-5は、外面肩部にヘラによる文様を施している。櫛による斜行刺突文が見られる。

117-7は擬宝珠状つまみの破片である。117-8・9は、輪状つまみを持つ蓋である。両者とも断面三角形の小さなつまみを持つ。

117-10～14は、無高台の坏である。底部の切り離しは回転ヘラ切りと考えられる。体部はわずかに外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁部直下でわずかに外湾する。117-20も無高台の坏であるが、器壁が薄く器高の高いものである。

117-15・16は蓋である。117-15は、口縁端部の垂下がほとんど無くなるもので、端部外面にわずかに面を持つのみである。9世紀台のものと思われる。117-16は、輪状つまみを持つ蓋の小片であるが、肩部に窓着の痕跡がある。

117-17～36は、高台の付く坏である。確認できたものは全て回転ヘラ切りで、ヘラ切り痕を再調整するものが多い。高台はいずれも下面にアクセントを持つもので、やや斜め方向に取り付く。

118-1・2は、皿であろうか。底径が小さく、断面三角形を呈す低い高台を持つ。

118-3～5・8は、無高台の坏であるが、底部に回転糸切り痕を残す。

118-6・7は、高台付きの坏の内、底部に回転糸切り痕を残すものである。高台はやや低くなり、体部との境目に付けられる。

118-12は底径が広い坏であるが、器高が高くなり、ほとんど椀形である。高台は太くしっかりしているが、高さは低い。

118-13は椀の口縁部と考えられるものである。口縁部近くの内外にアクセントがあり、口縁端部は

外反する。器壁は比較的厚い。

118-15～19は、皿である。回転糸切り痕を残し無高台のものと低い高台を持つものがある。118-17を除き体部は大きく外反し、直線的になる。

118-20は、壺である。口縁部を強く外反させ、端部に面を持つ。頸部は強くナデられており、肩部に櫛状工具による刺突がある。118-21は、口縁端部内面にカエリがあるために脚と考えたが、壺の口縁部の可能性もある。内外面とも横方向のナデで仕上げる。118-22は、小型の壺のようなものであろうか。断面三角形の小さな高台を持ち、体部は内湾気味に立ち上がるが、底径が非常に小さい。

第119図には、壺・壺を図示している。119-1・2は、長頸壺と考えられるものである。119-1には、頸部の接合痕が残っている。

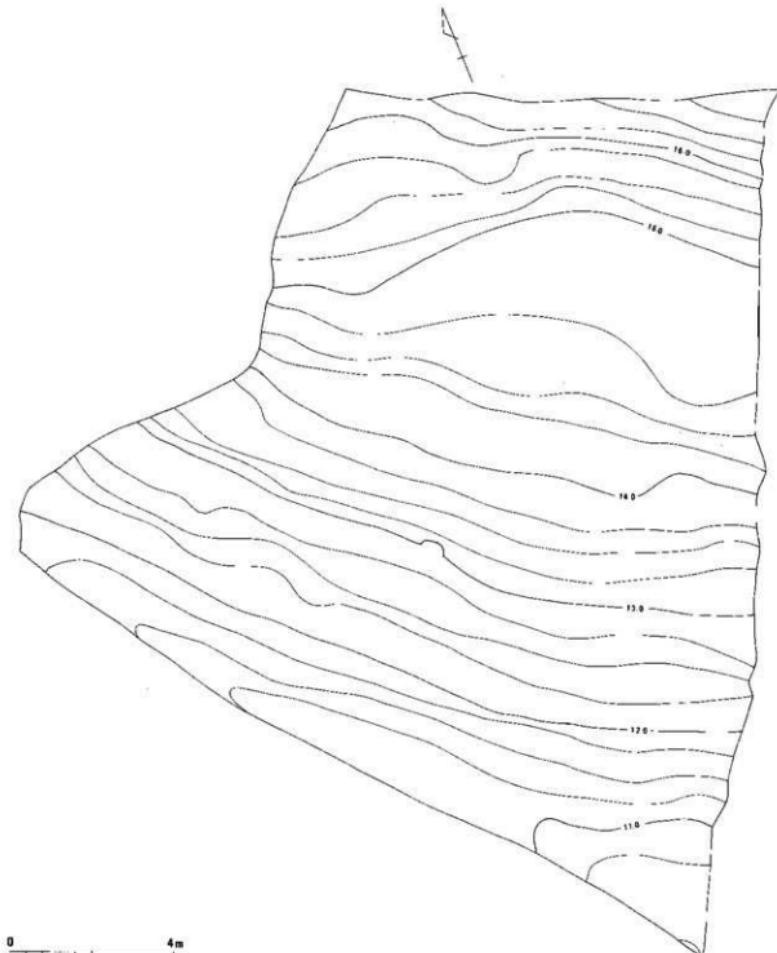
119-7は壺の底部と考えられるものである。底部は平底で、高台を持たない。内面には、同心円文の押さえ具の痕跡を残すが、外面はケズリの後ナデている。119-6は、壺の底部である。比較的細く、高い高台を斜めに付け、外面にはケズリの痕跡を残している。

119-19は、壺の口縁部と考えられる。断面では、口縁端部を外側に折り返し、玉縁状に作っている。119-10も同様のものであろうか。

⑧ V区の調査

V区は、IV区の北側で、標高13~17mの斜面である。IV区に見られた宅地による平坦面はここまで広がっておらず、西側の水路まで斜面が続いている。水路の標高に等しいことから調査区西側ではかなりの造成土が在る事が予想された。

遺構の概要 V区では、表土・耕作土部分は非常に薄く、特に調査区西側ではほとんど見られないほどであった。代わって、礫を含んだ橙色土が調査区全体で非常に厚く見られた。この橙色土は近年の



第120図 古八幡付近遺跡V区地形測量図 (1 : 120)

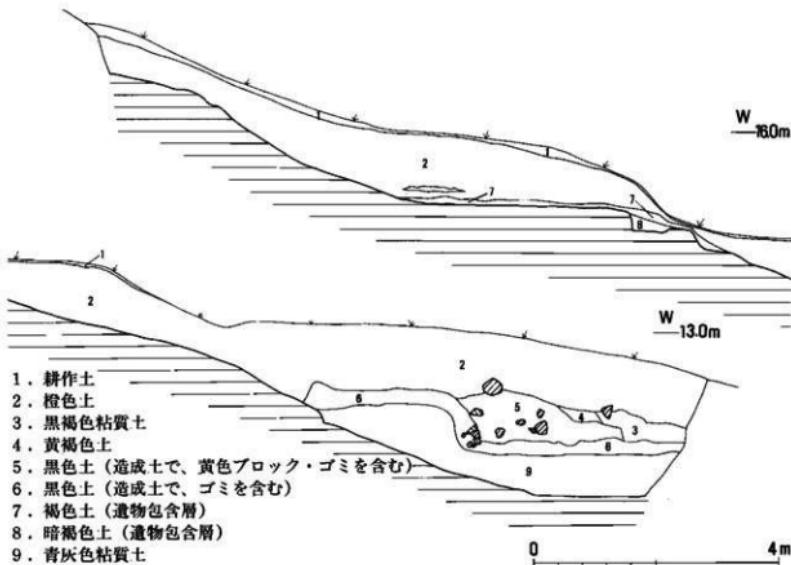
造成によるものと考えられ、その下層にある黒色土中には、ガラスなどのゴミを非常に多く含んでいた。この黒色土は、IV区の遺物包含層とは異なるものである。橙色土の下層に褐色土の薄い堆積が見られる場所があり、この褐色土中には遺物を含んでいる。この褐色土を剥がすと遺構面である地山面（橙褐色土）が現れる。調査区西側は大きく落ち込んでおり、水成層と考えられる青灰色粘質土層の厚い堆積が見られた。青灰色粘質土には、遺物はほとんど含んでいない。

地山面は、標高15m以上は急斜面となっているが、標高14~15m付近に、ほぼ水平になった加工段（加工段3）が見られる。また、それより下方には、古道が何度も付け替えられているようで、横向向に延びる小さな起伏が何条も見られた。そのうち最も幅広いものが標高12~13m付近に位置しており、加工段4と呼んだ。

加工段4は、等高線に平行して南北に延びる古道と考えられるもので、幅約60cm、検出長約17mである。斜面上方を削り落として段に加工したもので、斜面下方に拡張の痕跡は見られない。この段の中程に直径約50cmの土坑を検出した。斜面に斜めに掘り込んだ深さ20cm程の土坑で、内面は赤く焼けた痕跡がある。埋土中から遺物は検出されなかったが、小櫻窯と考えられる。

加工段3は、地山面を大規模にほぼ水平に掘り込まれた平坦面で、幅約3.6m、長さ8.5mに亘って検出し、更に南に延びるようである。遺物包含層である褐色土は、この平坦面上を中心に検出しており、特に加工段先端での遺物検出量が多かった。

褐色土を取り去ると完全な平坦面が検出され、ピット状の落ち込みが点々と見られたが、いずれも不定形なもので、柱穴とは考えにくい。加工段3の先端は凹凸があり、囁んだ所には、その下方にま

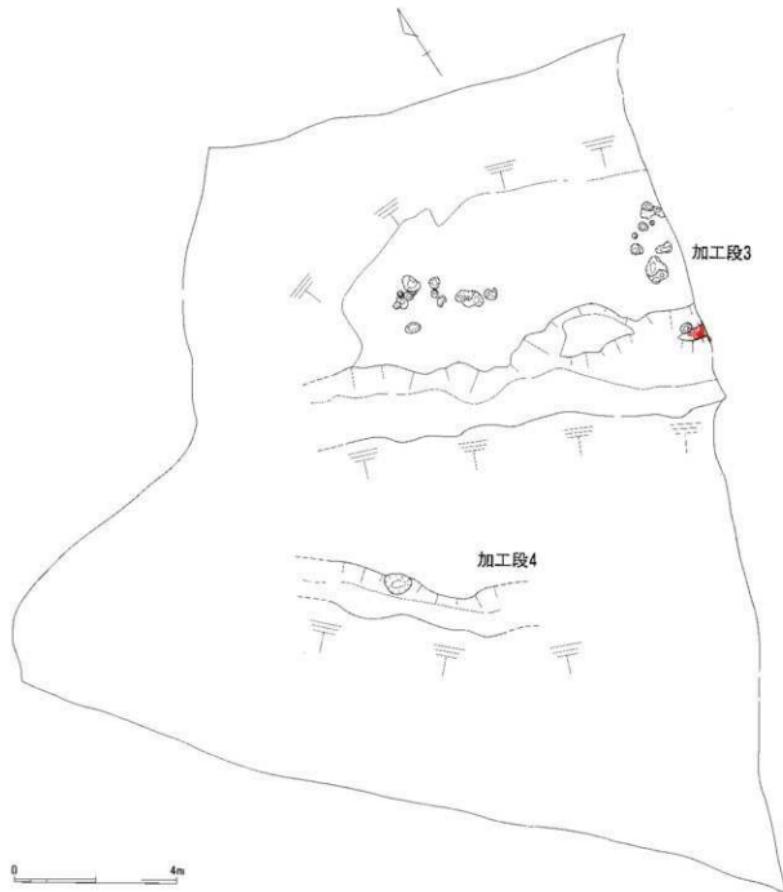


第121図 古八幡付近遺跡V区南壁土層断面図 (1 : 80)

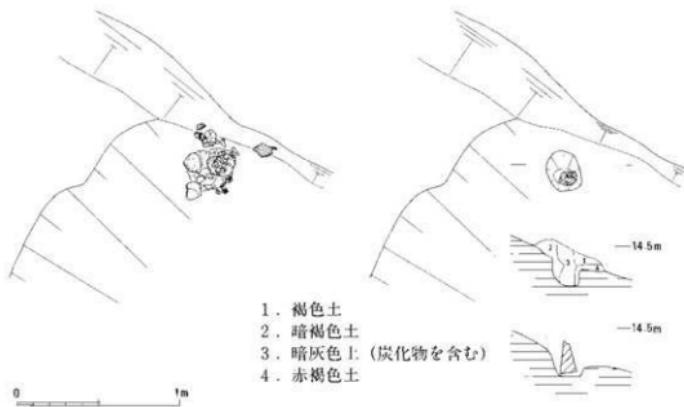
た小さな段が見られた。

加工段3の先端に見られる2カ所の小加工段の内、北側のものには遺物は伴わなかったが、南側の調査区際にかかる小加工段(SX-1)からは多数の土師器が出土した。これらの土師器は、いずれも残りが悪く、原形を留めるものは無かったが、全てが椀と皿と思われ、3カ所(4カ所か)に分け、入れ子の状態にして、重ねて置かれていたようである。その数は把握できなかったが、1カ所に少なくとも3枚が重なっており、外に離れて検出された1枚と合わせ、10枚以上が置かれていたものと考えられる。

これらの土師器を取り上げると、その下にピットが現れた。このピット内には、柱根が残っており、



第122図 古八幡付近遺跡V区遺構配置図 (1 : 120)

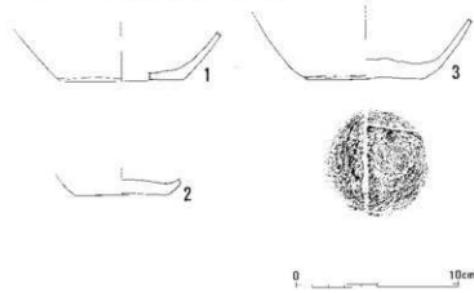


第123図 古八幡付近遺跡V区SX-1実測図 (1 : 30)

柱が立っていたものと思われる。出土した柱根は断面三角形を呈し、腐食が著しく、非常に多くの亀裂が入っており、亀裂内に流れ込んだ粘土によって、かろうじて形を保っている状態であった。柱根の基部は水平に切断され、そこから上方に向けて細くなっているが、これは、腐食によるものと考えられる。先端は、截断されたように、わずかに平らになった部分がある。土層断面から、柱は直径約14cm前後であったと考えられる。

SX-1は、柱根上面も切断されたと考えられることから、建物等の撤去後の呪いであったと考えられる。建物は不明であるが、掘立柱建物を撤去する際に柱を地面上で切断し、その上に上師器を供えていてと考えられる。仮に掘立柱建物が存在したとすると、斜面に平行して調査区外側の南側に広がっていたと思われる。SX-1は、北東隅の柱であったと想像される。

SX-1出土遺物 第124図には、SX-1出土遺物を図示している。SX-1からは、多くの土師器が出土したが、いずれも細片で、復元できるものは無かった。SX-1で出土した土師器の内確認できたものは全て回転糸切りで切り離されている。

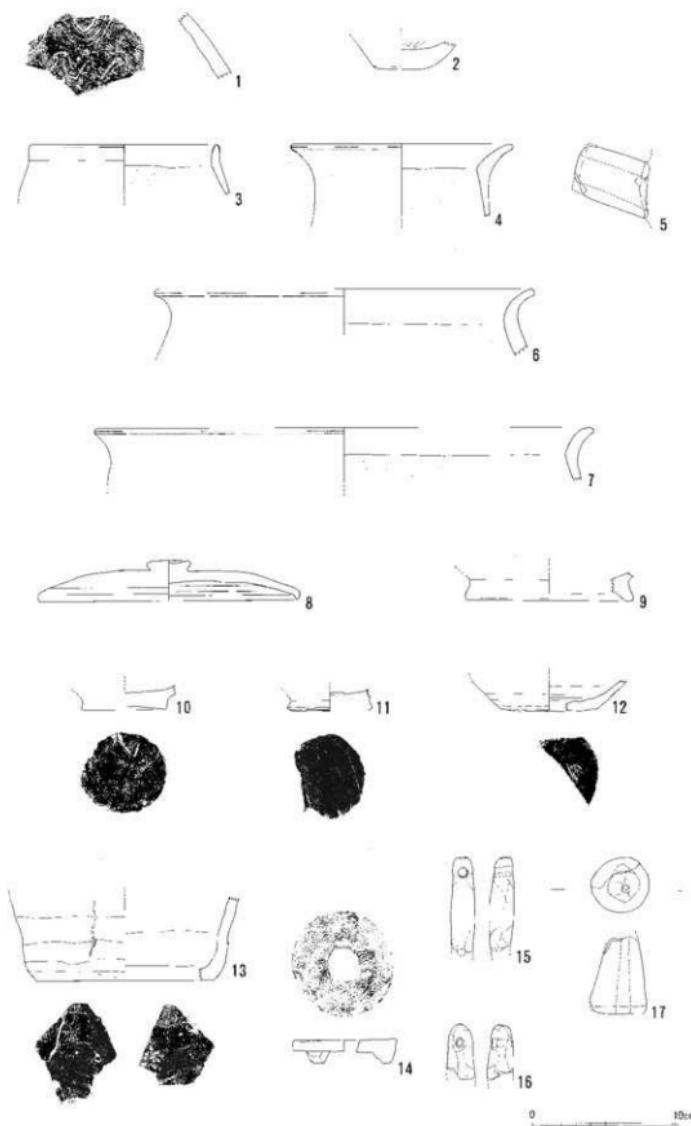


第124図 古八幡付近遺跡V区出土土師器実測図 (1 : 3)

124-1は、無高台の壺と考えられる。器壁は薄く、体部は直線的に延びる。

124-2は、小皿である、底部に回転糸切り痕を残し、内面には、螺旋状に強いナデを入れる。底部に対し体部の器壁が薄く、器高は低いものと思われる。

124-3は、碗である。底面には回転糸切り痕を残し、体部はわず



第125図 古八幡付近遺跡V区出土遺物実測図 (1 : 3)

かに内溝しながら延びる。内面見込み部には、強いナデにより螺旋状の文様が付けられている。SX-1で出土した土師器には、この種の椀が最も多い印象がある。

V区出土遺物 第125図には、SX-1以外から出土した遺物を示している。出土遺物は加工段3の先端から出土したものが多いが、弥生土器は、加工段3奥の造成土中から、陶器類は、西側の黒色土中から出土している。

125-1は弥生土器の壺と考えられる、肩部の小片である。内面は、やや荒いナデを施し、外面には、櫛による波状文を描いている。125-2は、弥生土器の底部である。外面はナデである。内面のナデは、下から上に向けて搔き上げるような荒いもので、数本の稜を明瞭に残している。125-5は、注口土器の注口部分である。磨滅が著しく調整は不明である。いずれも弥生時代後期のものと思われる。

125-3は土師器の無頬壺である。外面と口縁部内面はナデ、内面は横方向のケズリを施す。125-4は、小型の壺である。頸部で鋭く屈曲し、口縁部が強く外反する。内面の頸部以下はケズリが入る。

125-6・7は、壺である。口縁部が緩やかに外反し、頸部以下の中面にはケズリが見える。
須恵器はほとんど見られず1点を示した。この他にSX-1近くの上層で、甕片が出土している。
125-8は、蓋である。器高が低く、体部は直線的で、ボタン状つまみを持つ。口縁端部をわずかに垂下させ、口縁部外面に面を持つ。全面をナデ調整し、ケズリは残していない。久本奥窓跡のIV～V期に当たり、7世紀後半から8世紀前半ものである。

125-9は、高い高台を持つ、土師器の椀である。高台は端部を丸めた断面三角形を呈し、太く、斜めに張り出す。体部は直線的で、高く延びるものと思われる。125-10・11も土師器の椀で、高台を持たないものである。底部には、回転糸切り痕を残し、円盤高台状に下方に突き出す。体部との境はわずかにくびれ、内面には、螺旋状のナデを施す。

125-12は、土師器の皿である。底面に回転糸切り痕を残し、高台は持たない。体部は大きく外傾し、直線的に長く延びる。

125-13は、陶器の壺である。高台は無く、底部と体部の境をヘラケズリする。体部外面には、ヘラによる縱方向の傷があり、文様であろうか。体部は横方向に強くナデしている。

125-14は、石見焼の焼台である。断面台形の脚を3本持ち、上面には回転糸切り痕を残している。中央に直径約2cmの円孔が開けられる。

125-15～17は、土鍤である。125-15・16は、棒状を呈し、上下2カ所の孔の開くものである。手づくねで成形し、特に調整を行っていない。穿孔は片側から行われるようである。125-15の孔の周間にには、わずかに埋んだ部分が見られる。繩による磨滅と考えられ、使用によるものであろう。125-17は、裁頭円錐形を呈するもので、縱方向に穿孔される。磨滅しているが、ナデ調整であろう。穿孔は両側から行われる。棒状で、2カ所に穿孔する土鍤は、瀬戸内型土鍤と呼ばれており、従来山陰地方では知られていないかったものであるが、近年出土量が増加しており、出雲市上長浜貝塚・山持川川岸⁽¹⁾遺跡・矢野遺跡、大社町の修理免本郷遺跡、安来市の徳見津遺跡で出土している。この内、山持川川岸⁽²⁾遺跡・矢野遺跡・修理免本郷遺跡のものは、各1点の出土で、山持川川岸遺跡のものは、弥生時代後期である。また、鳥取県境に近い徳見津遺跡からは9個体分が出土しているが、奈良時代とされている。最も多く出土した上長浜貝塚では、74点がまとめて出土しており、奈良時代後半から平安時代初期にかけて使用されたと考えられている。

註1 川上稔・湯村功 「上長浜貝塚」 出雲市教育委員会 1996年

註2 川上稔 「山持川川岸遺跡」 出雲市教育委員会 1996年

註3 岩橋季典 「徳見津遺跡の調査」「徳見津遺跡・日延遺跡・陽徳寺遺跡」 島根県教育委員会 1996年

⑨ I・II区で出土した白磁

第126図は、I・II区で出土した白磁である。I・II区では、12・13世紀と考えられる遺物が少なく、流れ混みと考えられるため、別に扱った。126-1は、皿である。太宰府分類のVII類皿に当たり、見込み部に華文が描かれている。底面はほとんど水平で、高台は無い。体部は稜を持って内湾する。I区で出土したもので、I区から出土した陶磁器はこれのみであった。

126-2は、玉縁を持つ碗である。口縁部の小片で体部の形状は不明であるが、玉縁が大きく、太宰府分類の白磁IV類碗に当たる。126-3もIV類碗の底部と考えられる。高台は削り出しによるもので、低く、幅広い。釉は、外面の高台より上まで止まっている。両者ともII区SD-1上層から出土している。

これらの白磁は、12世紀末から13世紀前半のものと考えられ、平成5年度調査区やIV区で出土する陶磁器と同時期のものである。

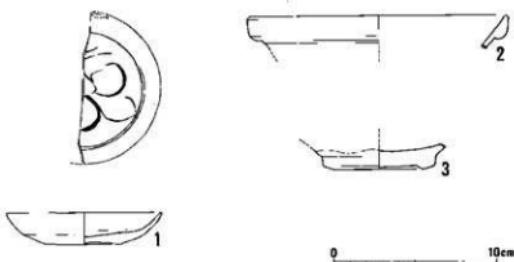
⑩ 小結

古八幡付近遺跡では遺物を伴う明確な遺構を検出していないが、各時代を通じて非常に多くの遺物が出土した。これらの遺物から、時代毎に古八幡付近遺跡の様相をまとめ、小結としたい。

縄文時代 縄文時代の遺物はI区を中心にまとまった量が出土している。縄文土器で見ると、晚期の突帯文を除く全ての土器が、福田K2式から縁帯文の時期に含まれるもので、縄文後期初頭から中葉のものである。江津市域での縄文時代の遺跡としては、波子町の大平山遺跡群が知られているが、大平山遺跡群でも中期の波子式の時期と、福田K2式から縁帯文の2時期に分かれて検出されており、福田K2式から縁帯文の時期に江津市域で遺跡数が増加することが解る。

I区で出土した石器の大半は、これらの縄文土器と同時に出土しており、それらの大半が、縄文後期に含まれると考えられる。出土した石器の大半がフレイクで、製品はきわめて少ないが、石鎌を見ると、その内訳は、黒曜石製と安山岩製がほぼ半々である。黒曜石の蛍光X線分析は行っていないが、表面観察からは、隠岐島産と考えられ、姫島産と考えられるものは含まれていない。また、良質の安山岩を比較的豊富に入手できたようである。

本報告中にも述べたように、I区の縄文土器は全て逆転包含層中の出土であり、包含層が客土であることは明確であるが、付近に縄文後期の



第126図 古八幡付近遺跡出土磁器実測図（1：3）

遺跡が存在した可能性が高い。

縄文時代晚期から弥生時代 I～III区では、突堤文土器と弥生時代前期の土器が、少量出土している。これらの土器は縄文時代後期に比べると格段に少なく、弥生時代中期になるとほとんど見られなくなる。敬川が形成する河岸段丘の前進に関係することが想像され、段丘上部にあった縄文時代後期の遺跡が、晚期・弥生時代前期と時代が下るにつれ、より川に近い河岸段丘下部に移動していったと想像される。古八幡付近遺跡では、弥生時代中期の土器はほとんど見られないが、この時期の江津市域では、都野津町の稻荷山遺跡・半田浜遺跡などで、中期の遺跡が見られる。

弥生時代後期と水田遺構 古八幡付近遺跡での弥生時代後期は、遺構に遺物が伴う S D - 1 がある。S D - 1 は、斜面下方に掘られた溝で、区画溝的性格が考えられ、遺構の中心は、調査区の西側、現県道の下にあるものと想像される。S D - 1 からは、弥生時代後期前葉の遺物が見られ、付近に弥生時代後期の集落が存在するものと思われる。縄文時代の集落が存在したと考えられる、河岸段丘上部よりも大きく下った場所に当たると思われ、敬川の河岸段丘の前進が伺われる。

河岸段丘の前進に伴い、この頃からIII区に在ったと思われる旧河川も、湿地化していったと考えられ、この場所の開発の開始が弥生時代後期と考えられる。

III区に見られる、杭・板材を使用した畦状遺構は、各時代の遺物の混在した遺物包含層に埋められており、その所属時期を遺物から判断することはできなかったが、木製品の年輪年代測定では興味深い結果が得られた。測定できた資料は3点で、それぞれ BC 16+ α 年（資料1）、AD 126+ α 年（資料2）、AD 620 年（資料3）であった。辺材の無い資料1・2は、それぞれ何年か加えなければならぬが、いずれにしても弥生時代後期のものと想像される。資料1は、畦状遺構に使用された板材であり、また、資料2は水田用の農耕具である方形枠付き田下駄と考えられる。資料2については、類例の少ない5穴の田下駄が存在するかどうか、と言う問題はあるが、水田遺構が弥生時代後期まで遡る可能性がある。使用3の年代は、7世紀になるが、プラントオパールの結果から、継続的に長期間に亘る水田耕作も予想され、こうしたものが含まれている事は問題ないものと思われる。ただし、方形枠付き田下駄の枠部分の部材は、いずれもほとんど同様の形態で、1種類しか存在しない。そのため、資料2・3の下駄部分の形状が異なる点から、どちらか一方が方形枠付き田下駄で、他方は別の用途であった可能性がある。この場合、明らかに、資料2の方が特殊な形状であり、資料2は、方形枠付き田下駄ではない事もあり得る。

武器形木製品（機織具）については、出土状況から畦状遺構に近い時期のものと考えられ、前述の状況から、弥生時代後期のものである可能性がある。仮に武器形木製品とすると、古墳時代以前の武器形木製品の出土は県内には見られず、山口県宮ヶ久保遺跡や、大阪府鬼虎川遺跡、奈良県の唐古・鍵遺跡などで知られている。これらの遺跡出土品は、いずれも祭器と考えられている。古八幡付近遺跡出土品は、いずれも括れの表現がなく、刃部は直線的に表現されている。茎から間にかけての線は、直線的に表現され、角を持つものが5点、曲線的に表現されるものが3点、片刃で、刃形に表現されるものが1点で、青銅製品よりは、鉄製品を模したと言う印象がある。III区の水田遺構は、旧河川の湿地化に伴って耕地化したと考えられ、旧河川を耕地に利用するに当たっての祭祀はあり得ると思われるが、類例の少ない資料であり、機織具の可能性も考えながら、今後の検討課題としたい。

古墳時代 古墳時代に入ると、また遺物量は減少する。古墳時代中期前半の遺物は比較的多いが、須

恵器出現以後から奈良時代に入るまでの間の遺物は少ない。江津市域でのこの時代の遺跡としては、都野津町の半田浜遺跡、二宮町の宮倉遺跡が知られており、集落の中心が、二宮町を中心とする地域に徐々に集まり始めたのではないだろうか。

奈良時代 奈良時代に入ると須恵器を中心に遺物量が増加するが、中でも特殊なものが含まれていることが注目される。III区で出土した遺物には、須恵器転用硯や、文具と考えられる小型の提瓶、土製分銅などが含まれている他、平成5年度調査区では、瓦も出土している。転用硯は、江津市域では、前述の飯田C遺跡で出土している。また、土製分銅は飯田C遺跡の他、二宮町の半田浜西遺跡で出土している。二宮町には石見二宮（多鳩神社）や、中世都野氏の拠点である神主城跡があり、山陰道が通っていたことも推定され、奈良時代からこの地域の中心的役割を担っていたことが推定され、官衙的施設が存在した可能性が指摘されている。転用硯や分銅などは官衙に関係するものと思われることから、二宮町内に官衙的施設が存在した可能性は高い。古八幡付近遺跡にも、官衙関連施設もしくは郡司層が活動した拠点の一つが存在したのではないだろうか。

江津市域での瓦の出土地は、生産遺跡である嘉久志町の久本奥窯跡、二宮町の宮倉遺跡が知られているほか、波来浜遺跡に近い都治農協裏遺跡出土遺物と言われるものの中に丸瓦1片が見られる。また、江津市を離れ近隣では、浜田市の石見国分寺跡、下府庵寺がある。都治農協裏遺跡については実体が解らないが、宮倉遺跡出土品には、石見国分寺跡と同文の軒平瓦があり、関連が伺われる。宮倉遺跡は二宮町に位置し、官衙関連施設であった可能性も高く、石見国分寺に供給した生産遺跡と断定しにくい。また、久本奥窯跡は、下府庵寺に供給した軒丸瓦・鶴尾が出土しており、下府庵寺に供給した時期もあるが、大半の平瓦は下府庵寺のものと規格が異なり、供給先が異なっていることが推定されている。このことから、浜田市内の古代寺院以外に江津市域でも瓦を使用した寺院・官衙が存在した可能性は高く、古八幡付近遺跡の近くにそうしたものがあった可能性もあながち否定できない。
(註6)

平安時代から中世 平安時代から中世に含まれると考えられる遺物は比較的多い。特にIII区から平成5年度調査区にかけて豊富に出土した青磁・白磁の存在から、12世紀後半から13世紀前半にかけての集落があったことが伺われる。青磁・白磁と同時に出土した土師器類の時期に付いては判断しがたい。椀・杯類は、大半の個体が回転糸切りを使用し、見込み部に螺旋状のナデを施すと言う共通点が見られ、底部の形態に關係なく、近い時期のものと思われ、出土比率から青磁・白磁に伴うと考えられる。

小皿には、内面に螺旋状のナデを持たないものがあり、それらは概して器高が低く、体部が短い。このような形態は時期が下ってから現れるものと思われ、14世紀代であろうか。

V区のSX-1で出土した土師器椀・杯・IIIは、内面に螺旋状の強いナデは見られるが、III区で大量に出土したものとは器形が異なり、底径が広く、わずかに体部が内湾するという古い要素を持つ。松江市の池の奥2号墳周溝内土坑出土遺物の中に似たものがあり、11世紀のものと思われる。

SX-1は、遺構としても注目すべきものがあり、柱の地上部分を切断し、その上に土器を置いていることから、呪術的なものを連想させるものである。建物の廃棄に伴う呪い的な意味が考えられ、今後の資料の増加を待ちたい。

- 註1 田中義紹他 「大平山遺跡群調査報告書」 江津市教育委員会・浜田市教育委員会 1988年
宍道正华 「島根県の縄文式土器集成 I」 1974年
- 註2 広江耕史 「一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 I」 島根県教育委員会 1995年
- 註3 「波来浜遺跡発掘調査報告書」 島根県教育委員会 1973年
- 註4 奈良国立文化財研究所光谷卓実氏に年輪年代判定を依頼し、上述の結果を得た。
- 註5 「宮ヶ久保遺跡」「考古学雑誌第63巻第2号」 1977年
「K 祭祀具」「木器集成図録近畿編原始」 奈良国立文化財研究所 1993年
- 註6 註2と同じ
- 註7 門脇俊彦 「歴史編〔古代〕」「江津市誌」 江津市教育委員会 1983年
- 註8 「池の奥古墳群」「松江東工業団地内発掘調査報告書」 松江市教育委員会 1990年
- 註9 江津市教育委員会宮本徳昭氏より、江津市内で見覚えがあるとのご教授を受けており、まだ、数例があるものと思われる。

4. 古八幡付近遺跡におけるプラント・オパール分析

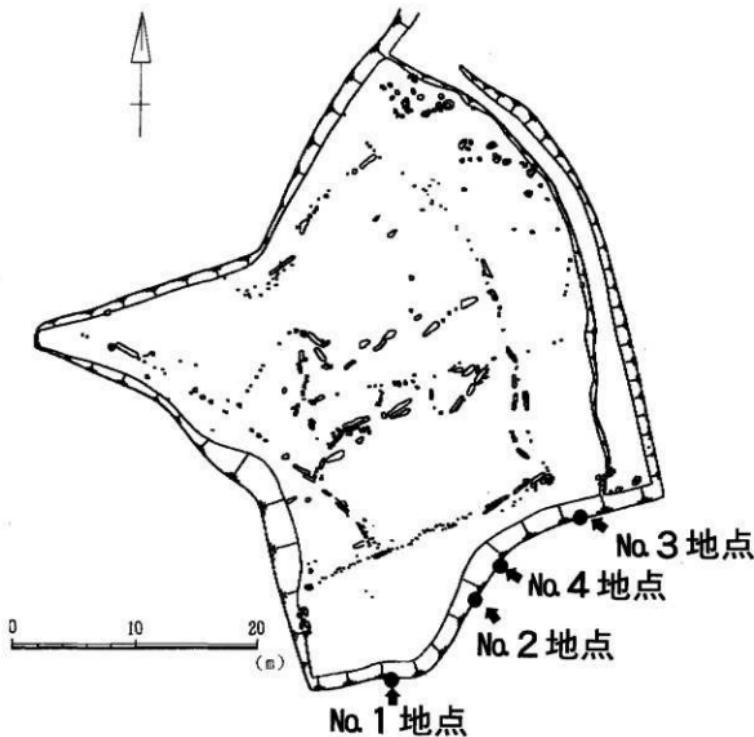
川崎地質株式会社（担当者：渡辺正巳）

はじめに

古八幡付近遺跡は江津市西部の散川町に位置する。平成6年度の調査において、III区から近世の遺物を含む水田状遺構が検出された。このため、島根県教育委員会の委託を受け、III区での稻作の確認のために、川崎地質株式会社がプラント・オパール分析を実施した。本報告は、上記のプラント・オパール分析の概報である。

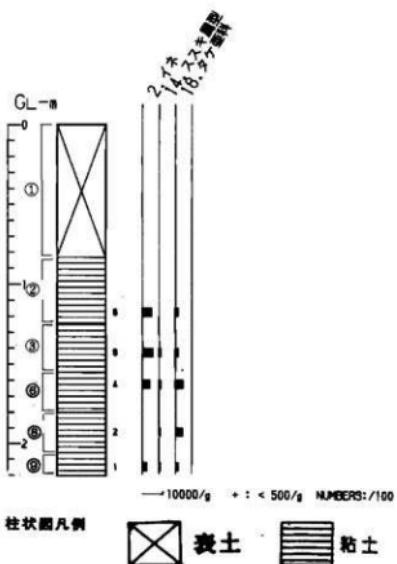
試料について

第127図に示す4地点で、島根県教育委員会によって採取された試料を対象に分析を行った。各地点で試料採取層準を、第128～131図のプラント・オパールダイアグラム中の柱状図として示す。柱状図左の①～⑨が土層番号、右の1～34(欠番あり)が試料採取層準である。また分析処理は、藤原(1976)

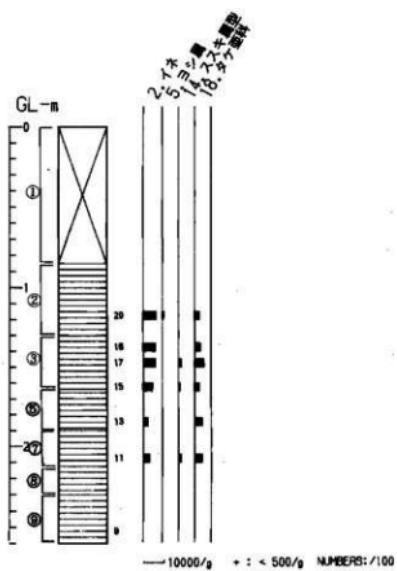


第127図 試料採取地点

のグラス・ピーズ法に従った。



第128図 No. 1 地点のプラント・オパールダイアグラム



第129図 No. 2 地点のプラント・オパールダイアグラム

分析结果

第128~131図のプラント・オパール ダイアグラムに分析結果を示す。

老歌

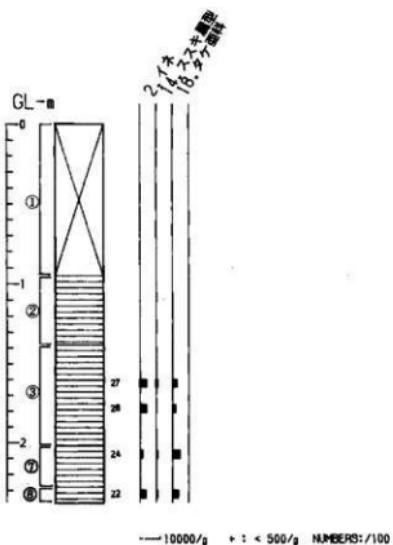
分析結果に示すように、7層から上位では分析した試料の全てからイネが検出され、さらにほとんどの試料から3000個/gを上回る含有量があった。このことから、7層から上位では耕作土が重なっていることがわかる。

一方9層と8層では試料により含有量に差があり、検出されない試料もあつた。

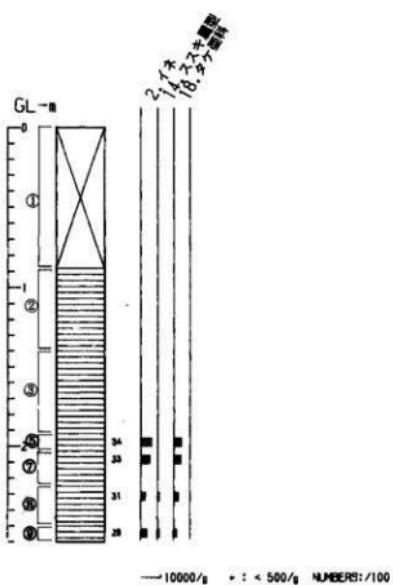
9層では1、2、4地点で分析を行い、1、4地点でイネを検出した（試料N o.1:2200個/g、試料N o.29:3100個/g）。また7層では、1、3、4地点で分析を行い、3、4地点でイネを検出した（試料N o.22:3100個/g、試料N o.31:2300個/g）。これらの層準ではイネが検出されなかった試料があったものの、耕作土であった可能性が高いと考えられる。

引用文献

藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) —数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学, 9, 15-29.



第130図 No.3 地点のプラント・オバールダイアグラム



第131図 No.4 地点のプラント・オバールダイアグラム

第V章 むすび

嘉久志遺跡では、経塚を発見することはできなかったが、近世から近代にかけての何らかの施設が存在したことは間違いない、それが経塚であった可能性が高い。江津市域では、この嘉久志遺跡より東側は砂丘地帯となり、江川西岸までの間には、知られている遺跡が少ない。また、近世から近代にかけての信仰関係遺跡については、県内でも調査例は少なく、資料を一つ増やした意味は小さくないものと思われる。

飯田C遺跡のある二宮町は、古代から中世にかけて、江津市域の中心的役割を果たした地域である。飯田C遺跡のある場所は、半田浜遺跡のある沖積平野と比較すると、谷奥であるが、転用窯や土製分銅などが見られ、奈良時代の二宮町が持っていた官衙的機能の一翼を担っていた可能性がある。官衙等がどこにあったかは不明であるが、飯田C遺跡の在り方は、奈良時代の役人の活動の様子を示す資料である可能性がある。また、少量ながら製鉄関係の資料が見られ、目の前に位置する神主城跡などとの関係が注目されるものである。谷を挟んだ対岸には恵良遺跡があり、平成8年度に発掘調査が行われ、現在整理中であるが、遺跡の立地や存続年代に重なる部分も多く、今後の検討が注目されるものである。

古八幡付近遺跡は、縄文時代から中世に至る非常に多様な遺跡であった。水成層が多く、遺物を伴う遺構が少なかったため、特に平安時代以降について、時期決定を保留したものが多かった点が悔やまれるが、近年石見地方では、浜田市古市遺跡など時期的に近い遺跡の調査が増えている。資料数の増加に伴って、編年の完成していない歴史時代上師器についても今後研究が進むものと期待したい。

古八幡付近遺跡III区で出土した木製品は、武器形木製品の可能性のあるものも含まれている。これが、武器形祭器なのか機織具なのかの決定は、類例の増加を待ちたいが、仮に武器形木製品とすれば県内では初の発見と言うことになる。

古八幡付近遺跡での最大の調査成果は、水田と考えられる遺構を検出した点である。残念ながら時期決定はできなかったが、年輪年代測定の結果などから弥生時代の可能性がある点は、期待が膨らむものである。水田と考えられる遺構は、まだ古八幡付近遺跡の南北に残っている可能性が高く、将来的な調査に期待するものである。

第2表 古八幡村近遺跡出土遺物

出土遺物名	出 所	材 質	形 状	測 定	調 査	色調・柄・模様	辨 別		考 察
							辨 別	考 察	
26-16 27 ブレイク 長 幅 厚 外寸 6.3cm 10mm 1.5mm 24.4mm 35.5mm 20mm	—	石	直角 片状	42mm 20mm 6.3mm 10mm 1.5mm 24.4mm 35.5mm 20mm	—	赤褐色・柄なし 無地	27 石器	高 幅 厚 外寸 19mm 4mm 0.54mm —	無端石
26-17 n	打製石斧	石	直角 片状	—	—	—	—	—	n
26-18 n	—	石	直角 片状	42mm 42mm 4.7mm 厚 8.75mm	—	—	—	—	n
27-1 27 紋	—	—	平面	—	—	—	—	—	空心尖
27-2 n	鉢	—	圓文	—	—	—	—	—	n
27-3 n	鉢	—	—	—	—	—	—	—	n
27-4 n	鉢	—	—	—	—	—	—	—	n
27-5 n	鉢	—	—	—	—	—	—	—	n
27-6 n	鉢	—	—	—	—	—	—	—	n
27-7 n	鉢	—	圓文	—	—	—	—	—	n
27-8 n	鉢	—	—	—	—	—	—	—	空山鉢
27-9 n	鉢?	—	—	—	—	—	—	—	空山鉢
27-10 n	鉢	—	—	—	—	—	—	—	無端行
27-11 n	鉢	—	—	—	—	—	—	—	n
27-12 n	鉢	—	—	—	—	—	—	—	n

種別	学名	和名	原産地	栽培地	備考
野菜類	—	—	外島：ナガツ 他はマツツ	日本：山地をやや多く育 む。島野。	純文の前葉 か?
27-13	27	絲	—	○口の野菜を育む ○口の野菜を育む	純文の前葉 か?
27	14	絲	系縄 北緯	○口の野菜を育む ○口の野菜を育む	純文の前葉 か?
27-15	28	海藻	—	○海藻、—の山内の野菜を 育む	純文の前葉 か?
27-16	n	海藻	—	○海藻、—の山内の野菜を 育む	純文の前葉 か?
27-17	n	糸	—	外島：田舎か? ○白糸、灰色の野菜を育む ○糸糸	糸に野菜を育む か?
27-18	n	海藻	—	門附：ミヤハ 水色	○野菜を育む ○口の野菜を育む
27-19	n	絲	—	—	○糸の野菜を育む ○やわらか質
27	20	絲	—	—	○糸の野菜を育む —
27	21	海藻	—	—	—
27-22	n	海藻	—	—	—
27-23	n	絲	—	—	—
27-24	n	絲	—	—	—
27-25	n	海藻	—	—	—
27-26	n	絲	—	—	—
27-27	n	絲	—	—	—

標題番号	題名	解説	法	基	病	色調・色彩・色彩	種	法	基	法	基	色調・色彩・色彩	種	解説
29- 4 29 痘		外部から入り難い や明	○黒褐色 ○白色の小粒状、無形物を やや多く含む	外傷	中等?	○褐色の ○白色の小粒状を含む	中等?	沙済	沙済	沙済	沙済	○灰色の ○白色の小粒状を含む	中等?	細川 K 2 or オレ 以前
29- 5 ホ 流体			○白色	○白色の小粒状をやや多く含む	外傷	外傷	○褐色の ○白色の小粒状を含む	外傷	沙済	沙済	沙済	沙済	○褐色の ○白色の小粒状を含む	外傷
29- 6 ホ 流体		ニコカラの液体	○白色の小粒状をやや多く含む	外傷	外傷?	内因:	○褐色の ○白色の小粒状を含む	外傷?	沙済	沙済	沙済	沙済	○褐色の ○白色の小粒状を含む	外傷?
30- 1 ホ 流体		ニコカラの液体	○白色の小粒状をやや多く含む	外傷	外傷?	内因:	○褐色の ○白色の小粒状を含む	外傷?	沙済	沙済	沙済	沙済	○褐色の ○白色の小粒状を含む	外傷?
30- 2 ホ 流体		毛さみ目失神	○白色の小粒状をやや多く含む	外傷	外傷	内因:	○褐色の ○白色の小粒状を含む	外傷	沙済	沙済	沙済	沙済	○褐色の ○白色の小粒状を含む	外傷?
30- 3 ホ 流体		アメの為調整不 キサツの失神	○白色の小粒状をやや多く含む	外傷	外傷?	内因:	○褐色の ○白色の小粒状を含む	外傷?	沙済	沙済	沙済	沙済	○褐色の ○白色の小粒状を含む	外傷?
30- 4 ホ 液体		○白色の小粒状をやや多く含む	外傷	外傷	外傷	外因:	○褐色の ○白色の小粒状を含む	外傷	沙済	沙済	沙済	沙済	○褐色の ○白色の小粒状を含む	外傷?
30- 5 ホ 流体		アメの失神	○白色の小粒状をやや多く含む	外傷	外傷	外因:	○褐色の ○白色の小粒状を含む	外傷	沙済	沙済	沙済	沙済	○褐色の ○白色の小粒状を含む	外傷?
30- 6 ホ 痘		毛さみ失神	○白色の小粒状をやや多く含む	外傷	外傷	外因:	○褐色の ○白色の小粒状を含む	外傷	沙済	沙済	沙済	沙済	○褐色の ○白色の小粒状を含む	外傷?
30- 7 ホ 流体		アメの失神	○白色の小粒状をやや多く含む	外傷	外傷	外因:	○褐色の ○白色の小粒状を含む	外傷	沙済	沙済	沙済	沙済	○褐色の ○白色の小粒状を含む	外傷?
31- 1 ホ 流体	成症	成症	○白色	○白色	外因:	○褐色の ○白色の小粒状を やや多く含む	外因:	沙済	沙済	沙済	沙済	○褐色の ○白色の小粒状を含む	外因:	
31- 2 ホ 流体	成症	成症	○白色	○白色	外因:	○褐色の ○白色の小粒状を やや多く含む	外因:	沙済	沙済	沙済	沙済	○褐色の ○白色の小粒状を含む	外因:	
31- 3 ホ 成症	成症	成症	○白色	○白色	外因:	○褐色の ○白色の小粒状を やや多く含む	外因:	沙済	沙済	沙済	沙済	○褐色の ○白色の小粒状を含む	外因:	
31- 4 ホ 成症	成症	成症	○白色	○白色	外因:	○褐色の ○白色の小粒状を やや多く含む	外因:	沙済	沙済	沙済	沙済	○褐色の ○白色の小粒状を含む	外因:	

標本番号	学名	科	花被子	葉	茎	花序	花被子	花被子
33-15 31	Phragmites	スイカズラ科	アズマヒナゲシ	葉	葉	葉	アズマヒナゲシ	アズマヒナゲシ
33-16 n	斯氏	—	アズマヒナゲシ	葉	葉	葉	アズマヒナゲシ	アズマヒナゲシ
33-17 n	斯	—	アズマヒナゲシ	葉	葉	葉	アズマヒナゲシ	アズマヒナゲシ
33-18 n	斯	—	アズマヒナゲシ	葉	葉	葉	アズマヒナゲシ	アズマヒナゲシ
33-19 r	斯	—	アズマヒナゲシ	葉	葉	葉	アズマヒナゲシ	アズマヒナゲシ
33-20 n	斯	—	アズマヒナゲシ	葉	葉	葉	アズマヒナゲシ	アズマヒナゲシ
33-21 n	斯	—	アズマヒナゲシ	葉	葉	葉	アズマヒナゲシ	アズマヒナゲシ
33 22	川	—	アズマヒナゲシ	葉	葉	葉	アズマヒナゲシ	アズマヒナゲシ
33-23	川	アズマヒナゲシ 付属	アズマヒナゲシ	葉	葉	葉	アズマヒナゲシ	アズマヒナゲシ
33-24	川	アズマヒナゲシ	アズマヒナゲシ	葉	葉	葉	アズマヒナゲシ	アズマヒナゲシ
33-25	川	アズマヒナゲシ	アズマヒナゲシ	葉	葉	葉	アズマヒナゲシ	アズマヒナゲシ
33-26	小畠	—	アズマヒナゲシ	葉	葉	葉	アズマヒナゲシ	アズマヒナゲシ
33-27 a	小畠	—	アズマヒナゲシ	葉	葉	葉	アズマヒナゲシ	アズマヒナゲシ
33-28 a	小畠	—	アズマヒナゲシ	葉	葉	葉	アズマヒナゲシ	アズマヒナゲシ
33-29	小畠	—	アズマヒナゲシ	葉	葉	葉	アズマヒナゲシ	アズマヒナゲシ

標本番号	学名	器種	法連	測定	内調・外寸・地図	標	介調・紹土・集成		類	系
							標	被		
34-16	32	皿?	縫錠	6.7cm	褐色	ナゲ	17cm 1.1cm 1.1cm	ナゲ 9.7cm 3.2cm 過錠 過錠	○褐色	○褐色
34-17	n	升?	縫錠	17cm	褐色	ナゲ	1.1cm 1.1cm 1.1cm	ナゲ 15.0cm 4.4cm 過錠	○褐色	○褐色
34-18	n	桶?	縫錠	10.9cm	ナゲ	ナゲ	1.1cm 1.1cm 1.1cm	ナゲ 14.0cm 4.4cm 過錠	○褐色	○褐色
34-19	n	甕?	縫錠	7.8cm	褐色	ナゲ	1.1cm 1.1cm 1.1cm	ナゲ 13.0cm 3.0cm 過錠	○褐色	○褐色
34-20	n	甕?	縫錠	8.2cm	ナゲ	ナゲ	1.1cm 1.1cm 1.1cm	ナゲ 13.0cm 3.0cm 過錠	○褐色	○褐色
34-21	甕	甕形大甕	縫錠	26.4cm	全錠ナゲ	ナゲ	1.1cm 1.1cm 1.1cm	ナゲ 9.6cm ナゲ	○褐色	○褐色
34-22	n	網出巻大甕	縫錠	23.5cm	褐色	ナゲ	1.1cm 1.1cm 1.1cm	ナゲ 10.7cm 4.4cm 過錠	○褐色	○褐色
34-23	甕	甕	縫錠	11.0cm	ナゲ	ナゲ	1.1cm 1.1cm 1.1cm	ナゲ 10.7cm 4.4cm 過錠	○褐色	○褐色
34-24	甕	甕	縫錠	11.0cm	ナゲ	ナゲ	1.1cm 1.1cm 1.1cm	ナゲ 10.7cm 4.4cm 過錠	○褐色	○褐色
34-25	甕	甕	縫錠	11.0cm	ナゲ	ナゲ	1.1cm 1.1cm 1.1cm	ナゲ 10.7cm 4.4cm 過錠	○褐色	○褐色
34-26	48	甕	縫錠	18.6cm	ナゲ	ナゲ	1.1cm 1.1cm 1.1cm	ナゲ 10.7cm 4.4cm 過錠	○褐色	○褐色
34-27	甕	甕	縫錠	9.9cm	ナゲ	ナゲ	1.1cm 1.1cm 1.1cm	ナゲ 9.6cm 3.2cm 過錠	○褐色	○褐色
38-1	33	甕	縫錠	9.9cm	ナゲ	ナゲ	1.1cm 1.1cm 1.1cm	ナゲ 9.6cm 3.2cm 過錠	○褐色	○褐色
39-1	33	石	縫錠	16cm	長	ナゲ	1.1cm 1.1cm 1.1cm	ナゲ 12.7cm ナゲ	○褐色	○褐色
39-2	n	石	縫錠	16cm	長	ナゲ	1.1cm 1.1cm 1.1cm	ナゲ 6.7cm ナゲ	○褐色	○褐色
39-3	n	石	縫錠	16cm	長	ナゲ	1.1cm 1.1cm 1.1cm	ナゲ 6.7cm ナゲ	○褐色	○褐色

測定番号		標本名	所	高さ	調	色調・土色・地緑	細	測	測定番号	器	法	法	測	色調・土色・地緑	細	
42-22	33	赤土土器	赤土	7.8cm	ハグア マツツ	○野原色 ○赤茶色の野原色やや赤 ○やや紅茶色	下地	42-7	33	学生土器	底付	60mm	測定筒	○赤茶色の野原色を含む ○H.R.	下地	
42-23	n	赤土土器	赤土	10.6cm	—	○赤褐色の地色を多く含む ○良好	—	42-8	n	学生土器	底付	45mm	—	○赤茶色 ○1mm以下の大粒を含む ○良好	—	
42-24	—	赤土土器	赤土	9.9cm	野原色不明	—	—	42-9	n	学生土器	底付	38mm	測定筒	○赤茶色 ○1mm以下の大粒を含む ○良好	—	
42-25	—	赤土土器	赤土	12.0cm	—	○外觀：赤褐色、内觀：黑 ○1mm以下の地色を多く含む ○良好	欠損	42-10	n	学生土器	底付	7.0cm	ハナメ ナゲ	○赤茶色の野原色を含む ○良好	下地	
43-1	34	土器	口径	12.9cm	漆灰	—	—	—	42-11	n	学生土器	底付	94mm	測定筒	○外觀：朱紅色の地色を含む ○良好	—
43-2	n	赤土土器	口径	26.0cm	漆灰	—	—	42-12	n	学生土器	底付	78mm	測定筒	○外觀：朱紅色の地色を含む ○良好	—	
43-3	n	土器	基部底	26.0cm	漆灰	つぶ6.62	—	42-13	n	土器	底付	5.4cm	測定筒	○外觀：朱紅色、内觀：漆 少帶行け	—	
43-4	n	土器	口径	26.0cm	漆灰	つぶ6.62	—	42-14	n	学生土器	底付	71mm	測定筒	○外觀：朱紅色、内觀：漆 少帶行け	—	
43-5	n	土器	底付	26.0cm	漆灰	つぶ6.62	—	42-15	n	学生土器	底付	80mm	測定筒	○外觀：朱紅色の地色を含む ○良好	—	
43-6	n	土器	底付	23.0cm	漆灰	—	—	42-16	n	学生土器	底付	80mm	測定筒	○外觀：朱紅色の地色を含む ○良好	—	
43-7	n	土器	高付	16.0cm	漆灰	漆灰は漆灰	—	42-17	n	学生土器	底付	78mm	測定筒	○外觀：朱紅色の地色を含む ○良好	—	
43-8	—	土器	高付	4.4cm	ヘクミダサ	—	—	42-18	n	学生土器	底付	66mm	—	○外觀：朱紅色の地色を含む ○良好	—	
43-9	—	土器	高付	13.6cm	漆灰	漆灰は漆灰 しづり口	—	42-19	n	学生土器	底付	80mm	測定筒	○外觀：朱紅色の地色を含む ○良好	—	
43-10	n	土器	口径	25.0cm	漆灰	漆灰は漆灰 文あり	—	42-20	n	学生土器	底付	106mm	—	○外觀：朱紅色の地色を含む ○良好	—	
43-11	n	土器	口付	15.0cm	コリナ	—	—	42-21	n	学生土器	底付	9.0cm	ハケア ナゲ	—	—	

掲載番号(図号)	品種	法	葉	茎	花	果	花・葉・果	根	色調・胎・熟度	調	葉	花	果	色調・胎・熟度	根	
43-27 34	上野錦 （原名）	施肥	70mm	さくら目	○緑(△) ○濃青(△) ○赤(△)	○緑(△) ○濃青(△) ○赤(△)	○緑(△) ○濃青(△) ○赤(△)	土野根 高生	110mm	凋萎は軽度	○淡紅色 むらさき色 ○濃紅色 ○濃紅色の葉の部分を 多く含む	—	—	—	—	—
44-1 35	深紫28	115g	157mm	圓葉(△) シダケイリ	—	—	—	土野根 高生	—	—	—	—	—	—	—	
44-2 n	深紫29	115g	157mm	圓葉(△) アゲツ	—	—	—	土野根 高生	110mm	凋萎は軽度	○淡紅色、内面 の葉の部分を 多く含む	—	—	—	—	
44-3 n	深紫30	115g	157mm	圓葉(△) シダケイリ	—	—	—	土野根 高生	110mm	凋萎は軽度	○淡紅色、内面 の葉の部分を 多く含む	—	—	—	—	
44-4 n	深紫31 （原名）	施肥	78mm	圓葉ナデ ヘタ切り	—	—	—	土野根 高生	110mm	凋萎は軽度	○淡紅色、内面 の葉の部分を 多く含む	—	—	—	—	
44-5 n	深紫32	施肥	116mm	圓葉ナデ	—	—	—	土野根 高生	110mm	凋萎は軽度	○淡紅色、内面 の葉の部分を 多く含む	—	—	—	—	
44-6 n	深紫33	施肥	92mm	圓葉ナデ 矢張	—	—	—	土野根 高生	110mm	凋萎は軽度	○淡紅色、内面 の葉の部分を 多く含む	—	—	—	—	
44-7 n	深紫34 心?	施肥	高白性 108g	圓葉(△) シダケイリ	—	—	—	土野根 高生	110mm	凋萎は軽度	○淡紅色、内面 の葉の部分を 多く含む	—	—	—	—	
44-8 n	深紫35	施肥	85g	圓葉(△) シダケイリ	—	—	—	土野根 高生	110mm	凋萎は軽度	○淡紅色、内面 の葉の部分を 多く含む	—	—	—	—	
44-9 n	深紫36	施肥	115g	全体切り落 し	—	—	—	土野根 高生	110mm	凋萎は軽度	○淡紅色、内面 の葉の部分を 多く含む	—	—	—	—	
44-10 n	深紫37	施肥	114mm	全体切ナデ	—	—	—	土野根 高生	110mm	凋萎は軽度	○淡紅色、内面 の葉の部分を 多く含む	—	—	—	—	
44-11 n	深紫38	施肥	116mm	圓葉ナデ	—	—	—	土野根 高生	110mm	凋萎は軽度	○淡紅色、内面 の葉の部分を 多く含む	—	—	—	—	
44-12 n	深紫39	施肥	116mm	圓葉ナデ	—	—	—	土野根 高生	110mm	凋萎は軽度	○淡紅色、内面 の葉の部分を 多く含む	—	—	—	—	
44-13 n	深紫40 （原名）	施肥	112mm	全体ナデ	—	—	—	土野根 高生	110mm	凋萎は軽度	○淡紅色、内面 の葉の部分を 多く含む	—	—	—	—	
44-14 n	深紫41	施肥	116mm	全体切ナデ	—	—	—	土野根 高生	110mm	凋萎は軽度	○淡紅色、内面 の葉の部分を 多く含む	—	—	—	—	

測量番号	面積	法 距	面 級	面 級	面 級	面 級	面 級	面 級
44-15	35	望遠鏡 一時度	W組ナダ	W組ナダ	W組ナダ	W組ナダ	W組ナダ	W組ナダ
44-16	50	傾出端 標	—	—	—	—	—	—
44-17	60	傾出端 標	—	—	—	—	—	—
44-18	60	傾出端 標	—	—	—	—	—	—
45-1	35	上 口	—	—	—	—	—	—
45-2	n	26面 底台	—	—	—	—	—	—
45-3	n	底台	—	—	—	—	—	—
45-4	n	瓦 質	—	—	—	—	—	—
49-1	38	石 砖	—	—	—	—	—	—
49-2	n	ス フレ ー	—	—	—	—	—	—
50-1	n	鋼 交 鋼 子鉄	—	—	—	—	—	—
51-1	36	牛 前 鋼 板	—	—	—	—	—	—
51-2	n	生 金	—	—	—	—	—	—
51-3	17	牛 前 鋼 板	—	—	—	—	—	—
51-4	n	牛 前 鋼 板	—	—	—	—	—	—

被験者番号	性別	年齢	学年	性別	年齢	学年	性別	年齢	学年
51 - 5	男	36	学生上級	-	-	-	生徒・衛・土・施設	-	-
51 - 6	女	31	学生上二階	-	-	-	の黄色、灰色の砂利を多く見	-	-
51 - 7	女	31	学生上二階	-	-	-	の白色、灰色の砂利を多く見	-	-
51 - 8	女	30	学生上一階	-	-	-	の白色、灰色の砂利を多く見	-	-
51 - 9	女	31	学生上一階	-	-	-	の白色、灰色の砂利を多く見	-	-
51 - 10	女	31	学生上一階	6.7cm	離れて	-	の白色、灰色の砂利を多く見	-	-
51 - 11	女	31	学生下一年	-	-	-	の白色、灰色の砂利を多く見	-	-
52 - 1	女	31	学生四年	-	11歳	14.0cm	の白色、灰色の砂利を多く見	-	-
52 - 2	女	31	学生五年	-	11歳	11.7cm	の白色、灰色の砂利を多く見	-	-
52 - 3	女	31	学生五年	-	11歳	12.1cm	の白色、灰色の砂利を多く見	-	-
52 - 4	女	31	学生五年	-	11歳	14.3cm	の白色、灰色の砂利を多く見	-	-
52 - 5	女	31	学生下一年	-	11歳	20.0cm	の白色、灰色の砂利を多く見	-	-
52 - 6	女	31	学生下一年	口径	20.4cm	ロード	の白色、灰色の砂利を多く見	-	-
53 - 1	女	37	余生下一年	口径	17.8cm	テラコッタ	の白色、灰色の砂利を多く見	-	-
53 - 2	女	32	学生上二階	口径	10.2cm	テラコッタ	の白色、灰色の砂利を多く見	-	-

種類	学名	日本名	分布	花期	葉		花		果		種子		備考
					葉形	葉色	花形	花色	果形	果色	種子	種子	
トゲヅタ	Leucosia aculeata	トゲヅタ	千葉県	口付 22.5cm 葉	口付	深緑色 の口付	花被片 の形状	白	口付	4.5cm の大きさよりな く	ナデ の花被片をわざかに含 む	の花被片をわざかに含 む	花被片の 内側の花被片をよく見 る
トゲヅタ	Leucosia aculeata	トゲヅタ	56-6	1脚	口付 22.5cm 葉	口付	深緑色 の口付	花被片 の形状	白	口付	4.5cm の大きさよりな く	ナデ の花被片をわざかに含 む	花被片の 内側の花被片をよく見 る
トゲヅタ	Leucosia aculeata	トゲヅタ	56-7	1脚	口付 20.6cm 葉	口付	深緑色 の口付	花被片 の形状	白	口付	5.4cm の大きさよりな く	ナデ の花被片をわざかに含 む	花被片の 内側の花被片をよく見 る
トゲヅタ	Leucosia aculeata	トゲヅタ	56-8	1脚	口付 20.6cm 葉	口付	深緑色 の口付	花被片 の形状	白	口付	5.4cm の大きさよりな く	ナデ の花被片をわざかに含 む	花被片の 内側の花被片をよく見 る
トゲヅタ	Leucosia aculeata	トゲヅタ	56-9	1脚	口付 15.3cm 葉	口付	深緑色 の口付	花被片 の形状	白	口付	4.6cm の大きさよりな く	ナデ の花被片をわざかに含 む	花被片の 内側の花被片をよく見 る
トゲヅタ	Leucosia aculeata	トゲヅタ	56-10	1脚	口付 12.4cm 葉	口付	深緑色 の口付	花被片 の形状	白	口付	3.0cm の大きさよりな く	ナデ の花被片をわざかに含 む	花被片の 内側の花被片をよく見 る
トゲヅタ	Leucosia aculeata	トゲヅタ	56-11	1脚	口付 13.2cm 葉	口付	深緑色 の口付	花被片 の形状	白	口付	3.6cm の大きさよりな く	ナデ の花被片をわざかに含 む	花被片の 内側の花被片をよく見 る
トゲヅタ	Leucosia aculeata	トゲヅタ	56-12	1脚	口付 11.7cm 葉	口付	深緑色 の口付	花被片 の形状	白	口付	4.0cm の大きさよりな く	ナデ の花被片をわざかに含 む	花被片の 内側の花被片をよく見 る
トゲヅタ	Leucosia aculeata	トゲヅタ	56-13	1脚	口付 14.7cm 葉	口付	深緑色 の口付	花被片 の形状	白	口付	4.6cm の大きさよりな く	ナデ の花被片をわざかに含 む	花被片の 内側の花被片をよく見 る
トゲヅタ	Leucosia aculeata	トゲヅタ	56-14	1脚	口付 16.2cm 葉	口付	深緑色 の口付	花被片 の形状	白	口付	4.6cm の大きさよりな く	ナデ の花被片をわざかに含 む	花被片の 内側の花被片をよく見 る
トゲヅタ	Leucosia aculeata	トゲヅタ	56-15	1脚	口付 25.8cm 葉	口付	深緑色 の口付	花被片 の形状	白	土壌円盤 厚さ 1.2cm	—	—	—
トゲヅタ	Leucosia aculeata	トゲヅタ	56-16	1脚	口付 16.6cm 葉	口付	深緑色 の口付	花被片 の形状	白	土壌円盤 厚さ 1.2cm	—	—	—
トゲヅタ	Leucosia aculeata	トゲヅタ	56-17	1脚	口付 18.4cm 葉	口付	深緑色 の口付	花被片 の形状	白	土壌円盤 厚さ 1.2cm	—	—	—
トゲヅタ	Leucosia aculeata	トゲヅタ	56-18	1脚	口付 14.3cm 葉	口付	深緑色 の口付	花被片 の形状	白	土壌円盤 厚さ 1.2cm	—	—	—
トゲヅタ	Leucosia aculeata	トゲヅタ	56-19	1脚	口付 14.3cm 葉	口付	深緑色 の口付	花被片 の形状	白	土壌円盤 厚さ 1.2cm	—	—	—
トゲヅタ	Leucosia aculeata	トゲヅタ	56-20	1脚	口付 15.4cm 葉	口付	深緑色 の口付	花被片 の形状	白	土壌円盤 厚さ 1.2cm	—	—	—

種名・学名		標本番号	性別	年齢	調査地	保護・貯子・放火	標本・死後・死後	剖検	死因・死後・死後	備考
58-5	男	口径 17.8mm	ハゲメ	♂	内臓白色の外側を少々含む ○良好	○口腔内、口唇 ○白色の外側を少々含む ○良好	上船 娘?	11歳	18.5cm	ヨコナダ ○良好
58-6	男?	口径 15.8mm	ハゲメ	♂	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 土井郡	10歳	24.5cm	ヨコナダ ○良好
58-7	男(ナヘ ル)?	口径 29.2mm	ハゲメ	♂	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 小笠	11歳	11.7cm	ヨコナダ ハゲメ ○良好
58-8	坐	口径 18.4mm	ハゲメ	♂	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 土井郡	11歳	7.8cm	ハゲメ タグナダリ ○良好
58-9	男	口径 18.4mm	ハゲメ	♂	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 小笠	11歳	7.2cm	タグナダリ ハゲメ ○良好
58-10	男	口径 11.8mm	ハゲメ	♂	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 小笠	11歳	9.9cm	タグナダリ ハゲメ ○良好
58-11	男	11歳 12.3mm	ハゲメ	♂	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 土井郡	11歳	11.1cm	タグナダリ ハゲメ ○良好
58-12	男	11歳 19.8mm	ハゲメ	♂	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 土井郡	11歳	11.5cm	タグナダリ ハゲメ ○良好
58-13	女	口径 17.2mm	ハゲメ	♀	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 土井郡	11歳	10.8cm	タグナダリ ハゲメ ○良好
58-14	男	口径 16.5mm	ハゲメ	♂	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 土井郡	11歳	13.5cm	タグナダリ ハゲメ ○良好
58-15	男	口径 26.8mm	ハゲメ	♂	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 土井郡	11歳	16.0cm	タグナダリ ハゲメ ○良好
58-16	女	11歳 12.4mm	ハゲメ	♀	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 土井郡	11歳	17.3cm	タグナダリ ハゲメ ○良好
58-17	坐	口径 13.7cm	ハゲメ	♂	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 土井郡	11歳	2.3cm 11本	タグナダリ ハゲメ ○良好
58-18	男	口径 13.2mm	ハゲメ	♂	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 土井郡	11歳	—	タグナダリ ハゲメ ○良好
58-19	男	口径 15.8mm	ヨコナダ	♂	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 土井郡	11歳	—	タグナダリ ハゲメ ○良好

種名・学名		標本番号	性別	年齢	調査地	保護・貯子・放火	標本・死後・死後	剖検	死因・死後・死後	備考
58-21	男	口径 11.8mm	ハゲメ	♂	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	上船 娘?	11歳	18.5cm	ヨコナダ ○良好
58-22	女	土井郡	ハゲメ	♀	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 小笠	11歳	24.5cm	ヨコナダ ハゲメ ○良好
58-23	女	土井郡	ハゲメ	♀	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 小笠	11歳	11.7cm	ヨコナダ ハゲメ ○良好
58-24	女	土井郡	ハゲメ	♀	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 小笠	11歳	7.8cm	タグナダリ ハゲメ ○良好
58-25	女	土井郡	ハゲメ	♀	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 小笠	11歳	7.2cm	タグナダリ ハゲメ ○良好
58-26	女	土井郡	ハゲメ	♀	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 小笠	11歳	9.9cm	タグナダリ ハゲメ ○良好
58-27	女	土井郡	ハゲメ	♀	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 小笠	11歳	11.1cm	タグナダリ ハゲメ ○良好
58-28	女	土井郡	ハゲメ	♀	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 小笠	11歳	11.5cm	タグナダリ ハゲメ ○良好
58-29	女	土井郡	ハゲメ	♀	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 小笠	11歳	10.8cm	タグナダリ ハゲメ ○良好
58-30	女	土井郡	ハゲメ	♀	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 小笠	11歳	13.5cm	タグナダリ ハゲメ ○良好
58-31	女	土井郡	ハゲメ	♀	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 小笠	11歳	16.0cm	タグナダリ ハゲメ ○良好
58-32	女	土井郡	ハゲメ	♀	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 小笠	11歳	17.3cm	タグナダリ ハゲメ ○良好
58-33	女	土井郡	ハゲメ	♀	○口腔内 ○良好	○口腔内 ○良好	土井郡 小笠	11歳	2.3cm 11本	タグナダリ ハゲメ ○良好

種類番号	学名	原産地	調査地	調査年	標本番号	標本名	調査地		標本番号	標本名	調査地	調査年
							標本番号	標本名				
59-17	高木	山辺	山辺 16.9cm	ヨコナダ	○淡色 ○白色 ○良好	○褐色 ○淡色 ○良好	115-2	山	115-14.0cm	ハケイの後ヨコナダ	○明褐色 ○良好	外側: 黄褐色 内側: 淡褐色 合掌形
59-18	生糸十輪	口辺	17.6cm	ヨコナダ ハケイ?	ヨコナダ ヨコナダの後ヨコナダ ハケイの後ヨコナダ?	○褐色 ○淡色 ○良好	115-3	山	115-13.2cm	ナガハケイ ナガハケイ?	○明褐色 ○良好	外側: ハケイの後ヨコナダ 内側: 黄褐色 合掌形
59-19	綿	山辺	17.3cm	ヨコナダ ハケイの後ヨコナダ?	ヨコナダ ヨコナダの後ヨコナダ?	○褐色 ○淡色 ○良好	115-4	山	115-14.2cm	ナガハケイ ナガハケイ?	○明褐色 ○良好	外側: ハケイの後ヨコナダ 内側: 黄褐色 合掌形
59-20	綿	口辺	15.6cm	ヨコナダ ヨコナダの後ヨコナダ?	ヨコナダ ヨコナダの後ヨコナダ?	○褐色 ○淡色 ○良好	115-5	山	115-17.2cm	ヨコナダ ヨコナダ?	○明褐色 ○良好	外側: ヨコナダ 内側: 黄褐色 合掌形
59-21	黒	口辺	20.2cm	ヨコナダ ハケイ トゲ	ヨコナダ ヨコナダの後ヨコナダ ハケイ	○褐色 ○淡色 ○良好	115-6	山	115-17.8cm	ヨコナダ ナガハケイ ナガハケイ?	○明褐色 ○良好	外側: ヨコナダ 内側: 黄褐色 合掌形
59-22	綿	115-1	16.8cm	ヨコナダ ハケイ	ヨコナダ ヨコナダの後ヨコナダ	○褐色 ○淡色 ○良好	115-7	山	115-14.0cm	ヨコナダ ナガハケイ ナガハケイ?	○明褐色 ○良好	外側: ヨコナダ 内側: 黄褐色 合掌形
59-23	黒	115-2	18.6cm	ヨコナダ ヨコナダ トゲ	ヨコナダ ヨコナダの後ヨコナダ トゲ	○褐色 ○淡色 ○良好	115-8	山	115-12.8cm	ヨコナダ ヨコナダ?	○明褐色 ○良好	外側: ヨコナダ 内側: 黄褐色 合掌形
59-24	黒	115-3	19.4cm	ヨコナダ ハケイ	ヨコナダ ヨコナダの後ヨコナダ ハケイ	○褐色 ○淡色 ○良好	115-9	山	115-16.4cm	ヨコナダ ヨコナダ?	○明褐色 ○良好	外側: ヨコナダ 内側: 黄褐色 合掌形
60-1	角糸	底糸	10.9cm	ナダ	—	—	59-10	山	115-13.8cm	ナダ ナダ?	○明褐色 ○良好	外側: ヨコナダ 内側: 黄褐色 合掌形
60-2	高木	口辺	14.2cm	ヨコナダ ナメドウの後ハケイ トゲ	ヨコナダ ヨコナダの後ハケイ トゲ	○褐色 ○淡色 ○良好	59-11	山	115-15.2cm	ヨコナダ ヨコナダ?	○明褐色 ○良好	外側: ヨコナダ 内側: 黄褐色 合掌形
60-3	高木	115-4	17.2cm	ヨコナダ	ヨコナダ	○褐色 ○良好	59-12	山	115-14.8cm	ヨコナダ ヨコナダ?	○明褐色 ○良好	外側: ヨコナダ 内側: 黄褐色 合掌形
60-4	高木	115-5	18.8cm	ハケイ ハケイ	ハケイ ハケイ	○褐色 ○良好	59-13	山	115-17.6cm	ヨコナダ ヨコナダ?	○明褐色 ○良好	外側: ヨコナダ 内側: 黄褐色 合掌形
60-5	高木	115-6	16.8cm	ヨコナダ	ヨコナダ	○褐色 ○良好	59-14	山	115-19.2cm	ヨコナダ ヨコナダ?	○明褐色 ○良好	外側: ヨコナダ 内側: 黄褐色 合掌形
60-6	高木	口辺	21.2cm	ヨコナダ ハケイ	ヨコナダ ヨコナダの後ハケイ ハケイ	○褐色 ○良好	59-15	山	115-19.4cm	ヨコナダ ヨコナダ?	○明褐色 ○良好	外側: ヨコナダ 内側: 黄褐色 合掌形
60-7	高木	115-7	14.0cm	ハケイ	ハケイ	○褐色 ○良好	59-16	山	115-16.4cm	ヨコナダ ヨコナダ?	○明褐色 ○良好	外側: ヨコナダ 内側: 黄褐色 合掌形

種類	学名	科	葉	花	果	被毛	色調・葉・花	特徴
開花植物群								
60- 8	高杆 —	山桔梗	口徑 20-8cm	花被 2.5cm	花被 1.5cm	無	○褐色、深褐色の部分をやや多く、葉は ○花被は褐色	ハケメの花被リット ○花被は褐色
60- 9	高杆 —	口徑	18-9cm	花被 1.5cm	花被 1.5cm	無	○褐色の部分を多く含む ○花被は褐色	ハケメの花被リット ○花被は褐色
60-10	高杆 —	口徑	18-9cm	花被 1.5cm	花被 1.5cm	無	○褐色の部分をわずかに含む ○花被は褐色	ハケメの花被リット ○花被は褐色
60-11	H?	—	11cm	花被 1.5cm	花被 1.5cm	無	○褐色の部分を多く含む ○花被は褐色	ハケメの花被リット ○花被は褐色
60-12	高杆 —	口徑	22-4cm	花被 2.5cm	花被 2.5cm	無	○褐色の部分を含む ○花被は褐色	ハケメの花被リット ○花被は褐色
60-13	高杆小?	—	12-3cm	花被 1.5cm	花被 1.5cm	無	○褐色の部分を含む ○花被は褐色	ハケメの花被リット ○花被は褐色
60-14	高杆 —	底被	12-9cm	花被 1.5cm	花被 1.5cm	無	○褐色の部分を含む ○花被は褐色	ハケメの花被リット ○花被は褐色
60-15	高杆 —	—	—	—	—	無	○褐色の部分を含む ○花被は褐色	ハケメの花被リット ○花被は褐色
60-16	高杆 —	—	—	—	—	無	○褐色の部分を含む ○花被は褐色	ハケメの花被リット ○花被は褐色
60-17	高杆 —	—	—	—	—	無	○褐色の部分を含む ○花被は褐色	ハケメの花被リット ○花被は褐色
60-18	高杆 —	—	—	—	—	無	○外側の花被は薄紅色 ○花被は褐色	ハケメの花被リット ○花被は褐色
60-19	高杆 —	底被	11-9cm	花被 1.5cm	花被 1.5cm	無	○褐色の部分を含む ○花被は褐色	ハケメの花被リット ○花被は褐色
60-20	高杆 —	底被	10-8cm	花被 1.5cm	花被 1.5cm	無	○褐色の部分を含む ○花被は褐色	ハケメの花被リット ○花被は褐色
60-21	高杆 —	—	—	—	—	無	○褐色の部分を含む ○花被は褐色	ハケメの花被リット ○花被は褐色
60-22	高杆 —	—	—	—	—	無	○褐色の部分を含む ○花被は褐色	ハケメの花被リット ○花被は褐色

標題別番号	標題	法種	調	類	色調・漸入・漸出		備考
					内洋	外洋	
60-23	内洋	内洋性	12.5cm	ケズリの後ナメ	○自然色 ○白色の小砂粒を外洋に多く含む	—	—
60-24	内洋	—	—	ナメ	○自然色 ○2mm前後の白色の砂粒を含む	—	—
60-25	内洋	内洋性	10.5cm	ナメ	○自然色 ○白色の砂粒を含む	—	—
60-26	内洋	内洋性	14.5cm	ナメ	○自然色 ○白色の砂粒を含む	—	風化のため表面 の少部分が白色で、石英が混じっている
60-27	内洋	内洋性	14.2cm	ナメ	○自然色 ○白色の砂粒を含む	—	—
60-28	内洋	—	—	ナメ	○自然色 ○白色の砂粒を含む	—	—
60-29	内洋	内洋性	11.7cm	ナメ	○自然色 ○白色の砂粒を含む	—	—
61-1	内洋	内洋性	11.8cm	ナメ	○自然色 ○白色の砂粒を含む	—	—
61-2	内洋	—	—	ナメ	○自然色 ○白色の砂粒を含む	—	—
61-3	内洋	—	—	ナメ	○自然色 ○白色の砂粒を含む	—	—
61-4	内洋	—	—	ナメ	○自然色 ○白色の砂粒を含む	—	—
61-5	内洋	内洋性	11.2cm	ナメ	○自然色 ○白色の砂粒を多く含む	—	—
61-6	内洋	—	—	ナメ	○自然色 ○白色の砂粒を含む	—	—
61-7	内洋	—	—	ナメ	○自然色 ○白色の砂粒を含む	—	—
61-8	内洋	—	—	ナメ	○自然色 ○白色の砂粒を含む	—	—

採集番号	学名	法 室	脚	色調・斑点・模様	備 考	標記番号		翅 種	法 葉	調 整	内脚・前上・後足	備 考
						前	後					
62-8	蝶	11歩	15.5mm	ヨコナデ ハケメ?	の地小脚色、 外脚はスリル 〇良好	61. 9	学生土器 萬生	11歩	17.8cm	ていねいなタテ 新しいタメ	〇褐色 〇2脚くらいのガラス管の 良好	〇良好
62-9	蝶	17歩	19.2mm	ヨコナデ ハケメ?	〇間赤褐色 〇良好	61-10	泥干	口径	12.7cm	ミガキ ヨコナデ	〇褐色 〇地色が少く色む	〇良好
62-10	蝶	11歩	33.4mm	ヨコナデ ハケメ?	〇暗赤褐色、 外脚は黒く青じ 〇良好	61-11	学生土器 萬生	口径	11.1cm	ミガキ 黒いミガキ	〇褐色 〇地色が少く少すむ	〇良好
62-11	蝶	11歩	14.3cm	ヨコナデ、 ハケメ?	〇暗褐色 〇良好	61-12	学生土器 萬生	11歩	12.2cm	ミガキ 黒いミガキ	〇褐色 〇地色が少く少すむ	〇良好
62-12	蝶	11歩	19.1cm	ヨコナデ ハケメ	〇赤褐色 〇良好	61-13	絲	口径	12.9cm	ミガキ マヅメ...ナダル	〇褐色 〇地色が少く少すむ	〇良好
62-13	蝶	11歩	14.5cm	ヨコナデ	〇褐色、 外脚に斑点によじ 〇良好	61-14	絲	口径	15.5cm	ヨコナデ	〇褐色 〇地色が少く少すむ	〇良好
62-14	蝶	11歩	19.0cm	ヨコナデ ハケメ?	〇赤褐色 〇良好	61-15	糸影	口径	6.2cm	ナシイナチの原種 ナシイナチの原種	〇褐色 〇地色が少く少すむ	〇良好
62-15	蝶	11歩	15.2cm	ヨコナデ ハケメ?	〇褐色、 外脚にスリスリ 〇良好	61-16	糸影外	直径	6.2cm	ナシ 押	〇褐色 〇地色が少く少すむ	〇良好
62-16	蝶	11歩	22.2cm	ヨコナデ	〇褐色 〇良好	62. 1	サ	口径	12.4cm	ヨコナデ	〇褐色 〇地色が少く少すむ	〇良好
62-17	蝶	11歩	28.2cm	ヨコナデ	〇褐色 〇良好	62-2	サ	口径	15.4cm	ナシ	〇褐色 〇地色が少く少すむ	〇良好
62-18	蝶	11歩	28.4cm	ヨコナデ	〇褐色 〇良好	62-3	サ	口径	24.4cm	ヨコナデスリ	〇褐色 〇良好	〇良好
63-1	蝶	過歩	60mm	出脚を切り取 ヨコナデ	〇褐色 〇良好	62-4	サ	口径	18.6cm	ヨコナデ	〇褐色 〇地色が少く少すむ	〇良好
63-2	蝶	過歩	6.4cm	切り(直脚)外 にぬけている	〇褐色～暗赤褐色 〇良好	62-5	糸影	口径	17.7cm	ヨコナデ ハケメ	〇褐色 〇地色が少く少すむ	〇良好
63-3	蝶	11歩?	6.2cm	ナシ 糸影外切り	〇褐色 〇良好	62-6	糸影	11歩	17.5cm	ヨコナデ ヨコナデ	〇褐色 〇地色が少く少すむ	〇良好
63-4	蝶	過歩	6.0cm	地色へ切りに見 通すナシ	〇褐色 〇良好	62-7	糸影	口径	17.8cm	ヨコナデ ケズワ	〇褐色 〇地色が少く少すむ	〇良好

物語番号		種類	法	性	調	鑑	標	法	鑑	標	色調・施上・形状	標	外因説明	
63-20	19	16-?	油絵	6.5cm	ナメ	同様の小紋状の切り	○淡水褐色 ○やや軟質	63	5	39	正	油絵	4.5cm	ナメ
												○赤色 ○軟質		
63-21	n	小皿	油絵	6.0cm	ナメ	ナメき状のナメ	○淡褐色 ○良好	63	-	6	?	油絵	5.9cm	ナメ
												○赤色 ○軟質		
63-22	n	平	油絵	5.5cm	ナメ	ナメき状のナメ	○淡褐色 ○良好	63	-	7	糊	油絵	7.7cm	ナメ
												○赤色 ○やや軟質		
63-23	n	糊	油絵	7.6cm	ナメ	ナメき状のナメ	○淡褐色 ○良好	63	-	8	小皿	油絵	6.4cm	ナメ
												○赤色 ○やや軟質		
63-24	n	糊	油絵	8.2cm	ナメ	ナメき状のナメ	○淡褐色 ○良好	63	9	?	糊?	油絵	6.6cm	ナメ
												○白色 ○良好		
63-25	n	小皿	油絵	5.5cm	ナメ	ナメき状のナメ	○淡褐色 ○良好	63	-	10	糊	油絵	5.4cm	ナメ
												○赤色 ○やや軟質		
63-26	n	m	油絵	5.2cm	ナメ	ナメき状のナメ	○淡褐色 ○良好	63	11	?	糊?	油絵	5.6cm	ナメ
												○白色 ○やや軟質		
63-27	n	正	油絵	4.5cm	ナメ	ナメき状のナメ	○淡褐色 ○良好	63	-	12	糊	油絵	6.1cm	ナメ
												○赤色 ○やや軟質		
63-28	n	糊	油絵	5.6cm	ナメ	ナメき状のナメ	○淡褐色 ○良好	63	13	29	糊	油絵	6.4cm	ナメ
												○白色 ○やや軟質		
63-29	n	糊	油絵	6.6cm	ナメ	ナメき状のナメ	○淡褐色 ○良好	63	-	14	正	油絵	6.0cm	ナメ
												○白色 ○やや軟質		
63-30	n	糊	油絵	6.2cm	ナメ	ナメき状のナメ	○淡褐色 ○良好	63	15	?	糊	油絵	7.0cm	ナメ
												○淡褐色 ○やや軟質		
63-31	n	糊	油絵	8.9cm	ナメ	ナメき状のナメ	○淡褐色 ○良好	63	-	16	糊	油絵	5.4cm	ナメ
												○赤色 ○やや軟質		
64-1	40	糊	油絵	6.1cm	ナメ	ナメき状のナメ	○淡褐色 ○良好	63	-	17	糊	油絵	6.4cm	ナメ
												○白色 ○やや軟質		
64-2	n	糊	油絵	6.1cm	ナメ	ナメき状のナメ	○淡褐色 ○良好	63	-	18	糊	油絵	4.4cm	糊
												○白色 ○やや軟質		
64-3	n	糊	油絵	6.3cm	ナメ	ナメき状のナメ	○淡褐色 ○良好	63	-	19	糊?	油絵	6.4cm	糊
												○白色 ○やや軟質		

種類番号		学名		科		属		種		色調・斑点・模様		特徴		測定・計量	
64-19	40	側	高さ 8.4cm	ナデ	ナデの失敗現象 葉先がよく伸びる の葉序	○淡褐色	○淡褐色の小葉は多く の葉序	64-4	40	幅	5-4cm	ナデ大き目のナデ の淡褐色の葉先がよく 伸びる葉序	○淡褐色の葉先がよく 伸びる葉序	幅	5-4cm
64-20	17	側	高さ 7.0cm	ナデ	ナデの失敗現象 葉先がよく伸びる の葉序	○淡褐色	○淡褐色の葉先は多く の葉序	64-5	17	幅	5-6cm	ナデ大き目のナデ の淡褐色の葉先がよく 伸びる葉序	○淡褐色の葉先がよく 伸びる葉序	幅	5-6cm
64-21	17	小皿	高さ 5.4cm	ナデ	ナデの失敗現象 葉先がよく伸びる の葉序	○淡褐色	○淡褐色の葉先は多く の葉序	64-6	17	幅	6-7cm	ナデ大き目のナデ の淡褐色の葉先がよく 伸びる葉序	○淡褐色の葉先がよく 伸びる葉序	幅	6-7cm
64-22	17	小皿	高さ 6.4cm	ナデ	ナデの失敗現象 葉先がよく伸びる の葉序	○淡褐色	○淡褐色の葉先は多く の葉序	64-7	17	幅	7.0cm	ナデ大き目のナデ の淡褐色の葉先がよく 伸びる葉序	○淡褐色の葉先がよく 伸びる葉序	幅	7.0cm
64-23	17	側	高さ 9.6cm	ナデ	ナデの失敗現象 葉先がよく伸びる の葉序	○淡褐色	○淡褐色の葉先は多く の葉序	64-8	17	幅	4.5cm	ナデ大き目のナデ の淡褐色の葉先がよく 伸びる葉序	○淡褐色の葉先がよく 伸びる葉序	幅	4.5cm
64-24	17	側	高さ 6.8cm	ナデ	ナデの失敗現象 葉先がよく伸びる の葉序	○淡褐色	○淡褐色の葉先は多く の葉序	64-9	17	幅	4.4cm	ナデ大き目のナデ の淡褐色の葉先がよく 伸びる葉序	○淡褐色の葉先がよく 伸びる葉序	幅	4.4cm
65-1	40	小皿	高さ 5.0cm	ナデ	ナデの失敗現象 葉先がよく伸びる の葉序	○淡褐色	○淡褐色の葉先は多く の葉序	64-10	40	幅	5-8cm	ナデ大き目の強い の淡褐色の葉先を多く含む	○淡褐色の葉先を多く含む	幅	5-8cm
65-2	17	小皿	高さ 5.8cm	ナデ	ナデの失敗現象 葉先がよく伸びる の葉序	○淡褐色	○淡褐色の葉先は多く の葉序	64-11	17	幅	5-4cm	ナデ大き目のナデ の淡褐色の葉先を多く含む	○淡褐色の葉先を多く含む	幅	5-4cm
65-3	41	小皿	高さ 6.6cm	ナデ	ナデの失敗現象 葉先がよく伸びる の葉序	○淡褐色	○淡褐色の葉先は多く の葉序	64-12	17	幅	6-8cm	ナデ大き目のナデ の淡褐色の葉先を多く含む	○淡褐色の葉先を多く含む	幅	6-8cm
65-4	40	小皿	高さ 7.8cm	ナデ	ナデの失敗現象 葉先がよく伸びる の葉序	○淡褐色	○淡褐色の葉先は多く の葉序	64-13	40	幅	7.0cm	ナデ大き目のナデ の淡褐色の葉先を多く含む	○淡褐色の葉先を多く含む	幅	7.0cm
65-5	17	小皿	高さ 4.7cm	ナデ	ナデの失敗現象 葉先がよく伸びる の葉序	○淡褐色	○淡褐色の葉先は多く の葉序	64-14	17	幅	7.3cm	ナデ大き目のナデ の淡褐色の葉先を多く含む	○淡褐色の葉先を多く含む	幅	7.3cm
65-6	17	小皿	高さ 4.2cm	ナデ	ナデの失敗現象 葉先がよく伸びる の葉序	○淡褐色	○淡褐色の葉先は多く の葉序	64-15	17	幅	7.2cm	ナデ大き目のナデ の淡褐色の葉先を多く含む	○淡褐色の葉先を多く含む	幅	7.2cm
65-7	41	皿	高さ 3.4cm	ナデ	ナデの失敗現象 葉先がよく伸びる の葉序	○淡褐色	○淡褐色の葉先は多く の葉序	64-16	41	幅	9.0cm	ナデ大き目のナデ の淡褐色の葉先を多く含む	○淡褐色の葉先を多く含む	幅	9.0cm
65-8	40	小皿	高さ 4.0cm	ナデ	ナデの失敗現象 葉先がよく伸びる の葉序	○淡褐色	○淡褐色の葉先は多く の葉序	64-17	40	幅	9.0cm	ナデ大き目のナデ の淡褐色の葉先を多く含む	○淡褐色の葉先を多く含む	幅	9.0cm
65-9	17	小皿	高さ 4.0cm	ナデ	ナデの失敗現象 葉先がよく伸びる の葉序	○淡褐色	○淡褐色の葉先は多く の葉序	64-18	17	幅	6-4cm	ナデ大き目のナデ の淡褐色の葉先を多く含む	○淡褐色の葉先を多く含む	幅	6-4cm

測定番号							留置場	留置	法	量	調	整	法	量	調	整	色	相	感
69- 2	留置器	11往	16.8cm	留置ナメ	○赤色、内面に凹凸があり ○良好	○赤色の小砂粒を含む	67- 8	42	深鉛錠	底坪	6.8cm	全周ナメ	○黒褐色 ○褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	
69- 3	留置器	口径	14.6cm	ナメ	○青色 ○良好	○青色の砂粒を含む	68- 1	42	深鉛錠	底坪	11.1cm	全周ナメ	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	
69- 4	留置器	11往	12.4cm	ナメ	○青褐色 ○良好	○青褐色の砂粒を含む ○良好	69- 2	7	深鉛錠	底坪	16.2cm	ヘラ打	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	
69- 5	留置器	底坪	10.1cm	ナメ	○青色 ○良好	○青色の砂粒を含む ○良好	69- 3	7	深鉛錠	底坪	3.4cm	全周凹面ナメ	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	
69- 6	留置器	底坪	10.6cm	四板ナメ	○青色 ○良好	○青色の砂粒を含む ○良好	69- 4	7	深鉛錠	底坪	1.4cm	ナメ	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	
69- 7	留置器	底坪	9.9cm	ナメ	○青色 ○良好	○青色の砂粒を含む ○良好	69- 5	7	深鉛錠	底坪	—	ナメ	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	
69- 8	留置器	底坪	8.0cm	ナメ	—	○青色の砂粒を含む	69- 6	7	深鉛錠	底坪	—	ナメ	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	
69- 9	留置器	底坪	7.6cm	ナメ	○青色 ○良好	○青色の砂粒を含む ○良好	69- 7	7	深鉛錠	底坪	12.3cm	ナメ	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	
69-10	留置器	底坪	6.9cm	四板ナメ	—	—	69- 8	7	深鉛錠	底坪	9.8cm	ナメ	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	
69-11	留置器	底坪	7.6cm	四板ナメ	つぎナメ	○青色の砂粒を含む	69- 9	7	深鉛錠	底坪	11.6cm	ナメ	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	
69-12	留置器	底坪	7.0cm	ナメ	—	—	69-10	7	深鉛錠	底坪	7.0cm	ナメ	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	
69-13	留置器	口径	16.5cm	留置ナメ	○青色 ○良好	○青色の砂粒を含む	69-11	7	深鉛錠	底坪	12.0cm	ナメ	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	
69-14	留置器	底坪	12.4cm	ナメ	○青色 ○良好	○青色の砂粒を含む ○良好	69-12	7	深鉛錠	底坪	10.0cm	ナメ	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	○黒褐色	○口紅色の砂粒を含む	ヘラ打	
69-15	留置器	底坪	14.5cm	四板ナメ	—	—	69-13	7	深鉛錠	底坪	15.2cm	ナメ	—	—	—	—	—	—	
69-16	留置器	底坪	6.0cm	四板ナメ	凹版水切り	—	69- 1	7	深鉛錠	底坪	14.3cm	ナメ	—	—	—	—	—	—	

標本番号		器種	決	主	副	類	色調・地土・地況	備	参考
71-2	縁	口筒	20.4cm	ナデ	強いたゞ	り白灰色 ○底質	り白灰色 ○底質	○物が口元 ○底質の付着を多く含む ○底質	—
71-3	縁	底泥筒	46.2cm	アリタキ	内面：灰 ○外側：褐色、内面：灰 ○やや底質	アリタキの内側 ○外側：褐色、内面：灰 ○やや底質	アリタキの内側 ○外側：褐色、内面：灰 ○やや底質	○表面：褐色 ○底質：灰 ○良好	○表面：褐色 ○底質：灰 ○良好
71-4	縁	底泥筒	10.0cm	アリタキ	内面：灰 ○良好	アリタキの内側 ○外側：褐色 ○良好	アリタキの内側 ○外側：褐色 ○良好	—	—
71-5	縁	底泥筒	11.5	アリタキ	内面：灰 ○良好	アリタキの内側 ○外側：褐色 ○良好	アリタキの内側 ○外側：褐色 ○良好	—	—
71-6	縁	底泥筒	37.0cm	アリタキ	内面：灰 ○良好	アリタキの内側 ○外側：褐色 ○良好	アリタキの内側 ○外側：褐色 ○良好	—	—
71-7	縁	底泥筒	1.0	アリタキ	内面：灰 ○良好	アリタキの内側 ○外側：褐色 ○良好	アリタキの内側 ○外側：褐色 ○良好	—	—
71-8	縁	底泥筒	—	アリタキ	内面：灰 ○良好	アリタキの内側 ○外側：褐色 ○良好	アリタキの内側 ○外側：褐色 ○良好	—	—
72-1	アリタキ	底泥筒	11.5	ナデ	2.7cm (2.4cm 底)	り白灰色 ○良好	り白灰色 ○良好	—	—
72-2	アリタキ	底泥筒	17.5	アリタキ	内面ナデ ○良好	アリタキの内側 ○良好	アリタキの内側 ○良好	—	—
73-1	アリタキ	アリ	—	アリ	—	—	—	—	—
73-2	n	アリ	—	アリ	—	—	—	—	—
73-3	n	アリ	—	アリ	—	—	—	—	—
73-4	n	アリ	—	アリ	—	—	—	—	—
73-5	n	アリ	—	アリ	—	—	—	—	—
69-17	底泥筒	外	—	ナデ	—	—	—	○物が口元 ○底質の付着を多く含む ○底質	—
69-18	底泥筒	外	—	アリタキ	—	—	—	○表面：褐色 ○底質：灰 ○良好	—
69-19	底泥筒	外	—	アリタキ	—	—	—	○表面：褐色 ○底質：灰 ○良好	—
69-20	底泥筒	外	—	アリタキ	—	—	—	—	—
69-21	底泥筒	外	—	アリタキ	—	—	—	—	—
69-22	底泥筒	外	—	アリタキ	—	—	—	—	—
69-23	底泥筒	外	—	アリタキ	—	—	—	—	—
70-1	底泥筒	外	—	アリタキ	—	—	—	—	—
70-2	底泥筒	外	—	アリタキ	—	—	—	—	—
70-3	底泥筒	外	—	アリタキ	—	—	—	—	—
70-4	底泥筒	外	—	アリタキ	—	—	—	—	—
70-5	底泥筒	(外)	—	アリタキ	—	—	—	—	—
70-6	底泥筒	外	—	アリタキ	—	—	—	—	—
70-7	底泥筒	外	—	アリタキ	—	—	—	—	—
71-1	底泥筒	外	—	アリタキ	—	—	—	—	—

採集番号	固有名	地 理	法 則	通 路	色 調	斑 点	標 本	色調・斑点・発光	標 号
103-2	♂ 頭	底地	直進	5.0km [リ]面メツ ヘタカホ?	○明るい褐色 ○やや黒質	○白色の小砂粒を多く含む	73-6 白頭 幅	○白色をなし、褐色が混じる ○口に黒質で、頭部は白質 ○口に黒質で、頭部は白質	73-
103-3	♂ 尾	底地	底地	8.0km [田]地アマ 田んぼ切り	○淡い褐色~明るい褐色 ○やや黒質	○白色の小砂粒を少し含む	73-7 白尾 幅	○褐色、灰色 ○褐色の小砂粒を含む	-
103-4	♀ 尾	底地	底地	6.6km [田]地アマ 田んぼ切り	○暗めの褐色 ○やや黒質	○白色の小砂粒を少し含む	73-8 白尾 幅?	○褐色、内部面で暗め ○外側は白質、頭部は黒質 ○褐色の小砂粒を含む	-
103-5	♂ 54?	底地	底地	6.6km [田]地アマ 田んぼ切り	○褐色 ○良好	○白色の小砂粒をわずかに含む	73-9 白尾 幅?	○褐色、内側は白質で、頭部は黒質 ○褐色の小砂粒を含む	73-
103-6	♀ 頭	底地	底地	5.5km [田]地アマ 田んぼ切り	○淡い褐色 ○良好	○白色の小砂粒をわずかに含む	73-10 白頭 幅	○褐色、内側は白質で、頭部は黒質 ○褐色の小砂粒を含む	-
103-7	♀ 田面	田面	口辻	15.6km [田]地アマ 田んぼ切り	○褐色 ○良好	○褐色、白色の小砂粒を少し含む	74-1 鷹頭 幅	○褐色、内側は白質で、頭部は黒質 ○褐色の小砂粒を含む	74-
103-8	♀ 頭	底地	底地	6.4km [田]地アマ 田んぼ切り	○褐色 ○良好	○明るい褐色 ○白色の小砂粒をやや多く含む	101-1 白頭 幅?	○明るい褐色 ○白色の小砂粒をやや多く含む	101-
103-9	♀ 頭	底地	底地	5.4km [田]地アマ 田んぼ切り	○淡い褐色 ○良好	○褐色の小砂粒をわずかに含む	101-2 白頭 幅?	○明るい褐色 ○白色の小砂粒をやや多く含む	-
103-10	♀ 頭	底地	底地	7.8km [田]地アマ 田んぼ切り	○褐色 ○良好	○褐色の小砂粒を少し含む	102-1 白頭 幅?	○褐色の小砂粒をやや多く含む	102-
103-11	♀ 頭	底地	底地	6.2km [田]地アマ 田んぼ切り	○明るい褐色 ○やや黒質	○白色の小砂粒をやや多く含む	102-2 白頭 幅?	○白色の小砂粒をやや多く含む	-
103-12	♂ 頭	底地	底地 (底地アマアマ)	7.1km [田]地アマ 田んぼ切り	○褐色 ○良好	○褐色、頭部は白質 ○白色の小砂粒をやや多く含む	102-3 白頭 幅?	○褐色の小砂粒をやや多く含む	102-
103-13	♂ 頭	底地	底地	5.8km [田]地アマ 田んぼ切り	○褐色 ○良好	○褐色の小砂粒をやや多く含む	102-4 白頭 幅?	○褐色の小砂粒を少々含む	102-
103-14	♂ 頭	底地	底地	5.9km [田]地アマ 田んぼ切り	○淡い褐色 ○良好	○褐色の小砂粒をやや多く含む	102-5 白頭 幅?	○褐色の小砂粒をやや多く含む	102-
103-15	♀ 尾	底地	底地	6.6km [田]地アマ 田んぼ切り	○明るい褐色 ○やや黒質	○白色の小砂粒を少し含む	102-6 白尾 幅?	○褐色の小砂粒を少々含む	102-
103-16	♀ 小頭	山地	山地	8.0km [田]地アマ 田んぼ切り	○褐色 ○良好	○褐色の小砂粒をやや多く含む	103-1 白尾 幅?	○褐色の小砂粒を含む	103-

標本番号(別名)		通称	法	通	調	標	色調・形・大きさ	種
104-7	60 年	口絆	12cm	内縫ナゲ	○黒灰色 ○口縫は白い縫合を含む	横手平 1 / 10 以 下	口縫 内縫 縫合	ナメ水切り
104-8	n	口縫	10.2cm	内縫ナゲ	○口縫は白い縫合を含む	横手平 1 / 10 以 下	口縫 内縫 縫合	ナメ水切り
104-9	n	口縫	10.8cm	内縫ナゲ	○青灰色 ○口縫	横手平 1 / 4 以 下	口縫 内縫 縫合	ナメ水切り
104-10	n	口縫	10.8cm	内縫ナゲ	○黒灰色 ○口縫	横手平 1 / 10 以 下	口縫 内縫 縫合	ナメ水切り
104-11	n	口縫	12.2cm	内縫ナゲ	○黒灰色 ○口縫	横手平 1 / 5 以 下	口縫 内縫 縫合	ナメ水切り
104-12	n	口縫	約10cm	内縫ナゲ	○黒灰色 ○口縫	横手平 1 / 10 以 下	口縫 内縫 縫合	ナメ水切り
104-13	n	面	—	内縫ナゲ	○淡青色 ○口縫	—	—	—
104-14	n	面	—	内縫ナゲ	○淡灰褐色 ○口縫	—	—	—
104-15	n	面	6.0cm	内縫ナゲ	○黒灰色 ○口縫	横手平 1 / 4 以 下	口縫 内縫 縫合	ナメ水切り
104-16	n	面	約6.0cm	内縫ナゲ	○黒灰色 ○口縫	横手平 1 / 10 以 下	口縫 内縫 縫合	ナメ水切り
104-17	n	面	6.0cm	内縫ナゲ	○口縫は白い縫合を含む	横手平 1 / 4 以 下	口縫 内縫 縫合	ナメ水切り
104-18	n	面	9.5cm	内縫ナゲ	○青灰色 ○口縫	—	—	—
104-19	n	底縫	7.2cm	内縫ナゲ	○黒灰色 ○口縫	横手平 1 / 10 以 下	口縫 内縫 縫合	ナメ水切り
104-20	n	底縫	9.2cm	内縫ナゲ	○淡灰褐色 ○口縫	—	—	—
104-21	n	底縫	1.1cm	内縫ナゲ	○赤褐色 ○口縫	—	—	—

標本番号・学名	地點	法 世	調 研	外觀・性状・構成	側	側	側	側	側	側	側	側
105-3 61 族	高さ 9.6cm 脚部狭人字 17.8cm	外側：花辦2枚。 内側：ナゲナダ 17.8cm	の暗紅色 の白色の毛被を含む の良好 ナリ切り後ナダ?	の暗紅色 の白色 の良好 ナリ切り後ナダ?	104-22	60	坪	底辺 10.0cm	内面： 株付ナダ の黄 の黄 の黄	外壁： 株付ナダ ナダ	の淡紅色 の黄 の黄	の淡紅色 の黄 の黄
105-4 n 族	—	筋性 12.2cm 脚部 剥離ナダ	の淡紅色 の良好 ナリ切 り後ナダ?	—	104-23	23	坪	底辺 8.0cm	内面： 株付ナダ ナダ	外壁： 株付ナダ ナダ	の淡紅色 の少葉 の少葉	の淡紅色 の少葉 の少葉
105-5 n 族	—	筋性 10.1cm 全體	の青紅褐色 の葉 の葉	—	104-24	61	坪	底辺 11.0cm	内面： 株付ナダ ナダ	外壁： 株付ナダ ナダ	の青紅色 の葉 の葉	の青紅色 の葉 の葉
105-6 n 族?	—	筋性 9.2cm 脚部	の淡紅色 ナリ切 り後ナダ?	—	104-25	21	坪	底辺 10.0cm	内面： 株付ナダ ナダ	外壁： 株付ナダ ナダ	の青紅色 の葉 の葉	の青紅色 の葉 の葉
105-7 n 族	—	筋性 16.6cm 脚部	の淡紅褐色 ナリ切 り後ナダ?	—	104-26	67	坪	底辺 8.0cm	内面： 株付ナダ ナダ	外壁： 株付ナダ ナダ?	の青紅色 の葉 の葉	の青紅色 の葉 の葉
105-8 n 族	—	筋性 11.0cm 脚部	の青紅褐色 ナリ切 り後ナダ?	—	104-27	21	坪	底辺 11.6cm	内面： 株付ナダ ナダ	外壁： 株付ナダ ナダ	の青紅色 の葉 の葉	の青紅色 の葉 の葉
105-9 n 族	—	筋性 20.0cm 脚部	の青 の青	—	104-28	27	坪	底辺 10.0cm	内面： 株付ナダ ナダ	外壁： 株付ナダ ナダ	の青紅色 の葉 の葉	の青紅色 の葉 の葉
105-10 n 族	—	筋性 18.2cm 脚部	の青紅色 ナリ切 り後ナダ?	—	104-29	27	坪	底辺 9.8cm	内面： 株付ナダ ナダ	外壁： 株付ナダ ナダ	の青紅色 の葉 の葉	の青紅色 の葉 の葉
105-11 n 族	—	筋性 10.0cm 脚部	の青紅色 ナリ切 り後ナダ?	—	104-30	21	坪	底辺 12.0cm	内面： 株付ナダ ナダ	外壁： 株付ナダ ナダ	の青紅色 の葉 の葉	の青紅色 の葉 の葉
105-12 n 族	—	筋性 11.0cm 脚部	の青紅色 ナリ切 り後ナダ?	—	104-31	21	坪	底辺 7.2cm	内面： 株付ナダ ナダ	外壁： 株付ナダ ナダ?	の青紅色 の葉 の葉	の青紅色 の葉 の葉
105-13 n 族	—	筋性 5.8cm 脚部	の青 の青 の葉	—	104-32	27	坪か?	底辺 9.0cm	内面： 株付ナダ ナダ	外壁： 株付ナダ ナダ?	の青紅色 の葉 の葉	の青紅色 の葉 の葉
106-1 62 族	口幅 13.1cm 筋部 7.1cm	全體：脚部ナダ	の青紅色 の白色の小形葉を含む の根茎葉状な良好	—	104-33	27	坪	底辺 12cm	内面： 株付ナダ ナダ?	外壁： 株付ナダ ナダ?	の青紅色 の葉 の葉	の青紅色 の葉 の葉
106-2 n 族	筋部 7.5cm	脚部 剥離 13.5cm	脚部ナダ	—	104-34	27	坪	口幅 16.8cm	内面： 株付ナダ ナダ	外壁： 株付ナダ ナダ	の青紅色 の葉 の葉	の青紅色 の葉 の葉
106-3 n 族?	口幅 13.0cm 筋部 13.1	脚部ナダ	の淡青火褐色 の葉	—	105-1	27	坪?	底辺 3.2cm	内面： 株付ナダ ナダ	外壁： 株付ナダ ナダ	の淡青火褐色 の葉	の淡青火褐色 の葉
106-4 n 族?	口幅 13.0cm 筋部	脚部ナダ	の淡青火褐色 の葉	—	105-2	27	坪	底辺 10.0cm	内面： 株付ナダ ナダ	外壁： 株付ナダ ナダ	の淡青火褐色 の葉	の淡青火褐色 の葉

標定番号	品種	法	目	測	色調	色調・施上・施成	施	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地
106-20 62	洋服鉢	口	11往	外径 1.3cm 底径 1.1cm 高さ 3.4cm	円柱	円柱ナダ	—	○濃い赤 ○濃い黒 ○濃い緑 ○濃い青	○濃い赤 ○濃い黒 ○濃い緑 ○濃い青	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
106-21 n	白箱	n	11往	外径 1.45cm 底径 1.2cm 高さ 5.6cm	外筒：四点糸切り 内筒：四点糸切り	—	○濃い赤 ○濃い黒 ○濃い緑 ○濃い青	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
106-22 n	洋服鉢	n	11往	外径 1.52cm 底径 6.0cm	外筒：四点糸切り 内筒：四点糸切り	—	○濃い赤 ○濃い黒 ○濃い緑 ○濃い青	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
106-23 n	深色鉢	n	11往	外径 6.3cm 底径 6.3cm	円筒：切妻ナダ 外筒：四点糸切り	—	○濃い赤 ○濃い黒 ○濃い緑 ○濃い青	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
107-1 63	白箱 N 鉢	n	11往	外径 1.5cm 底径 1.3cm	—	—	—	○濃い赤 ○濃い黒 ○濃い緑 ○濃い青	○濃い赤 ○濃い黒 ○濃い緑 ○濃い青	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
107-2 n	白箱 V 鉢	n	11往	外径 1.4cm 底径 1.2cm	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
107-3 n	白箱 N 鉢	n	11往	外径 6.8cm 底径 6.8cm	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
107-4 n	白箱 V 鉢	n	11往	外径 7.4cm 底径 7.4cm	テヌリ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
107-5 n	洋服鉢	n	11往	外径 6.9cm 底径 6.9cm	アズワ 四点ナダ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
107-6 62	白箱 N 鉢	n	11往	外径 7.1cm 底径 6.0cm	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
107-7 n	白箱 V 鉢	n	11往	外径 10.2cm 底径 10.2cm	テヌリ 〔2つおり〕	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
107-8 n	白箱 V 鉢	n	11往	外径 10.5cm 底径 10.5cm	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
107-9 n	白箱	n	11往	外径 10.5cm 底径 10.5cm	テヌリ 〔2つおり〕	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
107-10 n	陶器鉢	n	11往	外径 10.5cm 底径 10.5cm	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
107-11 n	高さのない 鉢	n	11往	外径 20.5cm 底径 20.5cm	ナダ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

標識番号	学名	種	形態	色調・斑紋・模様	備考	所収集地	海 深	底	調	網	色調・斑紋	備考
116-4 65 種	口付	21.8cm	ココナデ チエリ	○褐色～駆除色 ○良好		十勝沖 錦糸	11.8m 62	ナメ	26.0cm	ナメ	○駆除色の ○良好	
116-5 n 種	口付	11.7cm	頭輪6.9mm	○白色 ○1~3mmの斑紋を多く含む ○良好		107-13 63	ナメ	22.4cm	ナメ	○駆除色 ○良好		
116-6 n 種	口付	18.8cm	ココナデ チエリ	○褐色～駆除色 ○1mm以下の斑紋を含む ○良好		108-1 64	ナメ			○駆除色の ○良好		
116-7 n 種	口付	4.9cm 3.6cm 6.0cm 61.78kg	4.9cm 3.6cm 6.0cm 61.78kg	○褐色～駆除色 ○1mmの斑紋を含む ○良好		108-2 2	ナメ			○駆除色 ○良好		
116-8 n 土鰐	口付	11.7cm	ナメ	○褐色～駆除色 ○1mmの斑紋を含む ○良好		109-1 0	ナメ			○駆除色 ○良好		
116-9 n 87.6kg	成年頭鰓	11.6cm	ナメ	○褐色～駆除色 ○1mmの斑紋を含む ○良好		109-2 0	ナメ			○駆除色 ○良好		
116-10 n 小頭鰓	口付	5.6cm	ナメ 四輪切り	○褐色～駆除色 ○1mm以下ドの褐色の斑紋を ○良好		109-3 0	ナメ			○駆除色 ○良好		
116-11 n 小頭鰓	口付	8.6cm 4.7cm	ナメ 四輪切り	○褐色～駆除色 ○1mmの斑紋を含む ○良好		109-4 0	ナメ			○駆除色 ○良好		
116-12 n 小頭鰓	口付	8.6cm	ナメ 四輪切りか?	○褐色～駆除色 ○良好		110-1 66	地	11.8m 22.4cm	ナメ	○駆除色 ○良好		
116-13 n 小頭鰓	口付	9.6cm	ナメ	○褐色～駆除色 ○良好		110-2 0	地	11.8m 22.4cm	ナメ	○駆除色 ○良好		
116-14 n ドリホ	口付	-	-	○褐色～駆除色 ○良好		110-3 0	地	11.8m 22.4cm	ナメ	○駆除色 ○良好		
116-15 n 背鰓	口付	11.8cm	ハゲノ、ハゲメ 頭輪6.7cm	○褐色～駆除色 ○良好		110-4 0	地	11.8m 22.4cm	ナメ	○駆除色 ○良好		
117-1 66 種	頭輪6.2cm	7.46	ナメナメ	○褐色～駆除色 ○良好		110-1 65	地	11.8m 22.4cm	ナメ	○駆除色 ○良好		
117-2 n 頭鰓	口付	10.5cm	ナメナメナメ	○駆除色 ○良好		110-2 0	地	11.8m 22.4cm	ナメナメ	○駆除色 ○良好		
117-3 n 四頭鰓	頭輪6.2cm	7.46	ナメナメ	○駆除色 ○良好		110-3 0	地	11.8m 22.4cm	ナメナメ	○駆除色 ○良好		

標本番号	年月日	地名	標高	調査範囲	標本	備考
1117-19 67	須恵町 片	須恵	83m	田原山	ナメハタアリ	白腹・脚・趾端
1117-20 n	須恵町 元	須恵	86m	不特定	ナメハタアリ	○黒灰色 ○白色 ○黑色
1117 21 n	須恵町 元	須恵	9.5cm	不特定	ナメハタアリ	○白色 ○黑色
1117-22 n	須恵町 元	須恵	9.4cm	ナメハタアリ	ナメハタアリ	○白色の小形種をやや多く ○白色
1117 23 n	須恵町 片	須恵	96mm	田原山	ナメハタアリ	○青灰色 ○白色
1117-24 n	須恵町 片	須恵	79mm	田原山	ナメハタアリ	○青灰色 ○白色
1117 25 n	須恵町 片	須恵	96mm	田原山	ナメハタアリ	○青灰色 ○白色
1117-26 n	須恵町 片	須恵	95mm	田原山	ナメハタアリ	○青灰色 ○白色
1117-27 n	須恵町 片	須恵	9.7cm	不特定	ナメハタアリ	○白色 ○黑色
1117 28 n	須恵町 片	須恵	76mm	田原山	ナメハタアリ	○青灰色 ○白色
1117-29 n	須恵町 片	須恵	11mm	不特定	ナメハタアリ	○青灰色 ○白色
1117-30 n	須恵町 片	須恵	10.5cm	田原山	ナメハタアリ	○青灰色 ○白色
1117-31 n	須恵町 片	須恵	6.5cm	田原山	ナメハタアリ	○青灰色 ○白色
1117-32 n	須恵町 片	須恵	9cm	田原山	ナメハタアリ	○青灰色 ○白色
1117-33 n	須恵町 片	須恵	80mm	田原山	ナメハタアリ	○青灰色 ○白色

標識番号	学名	種類	分類・術式・性状	調査				備考
				法	量	調	理	
118-13 n 小型	アカウツギ	門式	11.4cm ナード	○明黄色 ○丸形容小形花を含む	117-31 67 緑地黒 糸	透視 延長 7.7cm	ナデ	○明黄色 ○灰色の小粒を含む
118-14 n 消滅	アカウツギ	門式	8.5cm	同様ナード 糸	117-35 # 黒地白 糸	透視 延長 8.0cm	ナデ	○明黄色 ○灰白色の地紋を含む
118-15 n 残存	アカウツギ	門式	8cm	同様ナード 糸	117-36 # 黑地白 糸	透視 延長 10.4cm	ナデ	○明黄色 ○灰白色の地紋を含む
118-16 n 開花	アカウツギ	門式	6.5cm	同様ナード 糸	118 1 # 黄 糸	透視 延長 6.0cm	ナデ	○明黄色 ○灰白色の地紋を含む
118-17 n 白化	アカウツギ	門式	6cm	同様ナード 糸	118-2 # 黄 糸	透視 延長 6.0cm	ナメテ	○明黄色 ○灰白色の地紋を含む
118-18 66 打	アカウツギ	門式	5cm	同様ナード 糸	118-3 # 黄 糸	透視 延長 6.0cm	ナメテ	○明黄色 ○灰白色の地紋を含む
118-19 n 垂直	アカウツギ	門式	—	同様ナード 糸	118-4 # 黄 糸	透視 延長 6.0cm	ナメテ	○明黄色 ○灰白色の地紋を含む
118-20 n 高さ	アカウツギ	門式	12.0cm	同様ナード 糸	118-5 # 黄 糸	透視 延長 6.0cm	ナメテ	○明黄色 ○灰白色の地紋を含む
118-21 n (葉の病害)	アカウツギ	門式	—	同様ナード 糸	118-6 # 黄 糸	透視 延長 6.0cm	ナメテ	○明黄色 ○灰白色の地紋を含む
118-22 n 残存	アカウツギ	門式	3.5cm	同様ナード 糸	118-7 # 黄 糸	透視 延長 6.0cm	ナメテ	○明黄色 ○灰白色の地紋を含む
119-1 66 打	アカウツギ	門式	—	同様ナード 糸	118-8 # 黄 糸	透視 延長 6.0cm	ナメテ	○明黄色 ○灰白色の地紋を含む
119-2 n 開花	アカウツギ	門式	—	同様ナード 糸	118-9 # 黄 糸	透視 延長 12.3cm	ナデ	○明黄色 ○灰白色の地紋を含む
119-3 n 開花	アカウツギ	門式	13.0cm	同様ナード 糸	118-10 # 黄 糸	透視 延長 7.0cm	ナデ	○明黄色 ○灰白色の地紋を含む
119-4 n 開花	アカウツギ	門式	11.5cm	同様ナード 糸	118-11 # 黄 糸	透視 延長 14.0cm	ナメテ	○明黄色 ○灰白色の地紋を含む
119 5 n 開花	アカウツギ	門式	13.0cm	同様ナード 糸	118 12 # 黄 糸	透視 延長 7.0cm	ナメテ	○明黄色 ○灰白色の地紋を含む

種類番号	学名	分類	科	属	種	通名	色調	斑点・點上・斑点	細胞器			細胞壁	細胞質	細胞核	細胞核内
									葉	茎	花				
125-5 69	土柏樹 江1	土柏樹	松科	江1			○明灰色の白色の形跡をわ り散在する。 ○良好。		119-6	66	葉毛細 管	肉桂	17.5cm ナデ ナデ ナデ	青灰色、 ○良好の小形孔を少く含む	
125-6 n	土柏樹	土柏樹	松科	江1	25.5cm ナコナリ?	ナコナリ?	○明灰色の小形孔を含む ○良好。		119-7	n	葉毛細 管	17.4cm ナデ ナデ	青灰色の ○良好の小形孔を含む	の樹皮灰白。断面：明灰軟 ○良好。	
125-7 n	土柏樹	土柏樹	松科	江1	30 km ナコナリ?	ナコナリ?	○明灰色の ○良好の小形孔を含む		119-8	n	葉毛細 管	18.6cm ナデ	青灰色、 ○良好。	の樹皮灰白。 ○良好。	
125-8 n	土柏樹 江1	土柏樹	松科	江1	11.5m ナコナリ?	ナコナリ?	○明灰色の白色形跡 ○良好。		119-9	n	葉毛細 管	17.7cm ナデ	青灰色 ○良好。	の樹皮灰白。 ○良好。	
125-9 n	土柏樹 江1	土柏樹	松科	江1	11.5m ナコナリ?	ナコナリ?	○明灰色の ○良好。		119-10	n	葉毛細 管	18.6cm ナデ	青灰色 ○良好。	の樹皮灰白。 ○良好。	
125-10 n	土柏樹 江1	土柏樹	松科	江1	5.9m ナコナリ?	ナコナリ?	○明灰色の ○良好。		119-11	n	葉毛細 管?	17.7cm ナデ	青灰色 ○良好。	の樹皮灰白。 ○良好。	
125-11 n	土柏樹 江1	土柏樹	松科	江1	5.8m ナコナリ?	ナコナリ?	○明灰色の ○良好。		119-12	66	葉毛細 管	17.6cm ナデ ナデ	青灰色 ○良好。	の樹皮灰白。 ○良好。	
125-12 n	土柏樹 江1	土柏樹	松科	江1	6.4m ナコナリ?	ナコナリ?	○明灰色の ○良好。		119-13	68	葉毛細 管	17.6cm ナデ	青灰色 ○良好。	の樹皮灰白。 ○良好。	
125-13 n	土柏樹 江1	土柏樹	松科	江1	12.2m ナコナリ?	ナコナリ?	○明灰色の ○良好。		124-1	69	葉毛細 管	7.7cm ナデ ナデ	青灰 ○良好。	の樹皮灰白。 ○良好。	
125-14 n	土柏樹 江1	土柏樹	松科	江1	1.7m ナコナリ?	ナコナリ?	○明灰色の ○良好。		124-2	9	葉毛細 管	5.7cm ナデ	青灰 ○良好。	の樹皮灰白。 ○良好。	
125-15 n	土柏樹 江1	土柏樹	松科	江1	0.6cm ナコナリ?	ナコナリ?	○明灰色の ○良好。		124-3	n	葉毛細 管	7.2cm ナデ ナデ	青灰 ○良好。	の樹皮灰白。 ○良好。	
125-6 n	土柏樹 江1	土柏樹	松科	江1	1.8cm ナコナリ?	ナコナリ?	○明灰色の ○良好。		125-1	n	葉毛細 管	4.0cm ナデ ナデ	青灰 ○良好。	の樹皮灰白。 ○良好。	
125-17 n	土柏樹 江1	土柏樹	松科	江1	1.9cm ナコナリ?	ナコナリ?	○明灰色の ○良好。		125-2	n	葉毛細 管	4.0cm ナデ ナデ	青灰 ○良好。	の樹皮灰白。 ○良好。	
126-1 70	田柏 江1	田柏	松科	江1	9.5cm ナコナリ?	ナコナリ?	○明灰色の ○良好。		125-3	n	葉毛細 管	12.6cm ナデ ナデ	青灰 ○良好。	の樹皮灰白。 ○良好。	
126-2 n	田柏 江1	田柏	松科	江1	15.8cm ナコナリ?	ナコナリ?	○明灰色の ○良好。		125-4	n	葉毛細 管	14.7cm ナデ ナデ	青灰 ○良好。	の樹皮灰白。 ○良好。	

機器番号	機種	外観	測定	色調・地上・地底	特 性
126-3	70 Nm	内面丸 タスリ 6.8mm	物 の 形 状 を 記 録 す る 機 器	○機：複数があり販賣が多 く人ら ○価格を較まない ○二重測定	

図 版

数字は図面の番号に対応

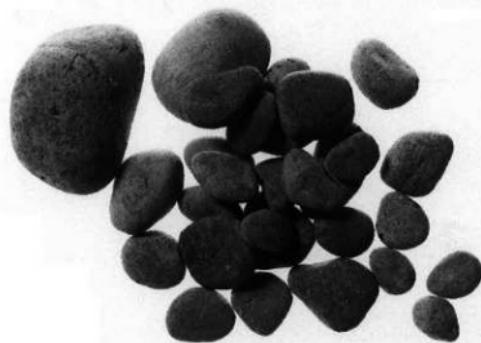


古八幡付近遺跡III区全景



土壤完掘状況
(西から)

嘉久志遺跡完掘状況
(北から)



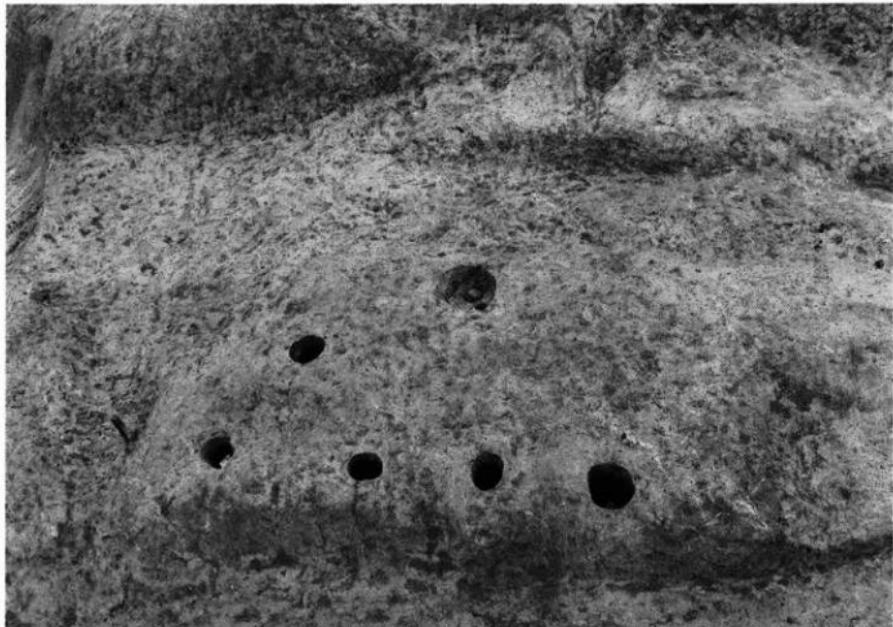
嘉久志遺跡出土玉石



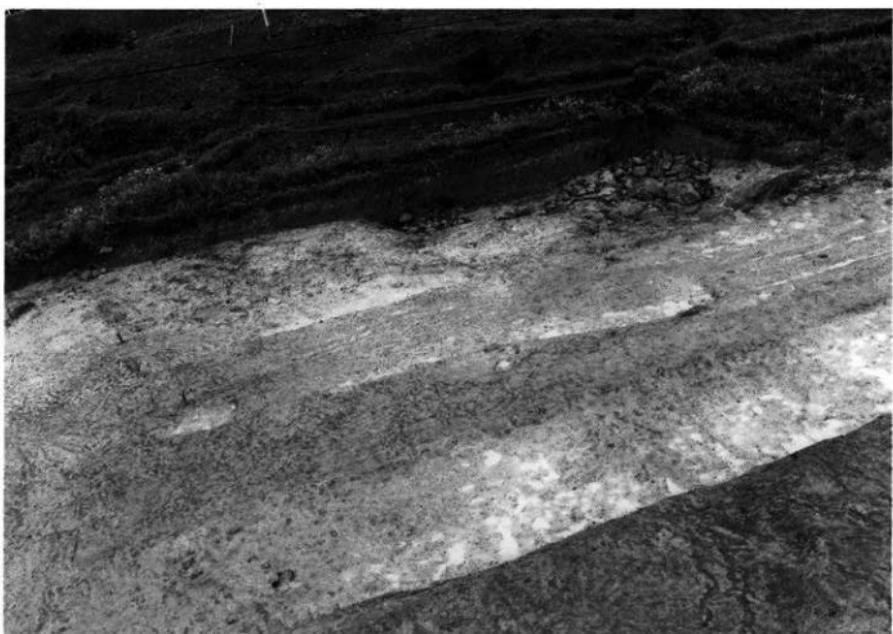
飯田 C 遺跡遠景（東から）



第 1 平面～第 2 平面完掘状況（東から）



第3平面SD-3・4付近完掘状況（東から）



第3斜面～第5平面完掘状況（西から）



第 3 平面落ち込み完掘状況（北から）



第 3 平面南壁土層堆積状況



第4 斜面南壁土層堆積状況



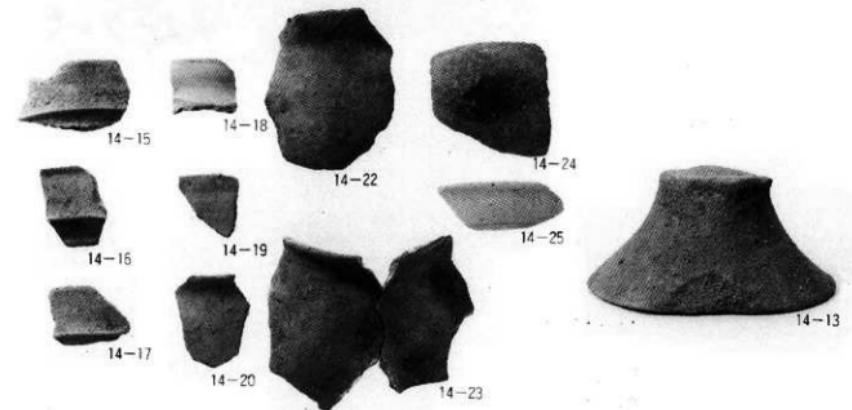
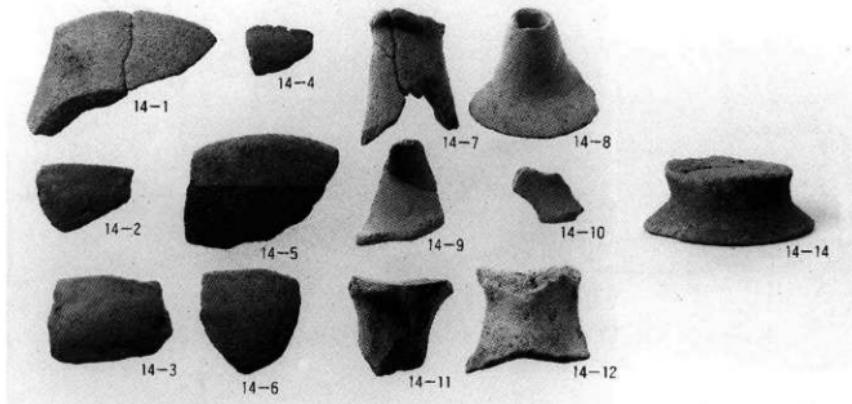
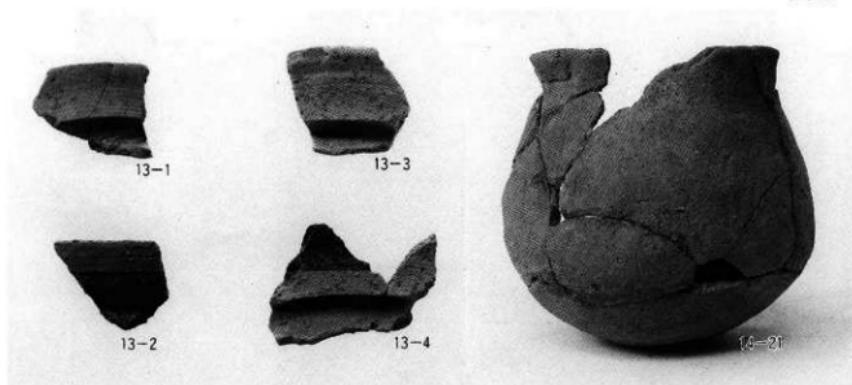
第5 平面土層堆積状況（北から）

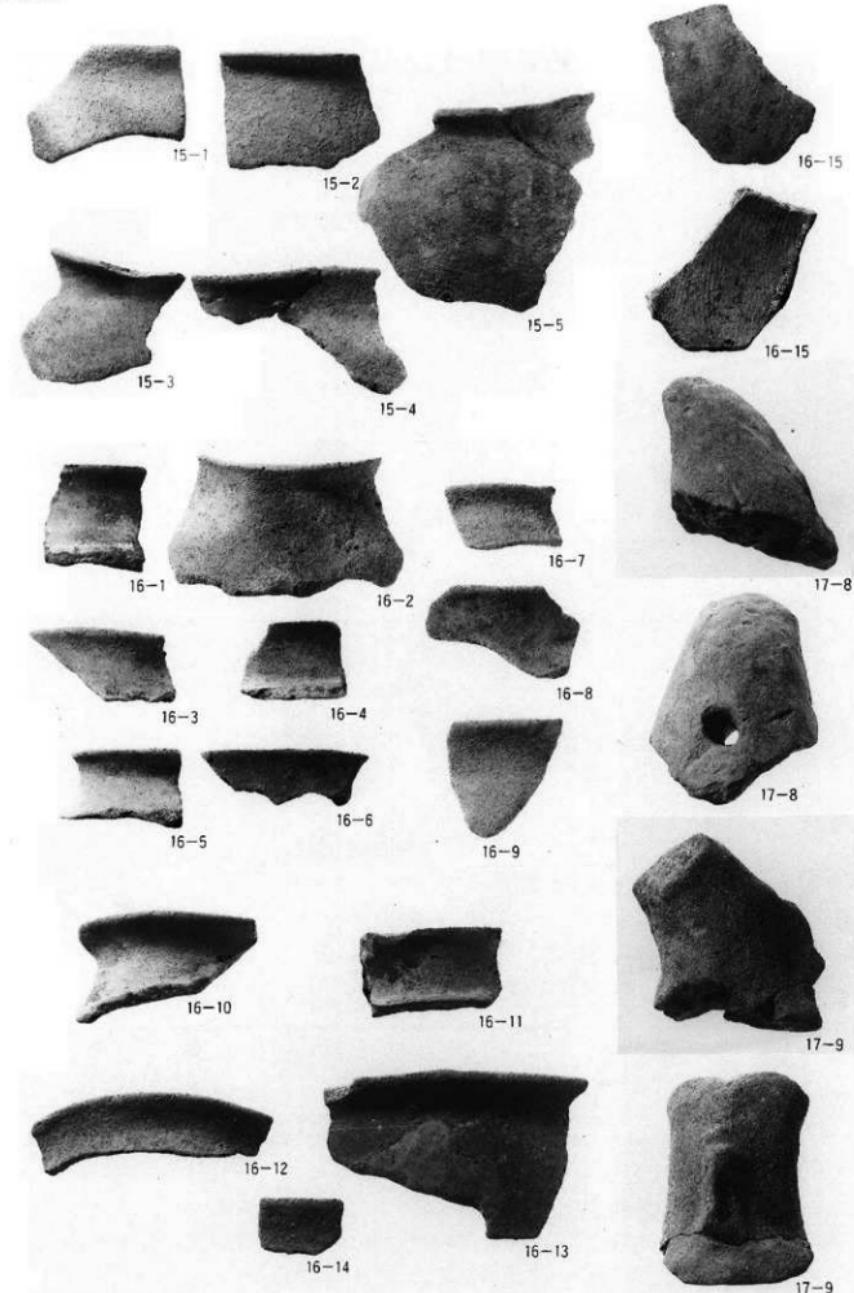


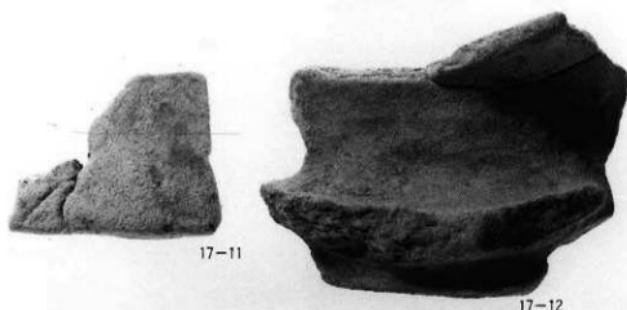
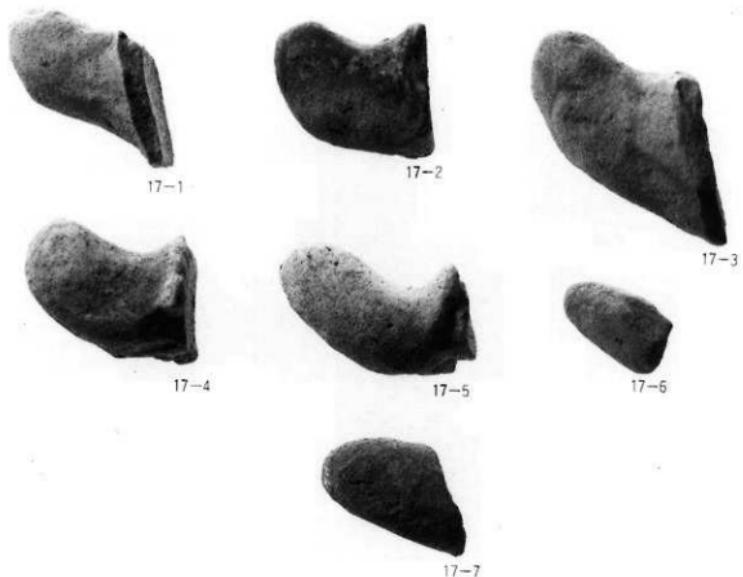
飯田 C 遺跡調査後全景（東から）

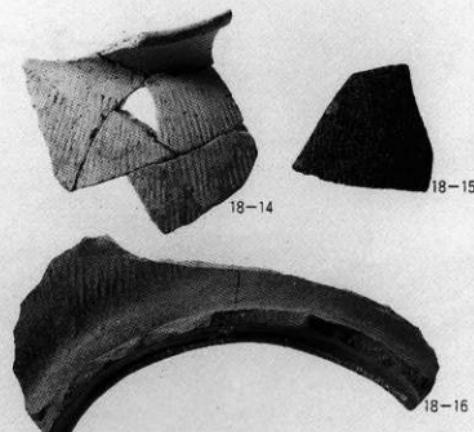
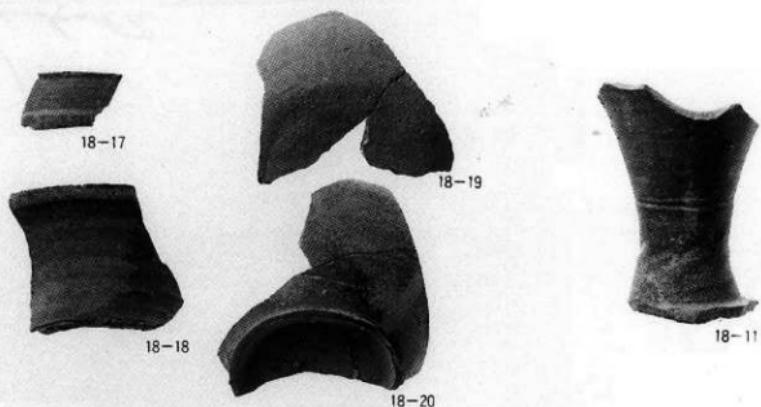
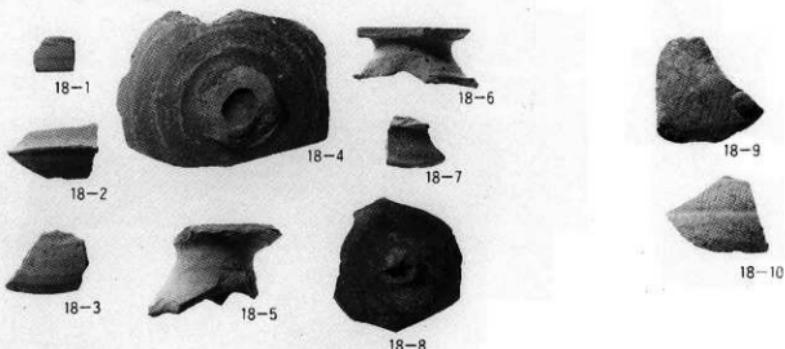


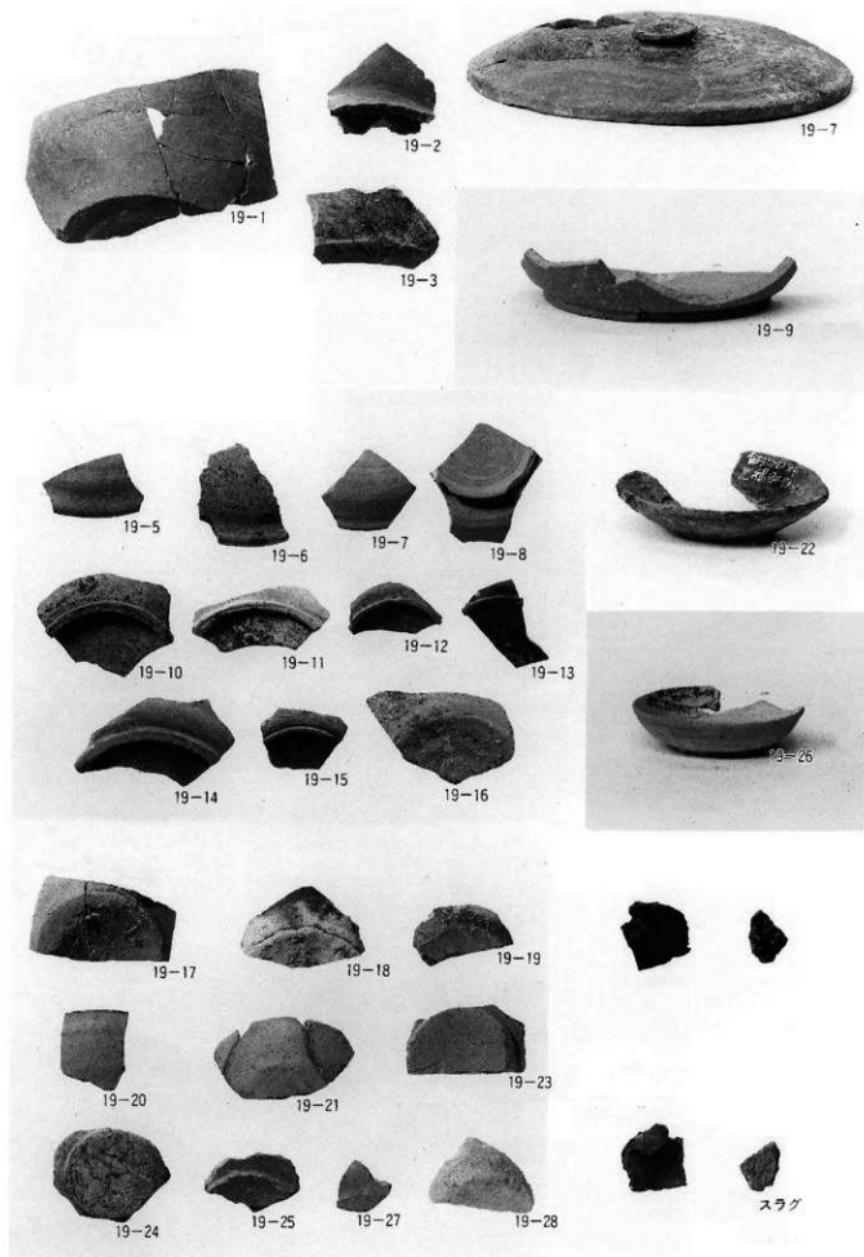
飯田 C 遺跡第 4 斜面作業風景

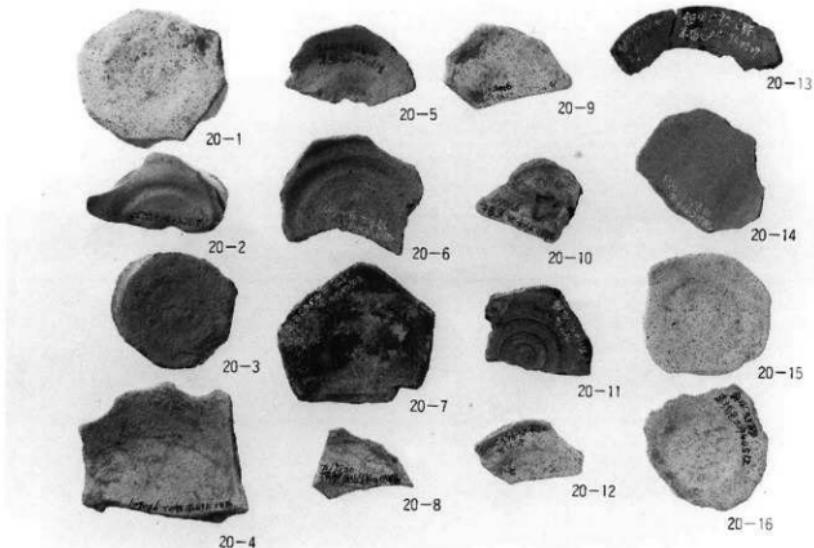
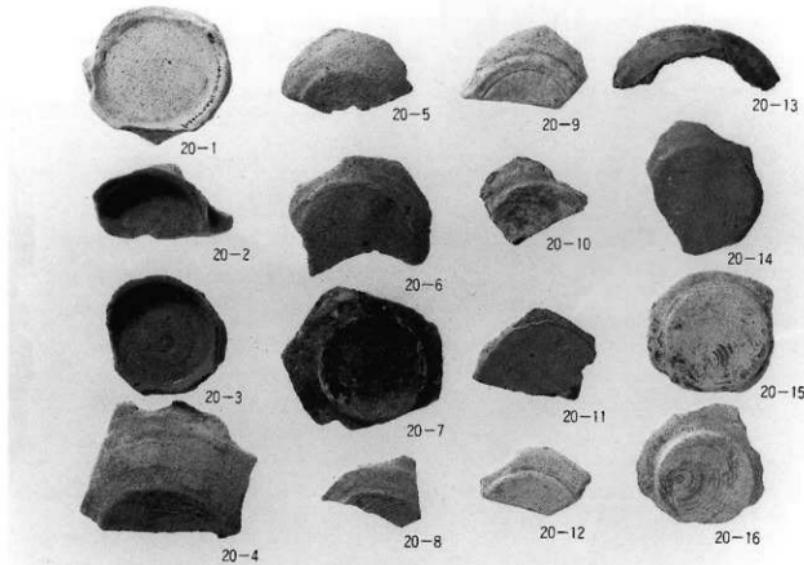


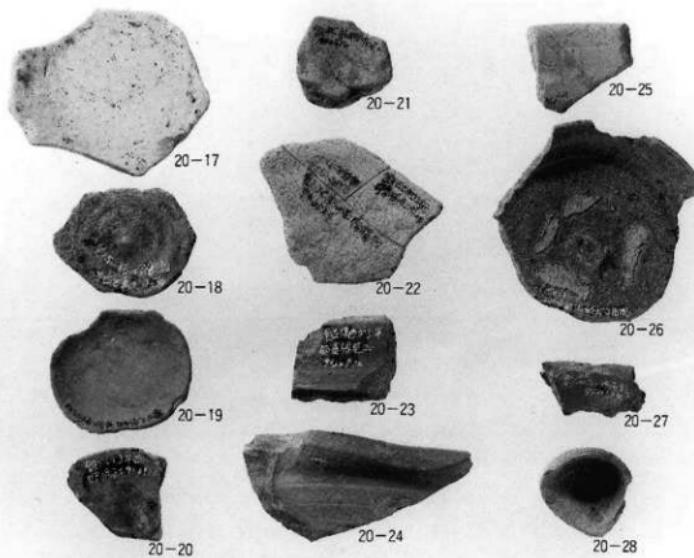
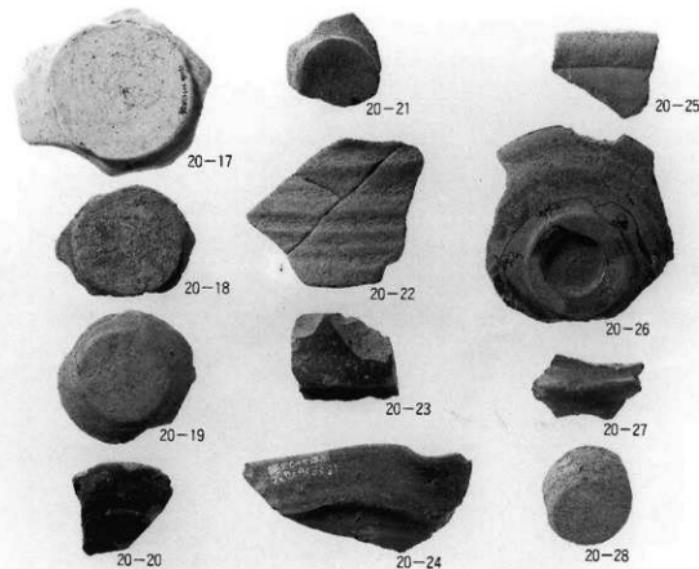


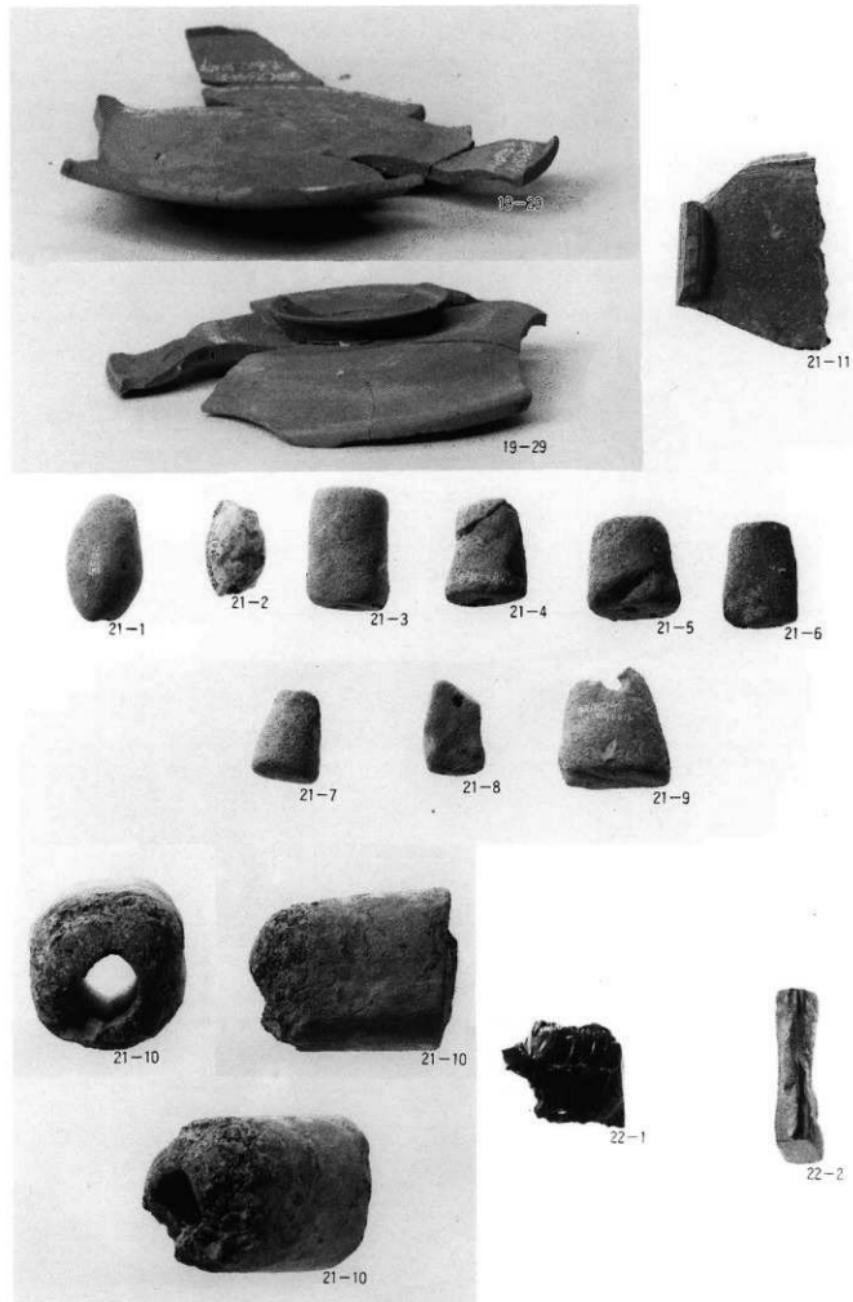












飯田C遺跡出土遺物 (8)



調査前近景



トレンチ調査状況（I区東側）



I区石組み検出状況（西から）



I区遺物出土状況（北から）



I区西壁土層堆積状況



I区完掘状況（南から）